

博士学位論文

英語話者による日本語の語アクセントの習得

TAYLOR Rebecca Louise

名古屋大学大学院

国際言語文化研究科

平成 24 年 2 月

博士学位論文

英語話者による日本語の語アクセントの習得

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

TAYLOR Rebecca Louise

平成 24 年 2 月

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご支援を賜りました。

指導教官の鹿島央教授にお礼を申し上げます。日本でご指導いただいただけでなく、イギリスでの研究活動中にも、メールでの丁寧なご指導をいただきました。また、学術交流の場として、先生主催の音声研究会に参加できたことで、多くの示唆を得ました。心から感謝いたします。

審査にあたって有益なご意見をくださった明治学院大学の佐藤努教授、名古屋大学の成田克史教授、玉岡賀津雄教授にも感謝申し上げます。

発話資料の判定および日本語のチェック双方の支援をいただいた天野修一氏、稲田朋晃氏、井上美代子氏、中林律子氏に心から感謝いたします。同じく発話資料の判定にたくさんのお時間を割いていただいた土井やすこ氏、野瀬浩代氏、日本語のチェックをしていただいた有菌智美氏、久野百代氏、野田大志氏にもお礼申し上げます。皆様のご協力なくしては、この論文は成しえませんでした。

I would like to thank the Department of Language and Linguistic Science at the University of York for providing me with many valuable opportunities to be involved in the department, and in particular Dr Sam Hellmuth for her advice and encouragement throughout this research.

I also wish to thank Mum, Dad, Cath, Phil, Simon and Maria for their love and support.

本研究には名古屋大学学術奨励賞奨学金、日本学生支援機構私費外国人留学生学習奨励費、大幸財団留学学芸奨励費の援助をいただきました。これにより研究に専念できたことをこの場を借りて深くお礼申し上げます。

English Abstract

How do English learners of Japanese learn lexical pitch accent? This thesis investigates to what extent accent type is learned word by word; to what extent accent is placed by rule; and how accent production varies both with experience and from learner to learner. A study was carried out in which two groups of English learners of Japanese, differing in amount of Japanese experience, read aloud Japanese words, and the accent types produced were identified by phonetically trained native speakers of Japanese. The effect of Standard Japanese (SJ) accent type, mora number, lexical class and speech environment were analysed.

The results show that, regardless of Japanese experience, which accent type a word is produced with is not greatly influenced by its Standard Japanese (SJ) accent type. Neither, for the words in this study which contain only light syllables, can the accent types produced by either group of learners be predicted with any confidence from a word's mora number, lexical class or speech environment. However, each individual learner's accent production shows some systematicity, with the details of the relation between accent type and word type and/or speech environment, and what is acquired from SJ, both individual to the learner.

These results are interpreted to mean that English learners of Japanese have difficulty in encoding SJ lexical accent in their phonological representations, perhaps due to a difficulty in recognising pitch as a lexical property. The large individual differences may be a consequence of each learner's attempt, in the absence of a phonological representation for SJ lexical accent, to predict accent placement from the largely non-predictable accentual system of SJ. Most importantly, this thesis shows that having English as a common L1 does not lead to similar trends in lexical accent production in L2 Japanese. Further research could explore the nature of the phonological representation; the effect of the L1; and why no effect of experience was observed.

要旨

英語を母語とする日本語学習者はどのように語レベルのピッチアクセントを習得するのだろうか。本論文は、アクセント型はどの程度語ごとに習得されるのか、アクセント付与はどの程度規則に従って行われるのか、そしてアクセント生成は日本語の経験量および個人差によってどのような影響があるかを調査するものである。英語を母語とする学習者を対象に、日本語の経験量の異なる二つの学習者群に日本語の語を読み上げさせ、生成されたアクセント型を音声学の専門知識のある日本語母語話者に判定させるという調査を行い、標準語のアクセント型、拍数、品詞、発話環境といった諸要因の影響を分析した。

その結果、語がどのアクセント型で生成されるかは、日本語の経験量を問わず、標準語のアクセント型にはそれほど影響されないということが分かった。同時に、少なくとも本研究の対象である軽音節のみで構成された語については、各学習者群が生成するアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測することができないという結果も得られた。一方で各学習者のアクセント生成に関しては、ある程度の体系性が見られ、生成されたアクセント型と語の種類や発話環境がどのように関係するか、何が標準語から習得されるかについても、個人独特のものであることが明らかになった。

これらの結果から、英語を母語とする日本語学習者には、ピッチを語の特徴として解釈するのが困難であるためか、アクセント型を音韻表象にエンコードすることが困難であることが示唆される。学習者間の大きな差異は、各学習者がアクセント型の音韻表象を持たないことにより、主に非予測的であるアクセント体系を持つ標準語から規則性を探ろうとした結果、形成されたのではないかと考えられる。本論文で得られた最も重要

要旨

な知見は、第一言語が同じ英語であっても、第二言語の日本語においては、アクセントの特徴が類似するとは限らないということである。今後の課題としては、音韻表象の性質および母語の影響を検討し、さらに経験量の影響がなぜ現れなかったかを調べる必要がある。

目次

謝辞.....	i
English Abstract.....	ii
要旨.....	iii
目次.....	v
図一覧.....	x
表一覧.....	xiii
第1章 序論.....	1
1-1 本研究の意義.....	2
1-2 本研究の目的.....	3
1-3 調査の全体像.....	6
1-4 研究対象の範囲.....	7
1-5 本研究の前提.....	10
1-5-1 学習者が習得しているのは標準語である.....	10
1-5-2 対象語のアクセント型は非予測的である.....	12
1-6 本論文の構成.....	13
第2章 理論的背景.....	16
2-1 はじめに.....	16
2-1 日本語の語アクセント.....	17
2-1-1 語アクセントとは？.....	17
2-1-2 音声的実現.....	18
2-1-3 体系.....	19
2-1-3-1 品詞.....	19
2-1-3-2 予測性.....	21
2-1-3-3 発話環境とアクセント型の関係.....	22
2-2 日本語の語アクセントと英語のプロソディ.....	25
2-2-1 体系の比較.....	26
2-2-2 音声的実現の比較.....	28

2-2-3 ピッチの現れ方の比較.....	29
2-3 まとめ.....	31
第3章 先行研究.....	32
3-1 はじめに.....	32
3-2 英語話者による日本語の語アクセントの特徴.....	32
3-2-1 音節構造と拍数の影響.....	34
3-2-2 個人差.....	37
3-2-3 品詞の影響.....	37
3-2-4 発話環境の影響.....	38
3-2-5 母語の影響.....	44
3-2-6 英語話者の傾向のまとめ.....	48
3-3 残されている課題.....	49
3-3-1 規則によるアクセント付与.....	49
3-3-2 語ごとの習得.....	52
3-3-3 個人差及び経験量の影響.....	56
3-4 終わりに.....	57
第4章 方法論.....	59
4-1 はじめに.....	59
4-2 調査参加者.....	59
4-2-1 母方言.....	60
4-2-2 日本語の経験.....	60
4-3 録音資料.....	64
4-3-1 対象語について.....	64
4-3-1-1 拍数、品詞とアクセント型.....	64
4-3-1-2 選定条件.....	66
4-3-1-3 対象語.....	69
4-3-2 付加語について.....	71
4-3-2-1 後接語.....	71
4-3-2-2 内容語.....	73
4-3-3 各発話環境におけるアクセント型について.....	75

4-3-3-3 単独	75
4-3-3-4 後接語の前	77
4-3-3-5 内容語の前	79
4-4 調査方法	82
4-4-1 背景調査	82
4-4-2 データ収集の方法	82
4-4-3 音声ファイルの準備	84
4-4-4 アクセント型の判定方法	86
4-5 終わりに	88
第5章 語ごとの習得	89
5-1 はじめに	89
5-1-1 分析対象データ数	92
5-2 標準語との一致率	92
5-2-1 はじめに	92
5-2-2 資料語全体	93
5-2-3 アクセント型別	94
5-2-4 資料語のタイプ別	97
5-2-5 考察	102
5-3 標準語の影響を示さない資料語のタイプ	104
5-3-1 はじめに	104
5-3-2 標準語の影響がない例①：単独の二拍単純名詞	105
5-3-3 標準語の影響がない例②：後接語の前の二拍転成名詞	108
5-3-4 標準語でもアクセント型が対立しない例：単独の転成名詞	110
5-3-5 標準語の影響がない残りの資料語のタイプ	112
5-3-6 考察	116
5-4 標準語から正の影響を示す資料語のタイプ	116
5-4-1 はじめに	116
5-4-2 正の影響の一例：単独の三拍単純名詞	118
5-4-3 語末から二拍目への偏りがある資料語のタイプ	123
5-4-4 語頭と語中アクセントの一致率が比較的高い資料語のタイプ	129
5-4-5 一致率が特に低い資料語のタイプ	133
5-4-6 考察	136
5-5 標準語から負の影響を示す資料語のタイプ	137
5-5-1 はじめに	137

5-5-2 経験の少ない学習者群	139
5-5-3 経験の多い学習者群	143
5-5-4 考察	148
5-6 結果のまとめ	149
5-6-1 資料語のタイプ別	149
5-6-2 アクセント型別	152
5-7 本章についての考察	154
第6章 規則によるアクセント付与	157
6-1 はじめに	157
6-2 語末から二拍目にアクセント核を置く傾向	161
6-3 アクセント付与における予測性の程度	165
6-4 統計的なパターンの習得	172
6-4-1 はじめに	172
6-4-2 品詞の影響	173
6-4-3 付加語の影響	180
6-4-4 まとめ	186
6-5 発話環境によるバリエーション	186
6-5-1 はじめに	186
6-5-2 発話環境の影響	187
6-5-3 アクセント型の不安定性	194
6-5-4 まとめ	198
6-6 本章についての考察	198
第7章 各個人の傾向	201
7-1 はじめに	201
7-2 個人の分析の一例：学習者 LF_AG (図 7-1) の傾向について	204
7-2-1 生成されたアクセント型の割合	206
7-2-2 標準語の影響	206
7-2-3 生成されたアクセント型の体系性	212
7-3 分析項目のまとめ	212
7-4 結果	214

目次

7-4-1 学習者 LF_EP (図 7-7) の傾向について	215
7-4-2 学習者 LF_GC (図 7-8) の傾向について	217
7-4-3 学習者 LF_JW (図 7-9) の傾向について	220
7-4-4 学習者 LF_LC (図 7-10) の傾向について	222
7-4-5 学習者 LF_LD (図 7-11) の傾向について	225
7-4-6 学習者 LF_MB (図 7-12) の傾向について	227
7-4-7 学習者 LM_JE (図 7-13) の傾向について	230
7-4-8 学習者 LM_JO (図 7-14) の傾向について	232
7-4-9 学習者 LM_JR (図 7-15) の傾向について	234
7-4-10 学習者 LM_MD (図 7-16) の傾向について	236
7-4-11 学習者 LM_MT (図 7-17) の傾向について	238
7-4-12 学習者 LM_NB (図 7-18) の傾向について	240
7-4-13 学習者 MF_KW (図 7-19) の傾向について	243
7-4-14 学習者 MF_NT (図 7-20) の傾向について	245
7-4-15 学習者 MF_PH (図 7-21) の傾向について	248
7-4-16 学習者 MM_DM (図 7-22) の傾向について	250
7-4-17 学習者 MM_DT (図 7-23) の傾向について	252
7-4-18 学習者 MM_JB (図 7-24) の傾向について	255
7-4-19 学習者 MM_LH (図 7-25) の傾向について	258
7-4-20 学習者 MM_TG (図 7-26) の傾向について	260
7-5 結果のまとめ	262
7-5-1 生成されたアクセント型の割合	262
7-5-2 標準語の影響	263
7-5-3 生成されたアクセント型の体系性	265
7-6 本章についての考察	267
第 8 章 全体のまとめと考察	269
8-1 語ごとの習得	270
8-2 規則によるアクセント付与	275
8-3 結論	282
参考文献	284

図一覧

図 4-1	調査に用いた紙の一例.....	83
図 5-1	単独の二拍単純名詞が生成されたアクセント型 —経験の少ない学習者群—.....	106
図 5-2	単独の二拍単純名詞が生成されたアクセント型 —経験の多い学習者群—.....	107
図 5-3	後接語の前の二拍転成名詞が生成されたアクセント型 —左側は経験の少ない学習者群、右側は経験の多い学習者群による—.....	108
図 5-4	単独の転成名詞が生成されたアクセント型 —上は経験の少ない学習者群、下は経験の多い学習者群による—.....	111
図 5-5	標準語の影響を受けにくい残りの資料語のタイプが生成されたアクセント型 —経験の少ない学習者群—.....	113
図 5-6	標準語の影響を受けにくい残りの資料語のタイプが生成されたアクセント型 —経験の多い学習者群—.....	114
図 5-7	経験の少ない学習者群による単独の三拍名詞.....	118
図 5-8	経験の多い学習者による単独の三拍単純名詞.....	121
図 5-9	経験の少ない学習者群による内容語の前二拍単純名詞.....	124
図 5-10	経験の多い学習者群による内容語の前二拍単純名詞.....	125
図 5-11	語末から二拍目にアクセントが置かれやすい資料語のタイプ —経験の少ない学習者群による—.....	127
図 5-12	経験の多い学習者群による後接語の前の三拍単純名詞の結果.....	130
図 5-13	経験の多い学習者群による内容語の前の三拍単純名詞の結果.....	131
図 5-14	一致率が低い資料語のタイプ —経験の少ない学習者群による—.....	134

図一覧

図 5-15	一致率が低い資料語のタイプ —経験の多い学習者群による—	136
図 5-16	経験の少ない学習者群による内容語の前の三拍単純名詞	140
図 5-17	経験の少ない学習者群による後接語の前の三拍動詞	142
図 5-18	経験の多い学習者群による内容語の前の二拍動詞	144
図 5-19	内容語の前の二拍動詞における付加語別の傾向	146
図 5-20	動詞における付加語別の傾向	147
図 6-1	経験の少ない学習者群が生成したアクセント型	168
図 6-2	経験の多い学習者群が生成したアクセント型	169
図 7-1	学習者 LF_AG が生成したアクセント型	205
図 7-2	偶然の一致の例①	207
図 7-3	一致率が高いアクセント型の対立の一例	208
図 7-4	標準語の正の影響を示す資料語のタイプの一例	209
図 7-5	偶然の一致の例②	210
図 7-6	標準語の負の影響を示す資料語のタイプの一例 (LF_JW)	210
図 7-7	学習者 LF_EP が生成したアクセント型	216
図 7-8	学習者 LF_GC が生成したアクセント型	218
図 7-9	学習者 LF_JW が生成したアクセント型	221
図 7-10	学習者 LF_LC が生成したアクセント型	223
図 7-11	学習者 LF_LD が生成したアクセント型	226
図 7-12	学習者 LF_MB が生成したアクセント型	228
図 7-13	学習者 LM_JE が生成したアクセント型	231

図一覧

図 7-14	学習者 LM_JO が生成したアクセント型	233
図 7-15	学習者 LM_JR が生成したアクセント型.....	235
図 7-16	学習者 LM_MD が生成したアクセント型	237
図 7-17	学習者 LM_MT が生成したアクセント型.....	239
図 7-18	学習者 LM_NB が生成したアクセント型	241
図 7-19	学習者 MF_KW が生成したアクセント型	244
図 7-20	学習者 MF_NT が生成したアクセント型.....	246
図 7-21	学習者 MF_PH が生成したアクセント型.....	249
図 7-22	学習者 MM_DM が生成したアクセント型	251
図 7-23	学習者 MM_DT が生成したアクセント型	254
図 7-24	学習者 MM_JB が生成したアクセント型.....	256
図 7-25	学習者 MM_LH が生成したアクセント型	259
図 7-26	学習者 MM_TG が生成したアクセント型	261

表一覧

表 4-1	調査参加者の日本語経験について.....	62
表 4-2	対象とするアクセント型とその対象語例.....	65
表 4-3	対象語	70
表 4-4	名詞に付加させる内容語.....	74
表 4-5	単独の発話環境における対象語のアクセント型.....	76
表 4-6	後接語の前の発話環境における対象語のアクセント型.....	78
表 4-7	内容語の前の発話環境における対象語のアクセント型.....	80
表 5-1	資料語全体における標準語との一致率.....	94
表 5-2	アクセント型別の標準語との一致率.....	95
表 5-3	資料語のタイプ別の標準語との一致 —経験の少ない学習者群—.....	99
表 5-4	資料語のタイプ別の標準語との一致 —経験の多い学習者群—.....	100
表 5-5	資料語のタイプ別の標準語との一致 —学習者群の比較—.....	101
表 5-6	資料語のタイプによる傾向の違い.....	151
表 5-7	アクセント型による傾向の違い.....	153
表 6-1	経験の少ない学習者群によるアクセント付与の全体の傾向.....	162
表 6-2	経験の多い学習者群によるアクセント付与の全体の傾向.....	163
表 6-3	資料語のタイプ別に最も多く生成されたアクセント型.....	170
表 6-4	品詞によるアクセント付与の傾向 —経験の少ない学習者群—.....	177

表一覧

表 6-5	品詞によるアクセント付与の傾向 —経験の多い学習者群—	177
表 6-6	付加語によるアクセント付与の傾向 —後接語の前の場合—	182
表 6-7	付加語によるアクセント付与の傾向 —内容語の前の場合—	184
表 6-8	発話環境によるアクセント付与の傾向 —経験の少ない学習者群—	191
表 6-9	発話環境によるアクセント付与の傾向 —経験の多い学習者群—	191
表 6-10	生成されたアクセント型の組み合わせ	196

第1章

序論

日本語の標準語（以下「標準語」とする）は語アクセントを持つ。即ち、語ごとに決まったアクセント型がある。語のアクセント型により、その語にアクセント核を置くかどうか、置くとすればどこに置くかが決まる。例えば、「雨」と「飴」は分節音（母音と子音）はいずれも /ame/ であるが、アクセント型が対立し、「雨」の場合は /a/ にアクセント核を置き、「飴」の場合はアクセント核を置かずに発音する。

本論文は、日本語の語アクセントの第二言語習得に焦点を当て、英語を母語とする日本語学習者（以下「英語話者」とする）は日本語の語アクセントをどのように習得するかを調査するものである。英語話者を対象にした音読調査をその目的のために行ったが、得られた結果に基づき、語がどのアクセント型で生成されるかは標準語におけるアクセント型にはそれほど影響されず、第一言語が英語で共通していても、第二言語の日本語では、語アクセントの特徴は様々であるということを示す。このような結果の説明として、ピッチを語の特徴として解釈することが困難であるためか、英語話者には日本語の語アクセントを音韻表象にエンコードすることが困難であり、学習者間の顕著な個人差は、各個人が標準語から規則性を探ろうとするために生じるのではないかということ論じる。

1-1 本研究の意義

語アクセントは一見、日本語学習者にとって重要でない学習項目に思われるかもしれない。なぜなら、語が持つピッチパターンは、日本語の方言によって異なるからである。標準語のアクセント体系は東京式アクセントであるが、方言のアクセント体系は方言によっては標準語と異なる、もしくは、語アクセントを持たない方言もある (Igarashi、2007)。しかも、標準語も、語アクセントの弁別力はそれほど高くない。一拍から四拍の語には、「雨」と「飴」のように分節音が同じである同音異義語は数多くあるものの、その中でアクセント型が対立するのは約三分の一程度にすぎないと言われている (北原、2006、pp.9-10)。したがって、同音異義語の大半は、アクセント型の情報を加えても弁別されないということになる。

しかしながら、語アクセントは同音異義語の弁別だけでなく、発話の理解を助ける働きを持っている。発話を理解するためには、聞き手は語を認識しなければならないが、語の認識に用いる情報は言語によって異なる。日本語は語アクセントの弁別力が低く、方言間のバリエーションが多いことから、日本語母語話者は語アクセントの情報を語認識に用いないと思われていた時代があった (Cutler & Otake、1999、p.1878) が、Cutler & Otake (1999) および Sekiguchi & Nakajima (1999) は実験を通し、標準語を母方言とする日本語話者は分節音の情報に加え、語アクセントの情報も語認識に用いることを明らかにしている。そのため標準語話者との対話では、同音異義語に限らずどの語に関しても、アクセント型が標準語と異なる場合には語の認識に時間がかかる、もしくは、正しく認識できないことがある (Minematsu & Hirose、1995)。

このことが意味することは、日本語学習者が標準語話者と対話する際、標準語の語アクセントを用いると発話がより理解しやすくなり、コミュニケーションがよりスムーズに行われるということである。しかも、これは対話の相手が標準語を母方言とする日本語話者である場合に限ることではないと思われる。語アクセントを持たない方言を母方言とする日本語話者でも、第二方言としての標準語の経験から、標準語の母方言話者と同様に、標準語のアクセント型の情報を語認識に用いることが示されている (Otake & Cutler, 1999)。したがって学習者が標準語の語アクセントを用いることは、標準語を母方言とする日本語話者をはじめ、他の方言を母方言とする日本語話者を対話の相手にしている場合でも、理解の助けにつながると推測できる。

語アクセントがどのように習得されるかが分かれば、語アクセントの学習やその指導にあたり、より効果的な方法を発展させることにつながる可能性がある。しかしながら、以下に述べるように、英語話者がどのように日本語の語アクセントを習得するかについては明らかではないことが多い。

1-2 本研究の目的

英語話者のアクセント生成を調査している先行研究として、堀口(1973)、磯村(1996)、久野(1998)、土岐(1980)、吉光(1981)、山田(1994a、b) および Taylor(2008、2012)がある。これらの先行研究から確実にいえるのは、英語話者が生成するアクセント型には個人差が多く、語の音節構造や品詞、語が置かれている発話環境の諸要因は生成されるアクセント型に何らかの影響を及ぼすという程度のことである。

標準語では、ある語がどのアクセント型を取るかは、ある程度、語の音節構造から予測できる。例えば、外来語や複合語に関しては音節構造に基づいたアクセント付与規則がある。その他の語においても、重音節にアクセントが来やすい傾向がある。しかしながら、「雨」、「飴」のようなミニマルペアに関してや、「食べる」、「決める」のように音節構造が同じで分節音が異なる語ペアに関しては、アクセント型は恣意的に決まっておき、規則では予測できない。このことが意味することは、このような語については、アクセント型は一語一語覚えなければならないということである。

英語話者には、標準語の語アクセントを語ごとに習得することが可能であるかどうかは明らかでない。「語の単独発話ではどの語も無核で生成する」、「動詞ではどの語も語末から二拍目にアクセント核を置く」というような中間言語の規則に従ってアクセント核を付与するとすれば、生成するアクセント型が標準語のアクセント型と一致する可能性がある。ただしこれは、標準語でのその語のアクセント型の直接的な影響で一致したことはもちろん異なる。

先行研究から、英語話者が生成するアクセント型は音節構造、品詞、発話環境といった要因に何らかの影響を受けることが明らかになっているが、これらの要因に基づく中間言語の規則は具体的にどのようなもので、アクセント付与はどの程度その規則に従って行われるかは明らかでない。生成されるアクセント型が標準語と一致するときもしないときもあることが報告されているが、標準語と一致する場合には、標準語のアクセント型からの直接的な影響で一致したのか、中間言語の規則を適用した結果偶然一致したのかが明確でない場合が多い。最後に、アクセント生成の傾向における個人差は報告されているが、日本語の経験量と関係しているかも不明であり、語アクセントがどのように習得されていくかも明らかでない。

本研究では、アクセント付与規則でアクセント型が予測できない語について、英語話者（つまり、英語を母語とする日本語学習者）を対象に、以下の三点を明らかにすることを目的とする。

（１）標準語のアクセント型はどの程度どのように語ごとに習得されるか

先行研究では、学習者が生成するアクセント型が標準語と一致しても、標準語のアクセント型からの直接的な影響によるものかは明らかでない。本研究では、標準語の語アクセントはどの程度、どのように、語ごとに習得されているかを調べることを目的とする。語ごとの習得が行われている程度を明らかにするために、標準語との一致率、ならびに標準語のアクセント型の影響が学習者の生成にどの程度現れるかを検討する。さらに語ごとの習得が行われている様子を調べるために、標準語からの負の影響（アクセントが常に一拍遅れるなど）を含め、標準語から何が習得され、何が習得されないかについて検討する。

（２）アクセント付与はどの程度、どのように規則に従って行われるか

英語話者の生成では、アクセント付与は中間言語の規則に従って行われる可能性が先行研究からうかがえる。本研究では、アクセント付与はどの程度、どのように、拍数、品詞、発話環境といった要因に基づく中間言語の規則に従って行われるかを検討する。

（３）日本語の経験量、ならびに、個人差には、どのような影響があるか

先行研究では、個人による傾向の違いは多く報告されているが、習得過程について明らかにされていることはないに等しい状況である。本研究では、経験量の異なる学習者群および各個人の特徴の検討を通し、中間言語の実態を明らかにしたい。

1-3 調査の全体像

本研究では、以上の目的のために、日本語の経験量において異なる二つの英語を母語とする学習者群に日本語の語を音読させ、どのアクセント型で生成されたかを、音声学の専門知識のある日本語母語話者に判定させるという音読調査を行った。

個々の語について、「これは標準語のアクセント型の影響が現れている」、「これは規則に従ってアクセント型が付与されている」というように判断することは、可能ではない。そこで、本論文における分析では以下の方法を用いる。生成されるアクセント型に影響する要因として、拍数、品詞、語が置かれた発話環境、さらに標準語のアクセント型という四つの影響を分析対象とする。以下では、拍数、品詞、発話環境別にグループ化された語群（例えば、後接語の前の二拍単純名詞など）を「資料語のタイプ」と呼ぶこととする。各資料語のタイプには、標準語にある各アクセント型の語をそれぞれ12語用いる。例えば、後接語の前の二拍単純名詞という資料語のタイプでは、頭高型、尾高型、平板型それぞれ12語、後接語の前の三拍単純名詞では、頭高型、中高型、尾高型、平板型それぞれ12語を資料語に含める。

まず、語ごとの習得がどの程度、どのように行われているかを検討するために、標準語のアクセント型の影響を分析対象とする。各資料語のタイプを対象に、標準語のアクセント型別に複数の語群に分け、生成されるアクセント型を比較する。標準語のアクセント型の異なる語群間で、生成されるアクセント型に差がない場合には、標準語のアクセント型は生成されるアクセント型に直接的に影響しないことが分かる。一方で、標準

語のアクセント型の異なる語群がお互い異なるアクセント型で生成される場合には、標準語のアクセント型からの直接的な影響があることが示唆される。

次に、アクセント付与はどの程度、どのように規則に従って行われるかを検討するために、語の拍数や品詞、語が置かれている発話環境の影響を分析する。具体的には、標準語のアクセント型が同じで、拍数、品詞、発話環境が異なる資料語がどのようなアクセント型で生成されるかを比較する。

これらの二つの項目について、二つの学習者群の結果を比較し、日本語の経験量の影響を検討したうえで、各個人の傾向も分析していく。

1-4 研究対象の範囲

本研究の対象範囲は以下の通りである。

(1) 生成のみ

本研究では、学習者の生成のみを対象とし、知覚は対象外とする。しかしながら、標準語のアクセント型の影響がどの程度どのように生成に現れるかを調べることで、知覚の影響については考察対象となる。なぜなら、標準語の影響が現れている場合には、そのアクセント型を音響的に知覚し、音韻表象にエンコードすることの可能性について考察できるためである。

(2) 調査参加者はイギリス英語話者

調査参加者はイギリス英語を母語とする日本語学習者である。先行研究では、アメリカ英語、オーストラリア英語あるいはイギリス英語を母語とする日本語学習者の間に、異なる傾向は特に指摘されていない。しかしながら、将来、英語の方言によって異なる傾向が発見された場合のために、ここでは、一つの種類に限定する。本研究におけるイギリス英語の扱いは、英語を一種類に揃えるためであり、特にイギリス英語独自の特徴を調べる目的で限定しているわけではない。

(3) 横断的研究

上述したように、英語話者が日本語の語アクセントをどのように習得していくかについて分かっていることは非常に少ない。他の言語を母語とする日本語学習者を対象とする先行研究についても、広東語を母語とする日本語学習者を対象に二年にわたり語アクセントの特徴を調べている Lee et al. (2006) があるが、正解率には変化がなかったという報告である。習得過程を調べるためには、縦断的研究が最も適切であると思われるが、横断的研究を用いることで、縦断的研究より長いスパンでの検討が可能である。そこで本研究では、日本語の経験量が異なる二つの学習者群を横断的に比較することとする。

(4) 語の種類、発話環境、アクセント型の限定

対象語の種類に関しては、拍数は二拍または三拍、品詞は単純名詞、動詞からの転成名詞または動詞に限る。対象語が置かれる発話環境は、①単独（例：「雨」、「振り」、

「出す」)、②後接語¹の前(例:「雨だ」、「振りだ」、「出すので」、「出すほど」)、③内容語²の前(例:「雨が降る」、「振りをする」、「出すのが好きだ」、「出すことができる」)の三つである。対象語のアクセント型は標準語に原則として生起する全種類であるが、例外的なアクセント型は対象外とする。

(5) 対象語のアクセント型のみ

「雨が降る」のように、語が別の内容語に先行する発話環境にある場合では、対象とするのは、文全体ではなく、対象語(例では「雨」)のアクセント型のみである³。

(6) アクセント核の有無と位置のみ

分析の対象とするのは、生成される対象語のアクセント型である。本研究では、アクセント型とは、アクセント核の有無と位置であると定義している。語頭の始めに現れるピッチの上昇は、語の特徴ではなく句レベルの特徴であると考え、対象外とする。日本語母語話者には、アクセント核の実現であるピッチの下降の有無と位置が、語のアクセント型を判定する十分条件であると言われている(杉藤、1982、pp.50-75)。

¹ 本論文では、コピュラと助詞を合わせて「後接語」と呼ぶこととする。

² 正確には、対象語と内容語をつなぐ後接語もある。

³ しかしながら無核か語末アクセントかを判定するためには、後接語の一拍目まで判定をする必要がある。

(7) 音声的実現は対象外

学習者の生成に見られるストレスアクセントの実現によると思われる大きさ、長さ、母音の音質などの違いは分析の対象外とし、生成されるアクセント型のみを対象とする。

1-5 本研究の前提

本研究は二つの前提のもとに進める。一つ目は、調査参加者が学習しているのは、日本語の方言の中で標準語であるという前提である。二つ目は、対象語のアクセント型は恣意的に決まっており、規則では予測できないという前提である。以下ではこの二つの前提について述べる。

1-5-1 学習者が習得しているのは標準語である

本研究では、アクセント型がどの程度語ごとに習得されているかを検討するために、標準語のアクセント型の影響がどの程度学習者の発話に現れるかを調べる。その背景には、学習者が習得しているのは、標準語であるという前提がある。しかしながら上述したように日本語は方言により、語のアクセント型が異なる場合もあり、アクセント体系が標準語と異なり語アクセントを持たない方言もある。

本研究の対象者は、日本語の経験の比較的少ない（以下「経験の少ない」）学習者群、および日本語の経験量の比較的多い（以下「経験の多い」）学習者群である。経験の少ない学習者群は大学で日本語を一年間または二年間学習しており、留学経験を有しない

学習者である。一方、経験の多い学習者群は大学で日本語を四年学習しており、そのうちの一学年は日本の大学に留学している。

このような学習者には標準語に接している経験は確実にあると思われる。日本語母語話者は、標準語を母方言としていない話者でも、フォーマルな場面では標準語を用いる傾向があると言われている（Otake & Cutler, 1999, pp.232-233）。したがって大学教育の場面では、日本語教材、日本語教師をはじめ日本語母語話者との対話、メディア放送などを通して標準語と接していると予測される。

経験の少ない学習者群に関しては、日本の滞在経験があっても旅行程度であるため、標準語以外に他の方言と接している可能性は比較的低いと思われる。しかしながら、日本に留学したことのある経験の多い学習者群に関しては、他の方言とも接している可能性は排除できない。経験の多い学習者のうち、アクセント体系が標準語と異なる地域に滞在した経験を持つ学習者が二名いるが、標準語以外にも他の方言とも接しているという恐れはこの二名について特にあると思われる。

本研究の分析の結果、経験の少ない学習者群と多い学習者群は非常に似通った傾向を示しているという結果が得られている。さらに、標準語圏以外に滞在経験のある学習者でも、標準語との一致率は平均かそれ以上である。したがって本研究では、学習者群全体について、習得しているのは主に標準語であるという前提で研究を進めても妥当であると判断する。

1-5-2 対象語のアクセント型は非予測的である

二つ目の前提は、対象語のアクセント型は恣意的に決まっており、アクセント付与規則では予測できないということである。

上述したように、標準語で重音節にアクセント核が置かれやすい傾向があり、語が取るアクセント型はある程度音節構造から予測できる。しかしながら、軽音節のみで構成される語に関しては、音節構造が同じで、アクセント型が異なる例が多くある。例えば「出口」、「八時」、「昼間」、「左」という四つの語は、音節構造は CV.CV.CV と共通であるが、「出口」は頭高型、「八時」は中高型、「昼間」は尾高型、「左」は平板型というように、アクセント型はすべて異なる。本研究では、アクセント型が規則で予測できないように、重音節を含む語は対象外とする。

対象とする語としてこのような語を選定したことの重要性は、語ごとの習得、規則によるアクセント付与を区別することを可能にするためである。ある資料語のタイプで、標準語のアクセント型が異なる資料語が、お互い異なるアクセント型で生成された場合には、傾向の違いが標準語にあるアクセント付与規則の適用によって生じたのではなく、語ごとのアクセント型の習得の結果であるといえるためには、アクセント型が規則で予測できないことが重要となってくる。

本研究の対象語には、「地図」のように語頭子音がある語も、「雨」のようにない語も含めるが、これは英語のストレス付与規則 (Hayes, 1982) でも、日本語のアクセント付与規則 (Kubozono, 2006) でも、語頭子音の有無とは関係ないと言われているためである。

正確なところ、音節構造が同じでも、分節音からアクセント型が予測できる場合もある。例えば、「飛ぶ」、「遊ぶ」のように「ぶ」で終わる動詞には平板式の語が多く、「勝つ」、「育つ」のように「つ」で終わる動詞は有核式の傾向がある（金田一・秋永、2001、付録 p.52）。つまり、少なくとも動詞に関しては、アクセント型は完全には、予測不可能とはいえない。しかしながら、構造からは予測が不可能であるため、本研究では、不可能であるという前提で、研究を進めることとする。

1-6 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第2章の「理論的背景」では、日本語の語アクセントについて述べ、日本語の語アクセントを英語の語ストレスおよびイントネーションと比較する。本研究の観点から最も重要であるのは以下の二点である。第一には、日本語には語アクセント、英語には語ストレスという語レベルのプロソディがあるが、日本語の語アクセントはピッチの急な下降で実現されるのに対して、英語の語ストレスはピッチの他、長さ、大きさ、母音の音質などの変化を伴うという違いである。第二には、日本語のアクセント核に結びつくピッチの動きは常に下降であるが、英語では、ストレスのある音節に結びつくピッチの動きは句レベルのイントネーションで決まり、上昇なども可能であることである。

第3章の「先行研究」では、英語話者の生成する日本語の語アクセントを調査している先行研究を概観し、生成されるアクセント型の特徴とそれに影響する要因を述べる。

次に、他の言語の語レベルのプロソディであるストレスやトーン習得の研究を参考にし、本章で紹介した研究目的の背景となっている課題をはっきりさせる。

第4章の「方法論」では、調査参加者、録音資料、調査方法について詳しく述べる。

第5章の「語ごとの習得」では、日本語の経験量の異なる二つの学習者群について、標準語との一致率は低く、ある語がどのアクセント型で生成されるかは、その語が標準語に持つアクセント型には、それほど影響されないということを示す。この結果から、語ごとの習得—すなわち語ごとにアクセント型を知覚し音韻表象にエンコードすること—が英語話者に困難である可能性を論じる。

第6章の「規則によるアクセント付与」では、日本語の経験量の異なる二つの学習者群について、生成するアクセント型は語の拍数と品詞、語が置かれた発話環境によって異なり、さらに動詞の場合には付加語⁴によっても異なるということを示す。この結果から、アクセント付与はある程度中間言語の規則に従って行われることが分かる。しかしながら、各学習者群では、拍数、品詞、発話環境がすべて統一してある資料語でも、様々なアクセント型が生成され、特定のアクセント型だけで生成される強い傾向はないことも示す。少なくとも本研究の対象である軽音節のみで構成される語については、生

⁴ 付加語に関しては、本来分析対象ではなかったが、生成されるアクセント型に影響を及ぼしていることが第5章で明らかになるため、第6章では分析対象に加わえることとした。

成されるアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測ができるほどの絶対的な中間言語規則はなく、アクセント付与は複数の要因の競合によって決まるのではないかということを論じる。

第7章の「各個人の傾向」では、学習者群全体ではなく、各学習者の傾向に焦点を当て、生成されやすい・されにくいアクセント型をはじめ、標準語の影響が出やすい・出にくいアクセント型や資料語のタイプにも、生成されるアクセント型と拍数、品詞、発話環境との関係にも、大きな個人差があることを示す。一方で標準語との一致率に関しては、どの学習者も低い結果が得られている。これらの結果から、標準語のアクセント型を語ごとに習得することが困難で、各学習者はそれぞれ独特のアクセント型の体系を作り出している可能性について言及する。

最後に、第8章の「全体の考察」では、第5章～第7章の結果に基づき、以下の二点を示す。まず、アクセント型を音韻表象にエンコードすることが困難であるのは、ピッチを語の特徴として解釈することが英語話者にとって困難であることに原因があるという可能性を論じる。ピッチの働きは上述したように日本語と英語で異なり、英語の語ストレスは日本語の語アクセントと異なりピッチ以外に他の音声的特徴を持つ。次に、学習者間の大きな差異は、各学習者がアクセント型の音韻表象を持たないことにより、主に非予測的であるアクセント体系を持つ標準語から、規則性を探ろうとした結果、形成されたのではないかという可能性について言及する。最後に今後の課題として、音韻表象の性質および母語の影響を検討し、さらに経験量の影響がなぜ現れなかったかを調べる必要があることを指摘し、本研究の結果が日本語教育にどのように応用できるかを述べる。

第2章

理論的背景

2-1 はじめに

本章では、日本語の語アクセントについて述べ、英語の語ストレスおよびイントネーションと比較する。日本語の語アクセントについては、本論文で用いる用語を定義した後、その音声的実現、ならびにその体系について述べる。英語との比較に関しては、日本語の語アクセントと英語の語ストレスにおける共通点と相違点を指摘し、両言語におけるピッチの働きには大きな相違点があることを示す。

2-1 日本語の語アクセント

2-1-1 語アクセントとは？

序論でも述べたように、日本語の標準語（以下「標準語」）では、アクセント核を置くかどうか、置くとすればどこに置くかは、語ごとに決まっている。言い換えると、各語にはアクセント核の有無と位置によって決められた「アクセント型」がある⁵。標準語に「語アクセント」があるということは、語ごとに決まったアクセント型があるということと同じことである。

標準語では「雨」と「飴」はアクセント型が対立する。「雨」は一拍目にアクセント核があり、「飴」にはアクセント核がない。標準語には、「雨」と「飴」のようにアクセント核の有無で対立する語の他に、アクセント核の位置で対立する語もある。例えば「岡氏」と「お菓子」は同じ分節音の連続であるが、「岡氏」は一拍目にアクセント核があり、「お菓子」は二拍目にアクセント核がある。先行研究では、「雨」、「岡氏」

⁵アクセントの「型」という用語を用いるが、本研究では上野（2003）に従い、アクセント型をアクセント核の有無と位置であると定義する。つまり、アクセント型とは、頭高型では語頭に、中高型では語中に、尾高型では語末にアクセント核があり、平板型ではアクセント核がないということを表わすものである（上野、2003、p.69 参照）。これは、「高低低」や「低高低」のように、各拍の高さが指定される旧来のアクセント型とは異なるものである。

の一拍目、「お菓子」の二拍目にあるものを「アクセント」と呼ぶ研究と、これを「アクセント核」と呼ぶ研究の両者があるが、本研究では「アクセント核」と呼ぶこととする。

2-1-2 音声的実現

標準語のアクセント核はピッチの急な下降として実現される (Beckman & Pierrehumbert, 1986, p.256; Pierrehumbert & Beckman, 1988, p.7; Venditti, 2005, p.174)。無核 (アクセント核がない) 語の場合はその急なピッチの下降がない (Beckman & Pierrehumbert, 1986, p.261; Pierrehumbert & Beckman, 1988, p.7; Venditti, 2005, p.174)。アクセント核のある拍とない拍とでは、長さ (正確には接続時間)、大きさ (正確には振幅) の変化はない (Beckman, 1986, pp.157-165)。

標準語の発話におけるピッチの上がり下がり、語アクセントによるピッチの下降、句レベルで決まるピッチの上昇や下降に分類することができる⁶ (Beckman & Pierrehumbert, 1986, p.261; Pierrehumbert & Beckman, 1988, p.13; Venditti, 2005, p.175)。発話は「アクセント句」と呼ばれる単位に区切られ、各アクセント句はピッチの上昇で

⁶ 異なる表わし方は上野(2003)にある。本研究では、Beckman & Pierrehumbert (1986)、Pierrehumbert & Beckman (1988)、Venditti (2005) に従うが、結果の解釈に影響するような観点の違いではないと思われる。

始まる。三拍目にアクセント核がある「味噌汁」という語について、「低高高低」のようにピッチ配置を高トーンと低トーンで表わすことがあるが、正確には、最初の上昇はアクセント句の実現であり、「高」から「低」への下降のみが語ごとに決まったアクセント型の実現による。アクセント核による下降がない場合でも、ピッチはアクセント句の終わりに向かって、徐々に下がっていく。例えば、「友達」という無核の語は、ピッチ配置が「低高高高」と表わされることがあるが、実際の発話では、高いトーンが維持されるのではなく、徐々に低くなる。

2-1-3 体系

2-1-3-1 品詞

ストレス言語の中には、フィンランド語のように原則としてどの語でも一音節目にストレスが置かれる言語、あるいはポーランド語のように語末から二音節目に置かれる言語など、ストレスの位置が固定化されている言語がある。日本語の標準語は、それらの言語とは対照的に、語頭にアクセント核を持つ語も、語中に持つ語も、語末に持つ語も、アクセント核を持たない語もある。ただし、アクセント付与⁷には制約がない訳ではな

⁷本研究の定義からすると「アクセント核の付与」もしくは「アクセント型の付与」がより正確であるかもしれないが、略して「アクセント付与」と呼ぶこととする。

い。語の品詞により、原則的なアクセント型が定まっており、例外的にしか現れないアクセント型がある。

標準語では、動詞は原則として語末から二拍目にアクセント核が置かれるか、無核かのどちらかである（金田一・秋永、2001、付録 p.49）。例えば、「来る」、「食べる」、「調べる」はいずれも最終拍から二拍目にアクセント核がある有核式の動詞で、「する」、「決める」、「忘れる」はいずれもアクセント核がない無核式の動詞である。

一方名詞では、アクセント型の数は拍数より一つ多い⁸（金田一・秋永、2001、付録 p.10）。例えば、一拍語には、「絵」のような有核語、「気」のような無核語の二種類があり、二拍語には、「雨」のような頭高型の語、「鍵」のような尾高型の語、「暇」のような平板型の語という三種類がある。より拍数の多い語には同様に、「眼鏡」、「奥様」のような頭高型の語、「あなた」、「紫」のように二拍目にアクセント核がある語や「味噌汁」のように三拍目にアクセント核がある中高型の語、「男」、「七月」のような尾高型の語、「左」、「友達」のような平板型の語がある。

しかしながら、名詞の種類によってはアクセント型に制約がある。動詞からの転成名詞の場合は原則として、「休み」のように尾高型であるか、あるいは「遊び」のように

⁸ 特殊拍はアクセント核を持たない（金田一・秋永、2001、付録 p.6）ため、アクセント型の数は音節数より一つ多いというのが、より正確である。

平板型である（金田一・秋永、2001、付録 p.12）。さらに地名や姓は原則として「名古屋」、「金沢」のように語末から三拍目にアクセント核があるか、あるいは「箱根」、「石川」のように平板型のどちらかである（金田一・秋永、2001、付録 p.28）。

以上、原則的なアクセント型について述べてきたが、それ以外のアクセント型が例外的に現れる場合がある。例えば、有核式動詞は原則として語末から二拍目にアクセント核があるが、「通る」、「入る」のようにアクセント核が長母音または連母音の影響で一拍前にずれる語もある（金田一・秋永、2001、付録 p.52）。有核式の転成名詞は原則として尾高型であるが、「富」、「限り」のような頭高型の語も例外的にある。金田一・秋永（2001、付録 p.12）によると、転成名詞における例外的なアクセント型は「もとの動詞から意義が大きく変化したもの、その語のさす実体がなくなり、読んで覚えるようになった文語的な語など」に現れる。

2-1-3-2 予測性

前節で見たように、名詞や動詞のアクセント型にはいくつかの可能性はあるが、どのアクセント型になるかを予測することはできるだろうか。Kubozono (2006) によると、語のアクセント型は、ある程度、音節構造から予測できるとしている。例えば、外来語や複合語に関しては音節構造に基づいたアクセント付与規則がある。その他の語についても、重音節にアクセント核が置かれやすい傾向を指摘している。さらに、拍数によっては、各アクセント型の頻度が異なり（杉藤・田原、1989）、特に四拍名詞には無核の傾向があることが指摘されている（Kubozono、2006）。

音節構造が同じでも、分節音からアクセント型が予測できる場合もある。例えば、「飛ぶ」、「遊ぶ」のように「ぶ」で終わる動詞には平板式の語が多く、「勝つ」、「育つ」のように「つ」で終わる動詞は有核式の傾向がある（金田一・秋永、2001、付録 p.52）。ただし、このように分節音からアクセント型が予測できる語はあまりないようである。「雨」、「飴」のようなミニマルペアに関しても、「食べる」、「決める」のように音節構造が同じで分節音が異なる語ペアに関しても、アクセント型は基本的には、予測できない。

2-1-3-3 発話環境とアクセント型の関係

アクセント型は語ごとに決められているが、その実現は発話環境によって異なる場合がある。

まず語単独での発話では、頭高型の語は語頭に、中高型の語は語中にアクセント核が置かれ、平板型の語はアクセント核が置かれず発音されるが、尾高型の語に関しては、

単語のみの発話では、アクセント核は実現されず、無核で生成される⁹(Sugiyama, 2006、p.86)。

尾高型の名詞にアクセント核が実現されるのは、特定の助詞やコピュラに先行するときである(杉藤、1982; Vance, 1995)。コピュラの「です」や「だ」など、あるいは助詞の「が」、「は」、「を」などが尾高型の語に後続する場合にはアクセント核が実現されるが、助詞の「の」が後続する場合にはアクセント核が実現されず無核で生成される(金田一・秋永、2001、付録 p.70、p.82)。以下では、名詞や動詞に後接するものとして、コピュラや助詞を合わせて「後接語」と呼ぶこととする。

他のアクセント型に関しても、後接語が付いているときに実現されるアクセント型は、先行する語のアクセント型だけでなく、後接語の種類にも影響される。例えば、有核の名詞にコピュラの「だ」、「です」、助詞の「が」などが後続する場合には、先行する語のアクセント型通りに有核で生成されるが、「ぐらい」が後続する場合には、語のアクセント型を問わず無核で生成される傾向がある(金田一・秋永、2001、付録 p.72)。

⁹ 単独のみの独立発話でも、尾高型の語と無核の語を区別して発音する標準語母語話者もいる(杉藤、1982; Vance, 1995)。しかしながらそのような話者でも、その差異は上昇幅の違いとして現れ、アクセント核によるピッチの急な下降は尾高型の語でも現れないため、「無核」とは言えよう。

動詞も名詞と同様に、後接語が付いた発話環境におけるアクセント型は、語のアクセント型、後接語の種類両方によって異なる。無核式の動詞に「ほど」、「はず」、「こと」などが後続する場合は無核で生成されるが、「の」、「が」、「し」、（およびそれらで始まる「ので」、「しか」など）が後続する場合には、語末にアクセント核が現れる（金田一・秋永 2001、付録 p.74-75）。有核の動詞に関しては、基本的にはアクセント型の通り有核で生成されるが、「だけ」、「ぐらい」などが後続する場合には、無核で生成されることがある。

このように、後接語が付いた発話環境では、アクセント型は先行する語と後接語の組み合わせによって決まるが、有核の語が無核となる、あるいは、無核の語が語末にアクセント核を持つなどの場合がある。

したがって、ある語のアクセント型を述べる際には、語が本来持っているアクセント型であるのか、ある発話環境に置かれたときに生成されるアクセント型であるのかを明記する必要がある。本稿ではこれ以後、語が本来持っているアクセント型と、ある発話環境に置かれた場合に生成されるアクセント型とを区別するために、語が本来持っているアクセント型を「頭高型」、「中高型」、「尾高型」、「平板型」と呼び、生成されるアクセント型を「語頭アクセント」、「語中アクセント」、「語末アクセント」、「無核」と呼ぶこととする。例えば、「鍵」という語のアクセント型は尾高型であるが、単独では無核で生成され、「行く」は平板型であるが、「ので」に先行する場合には、語末アクセントで生成される。

以上、単語のみの発話環境なのか、後接語の前の発話環境なのかについて述べたが、自然発話には、より複雑な発話環境がある。例えば、疑問文は句の終わりに上昇が現れ

るという点で平叙文と異なり、フォーカスの置き方によっては、発話の区切り方とそれに伴う句の始めの上昇で表わされる。その場合、語アクセントによるピッチの急な下降の他、句レベルで決まるピッチの上昇や下降も現れる（Venditti、2005、pp.180-184）。しかしながら本研究の観点から重要なのは、その場合でも、アクセント型は維持されるということである。例えば、頭高型の「雨」は、単独の「雨」、後接語の前の「雨だ」、後接語にさらに二つ目の内容語が後続する「雨が降る」のどの発話環境に置かれても語頭にアクセント核が現れ、また、疑問文の場合でも、「降る」にフォーカスが置かれても、「雨」のアクセント型に関しては、語頭アクセントであることに変化はない。他のアクセント型に関しても、上述したように後接語に先行している際には単独の語とはアクセント型が異なることがあるが、それは先行する語と後接語の組み合わせから予測的であり、より複雑な発話環境でも、そのアクセント型は基本的には維持される。

2-2 日本語の語アクセントと英語のプロソディ

標準語（本節では「日本語」と呼ぶ）の語アクセントは、語ごとに決まっている語レベルのプロソディである。英語にも、語ごとに決まっている語レベルのプロソディである語ストレスがある。

英語の語ストレスに関しては、ピッチのみで実現される日本語の語アクセントとは対照的に、ピッチの他に長さ、大きさ、母音の音質など様々な音声的な変化が現れる。さらに英語では、ストレスのある音節¹⁰に現れるピッチ変化は、常に急な下降として現れる日本語のアクセント核とは違い、上昇や下降などの様々な形状として現れる。英語の場合、ストレスのある音節に現れるピッチ変化がどの形状を取るかは、句レベルの特徴であるイントネーションで決定される。

このように、日本語の語アクセントは、英語の語ストレスにも、英語のイントネーションにも、共通する特徴を持っている。本節では、日本語の語アクセントと英語の語ストレスを対象に体系と音声的実現における比較を行い、さらに、イントネーションにも焦点を当て、両言語におけるピッチの現れ方について述べる。

2-2-1 体系の比較

日本語においてどの語がどのアクセント型を持つか、さらに英語においてどの語がどのストレスパターンを持つかは、語によって異なる。日本語では、すでに述べたように、語頭にアクセント核を持つ頭高型の語、語中にアクセント核を持つ中高型の語、語末にアクセント核を持つ尾高型の語、無核（アクセント核がない）平板型の語がある。英語

¹⁰ 語を区切る単位は日本語は「拍」であるが英語では「音節」である。

では、“person”のように語頭にストレスを持つ語、“banana”のように語中にストレスを持つ語、“guitar”のように語末にストレスを持つ語がある。これはフィンランド語やポーランド語のようにどの語も同じパターンを持つ言語とは対照的で、英語と日本語の共通点の一つである。

ただし相違点もある。英語には、日本語の平板型に該当するパターン、つまりストレスがないパターンは存在しない。このことから、音節数¹¹が n である語では、日本語では $n+1$ 通りのアクセント型があるが、英語ではストレスの位置は n 通りしかない。さらにもう一つの違いとして、英語には語の主ストレスの他、より弱い第二ストレスを一つまたは複数持つ語もある。例えば、“admiration”という語では、三音節目に主ストレスがあるが、第二ストレスが一音節目に置かれる。しかしながら、日本語では第二ストレスに当たる現象は存在しない。

標準語では、アクセント型はある程度、品詞と音節構造から予測できることをすでに述べた。英語でも、ストレスの位置は品詞と音節構造からある程度予測できる。もちろん、両言語では許容される音節構造が異なるため、音節構造と語レベルのプロソディの関係の詳細は異なる。しかしながら、日本語で重音節がアクセント核を持ちやすいように、英語にも、重音節がストレスを持ちやすい傾向がある (Hayes, 1982)。同様に、

¹¹ この場合は日本語も音節で数えたほうが妥当である。注 6 参照。

品詞によってアクセント型の制約が日本語にあるように、英語にも、品詞によって典型的なストレスパターンが異なる。例えば、英語の二音節語では、名詞は一音節目にストレスを持ちやすく、動詞は二音節目にストレスを持ちやすい傾向がある (Kelly & Bock, 1988)。

英語のストレス付与規則については多くの研究がある。名詞と動詞における基本的なストレス付与規則は以下の通りである。名詞に関しては、語末から二音節目が重音節の場合はその音節に、軽音節の場合一音節前の語末から三音節目にストレスが置かれる (Hayes, 1982, p.239)。動詞に関しては、語末音節が二つ以上の子音で終わり、もしくは、長母音を含む場合には語末にストレスが置かれるが、そうでない場合は語末から二音節目にストレスが置かれる (Hayes, 1982, p.238)。しかしながら、次章でも述べるように、英語の母語話者が無意味語を生成する場合、ストレスの位置には揺れが生じる (Guion et al., 2003)。このことから、ストレスの位置は品詞や音節構造からは、完全には予測できないということが分かる。

2-2-2 音声的実現の比較

日本語の「雨」と「飴」のように、分節音が同じで語レベルのプロソディのみで対立する語は、英語では非常に稀である。英語の“forebear”（先祖）と“forbear”（我慢する）がその一つの例である。分節音は /fɔːrbɛə/ と共通であるが、前者は一音節目に、後者は二音節目にストレスがある。Cutler (1986) によると、語ストレスのみで対立する語の数は全部で 10 ペア程度である。

語ストレスのみで対立する語がこのように非常に少ないのは、ストレスの位置の異なる語は母音の音質も異なる傾向があるためである。例えば、名詞の“object”（物体）と動詞の“object”（反対する）では、名詞は一音節目に、動詞は二音節目にストレスがあるが、分節音はそれぞれ /ɒ bɔ̃ʒ ɛ kt/ と /əbɔ̃ʒ ɛ kt/ のようにストレスの位置に伴って一音節目の母音の音質も異なる。

日本語のアクセント核はピッチの下降として実現される。一方、英語では、ストレスのある音節とない音節の間に、上述したような音質の変化をはじめ、ピッチ、長さ（正確には接続時間）、大きさ（正確には振幅）などさまざまな面で音声的差異が現れる（Beckman、1986）。

2-2-3 ピッチの現れ方の比較

英語の語ストレスの音声的特徴の一つはピッチであるが、ピッチの現れ方は日本語とは異なる。すでに述べたように、日本語では、句レベルのイントネーションによってアクセント句の境界が決まり、句頭では上昇、句末ではさまざまなピッチ変化が現れる。しかしながら、語のアクセント型に関しては、句レベルのイントネーションを問わず、

アクセント核がある場合は常にピッチの急な下降として実現される¹²。一方英語では、句の始めと終わりの上昇・下降の他、ストレスのある音節に現れるピッチの形状も、句レベルで決まる (Beckman & Pierrehumbert, 1986 ; Pierrehumbert、1980)。

英語では音節のピッチ形状は具体的には、ストレスのある音節に向かって上昇または下降する場合、ストレスのある音節から上昇または下降する場合、そして、ストレスのある音節が高くあるいは低く維持される場合がある。ある発話がどのピッチの形状で生成されるかは発話の意味によって異なる。つまりピッチの形状には、意味を伝える働きがある (Pierrehumbert, 1980 ; Pierrehumbert & Hirschberg, 1990, pp.288-302)。Pierrehumbert (1980, pp.7-8) は名前の “Anna” を例として挙げているが、ストレスのある一つ目の音節は、高いトーン、高いトーンから低いトーンへの下降、低いトーンから高いトーンへの上昇、低いトーンのいずれかで生成される場合がある。句レベルのトーンとの組み合わせにより、これらのトーンはそれぞれ質問の答え、呼びかけ、驚きを伝えるため、あるいは、質問に用いられる。ストレスのある音節に実現されるピッチの形状に意味があることは、イントネーションが句レベルのトーンのみで現れる日本語とは、対照的である。

¹² アクセント核が消されることもある (Pierrehumbert & Beckman, 1988, p.126)。ここで重要なのは、アクセント核が実現されるときにはピッチの下降として現れ、他の形状として実現されることはないということである。

ただし、単独の語が平叙文となり、中立的なイントネーションで生成される場合には、ストレスのある英語の音節と、アクセント核のある日本語の拍のそれぞれに現れるピッチパターンには、類似した形状が現れると言われている（Beckman、1986、p.146）。

2-3 まとめ

本章では、日本語の語アクセントについて述べ、英語の語ストレスおよびイントネーションと比較した。日本語の語アクセントはピッチの急な下降で実現されるのに対して、英語の語ストレスはピッチの他、長さ、大きさ、母音の音質などの変化を伴うことを指摘し、さらに、日本語のアクセント核に現れるピッチの動きは句レベルのイントネーションに拘わらず常に下降であるが、英語のストレスのある音節に現れるピッチの動きは句レベルのイントネーションで決まり、上昇なども可能であるということ述べた。

第3章

先行研究

3-1 はじめに

本章ではまず、英語話者の生成する日本語の語アクセントを調査している先行研究を概観し、生成されるアクセント型の特徴とそれに影響を及ぼす要因を述べる。次に、他の言語の語レベルのプロソディである語ストレスや語トーン習得の研究を参考にし、残されている課題を明らかにする。

3-2 英語話者による日本語の語アクセントの特徴

英語話者による語アクセントの特徴を調査している先行研究（堀口、1973；磯村、1996；久野、1998；Taylor、2008、2012；土岐、1980；山田、1994a、b；吉光、1981）では、英語話者は、無核、語末、語末から二拍目、語末から三拍目、語末から四拍目など、様々なアクセント型を生成することが報告されている。これらは全て標準語として許容されるアクセント型である。生成されるアクセント型のうち、無核、語末から二拍目、語末から三拍目が比較的多用されやすいようであるが、これらの三つは標準語にもよくあるアクセント型である（杉藤・田原、1989）。

しかしながら、各語がどのアクセント型で生成されるかについては、標準語における元のアクセント型と一致する場合もしない場合もある。一致しない場合に関しては、標準語の無核語が有核型で生成される例、逆に有核語が無核型で生成される例、アクセント核の位置が異なる例というように、多数のパターンが報告されている（堀口、1973；磯村、1996；久野、1998；Taylor、2008、2012；土岐、1980；山田、1994a、b；吉光、1981）。同じ学習者が同じ語を生成する場合、発話ごとに異なるアクセント型で生成することもある（土岐、1980；山田、1994a、b）が、標準語ではアクセント型は原則として発話環境を問わず維持されるため、このようなアクセント型のバリエーションも標準語と異なる特徴である。

英語話者がどのような語をどのようなときにどのアクセント型で生成するかについては、明らかにされていないことが多いが、本節では先行研究を概観し、生成されるアクセント型に影響する要因として、個人差、語の音節構造と拍数、語の品詞、語が置かれている発話環境があるということを示す。以下ではまず、これらの要因の影響について明らかにされていること、課題として残されていることを述べていく。次に、英語以外の言語を母語とする日本語学習者にも、英語話者と類似する特徴が報告されていることを示し、母語の影響について検討する。

なお、英語話者の語アクセントの特徴を調査している先行研究では、その対象者の母語が、アメリカ英語（堀口、1973；磯村、1996；久野、1998；土岐、1980）、オーストラリア英語（山田、1994a、b；吉光、1981）、イギリス英語（Taylor、2008、2012）と様々である。これらの先行研究では、英語の方言間で日本語の語アクセントの特徴に差異があることは指摘されていないため、本節ではまとめて紹介することとする。

3-2-1 音節構造と拍数の影響

英語話者の生成では、無核型が現れにくく、有核型になる傾向があると報告されている (Kondo, 2007, p.1650 ; 土岐, 1980, p.96) 。さらに Taylor (2008, 2012) では、語末アクセントが現れにくく、語頭または語中アクセントになる傾向が観察されている。本節では、音節構造と拍数が生成されるアクセント型にどのように影響するかを検討し、先行研究からうかがえる可能性として、語末から二拍目もしくは重音節にアクセント核が置かれる傾向があることを示す。

英語話者が生成する語アクセントの傾向を調査した初期の研究では、英語のストレス付与規則が日本語に転移されるという予測がなされている。ここでは、アクセント核(もしくはストレス) が置かれる位置の傾向について検討し、英語話者の日本語の生成において、語レベルのプロソディがピッチアクセントとして実現されるか、あるいはストレスアクセントとして実現されるかについては 3-2-5 節に述べる。

堀口 (1973) は英語のストレス付与規則を日本語の四拍名詞¹³に当てはめ、英語話者が日本語の語に付与するストレスを予測している。堀口 (1973) は様々な音節構造につ

¹³ 堀口 (1973) はこれを「四音節名詞」と呼んでいるが、本研究では「拍」と「音節」を区別して用いる。堀口 (1973) の資料語には「書き留め」、「連絡」、「中心」があるが、本研究では拍数はいずれも四拍、音節数はそれぞれ四音節、三音節、二音節と考える。

いて個々にストレス付与を予測しているが、その予測は、軽音節（一拍分）と重音節（特殊拍または連母音を含む二拍分）の概念を用いると、以下のように要約できる。軽音節のみの場合は、ストレスは語末から二音節目に置かれる。一方、重音節がある場合は、語末から二音節目に置かれるか、あるいは重音節に置かれるということになる。土岐（1980、p.96）は、堀口（1973）が扱った四拍語以外の語においても、語末から二音節目にストレスが置かれるのは英語のストレス付与規則の影響によるものと解釈している。

しかしながら、これらの予測が英語のストレス付与規則とどのように関係しているかは明らかでない。堀口（1973）が対象としているのは名詞であるが、第2章で述べたように、名詞に該当する英語のストレス付与規則は、語末から二音節目が重音節の場合はその音節に、軽音節の場合は一音節前の語末から三音節目にストレスが置かれるというものであり（Hayes、1982、p.239）、堀口（1973）の予測とは異なる¹⁴。

さらに、堀口（1973）によると、英語話者によって実際に生成された発話には、予測と異なったものも多く見られた。個々の結果は音節構造別に報告されているが、一般的

¹⁴ 堀口（1973）が英語のストレス付与規則として引用しているのは、Chomsky & Halle（1968／1991、p.29）の規則である。同文献（p. 72）には、名詞が短い母音で終わる場合には、その規則が適用されるのは最終母音を取った形であるという補足があるが、堀口（1973）はこれを考慮していない。これが、堀口（1973）の予測が Hayes（1982）のストレス付与規則と一致しない理由であると思われる。

に音節構造とアクセント核（もしくはストレス）の位置について、どのような傾向があるかについては検討していない。したがって、堀口（1973）の結果からは、音節構造とアクセント型の影響が明らかになっているとはいえない。ただし、次に示す二つの先行研究では、アクセント核が語末から二つ目の音節、あるいは重音節に置かれやすいという二つの傾向を支持するデータが報告されている。

語末から二音節目にアクセント核が置かれやすい傾向については、戸田（1999）で報告されている。戸田（1999）は、英語話者による日本語の外来語の生成において、三拍語では語末から二拍目の過剰般化、四拍語では語末から二拍目及び無核の過剰般化が見られることを報告している¹⁵。しかしながら、英語話者の生成では、語末から三拍目など、様々なアクセント型が他の先行研究で報告されているため、語末から二拍目が、外来語以外の語において特に多いかについては明らかでない。外来語は標準語では原則として語末から三拍目にアクセント核が置かれるため、学習者の生成における語末から二拍目の過剰使用は外来語に限られる、あるいは、外来語において特に現れやすいという可能性も考えられる。

重音節にアクセント核が現れやすい傾向を支持すると思われるデータは Shport（2008、p.178）にある。具体的には、ピッチパターンを記した語のリストを提示し生成させた

¹⁵ 戸田（1999）はアクセント核の位置を音節ではなく拍で数え、音節構造との関係は分析していない。

結果、軽音節のみで構成される語は、重音節を含む語に比べ、無核で正しく生成される割合が有意に高かったという。しかしながら、特殊拍を含む語を含まない語より無核化させやすいという逆の傾向を示す学習者もいるため（久野、1998、p.87）、その傾向の詳細は明らかになったとはいえない。

3-2-2 個人差

上述したように、英語話者の語アクセント生成における傾向として、無核が現れにくいと言われている（Kondo、2007、p.1650；土岐、1980、p.96）。しかしながら、最も多用されるアクセント型が無核であるという学習者もいる（久野、1998）。久野（1998、p.85）は語末から二拍目にアクセント核を置く傾向を持つ学習者、語末から三拍目に置く傾向を持つ学習者、無核で生成する傾向を持つ学習者がいることを示している。吉光（1981）は英語話者三名の発話からアクセント核の誤りを分析しているが、二名は有核化の傾向、一名は無核化の傾向があると報告している。

3-2-3 品詞の影響

Taylor（2012）¹⁶は、英語話者の日本語の生成における、品詞による傾向の違いを二点観察している。第一には、語のみの単独発話では、名詞は動詞より無核で生成されや

¹⁶ これらの傾向については、Taylor（2012）が、Taylor（2008）のデータに基づき分析している。

すく、第二には、三拍語の動詞及び動詞からの転成名詞においては、一拍目にアクセント核が置かれにくいという傾向である。

英語のストレスパターンには、以下のような品詞による違いがある。二音節語では、名詞は一音節目に、動詞は二音節目にストレスが置かれやすい傾向がある (Kelly & Bock, 1988, p.390 ; Guion et al., 2003, p.406) 。音節数がさらに多い語でも、名詞の方が動詞より前にストレスが置かれる傾向がある (Kelly & Bock, 1988, p.390) 。そのため、Taylor (2012) の結果である、名詞は動詞より無核で生成されやすく、動詞及び動詞からの転成名詞は一拍目にアクセントが置かれにくいという二つの傾向について、母語のストレスパターンが直接日本語に転移した可能性は低いと思われる。

標準語に関しては、三拍の動詞及び動詞からの転成名詞は原則として語頭にアクセント核を持たない (第 2 章参照) 。Taylor (2012) は、動詞及び動詞からの転成名詞は一拍目にアクセントが置かれにくいという傾向から、学習者は標準語のこの制約を習得しているのではないかと解釈している。しかしながら、語のみの単独発話に見られた動詞と名詞の差異の原因については明らかでない。

3-2-4 発話環境の影響

先行研究では、同じ学習者が同じ語を生成しても、発話ごとにアクセント型が異なることが報告されている (土岐, 1980 ; 山田, 1994a, b) 。このバリエーションの原因については明らかにされていないことが多いが、以下に述べるように、磯村 (1996) では、生成される文が平叙文であるか疑問文であるかの影響が指摘され、Taylor (2012) 、山田 (1994a, 1994b, 1999, 2007) では、同じ平叙文でも文の構造にも影響される可能性

が示唆されている。本節では、発話環境を、語が置かれている文の種類（疑問文、平叙文）及び前後に接続する語というように広く定義し、生成されるアクセント型への影響について述べる。

土岐（1980）は英語話者を対象に、同一の語が複数回現れている例を四つ含む文章を音読させ、生成される語のピッチ配置を記述し¹⁷、ピッチ配置は発話環境に左右されやすいと主張している（p.87）。しかしながら、分析対象となる語が置かれている発話環境は統一されておらず、どのような発話環境であればどのようなピッチ配置になるかという一般的な傾向については検討されていない。

磯村（1996）は、英語話者が対象者の半分を占める学習者群を対象に、標準語のアクセント型が異なる二拍の名詞を「これは何？○○？—ええ、○○です。」というフレームに入れ替えて読み上げさせた。その結果、ほとんどの学習者は、標準語のアクセント型と関係なく、疑問環境では「低高」と生成し、「です」に先行する形では「高低です」と生成した。対象者は日本語教師であるため日本語のレベルは高いと思われるが、標準

¹⁷ 土岐（1980）は「アクセント」を記述したと述べているが、これは本研究における「アクセント型」とも「アクセント核」とも異なるものである。混乱を避けるためここでは「ピッチ配置」と呼ぶことにする。具体的には、ピッチの高い拍、低い拍、高から低への変化がある拍、低から高への変化がある拍を記述している。

語のアクセント型による区別はされていなかったという。磯村（1996、p.2）はこの傾向について、母語の韻律の影響であるとしている。

この場合、ピッチ付与は語レベルではなく、句レベルで行われていることになる。ピッチ付与の領域は語レベルではないため、語アクセントについて述べるのは適切ではないが、強いて言えば、「です」の前では有核（語頭アクセント）、疑問環境では無核ということになる。ピッチ付与の領域が語レベルである日本語の観点から見た場合、置かれている発話環境により、語のアクセント型が変化していることとなる。

Taylor（2012）¹⁸は、同じ平叙文でも、後接語の有無によってアクセント型が変わる傾向を示している。具体的には、単独の名詞と「だ」に先行する名詞、さらに単独の動詞と「から」または「ので」に先行する動詞を比較した結果、「otoko→oTOko+da」¹⁹、「asobu→aSObu+kara」のように、単独の場合には無核の語が、後接語の前では最終拍から二拍目にアクセントを持ち、あるいは「oTOko→otoKO+da」、「aSObu→asoBU+kara」のように単独では語末から二拍目にアクセント核を置いて生成される語が、後接語の前では語末にアクセントを持つなど、標準語にはないアクセント型の組み合わせが見られた。ここでの対象語は、標準語でも「otoko→otoKO+da」、「asobu→asoBU+kara」のよ

¹⁸ この傾向については、Taylor（2012）が、Taylor（2008）のデータに基づき分析している。

¹⁹ 大文字はアクセント核のある拍を示す。以下同様。

うに、後接語の有無により、実現されるアクセント型が無核から有核に変わるという尾高型名詞及び平板型動詞²⁰であった。そのため、学習者の結果については、語末アクセントの誤った実現と解釈すべきか、後接語の有無の影響と解釈すべきかは明らかでなく、さらに調べる必要が残されている。

山田（1994a、1994b、1999、2007）の一連の研究は、発話環境の影響を調べることを目的としたものではないが、発話環境の影響を示唆する点が含まれている。これらの研究は、日本語学習者が生成するアクセント型はストラテジーの結果であると考え、そのストラテジーを様々なタイプに分類している。山田（1994a、b）では、英語母語話者が対象になっており、山田（1997、2007）では他の言語を母語とする日本語学習者が対象になっている。山田は、一連の研究を通し、ストラテジーの分類方法を発展させ、用いる用語を多少変えているが、ここで紹介するストラテジーの基本概念はその一連の研究を通して共通である。発話環境と関わるストラテジーは以下の五つである（山田、1994b、p.20 から引用）。

²⁰ 「遊ぶ」に関しては、「から」や「ので」に先行する場合には、語末にアクセント核を持つが、一般的には「尾高型動詞」ではなく「平板型動詞」と呼ばれる（金田一・秋永、2001、付録 pp.74-75）。

[OA]²¹ 初めのひとつ、またはふたつ以上のアクセント句にはアクセント核を置かず、最後のアクセント句の最初のモーラにアクセント核を置く。

[OB] 初めのアクセント句にはアクセント核を置かず、最後のアクセント句の、要素のさかいめの前のモーラに、アクセント核を置く。

[OC] アクセント核は、初めのアクセント句には置かれず、最後のアクセント句の要素の終わりから2番目のモーラに置かれる。

[OD] 初めのアクセント句にはアクセント核を置かず、最後のアクセント句の要素の終わりから3番目のモーラに置く。

[OP] 初めのアクセント句にはアクセント核が置かれず、最後のアクセント句の正しい位置に、アクセント核が置かれている場合がOPである。

山田 (1994a, b) では、[OA]~[OP]の例には以下のものが挙げられている。[OA]は「ほとんどの学生は」（「ほとんどの」は無核、「学生」は「が」にアクセント核）、[OB]は「日光のお寺と」（「日光の」は無核、「お寺」は「ら」にアクセント核）、[OC]は「住んでいる家族と」（「住んでいる」は無核、「家族」は「ぞ」にアクセント核）、[OD]は「とても色々な」（「とても」は無核、「色々」は最初の「ろ」にアクセント核）、[OP]は「興味がなくて」（「興味が」は無核、「なくて」は「な」にアクセント核）である。アクセント核の位置は[OA]~[OP]でそれぞれ異なるが、「ほとんどの」、「住ん

²¹ [OA]、[OB]などはストラテジーに付けられている名称であり、個別のストラテジーである[A]、[B]、[O]の組み合わせで形成されている。

でいる」、「日光の」、「とても」、「興味が」はいずれも無核となっている²²。山田（1994b）はこれについて、「初めのアクセント句」にはアクセント核が置かれずと説明している。

山田の一連の研究では、アクセント句は厳密に定義されていない。例えば、山田（1999、p.52）では、「ひとつのアクセント型を構成する『アクセント句』（多くの場合、文節）」とされ、山田（2007、p.24）では、「ひとつのアクセント単位である『アクセント句』（多くの場合文節）」とされている。したがって、文法的な単位であるのか、プロソディの音韻的な単位であるのかがあいまいである。山田（1999、2007）のアクセント型の分類の中には、一つの「アクセント句」に複数のアクセント核が置かれる例がある。そのため、Pierrehumbert & Beckman（1988、p.16）の「accentual phrase」（多くて一つのアクセント核を持つプロソディの音韻的な単位）とは異なり、使われている例を見る限りでは、「語」もしくは「文節」（語と助詞）を指していると考えられる。

したがって、山田（1994a、1994b、1999、2007）のストラテジーから、語もしくは文節が連続する際には、その一つ目の語もしくは文節は、無核で生成されやすいという傾

²² 山田は学習者が生成するアクセント型について、標準語との一致が見られたとしてもそれは中間言語のストラテジーの結果であるため、「たまたま正しいと考えるべきであろう」と述べている（山田 1999、p.59）。「とても」のアクセント型はその例の一つであると思われる。しかしながら、ストラテジーの一つには、後部要素が正しい位置にアクセント核が置かれる [OP] がある。この扱いの差異については説明されていない。

向がうかがえる。このピッチパターンについて、山田（1999、p.60）は、複合名詞や、無核語と有核語が連なったアクセント句²³（例えば「甘い料理」など）の標準語のパターンからの過剰般化によるものと推測している。しかしながら、山田（1994a、1994b）で報告されているデータから、他の発話環境に比べ、その発話環境が英語話者の生成において特に無核で生成されやすいかどうかは明確ではない。

3-2-5 母語の影響

日本語の語アクセントの習得が困難であることは、英語話者に限らず、韓国語、中国語、ポルトガル語など、他の言語を母語とする日本語学習者についても指摘されている。言語間の比較を行っているのは管見の限り戸田（1999）のみであるが、ここでは、先行研究による結果を概観し、母語の影響がどのように現れるかを検討する。本節ではこの検討の結果、英語話者に見られる語アクセントの音声的実現には、英語の語ストレスの影響が現れる可能性がうかがえることを述べる。しかしながら、どの語がどのアクセント型を取るかに関しては、英語以外の言語を母語とする日本語学習者にも類似の特徴が報告されており、母語の影響がどのように現れるかは不明であるということを示す。

²³ 山田はこれを「イントネーション句」と呼んでいるが、ここでは Beckman & Pierrehumbert (1988、p.18) の「accentual phrase」に従い「アクセント句」呼ぶ。

日本語の語アクセントはピッチのみで実現されるが、英語話者の日本語の生成には、語ストレスの影響が現れる可能性がある。堀口（1973）は、英語話者が生成する日本語の語レベルのプロソディには、ピッチアクセントとして実現される場合と、ストレスアクセントとして実現される場合の両方が見られ、ストレスアクセントの場合は、ストレスの置かれていない音節の母音が弱化し、第二ストレスが現れることがあると述べている。堀口（1973）はストレスアクセントかピッチアクセントかの判断を聴覚印象によって行っているが、Kondo（2007）は英語話者の生成において、アクセント核のある拍とない拍の長さ（正確には持続時間）を比較し、アクセント核のある拍を長く発音する学習者がいることを報告している²⁴。Kondo（2007）以外に音響的特徴を計測している先行研究はないようであるが、ストレスアクセントが現れる場合には、アクセント核のある拍が英語の影響で強く生成される可能性も考えられる。

どの語がどのアクセント型で生成されるかに関しては、英語以外の言語を母語とする学習者で、母語の影響がはっきりと出る例がある。韓国語を母語とする日本語学習者では、語頭子音が有声の破裂音である場合は語頭に低いピッチを、無声の破裂音である場

²⁴ Kondo（2007）は、アクセント型が記してある語を読み上げさせる方法を取っている。日本語の教科書では語のアクセント型は原則として記されない（Shport、2008）。そのため学習者は、無理にアクセント核を置こうとするなど、自然でない発話をする可能性があると考えられる。このような、英語話者による日本語の語レベルのプロソディの音響分析を行っている先行研究は、管見の限り Kondo（2007）のみである。

合は高いピッチを付与する傾向がある（福岡、2008）。同様の傾向は韓国語にもあると言われている²⁵（Kim & Duanmu、2004）。したがって、韓国語を母語とする日本語学習者のこの傾向は母語からの転移によると思われる。

一方多くの場合には、どのような語がどのアクセント型で生成されるかについて、母語の影響がどのように現れるかが判然としない。その理由は、複数の母語話者の間で類似の特徴が報告されているためである。例えば、英語話者に見られる特徴である語末から二拍目あるいは二音節目（数え方は研究によって異なる）の過剰使用は、韓国語（戸田、1999；中東、2001）、中国語（戸田、1999）、広東語（Lee et al.、2006）、ブルガリア語（アンドレエフ、2002）でも報告されている。重音節にアクセント核が置かれやすい傾向は、韓国語（中東、2001）、ポルトガル語（助川、1999）、ブルガリア語（アンドレエフ、2002）で観察されている。中東（2001、p.87）は、語末から二拍目にアクセント核が置かれやすい傾向、音節量（軽音節か重音節か）がアクセント付与に影響する傾向について、母語を異にする学習者でも類似する特徴が見られることを指摘してい

²⁵ 韓国語には、平音、濃音、激音という三種類の破裂音がある。それらが語頭に來る場合には、音声的には三つとも無声で実現される。一方語中では、平音は有声になる。平音は基底では有声、濃音と激音は基底では無声であるという Kim & Duanmu（2004）の記述に従って考えれば、日本語学習者に見られる傾向は母語の傾向と同様だと考えられる。一方平音、濃音、激音の三種類をいずれも無声であるとする場合、母語の規則と中間言語の規則が多少異なることになる。

るが、管見の限り、この共通の傾向についての原因を検討している先行研究は見あたらない。

品詞に関しては、名詞が動詞より無核で生成されやすいという傾向は、英語だけでなくポルトガル語話者にも見られる（助川、1999）。学習者の母語が英語の場合、母語のストレスパターンが直接日本語に転移した可能性は低いことはすでに述べた。母語がポルトガル語である学習者についても、助川（1999、p.18）はポルトガル語のストレス付与規則からの転移では説明ができないと述べている。

発話ごとにアクセント型が異なるという傾向も、様々な言語を母語とする日本語学習者に見られる（角道、1990；山田、1999、2007）。どのような発話環境であればどのようなアクセント型で生成されるかについては不明な点が多いが、学習者の母語と関係なく現れる傾向は次のように報告されている。まず、平叙文が有核、疑問文が無核で生成されるのは英語以外にも、様々な言語を母語とする日本語学習者に共通である（磯村、1996）。さらに、連続している語もしくは文節の一つ目が無核で生成されやすいという傾向も、英語話者に限られたことではない。山田（1994a、1994b）が提案しているアクセント付与ストラテジーの分類は、英語以外に様々な言語話者に共通であるとされている（山田 1999、2007）。連続している語もしくは分節の一つ目は、他の発話環境に比べ、特に無核で生成されやすいかどうかは明確にされていないが、その傾向が英語話者にあるとすれば、他の母語話者にもある可能性がある。

平叙文が有核、疑問文が無核で生成されやすい傾向について、磯村（1996、p.2）は母語の韻律の影響であるとしている。一方、連続している語もしくは文節の一つ目が無核で生成されることについて、山田（1999、p.60）は標準語のピッチパターンからの過

剰般化による可能性を指摘している。しかしながら、この主張に反して、平叙文・疑問文のパターンは日本語のイントネーションから一般化され、連続している文節の一つ目が無核で生成されるのは母語の韻律の影響によるという可能性も考えられる。英語話者、ならびに日本語学習者全般について、語アクセントの生成に母語の影響がどのように現れるかについては、疑問が多く残されている。

3-2-6 英語話者の傾向のまとめ

英語話者による語アクセントの特徴を調べた一連の先行研究から、以下のことが明らかになっている。第一に、様々なアクセント型が生成され、標準語と一致する場合も一致しない場合もある。第二に、無核と語末アクセントが生成されにくい傾向が報告されているが、最も多用されるアクセント型には個人差がある。第三に、同じ学習者が同じ語を生成しても、発話ごとに異なるアクセント型で生成することがある。

どのアクセント型が生成されるかは、音節構造と拍数、品詞、発話環境の要因が影響する可能性が先行研究からうかがえる。音節構造と拍数に関しては、語末から二音節目もしくは重音節にアクセント核を置く傾向が示唆されている。品詞に関しては、名詞は動詞より無核で生成されやすく、三拍語では、動詞及び動詞からの転成名詞は一拍目にアクセント核が置かれにくい傾向が観察されている。発話環境については、疑問文は無核、平叙文は有核で生成され、同じ平叙文でも後接語の有無によってアクセント型が異なるという傾向が観察され、また、語もしくは文節が連続する場合にその一つ目が無核で生成される可能性が示唆されている。

しかしながら、これらの傾向については、どれもデータが少なく、確定したものではない。さらに、英語以外の言語を母語とする日本語学習者にも類似の傾向が報告されているため、母語の影響がどのように現れているかも不明である。次節では、英語話者の日本語による語アクセントの習得について残されている課題をより明確にするために、他の言語の語レベルのプロソディである語ストレスや語トーンの習得を対象としている研究を検討していく。

3-3 残されている課題

標準語の語アクセントは、語レベルのプロソディであるという点では、他の言語の語ストレスや語トーンと類似しているものである。本節では、英語話者による日本語の語アクセントの習得に関する先行研究の主張と、語ストレスや語トーンに関する第二言語習得研究で論じられていることを照らし合わせ、英語話者が日本語の語アクセントをどのように習得するかについて、残されている課題を明確にする。具体的には、規則によるアクセント付与、語ごとの習得、習得過程という三つの項目について順に述べていく。

3-3-1 規則によるアクセント付与

語ストレスの第二言語習得研究の中には、学習者のストレス付与は規則に従って行われると論じているものがある。上述の通り、英語話者に関しては、生成されるアクセント型は、音節構造、拍数、品詞及び発話環境に何らかの影響を受けることが明らかになっている。したがって、これらの要因に基づき、アクセント核の付与が規則によって行

われる可能性が考えられる。本節では、その可能性について述べるとともに、どのような中間言語の規則があり、どの程度その規則に従ってアクセント付与が行われるかが具体的にされていないことを指摘する。

第二言語学習者に見られる中間言語の規則は、母語にある規則の影響で形成される場合がある。例えば、英語の第二言語学習者は、音節構造及び品詞に基づいた母語のストレス付与規則を転移させる場合がある (Archibald、 1992、 1993)。本研究とは逆のケースになるが、日本語を母語とする英語学習者の英語のストレス付与は、許される音節構造が両言語で異なる点を反映し、日本語のアクセント付与規則を若干調整した規則によって行われると言われている (Kawagoe、 2003²⁶)。

一方で、中間言語規則が目標言語における語レベルのプロソディの統計的なパターンの影響で形成される場合もある。ストレス付与については、例えば英語には、二音節名詞は一音節目に、二音節動詞は二音節目にストレスが置かれやすい傾向がある (Kelly & Bock、 1988、 p.390 ; Guion et al.、 2003、 p.406) が、第二言語学習者はその統計的なパターンを習得できることが知られている。Davis & Kelly (1997)、Arciuli & Cupples (2003、 2004) は、英語の第二言語学習者はその傾向についての知識を習得できるという結果を示しており、Guion et al. (2004)、Guion (2005)、Wayland et al. (2006) は、英語の第

²⁶ Archibald (1997) は日本語を母語とする英語学習者のストレス付与には規則性がないと報告しているが、Kawagoe (2003) は規則性があると主張し、その詳細について論じている。

二言語学習者の無意味語のストレス付与にはその傾向が現れるとしている。また Pater (1997) は、中間言語の規則が、母語とも目標言語とも異なる場合もあることを指摘している。

日本語の第二言語学習者の生成におけるアクセント付与規則には、語レベルの規則だけでなく、句レベルの規則も存在すると考えられる。前述の通り、磯村 (1996) の主張によると、本来の標準語のアクセント型を問わず、平叙文では有核、疑問文では無核で生成される傾向が、英語を含む様々な言語を母語とする学習者にある。また、これに類似していると思われる結果が宇都木 (2004) でも報告されている。宇都木 (2004) は、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、「形容詞・名詞です」という資料を会話フレームに置き生成させた。その会話フレームは三種類で、それぞれ対象の資料が中立発話になるもの、形容詞にフォーカスが来るもの、名詞にフォーカスが来るものであり、資料の標準語のアクセント型も様々であった。分析の結果、フォーカスによる違いはあったが、どのフォーカスの状況でも、本来のアクセント型がまったく無視され、全ての資料が同じようなピッチパターンで発音されたという。この結果は、ある一つの発話環境に置かれた場合にはどの語も同じようなピッチパターンで生成されているという点で、磯村 (1996) の結果と共通しているといえよう。

ピッチパターンが発話環境のみで決まるのだとすれば、アクセント付与は音節構造や品詞に基づく語レベルの規則ではなく、句レベルの規則で行われていることになる。英語話者に関しては、音節構造や品詞に基づく、語レベルのアクセント付与規則を示唆する傾向、発話環境に基づく句レベルの規則を示唆する傾向の両方が先行研究で報告されているが、日本語学習者のアクセント付与における両規則の影響は明らかになっていない。

本節ではここまで、第二言語学習者に見られる傾向について、中間言語の「規則」の影響があると述べてきたが、規則という用語は適切ではないかもしれない。第2章で見たように、伝統的には、英語にはストレスの位置を予測するストレス付与規則があるとされているが、英語の母語話者でも、無意味語へのストレス付与の際には揺れが生じる（Guion et al., 2003）。Guion et al. (2003) はこれに影響する要因として、音節構造や品詞の他、音韻的に類似している語のストレスパターンを挙げている。つまり、母語話者でも揺れが生じるのは、ストレス付与は絶対的な規則によって決まるのではなく、競合する複数の要因に影響を受けるためであるということである。

英語の第二言語学習者のように、日本語の第二言語学習者も、母語から何らかの規則を転移させ、目標言語から何らかの規則（もしくは統計的な傾向）を習得する可能性が考えられる。また、英語について言われているように、その規則の予測性は完全なものではなく、複合的な要因に基づきアクセント付与が行われる可能性もある。しかしながら現時点では、中間言語の規則が具体的にどのようなもので、母語及び日本語とはどのように異なるのか明らかになっていない。さらに、アクセント付与はどの程度中間言語の規則に従って行われるかも明らかでない。

3-3-2 語ごとの習得

前節では、日本語を学ぶ第二言語学習者の生成について、アクセント付与を決める語レベル・句レベルの規則の可能性について述べてきた。しかしながら、日本語学習者のアクセント付与が全て規則に従って行われるとは限らない。語ごとにアクセント型を知覚し、音韻表象にエンコードする可能性もある。本節では、ストレスの第二言語習得研究を参考にし、英語話者が日本語の語アクセントを語ごとに習得する可能性について述

べる。生成されるアクセント型が標準語のアクセント型と一致したという報告が先行研究においてなされている場合、それが標準語のアクセント型からの直接的な影響による一致なのか、あるいは中間言語の規則を適用した結果としての偶然の一致なのかが明確ではないことが多く、アクセント型がどの程度語ごとに習得されているかは明確ではない。

英語を学ぶ第二言語学習者に関しては、無意味語の生成におけるストレス付与の調査から、音節構造と品詞に基づいたストレス付与についての知識は英語の母語話者とは異なることが明らかになっている（韓国語母語話者については、Guion et al., 2004；スペイン語母語話者については、Guion, 2005；タイ語母語話者については、Wayland et al., 2006）。しかしながら、同じ学習者が無意味語ではなく有意味語を生成する場合、非常に高い一致率で英語のストレスパターンで生成できると報告されている。Wayland et al. (2006, p.298) はこれらの結果について、英語の第二言語学習者は、ストレス付与規則ではなく、ストレスパターンの語ごとの習得に頼る傾向があるとしている²⁷。

ストレスパターンを語ごとに習得することは、つまり、各語ごとにストレスパターンを知覚し、音韻表象にエンコードするということである。しかしながら、第二言語学習

²⁷ これに該当するのは特に「後期バイリンガル」とされているが、「後期」というのは、初めて目標言語を学習したのが15歳以上であると定義されているので、本研究で対象にしている学習者も同様に「後期バイリンガル」となる。

者には、第二言語の語レベルのプロソディを音韻表象にエンコードすることが可能である保証はない。Dupoux et al. (1997、2001、2008) の一連の研究では、フランス語母語話者には、語のストレスパターンを音韻表象にエンコードすることが困難であることが示されている。これは、フランス語には、対立的な語レベルのプロソディがないためであるとされている (Dupoux et al.、2008、p.701)。

フランス語母語話者は語ストレスが全く知覚できないわけではない。Dupoux et al. (1997、p.8-9) は、同じ話者が生成した資料を用いた AX のタスクでは、X のストレスパターンが A と同じかどうかという判断は、高い正解率でできることを報告している。また、複数の資料の連続を聞き、その順番を答えるという再生課題では、「tupu」と「tu'pu」のようにストレスの位置が異なる資料の正解率は、「tupu」と「tuku」のように一つの音素が異なる資料と同程度であった (Dupoux et al.、2001、p.1614-1615)。

フランス語母語話者にできないのは、資料に音声的バリエーションがあり、かつ、高い記憶容量を必要とするタスクの場合である。例えば、異なる話者が生成した資料を用いた ABX のタスクでは、フランス語母語話者の正解率は、母語に語ストレスを持つスペイン語母語話者に比べ低かった (Dupoux et al.、1997、p.2-3)。また、上記の再生課題と類似した実験では、資料に音声的バリエーションがある、もしくは異なる話者に生成されたものである場合においては、フランス語母語話者とスペイン語母語話者の傾向に以下の差異が生じる。スペイン語母語話者では「tupu」と「tu'pu」のようにストレスの位置が異なる資料の正解率は、「tupu」と「tuku」のように一つの音素が異なる資料とは違いがなかったが、フランス語母語話者では、ストレスが異なるペアの正解率が相対的に低かった (Dupoux et al.、2001)。

Dupoux et al. (1997, 2001) は、これらの結果について、ストレスパターンの違いは音響的には知覚できるが、音韻表象にストレスパターンをエンコードすることができないことを示すものと解釈し、その現象を「ストレスデフネス」と呼んでいる。ストレスデフネスはフランス語のモノリンガルに限らず、スペイン語の学習経験のあるフランス語母語話者にも見られる (Dupoux et al., 2008)。

では、英語話者の場合についてはどうだろうか。日本語の語アクセントを音韻表象にエンコードすることはできるだろうか。知覚研究に関しては、英語話者は日本語のアクセント型を、少なくとも音響的には弁別できると考えられる。坂本 (2008) によると、ABX のタスクでは、日本語の母語話者と同程度に日本語のアクセント型を聞き分けることができるという。しかしながら、Dupoux et al. (1997, 2001, 2008) の一連の研究の結果と照らし合わせると、音響的に聞き分けることができたのか、あるいは音韻表象にエンコードできたのかが明確ではないと思われる。

語レベルのプロソディの音声特徴が母語と異なる場合には、アクセント核の位置を間違えて知覚する可能性がある。例えば、スウェーデン語を母語とする日本語学習者は、アクセントが一拍遅い位置にあるように知覚する傾向がある (Nagano-Madsen, 2000)。Nishinuma et al. (1996) 及び西沼 (1997) は、英語話者を対象に、アクセント核の位置にかぎ印を付けさせる方法を用い、知覚の傾向を調べている。正解率はアクセント型によって異なり、語頭から三拍目、四拍目のアクセントは低く、語頭から二拍目及び無核は高く、さらに語頭アクセントには学習者による差異があったことを報告している。しかしながら、誤用の傾向は分析されていないため、スウェーデン語母語話者のように遅く知覚する、あるいは早く知覚するような傾向があるかどうかについては明らかでない。

英語話者を対象に語アクセントの生成における特徴を調査している先行研究では、生成されるアクセント型が標準語のアクセント型と一致する場合もしない場合も報告されているが、アクセント型の語ごとの習得が可能かどうかは明らかにされていない。磯村（1996）に関しては、「です」の名詞は有核、疑問環境の単独名詞では無核で生成される傾向を報告しているため、アクセント型は音韻表象にエンコードされていないか、もしくは生成では実現されていないという可能性が示唆される。一方他の先行研究（堀口、1973；久野、1998；Taylor、2008、2012；土岐、1980；山田、1994a、b；吉光、1981）では、生成されるアクセント型が標準語と一致している場合には、中間言語の規則を適用した結果偶然一致したのか、音韻表象にエンコードされているアクセント型が実現され一致したのかについては明確ではない。

3-3-3 個人差及び経験量の影響

本節では、日本語の語アクセントは英語話者によってどのように習得されていき、さらに各個人の間言言語はどのような体系を持つかという二点について、現時点で明らかにされている点が非常に少ないということを示す。

まず、日本語の経験量が長くなるにつれ、語アクセントの特徴がどのように変わっていくかについての記述はほとんどないに等しい状況である。吉光（1981）は英語話者三名の発話からアクセント核の誤りを分析しており、中級レベルの二名は有核化の傾向、上級レベルの一名は無核化の傾向があると報告している。しかしながら、アクセント型の傾向の差異は習得段階の違いによるものであるのか、あるいは、習得段階に関わりのない個人差であるのかについては明らかでない。

管見の限りでは、他の言語を母語とする日本語学習者についても、日本語の第二言語学習者の経験量が異なる二つの学習者群が生成するアクセント型の傾向を比較している横断的研究はないようである。縦断的研究については、広東語を母語とする日本語学習者の語アクセント及びイントネーションを調査している研究があるが、二年間にわたり語アクセントの正解率は変わらなかったと報告している (Lee et al., 2006)。

英語話者が多用するアクセント型は個人によって異なるということが先行研究によって明らかになっているが、各個人の間言語が具体的にどのような体系を持つかは明らかでない。他の言語ペアを対象とした先行研究から、多用されやすいアクセント型だけでなく、影響する要因においても、個人差が現れる可能性がうかがえる。アンドレエフ (2002) では、ブルガリア語を母語とする日本語学習者に音節構造の影響が現れるかどうかは、学習者によって異なると主張されている。また助川 (1999) では、ポルトガル語を母語とする日本語学習者について、品詞によるアクセント型の傾向に差異が現れるかどうか個人によると述べられている。さらに、英語話者がトーン言語を学ぶ場合には、トーンが正しく生成される確率に影響する要因は学習者によって異なると言われている (Nguyen & Macken, 2008)。しかしながら、英語話者については、要因の影響に個人差があるかは明らかでない。

3-4 終わりに

本章では、英語話者の生成する日本語の語アクセントを調査している先行研究を概観し、音節構造、拍数、品詞、発話環境といった要因が、生成されるアクセント型に影響することを指摘した。次に、これらの先行研究の結果を、語ストレスや語トーンについ

での第二言語習得研究で論じられていることと照らし合わせ、規則によるアクセント付与及び語ごとの習得がそれぞれどの程度どのように行われるか、個人差や経験量の影響がどのように現れるかが課題として残されていることを述べた。次章では、これらの課題を明らかにするために行った調査の方法論を述べる。

第 4 章

方法論

4-1 はじめに

本章では、本研究で行った調査について、調査参加者、録音資料、調査方法の順に、詳しく述べていく。

4-2 調査参加者

本研究では、日本語の経験量が比較的少ない（以下「経験の少ない」）学習者群、日本語の経験量が比較的多い（以下「経験の多い」）学習者群というように、日本語の経験量が異なる二つの学習者群を対象とする。調査参加者の人数は、経験の少ない学習者は 13 名（女性 7 名、男性 6 名）、経験の多い学習者は 8 名（女性 3 名、男性 5 名）である。

調査参加者の母方言および日本語の経験について、本調査の前に背景調査を行った。本節では、これらの項目について順に述べていく。

4-2-1 母方言

調査参加の条件として、イギリス英語の SSBE (Standard Southern British English) が母語であること、イングランドの南部で育ったこと、英語のモノリンガル環境で育ったことの三点を背景調査で確認した。

SSBE というのは、主にイングランドの南部で話される標準イギリス英語である。SSBE 話者であるかは、本人が SSBE を母語として話すと自称することを条件とした。調査参加者の 21 名のうち、18 名はイングランドの南部で育てられ、SSBE 話者であると自称している。残りの 3 名 (MF_KW、MF_PH、MM_DT) は、出身地はイングランドの南部ではなく、イギリスの他の地域であるが、本人は SSBE を母語として話すと自称しており、SSBE 話者である筆者の印象もそれと一致した。この三名の参加を認めた理由は、経験量の比較的多い学習者の数がより限られるのを避けるためである。これは結果に悪影響を及ぼすものではないと思われるが、この件については本論文の考察に再度述べる。

モノリンガル環境で育ったという条件であるが、一名の調査参加者 (LF_MB) は七歳からドイツ語にも接しているが、参加可にすることとした。

4-2-2 日本語の経験

本節では、調査参加者について、日本語学習年数と時間、留学経験の有無と日本滞在期間、日本の滞在地について述べる。

前述の通り、調査の対象となるのは日本語の経験量が異なる二つ学習者群である。経験の少ない学習者群と経験の多い学習者群のそれぞれの参加条件は、日本語学習期間および留学の有無による。調査参加者は調査当時、イギリスの大学で日本語を学習しているか、あるいは、学習した経験のある日本語学習者である。イギリスの大学では、日本語を学習している学生は、二年次または三年次に、日本の大学に留学するのが一般的である。経験の少ない学習者群の参加条件として、大学で日本語を一年間または二年間学習しており、留学経験を有しないことを条件とした。一方、経験の多い学習者群の参加条件として、大学で日本語を四年学習しており、そのうちの一学年は日本の大学に留学していることを条件とした。これらの二点は背景調査で確認した。

背景調査では、日本語の学習年数と留学の有無の他、日本語学習時間、日本滞在期間、日本の滞在地を記入させている。表 4-1は背景調査の回答をまとめたものである。

表 4-1のデータから、経験の少ない学習者群に関しては、日本語学習時間は多くて430時間で、日本滞在が旅行などであっても三カ月以下であることが分かる。一方で、経験の多い学習者群では、日本語学習時間は少ない学生で640時間、日本滞在は少なくとも一年弱であることが分かる。以下では、日本語学習者時間、日本滞在期間とその滞在地について、順に詳細を述べる。

表 4-1 調査参加者の日本語経験について

経験の少ない学習者群

学習者	学習時間	滞在期間 (週間数)
LF_AG	280	2
LF_EP	210	1
LF_GC	200	0
LF_JW	320	0
LF_LC	240	9
LF_LD	170	0
LF_MB	430	11
LM_JE	200	0
LM_JO	310	0
LM_JR	220	0
LM_MD	220	10
LM_MT	70	0
LM_NB	360	4

経験の多い学習者群

学習者	学習時間	滞在期間 (週間数)	滞在地 (週間数)
MF_KW	1400	212	東京 (52) 鹿児島 (156)
MF_NT	1250	43	東京 (43)
MF_PH	800	56	熊本 (52)
MM_DM	790	80	名古屋 (40)
MM_DT	770	46	名古屋 (44)
MM_JB	720	48	東京 (40)
MM_LH	1380	52	東京 (52)
MM_TG	640	44	名古屋 (44)

表 4-1の一行目は日本語の学習時間を示す。背景調査では、大学入学前、大学の各学年、大学外の授業という項目ごとに記入させた。回答の形は、「〇〇時間×〇〇週間」であったが、表 4-1では、その合計を10時間単位に四捨五入したものである。経験の少ない学習者群は、上述したように大学で一年間または二年間日本語を学習している。学習時間は短くて70時間、長くて430時間である。平均は250時間、標準偏差は90時間であるが²⁸、このバリエーションは、大学やコースの相違、入学前の学習経験の有無、大学以外の授業の受講経験の有無による。経験の多い学習者群は大学で四年間学習している。学習時間は短くて640時間、長くて1400時間である。平均は970時間、標準偏差は320時間である。バリエーションは経験の少ない学習者群と同様の理由による。

表 4-1の二行目は日本滞在期間を週間単位で示している。背景調査では、各滞在につき、「〇〇年間、〇〇カ月間、〇〇週間」を記入させたが、表 4-1で示しているのは、一年間を52週間、一カ月を4週間と計算して合計させたものである。経験の少ない学習者群は上述したように留学経験がなく、日本に行ったことがあっても旅行程度（三カ月以内）である。経験の多い学習者群は全員約一年の留学経験がある。一名（MM_DM）はそれに加えさらに一年日本に滞在した経験がある。他の一名（MF_KW）は大学卒業後日本に約三年滞在している。MF_KWの一名を除いては調査当時、大学を卒業する直前であった。

²⁸ 統計は R（R Development Core Team 2009）を用いて計算している。以下同様。

表 4-1 の三列目は日本の滞在地を示している。三か月以上滞在した場所があれば示しているが、経験の多い学習者のみが該当する。なお、序論で述べたように本研究は、調査参加者が習得しているのは日本語の方言の中で標準語であるという前提を進めている。しかしながら、表 4-1 から分かるように、日本での滞在地は標準語圏であるとは限らない。特に、MF_KW は標準語圏でない鹿児島に、MF_PH は熊本に滞在経験がある。これに関しては、序論で説明した通り結果に悪影響を及ぼすものではないと思われるが、本論文の第 7 章と考察に再度述べる。

4-3 録音資料

録音資料は、三つの発話環境に置かれた対象語である。対象語は、拍数、品詞、および標準語のアクセント型という点で異なるものである。以下では、対象語、ならびに対象語に付加させる語（以下では「付加語」）について述べ、各発話環境に置かれたときの対象語について標準語のアクセント型を述べる。

4-3-1 対象語について

4-3-1-1 拍数、品詞とアクセント型

対象語は二拍および三拍の単純名詞、動詞からの転成名詞（以下「転成名詞」）、動詞である。対象とするアクセント型は、標準語に原則として生起する全てのアクセント型である。どのアクセント型が原則的であるかは、第 2 章で述べたように、品詞によっ

て異なる。表 4-2 は各拍数の各品詞の対象語に対して、対象とするアクセント型を示している。

表 4-2 対象とするアクセント型とその対象語例

	頭高型	中高型	尾高型	平板型
二拍				
単純名詞	「雨」 /Ame/		「部屋」 /heYA/	「箱」 /hako/
転成名詞			「振り」 /fuRI/	「減り」 /heri/
動詞	「出す」 /DAsu/			「踏む」 /fumu/
三拍				
単純名詞	「出口」 /DEguchi/	「あなた」 /aNAta/	「昼間」 /hiruMA/	「左」 /hidari/
転成名詞			「焦り」 /aseRI/	「始め」 /hajime/
動詞		「選ぶ」 /eRAbu/		「浴びる」 /abiru/

表 4-2 から分かるように、単純名詞に関しては、二拍では頭高型、尾高型、平板型の三種類、三拍では頭高型、中高型、尾高型、平板型の四種類を対象としている。転成名詞では、拍数を問わず、尾高型と平板型が対象となる。転成名詞には、頭高型の「限り」のように、他のアクセント型の語もあるが、尾高型と平板型以外のアクセント型に関しては、第 2 章で説明したように例外的と考え、対象外としている。最後に動詞に関しては、二拍では頭高型と平板型、三拍では中高型と平板型というように、語末から二拍目のアクセント核と無核の二種類を対象としている。動詞には、頭高型の「通る」のよう

に他のアクセント型の語もあるが、第2章で説明したように例外的なアクセント型と考え、対象外としている。

なお、表4-2に示しているのは、語の本来のアクセント型であり、かならずしも発話環境に置かれた場合に実現されるアクセント型ではない。標準語では例えば、尾高型の語でも単独の発話環境では無核で生成され、平板型の動詞でも「ので」、「のが好きだ」に先行する環境では語末にアクセント核が置かれて生成される。これについては、4-3-3節に詳しく述べる。

4-3-1-2 選定条件

対象語は以下の五つの要因を考慮して選定している。

- (1) 軽音節のみ（特殊拍、連母音を含まない）
- (2) 無声環境の母音がない
- (3) 標準語のアクセント型に揺れがない
- (4) 外来語でない
- (5) 学習者に馴染みがある

以下では、それらについて詳しく述べていく。

(1) 軽音節のみ

重音節を含む語は本研究の対象外としている。これは序論で述べたように、音節構造からアクセント型が予測されることを避けるためである。軽音節のみで構成される語を対象とし、特殊拍（撥音、促音、長音）および連続母音を含む語は扱わないこととする。

語頭子音に関しては、序論で説明したように、ある語もない語も含めることとする。つまり、二拍語は(C)V.CV 構造、三拍語は(C)V.CV.CV 構造である。

(2) 無声環境の母音を含まない

標準語では、狭母音が無声子音の間に挟まれた際には母音が無声化されることがある。英語話者にとってこれは連続子音に聞こえる可能性がある。したがって、無声母音を含む拍とその前の拍が英語を母語とする学習者にとっては重音節に感じられる可能性があると考えられる。そのため、無声環境（無声子音の間）の狭母音を含む語を対象語から除外している。ただし、語の最終拍が「き」、「く」、「し」、「す」、「ち」、「つ」のように無声子音・狭母音の組み合わせで構成される語は含めている。

(3) 標準語のアクセント型に揺れない

標準語のアクセント型に揺れない語に限定した。アクセント型を『新明解日本語アクセント辞典』（金田一・秋永 2001）で確認した。原則として標準語のアクセント型が一つしかない語を用いているが、避けられないアクセント型の変種が二つある。一つ目は名詞（単純名詞、転成名詞の両方）の尾高型語が該当するが、平板型に変化させる接頭辞の「お」（例：「お言葉」、「おやすみ」など）である（金田一・秋永、2001、付録 p.94）。これに関しては、尾高型名詞の難しさの一つと考え、対象語の選定の問題ではないと判断している。もう一つは転成名詞が該当するが、分節音が同じで、アクセント型が異なる動詞の連用形である。例えば、転成名詞の「飲み」、「休み」は尾高型であるが、「彼女と飲みに行った」の連用形の「飲み」は頭高型で、「そこに休みに行こう」の連用形の「休み」は中高型である（金田一・秋永、2001、付録 p.52、p.76）。転成名詞の「泣き」は平板型であるが、「泣きはしない」の連用形の「泣き」は尾高型と

なる（金田一・秋永、2001、付録 p. 52、p.74）。これに関しても、転成名詞の難しさの一つであると考ええる。

（４）外来語でない

母語からの影響を考え外来語を除外している。

（５）学習者に馴染みがある

日本語学習者にとって馴染みのある語であるようにするため、可能な限り初級教科書の『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ本冊』（スリーエーネットワーク編 1998）に載っている語から選定を行っている。しかしながら、条件を満たす語が12語なかった場合には、この条件は守れなかった。以下には、その詳細を説明する。動詞および二拍の単純名詞は全て『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ本冊』から選定している。三拍の単純名詞は、標準語のアクセント型の分布における偏りを反映しているためか、中高型、尾高型は他の条件を満たす語がそれぞれ四語、七語のみであった²⁹。転成名詞に関しては、『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ本冊』に載っている語は非常に少ない。二拍語では「次、釣り」という二語しかなく、三拍語では「話、曇り、悩み、休み、始め、代わり、煙、周り、終わり」という九語しかない。12語ない場合、他の語を代わりに選んだ。なるべく学習者に馴染みがあると予想される語を選んだが、このような語に関しては、特に経験の少ない学習者にとって

²⁹ 杉藤・田原（1989）によると、標準語の三拍名詞では中高型、尾高型は比較的少ない。

未習である可能性が考えられる。これは避けられなかった問題であるが、結果には悪影響を及ぼしていないと思われる。この件については第 5 章で再度述べる。

4-3-1-3 対象語

以上説明した対象語として、各品詞、拍数、アクセント型それぞれに付き、12 語を使用する。表 4-3 は使用する全ての対象語を示す。

表 4-3 対象語

単純名詞

二拍	頭高型	雨、地図、駅、船、笠、窓、猫、奥、空、外、海、夜
	尾高型	部屋、犬、鍵、怪我、町、夏、音、島、裏、山、雪、夢
	平板型	箱、暇、紐、星、医者、椅子、壁、道、右、水、庭、横
三拍	頭高型	出口、技術、五月、花火、医学、彼女、家族、眼鏡、緑、涙、荷物、姿
	中高型	あなた、八時、花屋、一部、いところ、事務所、中身、二か所、斜め、おもちゃ、おしゃれ、和菓子
	尾高型	昼間、地獄、鏡、言葉、娘、仲間、表、男、刺身、宝、手元、夜中
	平板型	左、日にち、田舎、子供、車、昔、同じ、大人、魚、仕事、手紙、後ろ

転成名詞

二拍	尾高型	飽き、振り、晴れ、褒め、勝ち、賭け、漏れ、慣れ、伸び、次、膿、読み
	平板型	空き、減り、貸し、負け、真似、乗り、抜け、染み、釣り、売り、詫び、揺れ
三拍	尾高型	歩き、焦り、話、痛み、曇り、流れ、悩み、残り、恐れ、動き、別れ、休み
	平板型	始め、代わり、飾り、煙、周り、並び、踊り、遅れ、終わり、泊まり、続き、汚れ

動詞

二拍	頭高型	出す、出る、書く、噛む、切る、見る、持つ、飲む、脱ぐ、住む、取る、打つ
	平板型	踏む、貼る、行く、いる、消す、着る、泣く、寝る、乗る、押す、する、飛ぶ
三拍	中高型	歩く、選ぶ、話す、走る、被る、壊す、戻る、起きる、泳ぐ、食べる、届く、休む
	平板型	浴びる、遊ぶ、入れる、磨く、並ぶ、登る、送る、探す、泊まる、続く、痩せる、汚す

4-3-2 付加語について

対象語は以下の三つの環境に置き、発話資料とした。

(1) 単独

例：「雨」、「振り」、「出す」

(2) 後接語の前

例：「雨だ」、「振りだ」、「出すので」、「出すほど」

(3) 内容語の前

例：「雨が降る」、「振りをする」、「出すのが好きだ」、「出すことができる」

なお、本論文では、コピュラと助詞を合わせて「後接語」と呼ぶこととする。発話環境の(3)は「内容語の前」と呼ぶこととするが、正確には、対象語と内容語をつなぐ後接語もある。以下では、発話環境(2)と(3)に用いる付加語について述べる。

4-3-2-1 後接語

後接語の前という発話環境では、単純名詞と転成名詞にはコピュラの「だ」を、動詞には助詞の「ので」および「ほど」の二種類³⁰を付加している。

³⁰ 二種類を用いている理由は4-3-3-4節に述べる。

名詞に付加させる後接語は一拍語、動詞に付加させる後接語は二拍語というように、拍数が異なるものになっている。その理由は以下の通りである。後接語を一拍語に揃えるためには、名詞に「だ」を、動詞に一拍分の助詞を付加させる方法もあった。しかしながら、その場合には、「行くか」、「行くの」、「行くし」のように終助詞の働きが現れ、疑問、強調、連続のような中立でないイントネーションで生成される可能性がある。日本語の第二言語学習者には、発話環境がアクセント型に影響することが先行研究から分かっているため、イントネーションのために結果に影響する可能性がある。

逆に、動詞に「ので」および「ほど」を付加させ、名詞にも二拍分の後接語を付加させる方法もあった。しかしながら、「鍵から」、「鍵より」、「鍵さえ」などを用いると、名詞の資料語の独立性が低く、文脈がない場合には学習者にとって意味が想像しにくいと考えられる。機能語を二拍語に揃えるために、名詞に付加する助詞に終助詞を加え、「鍵だよ」のように二拍にする方法もあったが、その場合についても、終助詞の影響で中立でないイントネーションで生成され、結果に影響を与える恐れがあると思われる。もう一つ可能性としては、名詞にも動詞にも「と」を付加させる方法である。しかしながら、平板型名詞・平板型動詞において、「と」が付いた場合には無核ではなく、語末アクセントになる傾向がある（金田一・秋永、2001、付録 pp. 72-75）。したがって、この方法も不適切である。

実際に標準語では、名詞と動詞に後続する後接語の拍数が異なる場合がしばしばある。名詞に後続する「だ」、「は」、「が」、「を」、「も」などに対して動詞には「のだ」、「のは」、「のが」、「のを」、「のも」が後続し、さらに動詞に後続する「から」、「ので」、「のに」に対して、名詞には「だから」、「なので」、「なのに」が後続する。そのため、後接語の選定を行う際は、学習者にとって意味が想像しやすく、

中立のイントネーションで生成されやすいことを重視し、拍数を無理に揃える必要はないと判断した。

しかしながら、付加語の一つとして用いている「ほど」に関しては、経験の少ない学習者にとって馴染みが低い可能性がある。後接語の選定の問題である可能性が考えられるが、第5章では結果に悪影響を及ぼしていないことを述べる。

4-3-2-2 内容語

内容語の前という発話環境では、単純名詞と転成名詞には、その語の意味に適した助詞と動詞を、動詞には「のが好きだ」、「ことができる」の二種類³¹を付加している。名詞と動詞で異なる付加語にしているのは、できるだけ自然な文になるように配慮しているためである。単独、後接語の前、内容語の前という三つの環境において、名詞は「雨」、「雨だ」、「雨が降る」のようにし、動詞は「行く」、「行くので／行くほど」、「行くのが好きだ／行くことができる」にしている。動詞に関しては、どの対象語にも、同じ二種類の付加語を用いたが、「続く」、「届く」の二つの対象語において、不自然な文がそのことによってでき、録音資料にも含まれている。

³¹ 二種類を用いている理由は 4-3-3-5 節に述べる。

表 4-4 名詞に付加させる内容語

二拍の単純名詞

頭高型	尾高型	平板型
雨が降る	部屋にいる	箱を開ける
地図を見る	犬がいる	暇がある
駅に行く	鍵を掛ける	紐を結ぶ
船に乗る	怪我をする	星を見る
傘を差す	町に住む	医者になる
窓を開ける	夏になる	椅子に座る
猫がいる	音がする	壁に貼る
奥にある	島に行く	道を歩く
空を飛ぶ	裏に書く	右に曲がる
外に出る	山に登る	水を飲む
海で遊ぶ	雪が降る	庭がある
夜になる	夢を見る	横にする

三拍の単純名詞

頭高型	中高型	尾高型	平板型
出口を出る	あなたがいる	昼間に行く	左に曲がる
技術を磨く	八時に起きる	地獄に行く	日にちを決める
五月に行く	花屋に行く	鏡を見る	田舎に住む
花火を上げる	一部になる	言葉にする	子供と遊ぶ
医学を学ぶ	いところがある	娘がいる	車に乗る
彼女を見る	事務所に行く	仲間になる	昔に戻る
家族になる	中身を見る	表を読む	同じにする
眼鏡を掛ける	斜めにする	男がいる	大人になる
緑を楽しむ	二か所にある	刺身を食べる	魚を食べる
涙を流す	おもちゃで遊ぶ	宝を探す	仕事を探す
荷物を運ぶ	おしゃれをする	手元にある	手紙を書く
姿を消す	和菓子を食べる	夜中に起きる	後ろにある

二拍の転成名詞

尾高型	平板型
飽きが来る	空きを探す
振りをする	減りに気付く
晴れが続く	貸しがある
褒めをいただく	負けが続く
勝ちを目指す	真似をする
賭けをする	乗りで行く
漏れがある	抜けがある
慣れがある	染みを落とす
伸びが止まる	釣りをする
次に行く	売りに出る
膿が出る	詫びを入れる
読みを調べる	揺れがある

三拍の転成名詞

尾高型	平板型
歩きで行く	始めに戻る
焦りが出る	代わりになる
話をする	飾りを外す
痛みがある	煙が出る
曇りが晴れる	周りにいる
流れに乗る	並びが変わる
悩みがある	踊りを見る
残りを食べる	遅れが出る
恐れがある	終わりにする
動きをする	泊まりで行く
別れを告げる	続きをする
休みが終わる	汚れを落とす

前ページにある表 4-4 は単純名詞と転成名詞に付加させる内容語（および対象語と内容語をつなぐ後接語）を示す。その選定の際、重音節がないことを条件とした。したがって、特殊拍（撥音、促音、長音）および連母音を避けた。特に転成名詞に関しては、「がいい」、「が深い」などのように形容詞を付加させればより自然な文ができたものもあったが、重音節の影響を考慮し、軽音節のみに限定した。なお、語と語の境界には連母音を許すことにした（例：「がある」など）。拍数に関しては、助詞は全て一拍、動詞は二～四拍のいずれかにした。ただし、動詞の標準語のアクセント型の影響を考え、「雨が降る」のように動詞が有核のものと、「駅に行く」のように動詞が無核のもの数を揃えた。

4-3-3 各発話環境におけるアクセント型について

本研究の対象語のアクセント型は、頭高型、中高型、尾高型、平板型のいずれかになっているが、尾高型と平板型に関しては、実現されるアクセント型は、その語が置かれている発話環境による。ここでは、各発話環境の順に、対象語のアクセント型について述べていく。

4-3-3-3 単独

表 4-5 は単独の発話環境における対象語のアクセント型とその代表例を示す。アクセントのある拍は大文字で示す。尾高型の語末アクセントは単独では実現されない。そのため、単独のアクセント型は「無核」となる。しかしながら、語末に音韻的なアクセント核があることを明らかにするために、表 4-5 では語末の拍の大文字を残してある。

表 4-5 単独の発話環境における対象語のアクセント型

		語頭	語中	語末	無核
二拍					
単純名詞	頭高型 「雨」 /Ame/				平板型 「箱」 /hako/
					尾高型 「部屋」 /heYA/ ※
転成名詞					平板型 「減り」 /heri/
					尾高型 「振り」 /fuRI/ ※
動詞	頭高型 「出す」 /DAsu/				平板型 「踏む」 /fumu/
三拍					
単純名詞	頭高型 「出口」 /DEguchi/	中高型 「あなた」 /aNAta/			平板型 「左」 /hidari/
					尾高型 「昼間」 / hiruMA/ ※
転成名詞					平板型 「始め」 /hajime/
					尾高型 「焦り」 /aseRI/ ※
動詞		中高型 「選ぶ」 /eRAbu/			平板型 「浴びる」 /abiru/

※ 語末にあるアクセント核は実現されない

4-3-3-4 後接語の前

表 4-6 は後接語の前の発話環境における対象語のアクセント型を示す。アクセントのある文字は大文字で、形態素境界は「+」で示す。

動詞に付加させる後接語にそれぞれ二種類あるのは、語末アクセント環境、無核環境の両方を作るためである。後接語の前に置かれた平板型動詞のアクセント型は、付加している語によって異なる（第 2 章参照）。後接語の「ので」を平板型動詞に付加させると、動詞の語末にアクセントが置かれ、「踏むので」は/fuMU+node/、「浴びるので」は/abiRU+node/になる。一方「ほど」を付加させると「踏むほど」は/fumu+hodo/、「浴びるほど」は/abiru+hodo/というように無核になる。起伏式動詞の場合は、「ので」を付加させても「ほど」を付加させてもアクセント型は単独とは変わらず、頭高型の「出す」は単独の「出す」、後接語の前の「出すので」および「出すほど」のいずれも語頭にアクセントが置かれ、/DAsu/、/DAsu+node/、/DAsu+hodo/となる。同様に、中高型の「選ぶ」は単独の「選ぶ」、後接語の前の「選ぶので」および「選ぶほど」のいずれも語中にアクセントが置かれ、/eRAbu/、/eRAbu+node/、/eRAbu+hodo/となる。

表 4-6 後接語の前の発話環境における対象語のアクセント型

	語頭	語中	語末	無核
二拍				
単純名詞	頭高型 「雨だ」 /Ame+da/		尾高型 「部屋だ」 /heYA+da/	平板型 「箱だ」 /hako+da/
転成名詞			尾高型 「振りだ」 /fuRI+da/	平板型 「減りだ」 /heri+da/
動詞	頭高型 「出すので」 /DAsu+node/ ----- 頭高型 「出すほど」 /DAsu+hodo/		平板型 「踏むので」 /fuMU+node/	平板型 「踏むほど」 /fumu+hodo/
三拍				
単純名詞	頭高型 「出口だ」 /DEguchi+da/	中高型 「あなただ」 /aNAta+da/	尾高型 「昼間だ」 /hiruMA+da/	平板型 「左だ」 /hidari+da/
転成名詞			尾高型 「焦りだ」 /aseRI+da/	平板型 「始めだ」 /hajime+da/
動詞		中高型 「選ぶので」 /eRAbu+node/ ----- 中高型 「選ぶほど」 /eRAbu+hodo/	平板型 「浴びるので」 /abiRU+node/	平板型 「浴びるほど」 /abiru+hodo/

4-3-3-5 内容語の前

表 4-7 は内容語の前の発話環境における対象語のアクセント型を示す。アクセントのある文字は大文字で、形態素境界は「+」で示す。

表 4-7 内容語の前の発話環境における対象語のアクセント型

	語頭	語中	語末	無核
二拍				
単純名詞	頭高型 「雨が降る」 /Ame+ga+furu/		尾高型 「部屋にいる」 /heYA+ni+iru/	平板型 「箱を開ける」 /hako+wo+akeru/
転成名詞			尾高型 「振りをする」 /fuRI+wo+suru/	平板型 「減りに気付く」 /heri+ni+kizuku/
動詞	起伏式 「出すのが好きだ」 /DAsu+noga+sukida/ 起伏式 「出すことができる」 /DAsu+kotoga+dekiru/		平板式 「踏むのが好きだ」 /fuMU+noga+sukida/	平板式 「踏むことができる」 /fumu+kotoga+dekiru/
三拍				
単純名詞	頭高型 「出口を出る」 /DEguchi+wo+deru/	中高型 「あなたがいる」 /aNAta+ga+iru/	尾高型 「昼間に行く」 /hiruMA+ni+iku/	平板型 「左に曲がる」 /hidari+ni+magaru/
転成名詞			尾高型 「焦りが出る」 /aseRI+ga+deru/	平板型 「始めに戻る」 /hajime+ni+modoru/
動詞		起伏式 「選ぶのが好きだ」 /eRAbu+noga+sukida/ 起伏式 「選ぶことができる」 /eRAbu+kotoga+dekiru/	平板式 「浴びるのが好きだ」 /abiRU+noga+sukida/	平板式 「浴びることができる」 /abiru+kotoga+dekiru/

後接語の前と同様に、動詞に付加させる内容語にそれぞれ二種類あるのは、語末アクセントの環境、無核の環境の両方を作るためである。平板型動詞に「のが好きだ」を付加させると動詞の語末にアクセントが置かれ、「踏むのが好きだ」は/fuMU+noga+sukida/、「浴びるのが好きだ」は/abiRU+noga+sukida/となる。「ことができる」を付加させると「踏むことができる」は/fumu+koTOga+dekiru/、「浴びることができる」は/abiru+koTOga+dekiru/というように、動詞のアクセント型は無核となる³²。起伏式動詞は、「のが好きだ」を付加させても「ことができる」を付加させてもアクセント型は単独とは変わらず、頭高型の「出す」は単独では「出す」、内容語の前の「出すのが好きだ」、「出すことができる」はいずれも語頭にアクセントが置かれ、/DAsu/、/DAsu+noga+sukida/、/DAsu+kotoga+dekiru/となる。同様に、中高型の「選ぶ」は単独の「選ぶ」、内容語の前の「選ぶのが好きだ」、「選ぶことができる」はいずれも語中にアクセントが置かれ、/eRAbu/、/eRAbu+noga+sukida/、/eRAbu+kotoga+dekiru/となる。

³² 後接語の前の発話環境では、平板型動詞に「ほど」を付加させ、無核環境を作ることができた。後接語・述語付きに関しては、「ことができる」を付加させることで、動詞を無核環境に置くことはできるが、文全体が無核という訳ではなく、「こと」の最終拍にアクセント核が置かれる。

4-4 調査方法

4-4-1 背景調査

本調査の前に背景調査を行った。その調査には二つの目的があった。一つ目は、調査の参加条件を満たす学習者を募集するため、二つ目は、調査参加者の日本語の経験についての情報を得るためである。参加の条件として質問したのは、SSBE（主にイングランドの南部で話される標準イギリス英語）を母語として話すか、イングランドの南部で育ったこと、英語のモノリンガル環境で育ったかの三点である。日本語の経験については、日本語の学習年数と時間、留学経験と日本での滞在期間、日本での滞在先であった。背景調査はEメールで参加者に送り、英語で記入させた。

4-4-2 データ収集の方法

調査は2009年の6月に、一名ずつ行った。場所は、リーズ大学、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）、オクスフォード・ブルックス大学、ケンブリッジ大学の録音室で行った。録音は、コンピューターを介し、ランダムに読み上げさせ、デジタル録音（44.1kHz、16bit）した。参加は無報酬であった。以下がその調査の詳細である。

連続した読み上げによって生じるイントネーションをなるべく避けるために、各資料語を一枚ずつ紙で提示した。図4-1は紙での例を示すが、その例から分かるように、紙一枚には、漢字仮名交じりで録音資料を提示し、その下に平仮名のみで同様の録音資料を提示した。さらにその下に、対象語の英語訳を提示した。英語訳は対象語のみである

が、例えば「雨が降る」に関しては「雨」のみを、「行くことができる」に関しては「行く」のみを英語に訳した。学習者にとって馴染みがあると思われる対象語を選定しているのにも拘わらず、英語訳を提示しているのは、漢字が読めない可能性を考慮し、同音語との混乱などを避けるためである³³。

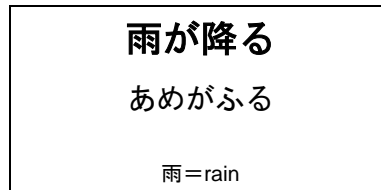


図 4-1 調査に用いた紙の一例

録音資料の数は合計 636 である。調査では、録音資料を八セットに分け読み上げさせ、間に休憩を取った。各セットには約五分かかった。各セットの始めにはダミーを三語入れた。その理由は、初めに躊躇などがあっても排除できるようにするためであった。さらに、各セットの終わりにもダミーを二語入れた。その理由は、イントネーションの影響を避けるためであった。一名に付き休憩を含め合計で約 90 分かかった。

³³ 録音資料全体ではなく対象語のみを訳していることで、調査者の意識がそこに集中し、かえって不自然さを引き起こす可能性があると思われる。しかしながら、対象語が繰り返して現れる実験デザインであること、同音語を区別する必要があるのは対象語のみであることの二点を考慮し、対象語のみを訳すことにした。

基本的には、各録音資料を一度生成し、次に進むという形で調査を行った。しかしながら、被験者が語を読み間違えた場合や、言い直しに強調があった場合には、再度繰り返させた。

4-4-3 音声ファイルの準備

生成調査では、各参加者に付き約 40 分の音声ファイルが作成された。その中には、言い淀みや空白など、不要な部分もあった。日本語話者にアクセントの判定を依頼するために、判定用のファイルを作成した。ここではその方法について述べる。

生成調査の際には、録音資料をランダムに読み上げさせたため、読み上げた語の順番は参加者ごとに異なっていた。したがって、参加者ごとにどの録音資料が生成されたかを記述する必要があった³⁴。用いたのは、Praat (Boersma, 2009) の音声ソフトである。具体的には、音声のスペクトログラムにラベルを付ける「textgrid」という機能を用いた。音声ファイルの必要のない部分（言い淀み、資料と資料の間の空白など）にはスペクト

³⁴ パソコンで録音資料を提示し、そのリストを自動的に作成させれば、この作業は不要であるが、本研究ではパソコンではなく紙で提示したため必要となった。この作業は時間がかかるため、パソコンによる提示を用いたデザインがよかったと思われる。

ログラムの下の `textgrid` に「xxx」を付け、必要な部分には録音資料のコードを付けた³⁵。次に、音声ファイルの必要な部分（録音資料の発話のみ）を個々の音声ファイルとして保存した。最後に、録音資料の発話をランダムに並べ、間に空白を入れるというように、判定用の音声ファイルを作成した³⁶。

判定用の音声ファイルには、原則として各録音資料を一度のみ入れている。参加者が複数回発話していても、最も自然であると思われる発話を用いた。発話が非常に分かりにくい場合には、その録音資料を判定から削除した。削除した発話は、複数の分節音の

³⁵ 例えば、「雨が降る」には、「ns2in_ame」というコードを付けたが、「ns2in」の「n」は名詞、「s」は「後接語・二つ目の内容語の前」、「2」は二拍、「in」は頭高型というように、品詞、発話環境、拍数、標準語のアクセント型かがそれぞれ分かるようなコードで、「ame」は対象語である。

³⁶ これらの作業には、Praat のスクリプトを用いたが、用いたスクリプトは具体的に以下の通りである。①発話と空白の境界に切れ目を入れ、空白に「xxx」を入れるスクリプト、②各録音資料の発話を別の音声ファイルとして保存するスクリプト、③判定用のファイルを作り、その順番が書かれているリストを作成するスクリプトである。スクリプトの①と②は *Mietta's Praat scripts* (<http://www.helsinki.fi/~lennes/praat-scripts/#labeling>) というウェブサイトで公開されているスクリプトを応用させたもので、③は筆者が作成したものである。

誤りがある、あるいは、異なる音節構造になっているものである³⁷。ただし、「娘」が /muzume/になるような有声性の誤り、英語の/r/のような日本語として不自然な流音などがあっても、判定に含めた。

4-4-4 アクセント型の判定方法

生成された発話のアクセント型は、音声学の専門知識を持つ日本語母語話者に判定させた。判定は20回のセッションで行った。各セッションは一時間程度かかったが、約六分ごとに短い休憩を取った。

各セッションにつき、判定者三名が判定した。全ての学習者が生成した全ての資料語を、同じ三名の判定者に判定させることが理想的であると思われるが、資料語の量が多く、計六名に振り分け、負担を減らすことにした。個人の癖が判定に現れることを避けるために、以下のように工夫した。第一に、各セッションの判定者の組み合わせを変え、同じ三名が二度と一緒にならないようにした。第二に、各学習者が生成する、各資料語

³⁷ 筆者の誤りにより、同音語の「空き」と「飽き」、ならびに「海」と「膿」に関しては、録音した音声ファイルからは、どちらが生成されていたかが分からず、その資料を判定から排除する必要があった。（ただし、最後の数人の参加者に関しては、どの資料語が生成されているかが後で分かるようにしたので分析に含めた）。

系の資料語を二つのセッションに分け、半分を三名に、残り半分を他の三名に判定させた。

判定のスケジュールは以下の通りであった。まずは 2009 年 10 月～11 月の間に、十回のセッションを通して、単純名詞と動詞の単独発話および後接語の前の発話の判定を行った。次は、2010 年 2 月～3 月の間に、残りの資料語、つまり転成名詞の単独発話と後接語の前、単純名詞、転成名詞と動詞の内容語の前の発話の判定を行った³⁸。

各発話はそれぞれ二秒間隔で二回流し、三秒後に次の発話に移った³⁹。回答はその間に行った。後接語・二つ目の内容語に後続する資料語に関しては、二秒より長い発話が少数あったが、それらに関しては、発話と発話の間にさらにもう一秒開け、まとめて最後に判定させた。

³⁸ 転成名詞、内容語の前の判定が遅くなったのは、音声ファイルの準備に時間がかかりかかったためであったが、判定者は母語話者であるため、その間に聞き方が変わり、一貫した判定でなくなった心配はないと思われる。

³⁹ 二秒間隔で流したが、音声の始めから測定した二秒である。単独の発話、後接語の前の発話のほとんどは一秒以下、内容語の前の発話は基本的には一秒より少し長い。この方法を用いたのは、聞き手にとっては、音声の終わりから決まった時間を空けるより、二秒置きに生成する方が、いつ次の音声が生じられるかが予測しやすく、聞きやすいと判断したためである。

アクセント型の判定方法では、アクセント核がないものには回答欄の「平」に丸を、アクセント核があるものには、その位置を記入させた。語の始めや終わりにある上昇を無視し、アクセント核の位置のみを記入するように指示した。後接語がある場合はその後接語を含めてアクセント型を記入させた。内容語の前の発話環境の場合は、対象語と付加語の後接語のみを記入させ、付加語の内容語に関してはアクセント型の判定は行っていない。

分析の対象にしたのは、判定者二名以上のアクセント判定が一致したものである。判定者一名のアクセント型の判定が残りの二名の判定と異なる場合、一致している二名の判定を用いることとした。判定が三名とも異なったものは分析から除外した。

4-5 終わりに

本章では、調査参加者、録音資料、調査方法について述べてきた。分析の結果に関しては、語ごとの習得については次章の第5章に、規則によるアクセント付与については第6章に述べる。二つの異なる学習者群の比較はこの二章を通して行う。個人の傾向については第7章に述べる。

第5章

語ごとの習得⁴⁰

5-1 はじめに

英語話者⁴¹が生成する日本語の語アクセントを調査している先行研究では、学習者が生成するアクセント型が標準語と一致する場合と一致しない場合の両方が報告されているが、第3章で指摘したように、一致する場合に関しては、中間言語の規則を適用した結果一致したのか、それとも、標準語でのその語のアクセント型からの直接的な影響によるものなのかは明らかでない。本章では、調査参加者である経験量の異なる二つの学習者群の生成を対象に、標準語の語アクセントはどの程度、どのように、語ごとに習得されているかを検討し、さらに経験量の影響を検討する。序論で述べたように、調査参加者が習得しているのは日本語の方言の中で標準語であるという前提で分析を進める。分析の結果、標準語との一致率は低く、ある語がどのアクセント型で生成されるか

⁴⁰ 本章に述べる結果の一部は、Taylor (2011b) に報告している。

⁴¹ 本章では、英語を母語とする日本語学習者の略として「英語話者」を用いる。

は、日本語の経験量とは関係がなく、その語が標準語に持つアクセント型には、それほど影響されないということを示す。この結果に基づき、語ごとの習得は不可能ではないが、困難な可能性があるということ論じる。

ここでは、先行研究から明らかになったことを要約して述べ、本章の概要を述べる。第3章で述べたように、語ごとの習得の可能性については、ストレスの第二言語習得研究で話題となっている。Wayland et al. (2006) はタイ語母語話者による英語のストレス習得を調査し、さらにスペイン語母語話者を対象とした Guion et al. (2004) と韓国語母語話者を対象とした Guion (2005) の結果を参考に考察をしているが、英語を学ぶ第二言語学習者は、ストレスを規則で付与するのではなく、ストレスパターンを語ごとに習得する傾向があるとしている。ストレスパターンを語ごとに習得することは、つまり、各語ごとにストレスパターンを知覚し、音韻表象にエンコードすることである。しかしながら、第二言語学習者には、第二言語の語レベルのプロソディを音韻表象にエンコードすることが困難である例も先行研究に指摘されている。Dupoux et al. (1997, 2001, 2008) の一連の研究では、フランス語母語話者には、語のストレスパターンを音韻表象にエンコードすることが困難であるとされている。

英語を母語とする日本語学習者については、語アクセントがどの程度語ごとに習得されるかは第3章で紹介している先行研究では明らかになっていない。磯村 (1996) によると、英語話者には、「です」に先行する名詞は有核、疑問環境の単独名詞では無核で生成する傾向があるとしている。このことから、アクセント型は音韻表象にエンコードされない、もしくは生成では実現されないという可能性が示唆される。しかしながら、英語話者のアクセント生成を調査している他の研究 (堀口、1973 ; 久野、1998 ; Taylor、2008、2012 ; 土岐、1980 ; 山田、1994a、b ; 吉光、1981) では、生成されるアクセント型が標

標準語と一致している場合には、中間言語の規則を適用した結果偶然一致したのか、標準語の語のアクセント型からの直接的な影響で一致したのかは区別されていない。

本章では、英語話者である調査参加者の生成について、以下の三点をまず示す。第一に、生成されたアクセント型と標準語のアクセント型との一致率が低く、経験の多い学習者群がより習得している証拠はないということを示す。第二に、資料語のタイプによっては、標準語の影響を示さないものがあることを示す。これらの資料語のタイプに関しては、どのアクセント型で生成されるかは、標準語のアクセント型とは無関係に決まり、生成されたアクセント型が標準語と一致しても偶然の一致であることになる。第三には、標準語の影響を示す資料語のタイプでも、その影響は強くないということを示す。

これらの結果が意味することは、ある語がどのアクセント型で生成されるかは、日本語の経験量を問わず、その語が標準語に持つアクセント型には、それほど影響されないということである。語ごとの習得は不可能ではないものの、困難であるという可能性が示唆される。この点では、Wayland et al. (2006) によって語ごとの習得に頼ると言われている英語を学ぶ第二言語学習者とは対照的である。Dupoux et al. (1997, 2001, 2008) がフランス語母語話者について報告しているように、語レベルのプロソディ（本研究の場合は語アクセント）を音韻表象にエンコードし、語ごとに習得することが困難である可能性が示唆される。

次に語ごとの習得がどのようになされるかという点であるが、分析結果に基づき以下の二点を示す。第一には、標準語からの影響が小さくても、現れているのは正の影響のみで、アクセント核が常に一拍遅れるなどの負の影響が現れている証拠はないということである。第二には、標準語との一致率はアクセント型および資料語のタイプによって

異なるが、一致率が比較的高い発話環境、拍数、アクセント型と、比較的低いものごとを比較しても、標準語の影響が現れる程度には大きな違いはないということである。

以下では、分析対象となるデータ数について述べ、分析結果に移る。結果に関しては、標準語との一致率を述べ、次に、標準語の影響を示さなかった資料語のタイプ、示した資料語のタイプの順に結果を示す。

5-1-1 分析対象データ数

全調査語数は、13356 語（636 語 x 21 名）であるが、このうち分析に用いたのは 96% にあたる 12802 語である。分析に使用できなかった語は、分節音が異なって発音された 47 語、録音の際のミスによる 100 語、日本語母語話者による判定が一致しなかった 402 語、アクセント核が二か所に置かれていた 5 語で、合計 554 語（全体の 4%）である。

5-2 標準語との一致率

5-2-1 はじめに

本節では、日本語の経験量が異なる二つの学習者群について、生成されたアクセント型が標準語でのアクセント型と一致した割合を報告する。標準語との一致率は全体的に低いということを示し、さらに、日本語経験の少ない学習者群と多い学習者群の間にはほとんど差がなく、経験の多い学習者群が標準語の語アクセントをより習得している証

抛はないということを示す。以下では、標準語との一致率を、資料語全体、アクセント型別、資料語のタイプ別という順に述べていく。

5-2-2 資料語全体

本節では、各学習者群が生成した資料語全体のうち、生成されたアクセント型が標準語のアクセント型と一致した割合を報告し、経験の少ない学習者群と多い学習者群の間には差がないということを示す。

表 5-1 は経験の少ない学習者、経験の多い学習者群それぞれについて、資料語全体における標準語との一致率を示したものである。5-1-1 節に述べたように、分析対象となるのは全調査数のうちの 96%であるが、ここでは分析対象となるデータ数を 100%として、標準語との一致率を計算している。

表 5-1 から、全体の一致率は、経験の少ない学習者群と経験の多い学習者群はいずれも 43%程度であることが分かる。統計的には差がない ($\chi^2(1)=0.01, ns$)⁴²。

⁴² 統計は頻度に基づき、R (R Development Core Team, 2009) を用いて計算しているが、結果についてはパーセンテージで示している。以下同様。

表 5-1 資料語全体における標準語との一致率

経験の少ない学習者群	43.2%
経験の多い学習者群	43.3%

5-2-3 アクセント型別

本節では、標準語との一致率をアクセント型別に報告し、以下の二点を示す。まず、標準語との一致率はアクセント型によって異なり、語頭アクセントと語中アクセントでは相対的に高いということを示す。次に、日本語の経験量の異なる二つの学習者を比較した結果、経験の多い学習者群の一致率が多少高くなっている語頭アクセントを除いては、アクセント型別の一致率には差がないということを示す。

表 5-2 は二つの学習者群のそれぞれについて、標準語との一致率をアクセント型別に示したものである。標準語との一致率は、標準語のアクセント型別に、語頭アクセント、語中アクセント、語末アクセント、無核という四つに分けて提示している。なお、単独の発話環境では、尾高型の語末アクセントが実現されないため、表では無核に分類され、「ので」、「のが好きだ」の前の平板型動詞は語末にアクセント核があるので、語末アクセントに分類されている。

表 5-2 アクセント型別の標準語との一致率

	経験の少ない学習者群	経験の多い学習者群
語頭	61% ⁴³	68%
語中	61%	60%
語末※	19%	16%
無核※※	40%	39%

※ 語末アクセントが実現されるもののみ

※※ 実現されない語末アクセントを含む

表 5-2 から、標準語との一致率はアクセント型によって異なるということが分かる。具体的には、経験の少ない学習者群では、語頭アクセントと語中アクセントはそれぞれ一致率が無核に比べ高くなっている（語頭／無核： $\chi^2(1)=195.78, p<.01$ ；語中／無核： $\chi^2(1)=153.99, p<.01$ ）。語末アクセントの一致率については、他のどのアクセント型と比べても、一致率が低くなっている（語末／語頭： $\chi^2(1)=638.82, p<.01$ ；語末／語中： $\chi^2(1)=548.85, p<.01$ ；語末／無核： $\chi^2(1)=235.76, p<.01$ ）。語頭アクセントと語中アクセントについては、一致率は同程度である（ $\chi^2(1)=0, ns$ ）。

経験の多い学習者群では、一致率は以下のようにアクセント型によって異なる。語頭アクセントは他のどのアクセント型に比べても、一致率が有意に高くなっている（語頭／語中： $\chi^2(1)=14.06, p<.01$ ；語頭／無核： $\chi^2(1)=238.37, p<.01$ ；語頭／語末： $\chi^2(1)=586.88,$

⁴³ 表では結果を整数に四捨五入している。以下同様。

$p<.01$)。語中アクセントは無核、語末アクセントのそれぞれに比べ、一致率が有意に高くなっている(語中/無核： $\chi^2(1)=96.12, p<.01$ ；語中/語末： $\chi^2(1)=370.42, p<.01$)。無核については、語末アクセントに比べ、一致率が有意に高くなっている($\chi^2(1)=167.44, p<.01$)。

以上の結果から、経験の少ない学習者群では、語頭と語中アクセントの一致率が最も高く、無核、語末アクセントの順に低くなっていき、経験の多い学習者群では、語頭アクセント、語中アクセント、無核、語末アクセントの順に一致率が低くなっていくことが分かる。二つの学習者群が共通に持つ大まかな傾向としては、語頭と語中アクセントが相対的に高く、語末アクセントが最も低く、無核がその中間という傾向であるといえる。

二つの学習者群では、語頭アクセントを除いては、アクセント型別の一致率には差がない。語頭アクセントの一致率は、経験の多い学習者群の方が多少高くなっており、有意な差である($\chi^2(1)=13.23, p<.01$)。一方、他のアクセント型では同程度である(語中： $\chi^2(1)=0.38, ns$ ；語末： $\chi^2(1)=3.41, ns$ ；無核： $\chi^2(1)=1.16, ns$)。資料語全体の一致率が同程度であるのに、学習者群による差が一つのアクセント型にのみ現れたのは、一見矛盾する結果のように思われるが、よく見ると、語頭アクセント以外のアクセント型では、有意ではないがわずかな差で、経験の少ない学習者群が高い一致率を示していることが分かる。

5-2-4 資料語のタイプ別

本節では、標準語との一致率を資料語のタイプ別に報告し、以下の二点を示す。まず、標準語との一致率は資料語のタイプによって異なるということを示す。次に、二つの例外を除いては、どの資料語のタイプにおいても、経験の少ない学習者群と経験の多い学習者群とでは、標準語のアクセント型と一致した割合には差がないということを示す。

各資料語のタイプについて、標準語との一致率をチャンスレベルと比較する。チャンスレベルというのは、標準語のアクセント型からの直接的な影響がなく、アクセント型がランダムに付与されると仮定した場合に予測される標準語との一致率のことである。各資料語のタイプではチャンスレベルを以下のように設定する。単独の二拍語では50%（語頭、無核）、後接語の前、後接語・二つ目の内容語の前の二拍語では33.3%（語頭、語末、無核）、単独の三拍語では33.3%（語頭、語中、無核）、後接語の前、後接語・二つ目の内容語の前の三拍語では25%（語頭、語中、語末、無核）と計算する。これは実際にどのアクセント型が標準語にあるかとは無関係に設定されている。例えば、単独の三拍動詞では、標準語には語中アクセントと無核しかないが、チャンスレベルは50%ではなく、アクセント核が置かれうる拍の数を考慮し33.3%とする。

原則としては、標準語との一致率がチャンスレベルを超えているということは、標準語のアクセント型からの直接的な影響があるということを示す。一方、一致率がチャンスレベルと同程度である場合、標準語のアクセント型からの直接的な影響がなく、標準語との一致は偶然であることになる。ただしこれは、標準語の影響が現れているかどうかを把握する目安としては、あまり正確ではないと思われる。例えば上述の例である単独の三拍動詞では、どの動詞がどのアクセント型を取るかが学習者に分からなくて

も、語中アクセントか無核かにいずれかにランダムにアクセント付与をすることで一致率は50%となり、33.3%に設定しているチャンスレベルを超える可能性がある。その逆の例として、標準語からの影響がある場合でも、語頭アクセントにもアクセント核を置く傾向があれば一致率がチャンスレベル以下に落ちてしまう可能性がある。標準語の影響が現れているかどうかについては、5-2節以降でより正確な方法を用いて分析するが、ここでは標準語の影響が現れている程度の大まかな目安として、それぞれの資料語のタイプについて一致率をチャンスレベルと比較する。

次ページ以降に示す表5-3と表5-4は、経験の少ない学習者群、経験の多い学習者群のそれぞれについて、標準語との一致率と、チャンスレベルとの差を資料語別に示したものである。その比較に用いるのは、カイ二乗分布を使った独立性の検定である。

表5-3と表5-4から、標準語との一致は資料語のタイプによって異なるということが分かる。経験の少ない学習者は資料語のタイプによっては24%~56%、経験の多い学習者は13%~56%であるが、それぞれの学習者群には、標準語との一致率がチャンスレベルに比べ有意に低い資料語のタイプ、チャンスレベルと同様である資料語のタイプ、チャンスレベルに比べ有意に高い資料語のタイプがあることが表から分かる。

表5-5は、資料語のタイプ別の一致率を二つの学習者群で比較したものである。経験の少ない学習者群と多い学習者群の一致率は、ほとんどの資料語のタイプでは、同程度である。例外は、経験の少ない学習者群の一致率が有意に高くなっている後接語の前の二拍転成名詞、経験の多い学習者群の一致率が有意に高くなっている内容語の前の三拍単純名詞のみである。

表 5-3 資料語のタイプ別の標準語との一致
—経験の少ない学習者群—

資料の種類	標準語との一致 (%)	チャンスレベル	χ^2 検定の結果
標準語との一致がチャンスレベル以下のもの			
二拍転成名詞 (後接語の前)	24%	33%	$\chi^2(1)=12.13, p<.01$
二拍転成名詞 (内容語の前)	28%	33%	$\chi^2(1)=4.03, p<.05$
標準語との一致がチャンスレベルのもの			
三拍転成名詞 (後接語の前)	25%	25%	$\chi^2(1)=0, ns$
二拍転成名詞 (単独)	47%	50%	$\chi^2(1)=1.05, ns$
二拍単純名詞 (単独)	49%	50%	$\chi^2(1)=0.05, ns$
標準語との一致がチャンスレベル以上のもの			
三拍転成名詞 (内容語の前)	32%	25%	$\chi^2(1)=7.73, p<.01$
三拍単純名詞 (後接語の前)	35%	25%	$\chi^2(1)=28.34, p<.01$
三拍単純名詞 (内容語の前)	35%	25%	$\chi^2(1)=31.04, p<.01$
二拍単純名詞 (後接語の前)	38%	33%	$\chi^2(1)=4.44, p<.05$
二拍単純名詞 (内容語の前)	41%	33%	$\chi^2(1)=12.24, p<.01$
三拍単純名詞 (単独)	43%	33%	$\chi^2(1)=24.65, p<.01$
三拍動詞 (後接語の前)	45%	25%	$\chi^2(1)=133.84, p<.01$
三拍動詞 (単独)	46%	33%	$\chi^2(1)=21.92, p<.01$
二拍動詞 (後接語の前)	51%	33%	$\chi^2(1)=80.62, p<.01$
三拍動詞 (内容語の前)	54%	25%	$\chi^2(1)=262.97, p<.01$
二拍動詞 (単独)	56%	50%	$\chi^2(1)=4.18, p<.05$
二拍動詞 (内容語の前)	56%	33%	$\chi^2(1)=129.56, p<.01$
三拍転成名詞 (単独)	56%	33%	$\chi^2(1)=69.33, p<.01$

表 5-4 資料語のタイプ別の標準語との一致
—経験の多い学習者群—

資料の種類	標準語との一致 (%)	チャンスレベル	χ^2 検定の結果
標準語との一致がチャンスレベル以下のもの			
二拍転成名詞 (後接語の前)	13%	33%	$\chi^2(1)=32.4, p<.01$
標準語との一致がチャンスレベルのもの			
三拍転成名詞 (後接語の前)	24%	25%	$\chi^2(1)=0.19, ns$
二拍転成名詞 (内容語の前)	28%	33%	$\chi^2(1)=2.61, ns$
二拍単純名詞 (後接語の前)	38%	33%	$\chi^2(1)=2.19, ns$
二拍転成名詞 (単独)	46%	50%	$\chi^2(1)=1.53, ns$
二拍単純名詞 (単独)	49%	50%	$\chi^2(1)=0.13, ns$
二拍動詞 (単独)	52%	50%	$\chi^2(1)=0.33, ns$
標準語との一致がチャンスレベル以上のもの			
三拍転成名詞 (内容語の前)	32%	25%	$\chi^2(1)=4.57, p<.05$
三拍単純名詞 (後接語の前)	41%	25%	$\chi^2(1)=46.46, p<.01$
三拍単純名詞 (内容語の前)	43%	25%	$\chi^2(1)=60.65, p<.01$
二拍単純名詞 (内容語の前)	45%	33%	$\chi^2(1)=17.99, p<.01$
三拍単純名詞 (単独)	46%	33%	$\chi^2(1)=26.06, p<.01$
三拍動詞 (後接語の前)	46%	25%	$\chi^2(1)=91.1, p<.01$
三拍動詞 (単独)	47%	33%	$\chi^2(1)=16.6, p<.01$
三拍動詞 (内容語の前)	47%	25%	$\chi^2(1)=93.77, p<.01$
二拍動詞 (後接語の前)	49%	33%	$\chi^2(1)=40.12, p<.01$
二拍動詞 (内容語の前)	53%	33%	$\chi^2(1)=62.01, p<.01$
三拍転成名詞 (単独)	56%	33%	$\chi^2(1)=44.95, p<.01$

表 5-5 資料語のタイプ別の標準語との一致
—学習者群の比較—

資料語のタイプ	経験の少ない 学習者群	経験の多い 学習者群	χ^2 検定の結果
二拍単純名詞（単独）	49%	49%	$\chi^2(1)=0, ns$
二拍単純名詞（後接語の前）	38%	38%	$\chi^2(1)=0, ns$
二拍単純名詞（内容語の前）	41%	45%	$\chi^2(1)=1.04, ns$
二拍転成名詞（単独）	47%	46%	$\chi^2(1)=0.06, ns$
二拍転成名詞（後接語の前）	24%	13%	$\chi^2(1)=6.72, p<.01$
二拍転成名詞（内容語の前）	28%	28%	$\chi^2(1)=0.01, ns$
二拍動詞（単独）	56%	52%	$\chi^2(1)=0.52, ns$
二拍動詞（後接語の前）	51%	49%	$\chi^2(1)=0.25, ns$
二拍動詞（内容語の前）	56%	53%	$\chi^2(1)=0.53, ns$
三拍単純名詞（単独）	43%	46%	$\chi^2(1)=0.68, ns$
三拍単純名詞（後接語の前）	35%	41%	$\chi^2(1)=3.22, ns$
三拍単純名詞（内容語の前）	35%	43%	$\chi^2(1)=5.32, p<.05$
三拍転成名詞（単独）	56%	56%	$\chi^2(1)=0, ns$
三拍転成名詞（後接語の前）	25%	24%	$\chi^2(1)=0.04, ns$
三拍転成名詞（内容語の前）	32%	32%	$\chi^2(1)=0.01, ns$
三拍動詞（単独）	46%	47%	$\chi^2(1)=0.05, ns$
三拍動詞（後接語の前）	45%	46%	$\chi^2(1)=0.06, ns$
三拍動詞（内容語の前）	54%	47%	$\chi^2(1)=3.79, ns$

5-2-5 考察

標準語との一致率の分析結果から、次の二点が指摘できる。第一に、生成されたアクセント型が標準語のアクセント型と一致する割合は全体的に低いということ、第二には、経験の多い学習者群が標準語の語アクセントをより習得している証拠はないということである。

標準語との一致率は、二つの学習者群とも、低い結果となった。資料語全体の一致率は二つの学習者群とも 43%と半分以下である。その詳細に関しては、アクセント型により、経験の少ない学習者群は 19%~61%、経験の多い学習者群は 16%~68%、資料語のタイプにより、経験の少ない学習者群と経験の多い学習者群はそれぞれ 24%~56%と 13%~56%である。これは、Wayland et al. (2006) が語ごとの習得に頼るとしている英語を学ぶ第二言語学習者のストレス生成における一致率に比べ、顕著に低い。Wayland et al. (2006) と、語ごとの習得に頼る傾向を示す例として挙げられている Guion et al. (2004)、Guion (2005) のそれぞれの結果は以下の通りである。典型的なストレスパターンの場合は、スペイン語と韓国語母語話者はいずれも 98%、タイ語母語話者では 90%、非典型的なアクセント型はそれぞれ 96%、95%、72%であると報告されている。本研究とは対象言語も研究方法も異なるため、直接比較することは控えるべきだろうが、本章で報告した結果で最も高い一致率でも、これらの一致率を顕著に下回っているという結果が、本章の結果における一致率の低さを感じさせる。

本章の二つ目の知見は、日本語経験の多い学習者群には、習得がより進み、標準語と一致率がより高くなるという証拠がないという結果である。全体の一致率には学習者群による差がない。それぞれのアクセント型およびそれぞれの資料語のタイプの結果にお

いても、経験の異なる二つの学習者群は非常に似通った傾向を示している。18 の資料語のタイプのうち、16 タイプが経験の少ない学習者群と多い学習者群で同程度の一致率を示し、残りの2タイプについて一致率が高かったのは経験の少ない学習者群と経験の多い学習者群それぞれ一つずつであった。アクセント型に関しては、語頭アクセントでは経験の多い学習者群がより高い一致率を示したが、全体的には、経験の少ない学習者群が他のアクセント型で有意ではないがわずかに高い一致率を示したことで、学習者間の差が相殺されている。語頭アクセントにおける学習者群の間の差については 5-6-2 節でより深く検討するが、そこでは、どの語が語頭アクセントを取るかが経験の多い学習者群によって習得されているのではなく、語頭アクセントが標準語のアクセント型を問わず使用されやすい傾向が経験の多い学習者群に多少強くなっているだけのことであるという見方を示す。細かい傾向の違いは多少あるものの、経験の多い学習者群が標準語の語アクセントをより習得している証拠はないと考えられる。

本節では、標準語との一致率がアクセント型および資料語のタイプによって異なるという傾向が観察された。具体的には、アクセント型では語頭および語中アクセントが相対的に高い一致率を示し、資料語のタイプ別では一致率がチャンスレベル以下のもの、チャンスレベルと同程度のもの、チャンスレベル以上のものが見られた。これらの傾向についての考察はこれ以降の分析にゆずる。

5-3 標準語の影響を示さない資料語のタイプ

5-3-1 はじめに

本節では、標準語のアクセント型からの直接的な影響を示さない資料語のタイプがあるということを示す。この傾向が見られるのは、単独の二拍単純名詞、後接語の前の二拍転成名詞をはじめとするいくつかの資料語のタイプである。これらの資料語のタイプに関しては、語ごとの習得は行われていないか、もしくは、アクセント型が語ごとに習得されているとしても、生成では実現されていないと考えられる。

標準語のアクセント型からの直接的な影響がないことは次のように示す。各資料語のタイプについて、標準語のアクセント型別に異なる複数の語群に分ける。例えば、単独の二拍単純名詞の場合には、標準語のアクセント型が頭高型、尾高型と平板型という語群に、後接語の前の二拍転成名詞の場合には、標準語のアクセント型が尾高型と平板型という語群に分ける。次に、それぞれの語群で生成されているアクセント型を、カイ二乗分布を使った独立性の検定で比較する。本節で示すのは、その検定の結果が有意でない資料語のタイプである。有意ではないというのは、生成されるアクセント型は、標準語のアクセント型とは、無関係に決められるということを意味する。

これらの資料語のタイプでも、標準語との一致率がチャンスレベルであるとは限らない。本節では、標準語との一致率とチャンスレベルの差を資料語のタイプ別に報告していくが、一致率がチャンスレベル以下あるいは以上の場合はその解釈についても述べる。なお、チャンスレベルの設定については5-2-4節ですでに述べている。

以下に報告する資料語のタイプに関しては、生成されるアクセント型が標準語のアクセント型と無関係に決められるということを示す目的でのみ提示する。どのような資料語のタイプが標準語の影響を示しにくいかについては5-6節に、さらに生成されるアクセント型に影響する要因については第6章に検討をゆずり、ここでは扱わないこととする。

5-3-2 標準語の影響がない例①：単独の二拍単純名詞

まず、標準語の影響を示さない例として、単独の二拍単純名詞の結果を述べる。この資料語のタイプでは、生成されるアクセント型は、標準語のアクセント型が語頭アクセントであるか、あるいは無核であるかとは、無関係である。ある語が生成されるアクセント型が標準語のアクセント型と一致しても、その語のアクセント型からの直接的な影響ではなく、偶然の一致による。

図5-1は、経験の少ない学習者群による単独の二拍単純名詞の結果である。標準語のアクセント型別に異なる三つの語群に分け、それぞれの語群が生成されているアクセント型を示している^{44, 45}。図には、カイ二乗分布を使った独立性の検定の結果を二つ示しているが、一つ目は、標準語のアクセント型が異なる三つの語群が生成されているアク

⁴⁴ 図では「標準語」の代わりに、Standard Japanese の略として「SJ」を用いている。以下同様。

⁴⁵ 図では結果を整数に四捨五入している。以下同様。

セント型を比較しているものである。二つ目は、標準語との一致率と、チャンスレベルの一致率を比較したものである。標準語と同じアクセント型で生成された語は斜線で表記してある。標準語では、頭高型の語は語頭にアクセント核があり、尾高型の語および平板型の語はいずれも無核である⁴⁶。

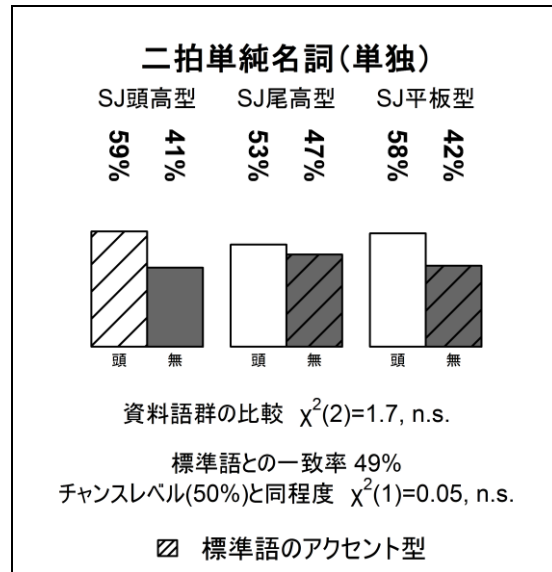


図 5-1 単独の二拍単純名詞が生成されたアクセント型
—経験の少ない学習者群—

図 5-1 に示す一つ目の検定の結果から、標準語のアクセント型が異なる三つの語群が生成されているアクセント型の間には、有意な差がないということが分かる。この結果が意味することは、生成されているアクセント型は標準語のアクセント型とは無関係に

⁴⁶ 尾高型でも無核であるのは、語単独の形において語末アクセントが実現されないためである。

決められているということである。二つ目の検定の結果は、標準語との一致率がチャンスレベルとは同程度であることを示している。ある語が生成されるアクセント型が標準語のアクセント型と一致しても、その語のアクセント型からの直接的な影響ではなく、偶然の一致によるということになる。

図5-2は、経験の多い学習者群による単独二拍単純名詞の結果である。ここでも、標準語のアクセント型別に異なる三つの語群が生成されているアクセント型の間には、有意な差がなく、標準語との一致率がチャンスレベルと同程度である。

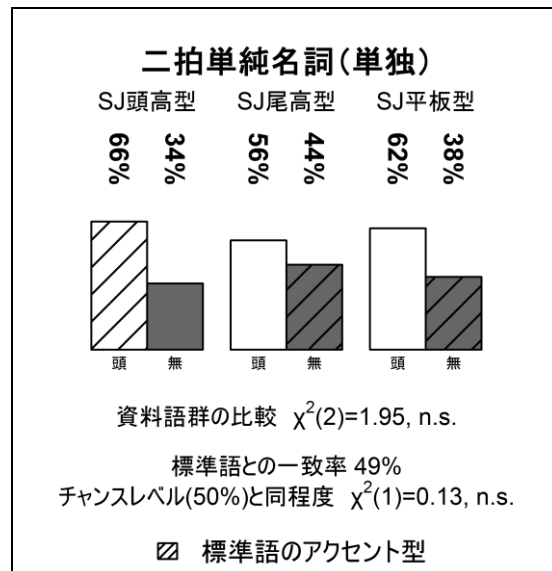


図5-2 単独の二拍単純名詞が生成されたアクセント型
—経験の多い学習者群—

これらの結果から、経験の多い学習者群は経験の少ない学習者と同様に、生成されているアクセント型は標準語のアクセント型とは無関係に決められており、生成されるアクセント型が標準語のアクセント型と一致しても、その語のアクセント型からの直接的な影響ではなく、偶然の一致によるということが分かる。

5-3-3 標準語の影響がない例②：後接語の前の二拍転成名詞

本節では、標準語の影響を示さない二つ目の例として、後接語の前の二拍転成名詞の結果を述べる。この資料語のタイプでは、生成されるアクセント型は、標準語のアクセント型が語末アクセントであるか、あるいは無核であるかとは、無関係である。標準語との一致率はチャンスレベルより有意に低い、この理由は、標準語でのアクセント型が語頭アクセントである資料語がないにもかかわらず、学習者には語頭にアクセント核を置く傾向があるために生じたものである。

図 5-3 は二つの学習者群による後接語の前の二拍転成名詞標準語の結果を示している。左側は経験の少ない学習者群、右側は経験の多い学習者群の結果である。各学習者群について、標準語のアクセント型が異なる二つの語群についてそれぞれ生成されたアクセント型を示している。

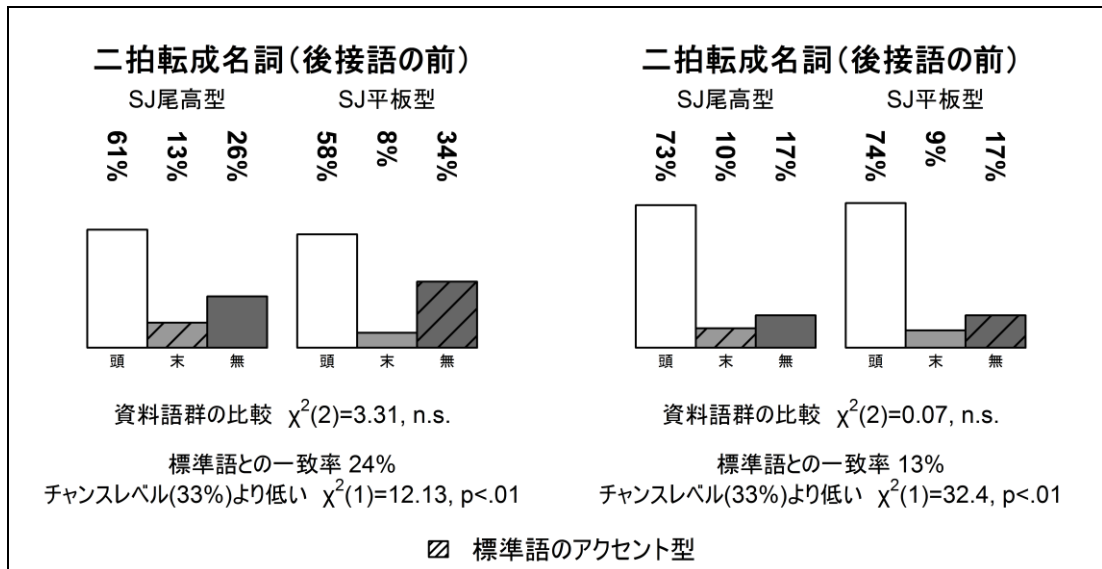


図 5-3 後接語の前の二拍転成名詞が生成されたアクセント型
—左側は経験の少ない学習者群、右側は経験の多い学習者群による—

図 5-3 には各学習者群について独立性の検定の結果を二つ示しているが、上に示しているのは、標準語のアクセント型が異なるそれぞれの語群が生成されているアクセント型を比較しているものである。いずれの学習者群でも、この検定の結果は有意ではない。この結果が意味することは、生成されるアクセント型は、ある語の標準語でのアクセント型が尾高型なのか、あるいは平板型なのかとは、無関係であるということである。

図 5-3 に示している各学習者群の下の独立性の検定の結果は、標準語との一致率とチャンスレベルを比較しているものである。二つの学習者群ともに、標準語との一致率はチャンスレベルを有意に下回っていることが分かる。その理由は、標準語のアクセント型が語末アクセントもしくは無核であるのに対して、学習者の生成では、語頭アクセントが多く生成されていることにある。図 5-3 から、語頭アクセントで生成される割合が経験の少ない学習者群では 60%程度と高く、経験の多い学習者群では 70%程度とさらに高いことが分かる。

5-2-4 で見たように、ほとんどの資料語のタイプでは、二つの学習者群の間には一致率の差がないが、本節で紹介している後接語の前の二拍転成名詞は例外的に、経験の少ない学習者群の一致率が有意に高くなっている。これは、語頭アクセントを多用する傾向が二つの学習者群ともにありながら、その割合が経験の多い学習者群でさらに高くなっていることで生じている。本章において重要であるのは、生成されているアクセント型が標準語のアクセント型とは無関係であるということである。生成されるアクセント型に影響する要因についての検討は第 6 章にゆずる。

5-3-4 標準語でもアクセント型が対立しない例：単独の転成名詞

以上の二つの例では、標準語のアクセント型が異なるそれぞれの語群が同様のアクセント型で生成されているという結果に基づき、生成されるアクセント型は標準語のアクセント型とは無関係であることを示した。本節で示す資料語のタイプは二拍および三拍の単独の転成名詞であるが、これらの資料語のタイプに関してのみ、対象としている語群のアクセント型は標準語でも対立しない。そのため、他の資料語のタイプとは違い、それぞれの語群が生成されるアクセント型に差がないという結果は、標準語からの直接的な影響がないことを示すものではない。これらの資料語のタイプの結果を、標準語の影響を示さない資料語のタイプと一緒に述べるのは、結果の記述を完全なものにするためである。

図5-4は、本調査で対象としている二、三拍の単独の転成名詞の結果を示したものである。上は経験の少ない学習者群、下は経験の多い学習者群で、左と右はそれぞれ二拍と三拍の転成名詞である。各学習者群の各転成名詞について、標準語のアクセント型が尾高型と平板型である二つの語群がそれぞれどのアクセント型で生成されたのかを示している。

これらの資料語のタイプについては上述したように、対象としている語群のアクセント型は標準語でも対立しない。図5-4からも分かるように、各転成名詞では、標準語のアクセント型が尾高型と平板型という二つの語群を対象としているが、標準語では、語末アクセントは語のみの単独発話の場合は実現されない。そのため、アクセント型が尾高型の語でも、生成では無核となる。標準語のアクセント型がそれぞれ尾高型と平板型である語群は、その結果、いずれも無核となり、対立しないこととなる。

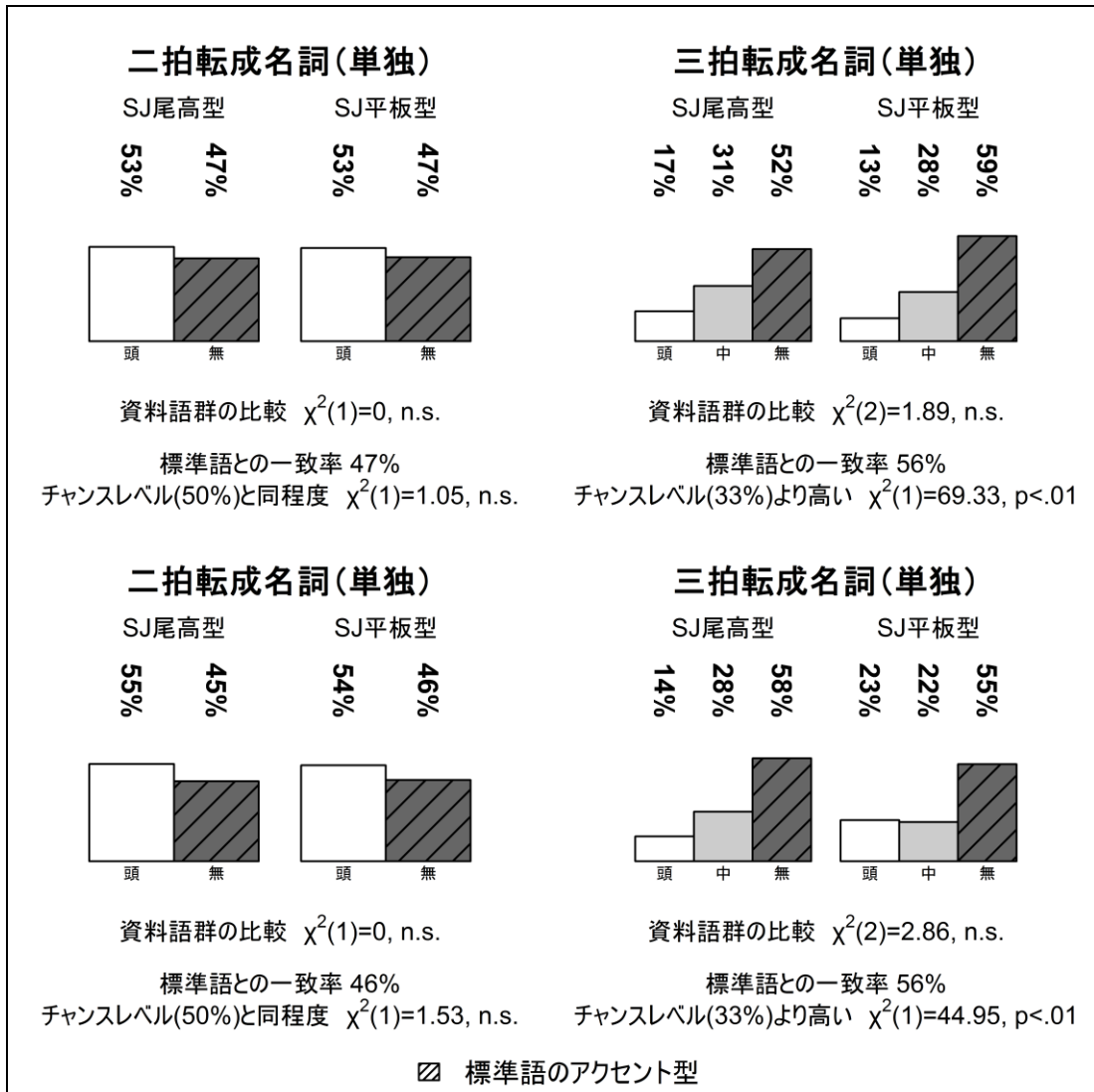


図 5-4 単独の転成名詞が生成されたアクセント型
—上は経験の少ない学習者群、下は経験の多い学習者群による—

図 5-4 には、各学習者群が生成した異なるアクセント型の転成名詞について、二つの独立性の検定の結果を提示している。一つ目は両語群の生成において生成されたアクセント型の比較である。二つ目は、標準語との一致率とチャンスレベルとの比較である。これらの解釈については、他の資料語のタイプとは異なる。まず、各学習者群の各転成名詞において、一つ目の検定の結果が有意でないことから、経験量、拍数を問わず、二つの語群が生成されるアクセント型の間には差がないことが分かる。ただし両語群には、標準語におけるアクセント型の対立がないため、他の資料語のタイプとは違い、標準語からの直接的な影響がないことを示すものではない。

次には、両学習者群に共通した傾向として、標準語との一致率は二拍ではチャンスレベルと同程度、三拍ではチャンスレベルを有意に上回っていることが図 5-4 に示した独立性の検定の結果から分かる。ただし、これらの資料語のタイプに関しては、標準語におけるアクセント型の対立がないため、これは無核の割合を表しているにすぎない。すなわち、無核で生成される割合は二拍語より三拍語で比較的高いということのみを意味している。なお、生成されるアクセント型に影響する要因についての検討は第 6 章にゆずる。

5-3-5 標準語の影響がない残りの資料語のタイプ

本節では、標準語の影響を示さなかった残りの資料語のタイプの結果を述べる。前節の転成名詞とは違い、本節で報告する資料語のタイプでは、それぞれの語群は標準語ではアクセント型が対立する。以下では、各資料語のタイプについて、標準語においてアクセント型の異なるそれぞれの語群が生成されたアクセント型には、有意な差がないということを示す。

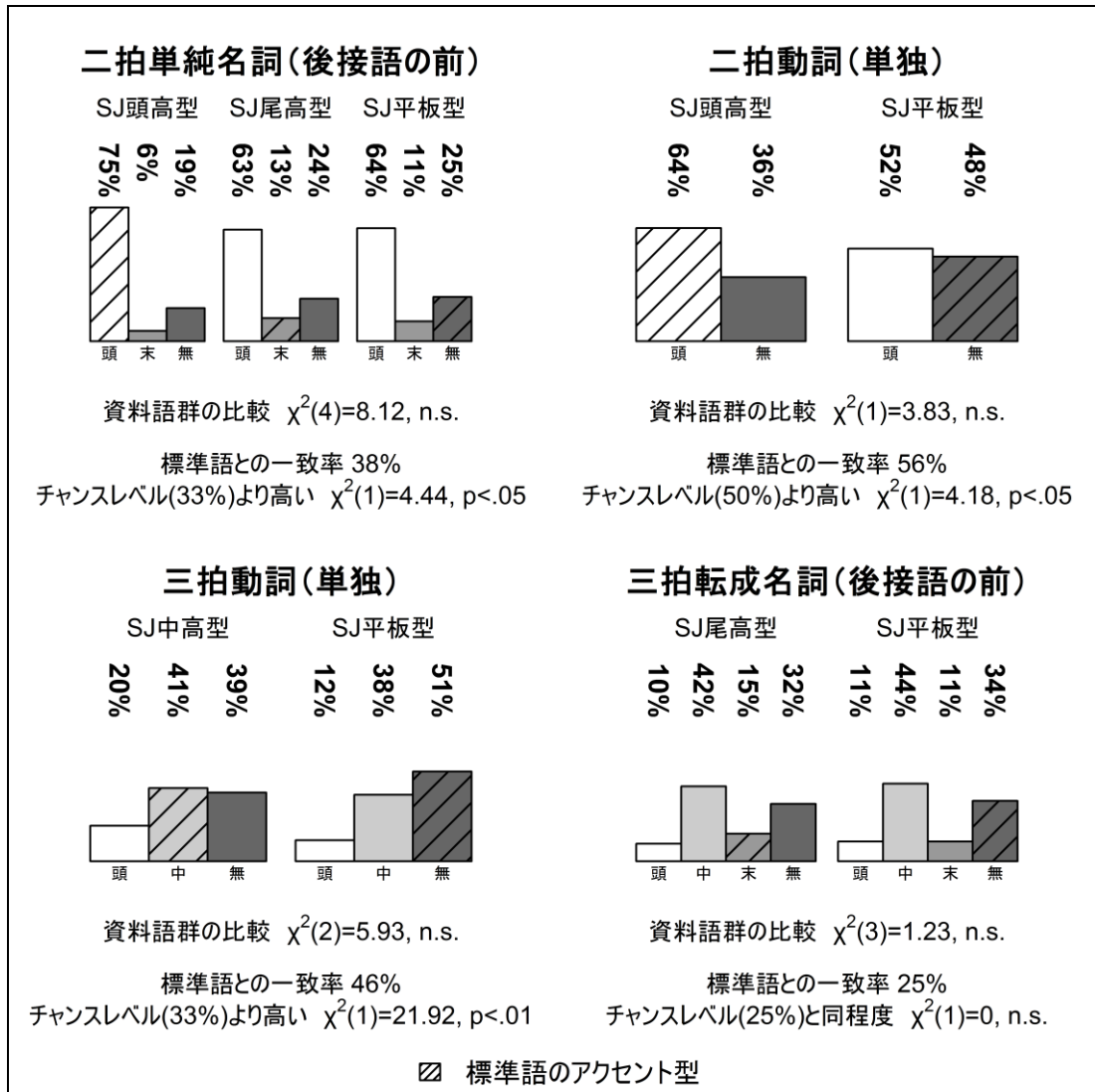


図 5-5 標準語の影響を受けにくい残りの資料語のタイプが生成されたアクセント型
—経験の少ない学習者群—

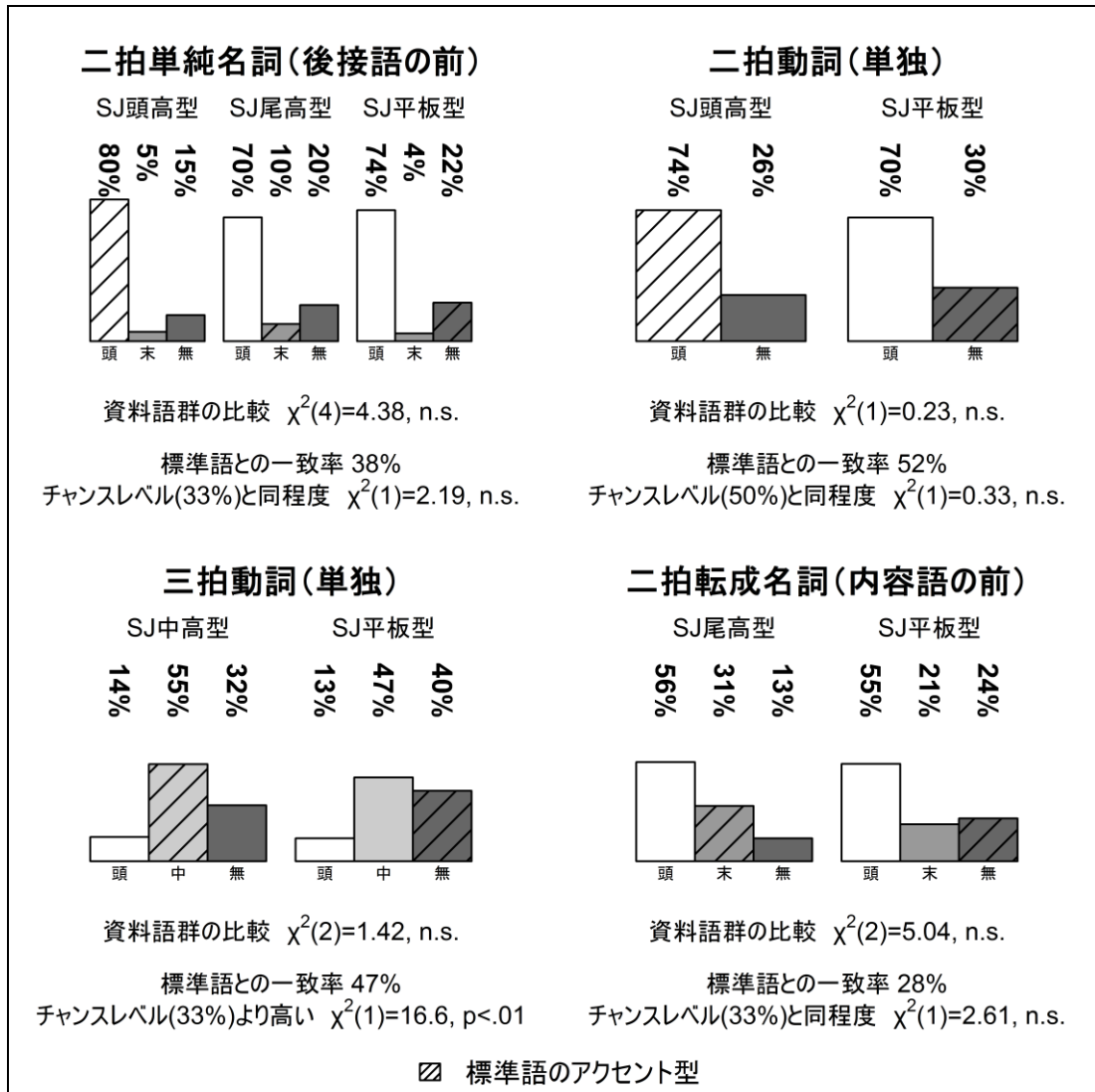


図 5-6 標準語の影響を受けにくい残りの資料語のタイプが生成されたアクセント型
 —経験の多い学習者群—

本節に示す資料語のタイプは、標準語との一致率がチャンスレベルと同程度であるとは限らず、資料語のタイプによってはチャンスレベルを超えるものもある。このことは、標準語におけるアクセント型の異なるそれぞれの語群が生成されたアクセント型には有意な差がないという結果とは、一見矛盾していると思われる。しかしながら、これは統計上の理由によるものと思われる。本節に示す資料語のタイプは、生成されたアクセント型が標準語のアクセント型とは無関係、もしくは、ほぼ無関係に決められていると考えられる。

図 5-5 と図 5-6 はその種の資料語のタイプを、経験の少ない学習者群、経験の多い学習者群それぞれについて示したものである。各図の各資料語のタイプについて独立性の検定結果を二つ示しているが、一つ目の検定の結果はいずれも有意ではない。この結果から、各資料語のタイプでは、それぞれの語群が生成されるアクセント型には有意な差がないということが分かる。

図 5-5 と図 5-6 に示した各資料語のタイプの二つ目の検定を見ると、標準語との一致率に関しては、チャンスレベルのもの、チャンスレベルを有意に超えているものの二種類があることが分かる。これらの資料語のタイプに関しては、標準語の影響がないと断言することはできず、「現れにくい」と解釈するほうが妥当であると考えられる。したがって図 5-5 と図 5-6 に示した資料語のタイプは、生成されるアクセント型が標準語のアクセント型とは無関係、もしくは、ほぼ無関係に決められていると考えられる。

5-3-6 考察

本節で報告した資料語のタイプは、標準語のアクセント型の異なる語群でも、生成されるアクセント型の間には有意な差がないものであった。標準語においてアクセント型が対立しないという例外的な単独の転成名詞を除き、この結果が意味することは、どのアクセント型で生成されるかは、標準語のアクセント型とは無関係に、もしくはほぼ無関係に、決められているということである。これらの資料語のタイプに関しては、ある語に付与されたアクセント型が標準語のアクセント型と一致しても、その語のアクセント型からの直接的な影響によるものではなく、偶然一致したにすぎないことになる。アクセント型は標準語から語ごとに習得されているのではないか、もしくは、習得されているとしても、生成には実現されていないと考えられる。

5-4 標準語から正の影響を示す資料語のタイプ

5-4-1 はじめに

本節では、標準語のアクセント型による直接的な正の影響を示す資料語のタイプがあるということを示す⁴⁷。これらの資料語のタイプに関しては、標準語のアクセント型が

⁴⁷ ただし、正の影響の他、負の影響も示す資料語のタイプに関しては、5-5 節に述べる。

語ごとに習得されている証拠はある程度あるが、それでも標準語との一致率は低く、生成されるアクセント型への標準語の影響は強くない。

標準語からの正の影響は以下のように示す。まず、標準語のアクセント型が異なる語群に対して付与されるアクセント型には、有意な差があるということを示す。その関係が有意であるという結果だけでは、標準語の影響が具体的にどのように現れているかは分からないが、さらに各アクセント型について以下のことを示し、それが正の影響であるということを示す。具体的には、標準語との一致率（標準語のアクセント型が x である資料語のうち x で生成された割合）は、そのアクセント型の「過剰使用率」（標準語のアクセント型が x でない資料語のうち x で生成された割合）より、有意に高いということを示す。このことから、標準語のアクセント型が x である資料語は、 x でない資料語に比べ、 x で生成されやすく、つまり、生成されるアクセント型には標準語のアクセント型からの直接的な影響が現れているということが分かる。本節で紹介する資料語のタイプは、少数の例外を除けばどのアクセント型でも、一致率が過剰使用率より有意に高くなっており、標準語の影響を示していると考えられる。

標準語のアクセント型からの直接的な影響があるということは、アクセント型が標準語からある程度語ごとに習得されている証拠となる。しかしながら、以下に示す資料語のタイプは標準語の影響を示しても、その一致率は高くない。資料語のタイプによっては、語末から二拍目にアクセント核が置かれる傾向を示すもの、語頭と語中アクセントで比較的高い一致率を示すもの、特に低い一致率を示すものなどがある。以下では、類似の傾向を示した資料語のタイプを順に報告していく。

5-4-2 正の影響の一例：単独の三拍単純名詞

本節では、標準語から正の影響を示す資料語のタイプの例として、単独の三拍単純名詞の結果を報告する。一つの例外を除けば各アクセント型では、一致率が過剰使用率より高いということを示す。この結果が意味することは、標準語のアクセント型からの直接的な影響が生成に現れている、すなわち、標準語のアクセント型がある程度語ごとに習得されているということである。しかしながら、それでも標準語との一致率は低く、生成されるアクセント型への標準語の影響は強くない。

図 5-7 は経験の少ない学習者群の結果である。標準語におけるアクセント型の異なる四つの語群がそれぞれどのアクセント型で生成されたのかを示している。カイ二乗検定の結果を二つ示しているが、一つ目は語群の間の比較、二つ目は一致率とチャンスレベルとの比較である。

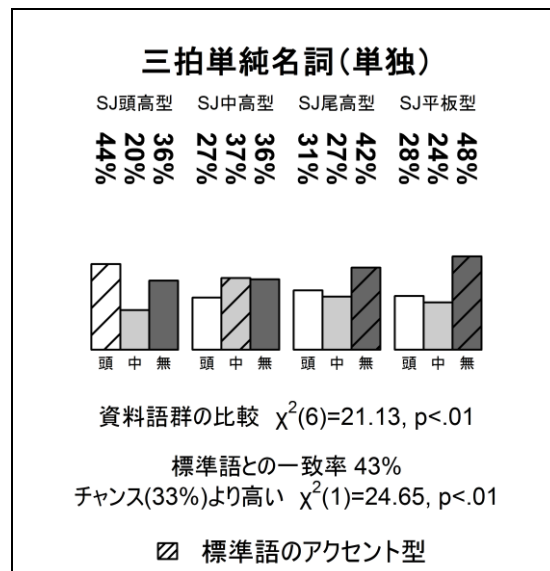


図 5-7 経験の少ない学習者群による単独の三拍名詞

図 5-7 に示した独立性の検定の結果から、標準語におけるアクセント型の異なる四つの語群が生成されたアクセント型の間には有意な差があり、さらに、標準語との一致率はチャンスレベルを有意に上回っているということが分かる。これらの結果から、生成されるアクセント型には、標準語のアクセント型からの直接的な影響があるということが分かる。

ただし、これらの検定の結果だけでは、標準語のアクセント型が具体的にどのように現れているかが分からない。その詳細を検討するために、各アクセント型について、一致率と過剰使用率を比較していく。語頭アクセントに関しては、一致率（標準語の頭高型語における語頭アクセントの割合）は 44%、過剰使用率（標準語の中高型、尾高型、平板型における語頭アクセントの割合）は 28%⁴⁸である。一致率は過剰使用率に比べ 16 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1) = 12.18, p < .01$)。語中アクセントに関しては、一致率（標準語の中高型語における語中アクセントの割合）は 37%、過剰使用率（標

⁴⁸ 算出方法は以下の通りである。図 5-7 ではパーセンテージしか示していないが、語頭にアクセント核が置かれているのは、標準語のアクセント型が中高型である 149 語のうちの 40 語（図では 27%）、標準語のアクセント型が尾高型である 154 語のうちの 47 語（図では 31%）、標準語のアクセント型が平板型である 152 語のうちの 42 語（図では 28%）である。全体的には、標準語のアクセント型が頭高型でない 149+154+152（計 455）語のうち、40+47+42（計 129）語は語頭にアクセント核が置かれていることとなる。ここでの過剰資料率とは、標準語のアクセント型が頭高型でない資料語のうち、語頭にアクセント核が置かれている資料語の割合であるので、 $129/455 \times 100$ の 28%となる。なお、大まかな目安としては、パーセンテージの平均 $((27\%+31\%+28\%)/3 \approx 28\%)$ で算出できる。以下同様。

標準語の頭高型語、平板型語、尾高型語における語中アクセントの割合)は24%である。一致率は過剰使用率に比べ13ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=8.8, p<.01$)。無核に関しては、標準語の尾高型語と平板型語の二種類があるが⁴⁹、尾高型における一致率(無核の割合)は42%、平板型における一致率(無核の割合)は48%、過剰使用率(標準語の頭高型語、中高型語における無核の割合)は36%である。尾高型の一致率は無核の過剰使用率に比べ6ポイント高いが、有意な差ではない ($\chi^2(1)=1.47, ns$)。平板型の一致率は無核の過剰使用率に比べ12ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=5.71, p<.05$)。

以上の結果から、語頭と語中アクセントが生成される割合には、標準語のアクセント型からの直接的な影響があるということが分かる。標準語のアクセント型が語頭である資料語は語頭でない資料語に比べ語頭にアクセント核が置かれやすく、標準語のアクセント型が語中である資料語は語中でない資料語に比べ語中にアクセント核が置かれやすい。つまり、経験の少ない学習者群はこの資料語のタイプについて、どの語が頭高型で、どの語が中高型かを、ある程度標準語から習得しているといえる。

さらに以上の結果から分かることとして、無核が生成される割合にも、標準語の影響がある程度現れていることが挙げられる。しかしながら、有意差が認められたのは、標

⁴⁹ 単独では、いずれも無核で生成されるため。

標準語のアクセント型が平板型である資料語のみで、標準語のアクセント型が尾高型の資料語には有意な差が認められていない。標準語のアクセント型が平板型である資料語は語頭と語中アクセントの資料語に比べ無核で生成されやすいが、標準語のアクセント型が尾高型である資料語が無核で生成される割合は、語頭や語中アクセントと同程度となっている。同じ無核であるにもかかわらず、平板型に関しては標準語の影響が多少現れているが、尾高型に関しては、無核で正しく生成されるとしても、偶然の一致となる。

しかしながら、尾高型と他のアクセント型との違いはそれほど大きくないと思われる。標準語との一致率がアクセント型によっては 37%~48%とどのアクセント型も低く、さらにどのアクセント型にも、標準語のアクセント型は x でないにもかかわらず、x で生成されている例、つまり過剰使用の例が現れている。これらの結果から、生成されるアクセント型への標準語の影響はどのアクセント型でも強くないことが分かる。

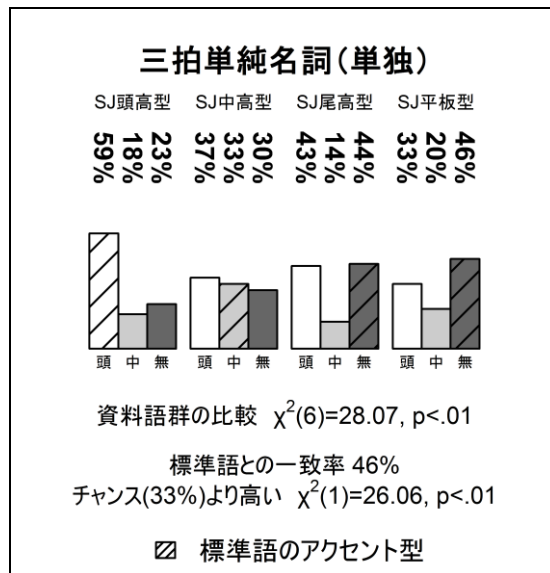


図 5-8 経験の多い学習者による単独の三拍単純名詞

前ページにある図 5-8 は、経験の多い学習者群による結果を示したものである。経験の少ない学習者群の結果と同様に、標準語におけるアクセント型の異なる四つの語群がそれぞれ生成されたアクセント型を示し、語群の間の比較、一致率とチャンスレベルとの比較をカイ二乗の検定の結果で示している。

図 5-8 に示した独立性の検定の結果から、標準語のアクセント型の異なる四つの語群について生成されたそれぞれのアクセント型の間には有意な差があり、さらに、標準語との一致率はチャンスレベルより有意に高いということが分かる。これらの結果から、生成されるアクセント型には、標準語のアクセント型からの直接的な影響があるということが分かる。標準語のアクセント型の影響が具体的にどのように現れているかを検討するために、各アクセント型について、一致率と過剰使用率を比較していく。語頭アクセントでは一致率は 59%、過剰使用率は 38% である。一致率は過剰使用率に比べ 22 ポイント高く⁵⁰、有意な差である ($\chi^2(1)=13.07, p<.01$)。語中アクセントでは、一致率は 33%、過剰使用率は 17% である。一致率は過剰使用率に比べ 16 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=9.79, p<.01$)。無核では、尾高型における一致率は 44%、平板型における一致率は 46%、過剰使用率は 26% である。尾高型の一致率は無核の過剰使用率に比

⁵⁰ 59%と 38%の差が 22 ポイントであるとしているのは、誤りではなく、一致率と過剰使用率を整数に四捨五入して表示しているものの、差の計算には元のデータを用いていることに原因がある。以下同様。

べ17ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=7.71, p<.01$)。平板型の一致率は無核の過剰使用率に比べ20ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=10.16, p<.01$)。

どのアクセント型も、一致率は過剰使用率より有意に高く、つまり、標準語のアクセント型が x (語頭、語中、語末、無核のいずれか) である資料語は、x でない資料語に比べ、x で生成されやすいことになる。この結果から、どのアクセント型も標準語の影響を示しているということが分かる。ただし、一致率はアクセント型によっては 38%~59%と低く、どのアクセント型にも過剰使用の例が多くある。これらの結果から、経験の少ない学習者群と同様に、アクセント型はある程度語ごとに習得されているが、生成されるアクセント型への標準語のアクセント型からの直接的な影響は強くないといえる。

5-4-3 語末から二拍目への偏りがある資料語のタイプ

本節では、標準語から正の影響を示す資料語のタイプの例として、標準語からの影響を示しながら、語末から二拍目にアクセント核を置かれる傾向が強い資料語のタイプがあるということを示す。これらの資料語のタイプに関しては、語末から二拍目のアクセント核は高い一致率を示すが、その背景には、標準語の影響の他、そのアクセント型の過剰使用も多く関わっている。

その種の資料語のタイプの一つの例として、本節で第一に示すのは、経験の少ない学習者群、経験の多い学習者群のそれぞれによる、内容語の前の二拍名詞の結果である。

図 5-9 は経験の少ない学習者群の結果を示したものである。標準語におけるアクセント型の異なる三つの語群がそれぞれ生成されたアクセント型を示している。語頭アクセントの割合は語群によっては 61%~75%と、全体的に高くなっていることが分かる。

図 5-9 には、語群の間の比較、一致率とチャンスレベルとの比較をそれぞれカイ二乗の検定の結果で示している。それらの結果から、標準語におけるアクセント型の異なる三つの語群についてそれぞれ生成されたアクセント型の間には、有意な差があり、さらに、標準語との一致率はチャンスレベルより高いことから、標準語の影響が現れていることが分かる。

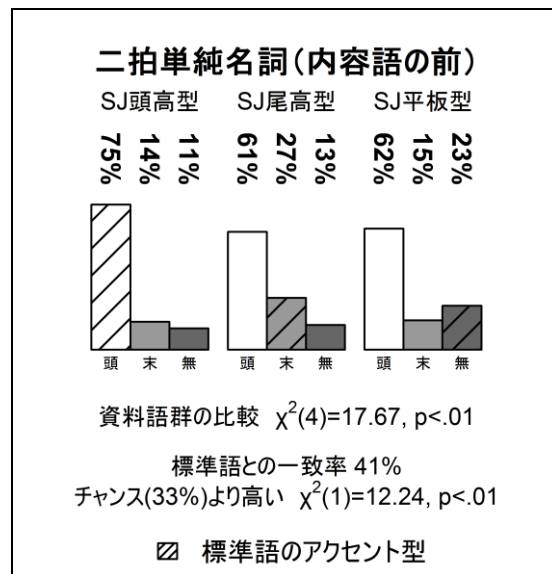


図 5-9 経験の少ない学習者群による内容語の前二拍単純名詞

図 5-9 から、語頭アクセントは 75%と高い一致率を示していることが分かるが、その背景には、標準語の影響の他、語頭アクセント型の過剰使用も多く関わっている。具体的には、語頭アクセントの過剰使用率は 61%と高い。一致率は過剰使用率に比べ 13 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=6.97, p<.01$) が、比較的高い一致率は、標準語の

影響の他、全体的に語頭にアクセント核を置く傾向があることにも原因があり、偶然の一致も大きく貢献していることが分かる。

一方、他のアクセント型に関しては、標準語の影響は現れているが、一致率は低くなっている。語末アクセントでは、一致率は27%、過剰使用率は15%である。無核では、一致率は23%、過剰使用率は12%である。これらのアクセント型では、一致率は過剰使用率に比べ有意に高くなっている（語末アクセントでは12ポイント高く、 $\chi^2(1)=8.5$, $p<.01$ 、無核では11ポイント高く、 $\chi^2(1)=7.92$, $p<.01$) が、一致率は高くない。

図 5-10 は経験の多い学習者群による内容語の前の二拍単純名詞の結果を示している。

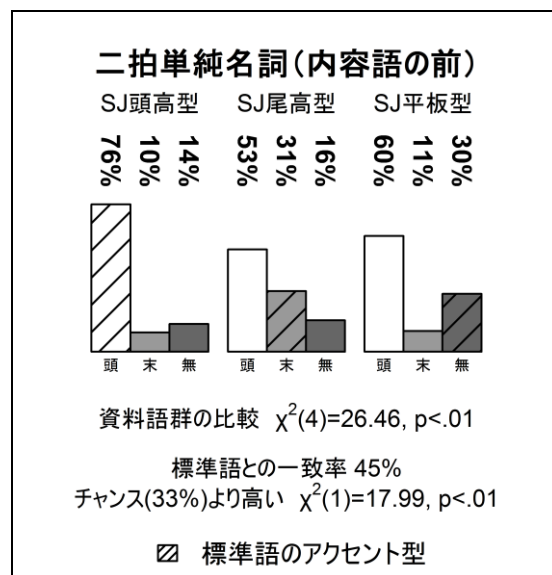


図 5-10 経験の多い学習者群による内容語の前二拍単純名詞

ここでもまた、語頭アクセントで生成されやすい傾向があり、語頭アクセントに見られる高い一致率の背景には、標準語の影響の他、偶然の一致も関わっていると考えられる。具体的には、語頭アクセントの一致率は76%、過剰使用率は56%である。一致率

も過剰使用率も高いが、一致率は過剰使用率に比べ 20 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=9.3, p<.01$)。一方、語頭以外のアクセント型に関しては、一致率は低くなっている。語末アクセントでは、一致率は 31%、過剰使用率は 10%である。無核では、一致率は 30%、過剰使用率は 15%である。これらのアクセント型では、一致率は過剰使用率に比べ有意に高くなっている (語末アクセントでは 21 ポイント高く、 $\chi^2(1)=17.51, p<.01$ 、無核では 15 ポイント高く、 $\chi^2(1)=7.33, p<.01$) が、高い一致率ではない。このように、どのアクセント型にも標準語の影響が見られるが、語頭アクセント以外では一致率が低く、語頭アクセントでは、一致率は高いが、偶然一致している要素も多い。

次ページにある図 5-11 は、標準語の影響を示しながら、語末から二拍目にアクセント核が置かれる傾向もある残りの例として、四つの資料語のタイプの結果を示したものである。これらの資料語のタイプに関しては、経験の少ない学習者の結果のみを本節に紹介するが、経験の多い学習者群の結果については、語頭と語中アクセントの一致率が比較的高い資料語のタイプの例として 5-4-4 節に述べるものと、負の影響も示す例として 5-5-3 節に述べるものがある。

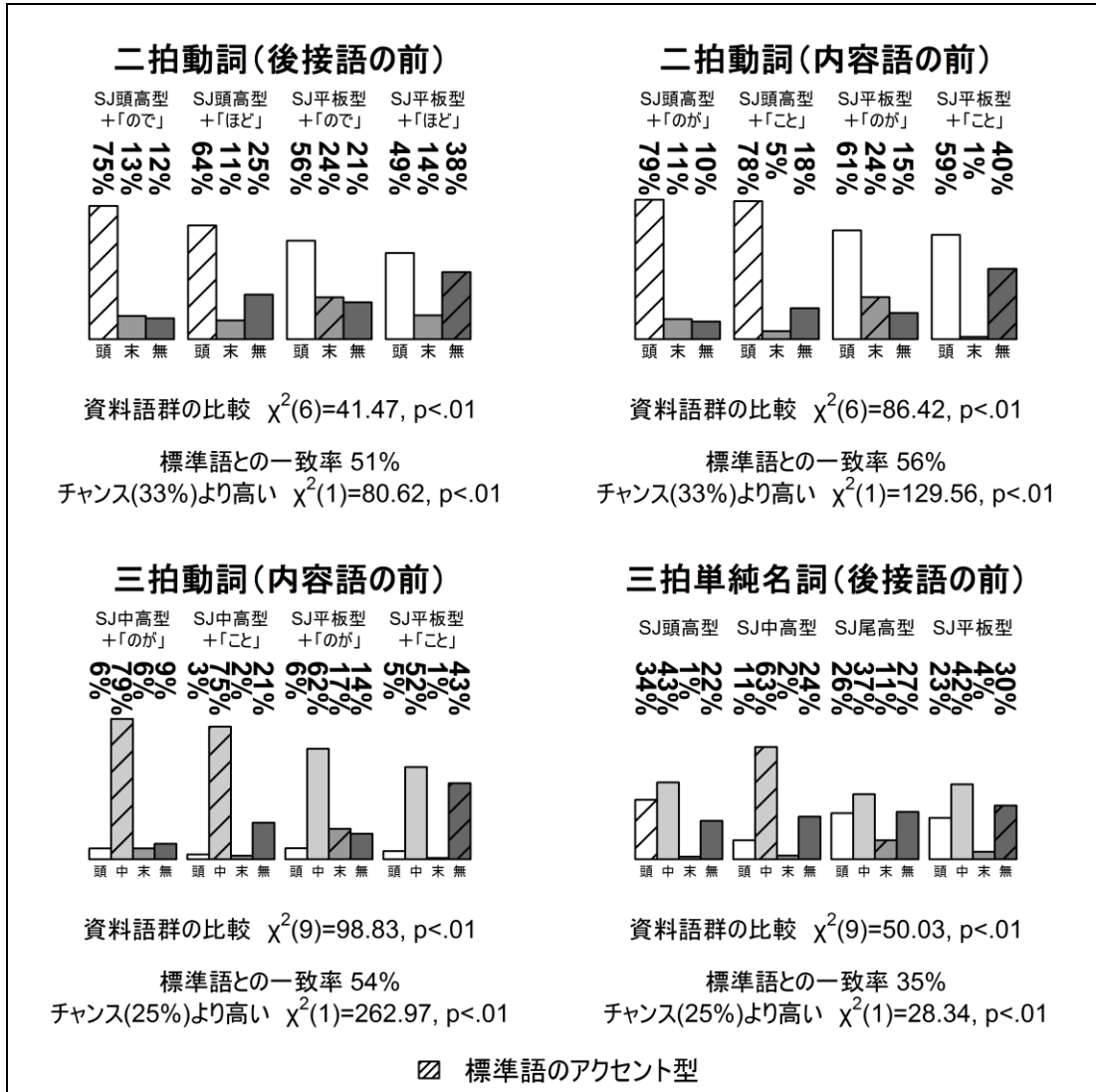


図 5-11 語末から二拍目にアクセントが置かれやすい資料語のタイプ
—経験の少ない学習者群による—

図 5-11 の資料語のタイプは、いずれも語末から二拍目にアクセント核が置かれて生成されやすい傾向がある。したがって語末から二拍目のアクセント核では、一致率は高いが、過剰使用率も高くなっている。具体的には、語末から二拍目のアクセント核についての結果は以下の通りである。後接語の前の二拍動詞では、標準語の頭高型+「ので」における一致率は 75%、標準語の頭高型+「ほど」における一致率は 64%、過剰使用率は 52%である。内容語の前の二拍動詞では、標準語の頭高型+「のが」における一致率は 79%、標準語の頭高型+「こと」における一致率は 78%、過剰使用率は 60%である。内容語の前の三拍動詞では、標準語の中高型+「のが」における一致率は 79%、標準語の中高型+「こと」における一致率は 75%、過剰使用率は 57%である。後接語の前の三拍単純名詞では、語中アクセントの一致率は 63%、過剰使用率は 41%である。

これらの例では全て、一致率は過剰使用率に比べ、有意に高くなっている。後接語の前の二拍動詞では、頭高型+「ので」は 23 ポイント ($\chi^2(1)=21.39, p<.01$) ; 頭高型+「ほど」は 12 ポイント ($\chi^2(1)= 5.52, p<.05$) ; 内容語の前の二拍動詞では、頭高型+「ので」は 19 ポイント ($\chi^2(1)=13.77, p<.01$) ; 頭高型+「ほど」は 18 ポイント ($\chi^2(1)=13.39, p<.01$) ; 内容語の前の三拍動詞では、中高型+「のが」は 22 ポイント ($\chi^2(1) =20.42, p<.01$) ; 中高型+「こと」は 18 ポイント ($\chi^2(1)=12.95, p<.01$) ; 後接語の前の三拍単純名詞では、中高型は 23 ポイント ($\chi^2(1)=22.09, p<.01$) といずれも高くなっている。

一方、語末から二拍目以外のアクセント型に関しては、全体的に生成されにくく、一致率が低くなっている。その詳細は以下の通りである。後接語の前の二拍動詞では、平板型+「ので」における語末アクセントの一致率は 24%、語末アクセントの過剰使用率は 12%である。同資料語のタイプでは、平板型+「ほど」における無核の一致率は 38%、無核の過剰使用率は 19%である。内容語の前の三拍動詞では、平板型+「のが」

における語末アクセントの一致率は 17%、語末アクセントの過剰使用率は 3%である。平板型+「こと」における無核の一致率は 43%、無核の過剰使用率は 15%である。後接語の前の三拍単純名詞では、語頭アクセントの一致率は 34%、過剰使用率は 20%；語末アクセントの一致率は 11%、過剰使用率は 3%；無核の一致率は 30%、過剰使用率は 24%である。

以上のアクセント型のほどんどでは、一致率は過剰使用率に比べ有意に高くなっており、標準語の影響が現れている。後接語の前の二拍動詞では、語末アクセントは 11 ポイント ($\chi^2(1)=9.87, p<.01$)；無核は 19 ポイント ($\chi^2(1)=20.29, p<.01$)；内容語の前の三拍動詞では、語末アクセントは 14 ポイント ($\chi^2(1)=35.5, p<.01$)；無核は 28 ポイント ($\chi^2(1)=52.01, p<.01$)；後接語の前の三拍単純名詞では、語頭アクセントは 14 ポイント ($\chi^2(1)=10.54, p<.01$)、語末アクセントは 8 ポイント ($\chi^2(1)=14.98, p<.01$)といずれも高くなっている。

一方、後接語の前の三拍単純名詞では、無核の一致率は過剰使用率に比べ 6 ポイント高いが、有意な差ではない ($\chi^2(1)=1.81, ns$)。この結果から、このアクセント型に関してのみ、標準語との一致は標準語でのアクセント型からの直接的な影響ではなく、偶然の一致によるものであることが分かる。

5-4-4 語頭と語中アクセントの一致率が比較的高い資料語のタイプ

本節では、標準語から正の影響を示す資料語のタイプの例として、全体の一致率が他の資料語のタイプと同様に低いものの、語頭と語中アクセントに限っては、比較的高い割合で標準語と一致している資料語のタイプがあることを示す。この結果は、本調査の

結果としては高いが、それでも語ごとの習得に頼る傾向があると Wayland et al. (2006) によって指摘されている英語を学ぶ第二言語学習者に比べれば低くなっている。

この種の結果は、経験の多い学習者群にのみ観察された。本節に報告する二つの資料語のタイプにおける経験の多い学習者群の結果については、後接語の前の三拍単純名詞の結果は語末から二拍目にアクセント核が置かれやすい例としてすでに 5-4-3 節に述べており、内容語の前の三拍単純名詞の結果は負の影響も示す例として 5-5-2 節に述べる。

図 5-12 は経験の多い学習者群による後接語の前の三拍名詞の結果を示したものである。標準語におけるアクセント型が異なる四つの語群の結果を示している。図にはカイ二乗検定の結果をこれまでのように二つ示しているが、標準語におけるアクセント型が異なるそれぞれの語群の間には有意な差があり、標準語との一致率はチャンスレベルより有意に高いことが分かる。

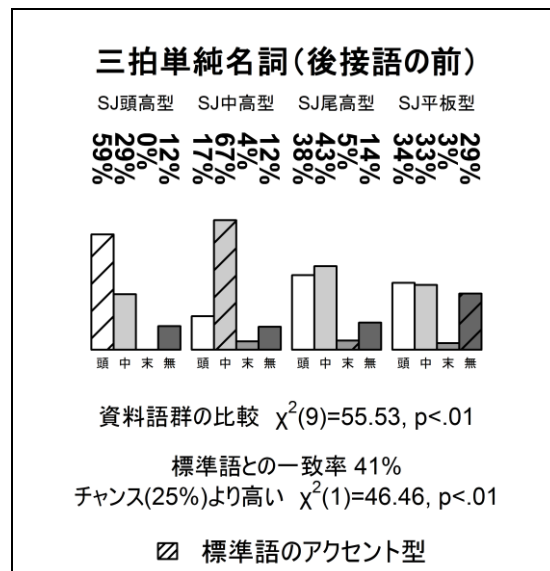


図 5-12 経験の多い学習者群による後接語の前の三拍単純名詞の結果

図 5-12 から、語頭と語中アクセントはいずれも 50%を超えた比較的高い一致率を示していることが分かる。語頭アクセントでは、一致率は 59%、過剰使用率は 30%である。一致率は過剰使用率に比べ 30 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=24.25, p<.01$)。語中アクセントでは、一致率は 67%、過剰使用率は 35%である。一致率は過剰使用率に比べ 32 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=27.23, p<.01$)。

一方、語末アクセントと無核では、一致率は比較的低くなっている。無核では、一致率は 29%、過剰使用率は 13%である。一致率は過剰使用率に比べ 16 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=11.76, p<.01$)。語末アクセントでは、一致率は 5%、過剰使用率は 3%である。尾高型における無核の一致率は無核の過剰使用率に比べ 2 ポイント高いが、有意な差ではない ($\chi^2(1)=0.39, ns$)。したがって語末アクセントの割合には標準語の影響が現れているが、無核に関しては標準語と一致しても偶然の一致ということになる。

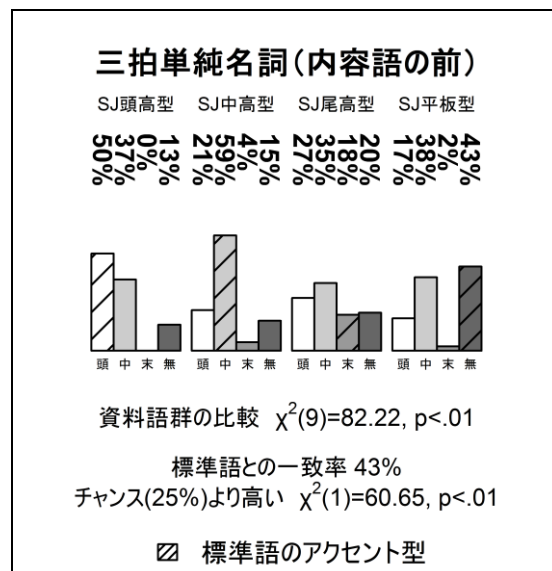


図 5-13 経験の多い学習者群による内容語の前の三拍単純名詞の結果

図 5-13 は経験の多い学習者群による内容語の前の三拍単純名詞の結果を示したものである。経験の少ない学習者群の結果については 5-5-2 節に述べるが、この資料語のタイプは、経験の多い学習者群の一致率が経験の少ない学習者群より有意に高くなっている唯一の例である。語頭と語中アクセントはいずれも 50%以上という比較的高い一致率を示している。語頭アクセントでは、一致率は 50%、過剰使用率は 22%である。一致率は過剰使用率に比べ 28 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=25.31, p<.01$)。語中アクセントでは、一致率は 59%、過剰使用率は 36%である。一致率は過剰使用率に比べ 23 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=13.79, p<.01$)。無核では一致率が多少低く、語末アクセントではさらに低くなっている。無核では、一致率は 43%、過剰使用率は 16%である。一致率は過剰使用率に比べ 27 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=26.9, p<.01$)。語末アクセントでは、一致率は 18%、過剰使用率は 2%である。尾高型の一致率は無核の過剰使用率に比べ 16 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=27.94, p<.01$)。

以上の結果から、経験の多い学習者群が生成する三拍単純名詞では、後接語の前、内容語の前という二つの発話環境の場合、語頭にアクセント核が置かれて生成されるか、あるいは、語中にアクセント核が置かれて生成されるかは、50%以上の割合で、標準語と一致していることが分かった。このように二つのアクセント型の一致率が 50%を超

えるのは、この二つの資料語のタイプのみである⁵¹が、これらの資料語のタイプにおけるこれらのアクセント型に関しては、語ごとの習得が比較的されやすいと考えられる。

この結果は、本調査の結果としては高い値であるが、それでも語ごとの習得に頼る傾向があると Wayland et al. (2006) で報告されている英語を学ぶ第二言語学習者に比べれば低い。Wayland et al. (2006) では、韓国語、スペイン語、タイ語を母語とする英語の第二言語学習者の生成では、英語のストレスとの一致率が 90%を超えていたことを報告している。本節に報告した資料語のタイプでは、語頭と語中アクセントにおける一致率は、本調査の他の資料語のタイプの他のアクセント型に比べて高いが、一致率はそれでも後接語の前では語頭が 59%、語中が 67%、内容語の前では、語頭が 50%、語中が 59%と Wayland et al. (2006) に報告されているストレスパターンの一致率に比べれば高くない。本調査での結果のうち、最も一致しやすい語群でも、70%以下となっていることから、標準語との一致率がどれだけ低いかを改めて示しているものと思われる。

5-4-5 一致率が特に低い資料語のタイプ

本節では、標準語からの正の影響を示す資料語のタイプの最後の例として、標準語からの影響があるものの、標準語との一致率が 30%程度と特に低い資料語のタイプがあ

⁵¹ 後接語の前の動詞、内容語の前の動詞にも、一致率が 50%を超えたアクセント型を二つ持つ資料語のタイプもあるが、語ごとの習得の結果ではないと思われる (5-5-3 節参照)。

るということを示す。これらの資料語のタイプに関しては、標準語のアクセント型が語末から二拍目のアクセント核である語が対象語にないことが一致率を低くしていると思われる。

図 5-14 は経験の少ない学習者群が生成した内容語の前の二拍および三拍転成名詞の結果を示したものである。

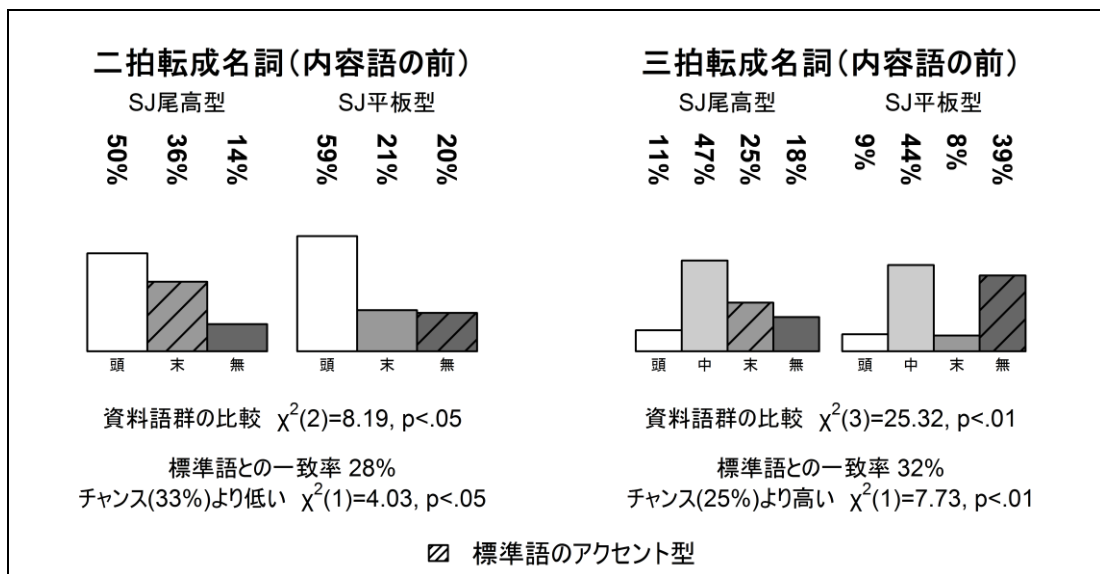


図 5-14 一致率が低い資料語のタイプ
—経験の少ない学習者群による—

図 5-14 の左側のグラフは内容語の前の二拍転成名詞の結果である。標準語におけるアクセント型の異なる二つの語群が生成されるアクセント型の間には、有意な差があるが、標準語との一致率はチャンスレベル以下となっている。その理由は、他の資料語のタイプとは異なり、語末から二拍目にアクセント核を置いて生成しても、対象語には標準語のアクセント型がそれに該当するものがないため、一致しないことが原因と思われる。しかしながら、標準語の影響が現れていないわけではない。語末アクセントでは、一致率は36%、過剰使用率は21%である。一致率は過剰使用率に比べ、15ポイント高

くなっている ($\chi^2(1)=7.16, p<.01$)。つまり語末アクセントの割合には標準語の影響が現れている。一方、無核に関しては、一致している場合には標準語からの直接的な影響ではなく偶然の一致による。一致率は 20%、過剰使用率は 14%である。一致率は過剰使用率に比べ 6 ポイント高いが、有意な差ではない ($\chi^2(1)=1.41, ns$)。

図 5-14 の右側のグラフにある内容語の前の三拍転成名詞では、標準語におけるアクセント型の異なる語群が生成されるアクセント型には有意な差が見られ、標準語との一致率はチャンスレベル以上であるが、一致率は 32%と比較的低くなっている。その理由は上述の例と同様である。語末アクセントでは、一致率は 25%、過剰使用率は 8%である。一致率は過剰使用率に比べ、17 ポイント高くなっている ($\chi^2(1)=14.27, p<.01$)。無核では、一致率は 39%、過剰使用率は 18%である。一致率は過剰使用率に比べ 21 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=15.66, p<.01$)。

図 5-15 は経験の多い学習者群が生成する後接語の前の三拍転成名詞、内容語の前の三拍転成名詞の結果を示したものである。図 5-15 の左側にある後接語の前の三拍転成名詞では、標準語におけるアクセント型の異なる二つの語群が生成されるアクセント型には有意な差があるが、標準語との一致率はチャンスレベルを超えていない。この理由は以上の例と同様に、標準語のアクセント型が語末から二拍目の語を対象としていないためである。また、二つのアクセント型のうち、標準語の影響を示しているのは語末アクセントであることもある。語末アクセントでは、一致率は 19%、過剰使用率は 2%である。一致率は過剰使用率に比べ、17 ポイント高くなっている ($\chi^2(1)=11.9, p<.01$)。無核では、一致率は 28%、過剰使用率は 17%である。一致率は過剰使用率に比べ 11 ポイント高いが、有意な差ではない ($\chi^2(1)=2.36, ns$)。

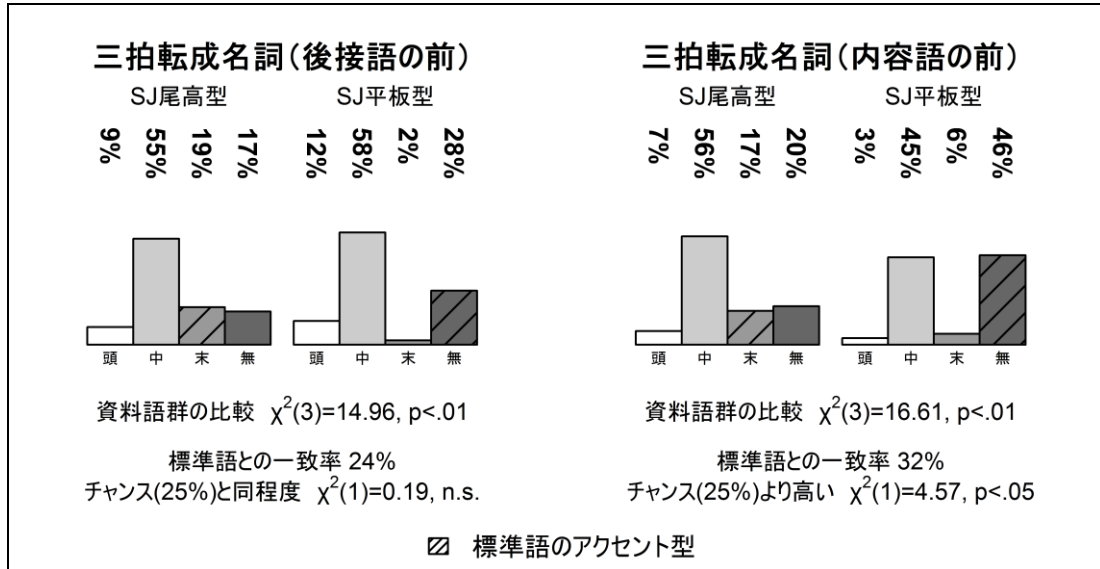


図 5-15 一致率が低い資料語のタイプ
—経験の多い学習者群による—

図 5-15 の右側のグラフにある内容語の前の三拍転成名詞では、標準語のアクセント型で異なる語群が生成されるアクセント型の間には有意な差があり、標準語との一致率はチャンスレベル以上であるが、一致率はここでも 32% と高くない。語末アクセントでは、一致率は 17%、過剰使用率は 6% である。一致率は過剰使用率に比べ、12 ポイント高くなっている ($\chi^2(1)=4.93, p<.05$)。無核に関しては、一致率は 46%、過剰使用率は 20% である。一致率は過剰使用率に比べ 26 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=12.49, p<.01$)。つまり一致率は低いが、標準語の影響は語末アクセントの割合にも無核の割合にも見られる。

5-4-6 考察

以上では、標準語から正の影響を示す資料語のタイプの結果を報告したが、生成されるアクセント型への標準語の影響は強いものではなかった。具体的な傾向には様々な種

類があったが、標準語のアクセント型が語ごとに習得されている証拠はどれもある程度観察された。少数の例外を除いては、標準語のアクセント型が x である資料語は、x でない資料語に比べ、x で生成されやすく、つまり、生成されるアクセント型には標準語のアクセント型からの直接的な影響が現れているということが分かった。しかしながら、ほとんどのアクセント型では一致率が低く、比較的高い場合には過剰使用も多く現れている。生成されるアクセント型への標準語の影響は強いものではないといえる。

以上紹介した 14 の資料語のタイプのうち、無核（標準語の平板型もしくは単独の発話環境における尾高型）の割合には、標準語の影響が有意でない例が五つ観察された。このことから、これらの資料語のタイプに関しては、標準語のアクセント型が無核である資料語と、無核でない資料語が、それぞれ無核で生成される割合は同程度であることが分かった。つまり、標準語との一致は直接的な影響ではなく、偶然の一致によるということになる。この結果から、無核が特に習得されにくいアクセント型であるという可能性がうかがえるが、これについては 5-6-2 節で再度検討する。

5-5 標準語から負の影響を示す資料語のタイプ

5-5-1 はじめに

本節のタイトルは「標準語から負の影響を示す資料語のタイプ」であるが、タイトルから予測されることに反して本節では、負の影響が一定の傾向として現れる証拠はないということを示す。経験の少ない学習者群では、負の影響と思われる傾向は二箇所あるが、この影響は強いものではない。経験の多い学習者群では、一見負の影響に見える傾

向はあるが、正確には、対象語に付加されている語の影響である。これまでの分析では、標準語からの影響は全体的な傾向として低いことを示したが、本節の結果から、現れているのは基本的には正の影響のみであることを示す。

学習者の生成では、例えば標準語のアクセント型が語中アクセントの語が、他のアクセント型（例えば語末アクセントや無核）の語より、語中ではなく語頭にアクセント核が置かれやすいというような傾向が現れる可能性が考えられる。本研究で「標準語からの負の影響」と呼んでいるのは、このような傾向である。つまり、負の影響とは、標準語におけるアクセント型の異なる語が、学習者の生成では、標準語とは違う方向で異なって生成されるという傾向であると定義する。

第3章で述べたように、Nagano-Madsen (2000) によると、英語と同じストレス言語であるスウェーデン語を母語とする日本語学習者には、アクセント核の位置を一拍遅く知覚する傾向があることが指摘されている。このように知覚する場合、生成では、標準語のアクセント型が語頭アクセントの語は他の語より語中アクセントで、標準語のアクセント型が語中アクセントの語は他の語より語末アクセントで生成される可能性が考えられる。つまり、生成には標準語からの負の影響が現れる可能性がある。本節では、英語話者にはこのような傾向がない、もしくは少なくとも生成には実現されないということ論じる。

負の影響の有無については以下の方法で判断する。まず、標準語の影響があるかどうかを検討するために、標準語のアクセント型が異なる語群についてそれぞれ生成されるアクセント型の間の一致率に、有意な差があるかどうかを、カイ二乗分布を使った独立性の検定で検討する。次に、有意な違いが認められた資料語のタイプを対象に、残差分

析を行う⁵²。標準語と一致しないアクセント型（例えば、標準語のアクセント型が語中アクセントである語群における語頭アクセント）で、残差が1を超えたアクセント型がある場合、負の影響が現れていると判断する。負の影響があるということは、上述の例では、標準語のアクセント型が語中アクセントである語は、他の（ひとつか、あるいは複数の）語群に比べ、語頭にアクセント核を置かれやすいということを意味する。

水準を1にすることは以下の理由による。これまでの分析結果に報告した標準語からの正の影響で、一致率が過剰使用率より有意に高いアクセント型は、生成されたアクセント型と標準語のアクセント型のカイ二乗検定では、少数の例外を除いては、残差が1以上、一致率と過剰資料率の間に有意な差がないアクセント型は、少数の例外を除いては、残差が1以下となっている。したがって、水準を1に設定することで、正の影響と同程度の水準に設定することができる。

5-5-2 経験の少ない学習者群

本節では、経験の少ない学習者群の生成には、負の影響と思われる傾向が二箇所現れていることを報告する。ただしこの影響は強いものではなく、一定の傾向ではない。

⁵² 残差分析とは、カイ二乗検定が有意である場合、複数のセルから偏りのあるセルを判定するための検定法である。

具体的には以下の結果である。一つ目の例では、標準語でのアクセント型が語末アクセントである資料語が、語中アクセントと無核の資料語に比べ、語頭アクセントで生成される割合が若干高くなっている。二つ目の例では、標準語でのアクセント型が語中アクセント（中高型+「ので」）である語では、他の資料語に比べ、語頭アクセントで生成される割合が若干高くなっている。一定の傾向ではないとするのは、これらの傾向は強いものではなく、しかもすべて資料語のうち二箇所のみでしかないのである。

図 5-16 は経験の少ない学習者群による内容語の前の三拍単純名詞の結果である。四つの語群が生成されたアクセント型を示している。図にはカイ二乗検定の結果をこれまで通り二つ示しているが、標準語におけるアクセント型が異なるそれぞれの語群の間には有意な差があり、標準語との一致率はチャンスレベルより有意に高いことが分かる。この結果から、標準語の影響が現れていることが分かるが、以下に示すように、正の影響の他、負の影響も現れている。

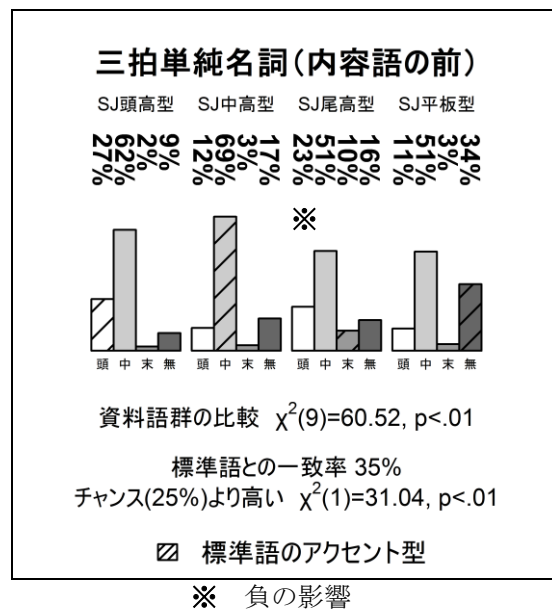


図 5-16 経験の少ない学習者群による内容語の前の三拍単純名詞

負の影響が現れているのは、図 5-16 で「※」で記しているアクセント型である。標準語でのアクセント型が尾高型の語における語頭アクセントの割合であるが、それぞれの語群が生成されたアクセント型を比較したカイ二乗検定で、標準語と一致しないアクセント型であるにもかかわらず、残差が 1 を超えている。標準語の中高型の語および平板型の語に比べ、標準語の尾高型の語では、語頭アクセントが多少多くなっていることは、図 5-16 から確認できる。

図 5-16 に示した資料語のタイプには、正の影響も以下のように現れている。全体的に語末から二拍目にアクセントが置かやすい傾向がある。語頭アクセントでは、一致率は 27%、過剰使用率は 15% である。語中アクセントでは、一致率は 69%、過剰使用率は 55% である。語末アクセントでは、一致率は 10%、過剰使用率は 3% である。最後に無核では、一致率は 34%、過剰使用率は 14% である。これらについて、一致率は過剰使用率に比べ、有意に高くなっている。語頭は 11 ポイント ($\chi^2(1)=8.66, p<.01$) ; 語中は 14 ポイント ($\chi^2(1)=8.43, p<.01$) ; 語末は 8 ポイント ($\chi^2(1)=12.39, p<.01$) ; 無核は 20 ポイント ($\chi^2(1)=28.65, p<.01$) それぞれ高い。

図 5-17 は、経験の少ない学習者群による、後接語の前の三拍動詞の結果である。四つの語群が生成されたアクセント型を示している。図にはカイ二乗検定の結果を今まで通り二つ示しているが、標準語においてアクセント型が異なるそれぞれの語群の間には有意な差があり、標準語との一致率はチャンスレベルより有意に高いことが分かる。この結果から、標準語の影響が現れていることが分かるが、以下に示すように、正の影響の他、負の影響も現れている。

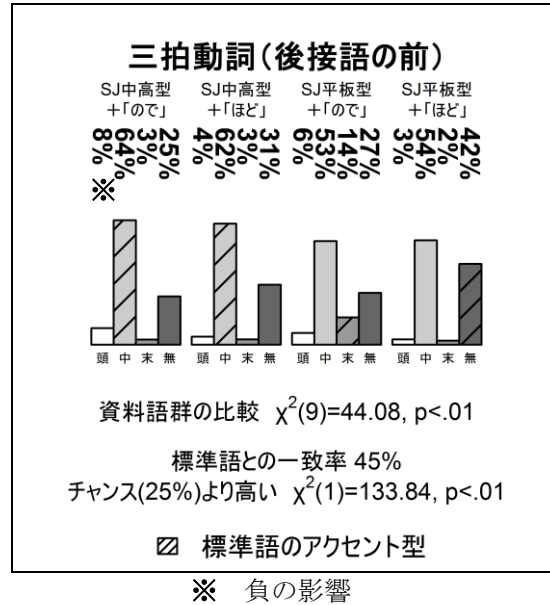


図 5-17 経験の少ない学習者群による後接語の前の三拍動詞

負の影響が現れているのは、図 5-17 で「※」で記しているアクセント型である。標準語の中高型+「ので」の資料語における語頭アクセントであるが、標準語と一致しないアクセント型であるにもかかわらず、残差が 1 を超えている。標準語の他の語に比べ、標準語の中高型+「ので」の語では、語頭アクセントが多少多くなっていることは、図 5-17 から確認できる。

図 5-17 に示した資料語のタイプには、正の影響も以下のように現れている。全体的に語末から二拍目にアクセントが置かれやすい傾向がある。語中アクセントでは、標準語中高型+「ので」の一致率は 64%、標準語中高型+「ほど」の一致率は 62%、過剰使用率は 54%である。中高型+「ので」に関しては、一致率は過剰使用率に比べ 11 ポイント高く、有意な差である ($\chi^2(1)=4.17, p<.05$)。一方、中高型+「ほど」に関しては、一致率は過剰使用率に比べ 9 ポイント高いが、有意な差ではない ($\chi^2(1)=2.75, ns$)。語末アクセントでは、平板型+「ので」における一致率は 14%、過剰使用率は 2%であ

る。無核では、平板型+「ほど」における一致率は42%、過剰使用率は27%である。この二つのアクセント型に関しては、一致率は過剰使用率に比べ、有意に高くなっている。語末アクセントは12ポイント($\chi^2(1)27.34, p<.01$) ; 無核は14ポイント($\chi^2(1)9.93, p<.01$) それぞれ高くなっている。したがって、中高型+「ので」、平板型+「ので」、平板型+「ほど」にはそれぞれ標準語の影響が現れているが、中高型+「ほど」に関しては、アクセント型が標準語と一致しても、偶然の一致によるということになる。

以上では、負の影響を二つ報告したが、経験の少ない学習者群が生成する他の資料語のタイプでは、標準語と一致しないアクセント型には、残差が1を超えたものはなかった。したがって、負の影響は強いものではなく、一定の傾向はないといえる。

5-5-3 経験の多い学習者群

本節では、経験の多い学習者群の生成には、一見負の影響に見える傾向があるが、それは標準語のアクセント型からの負の影響ではなく、対象語に付加されている「ほど」、「ので」、「こと」、「のが」の影響であることを示す。以下に示す四つの資料語のタイプのうち、三つでは、対象語の標準語におけるアクセント型からの直接的な影響がなく、付加語の影響のみが現れている。

対象語の標準語におけるアクセント型からの直接的な影響がないことは以下のように示す。対象語が頭高型の「出すので」、平板型の「踏むので」のように、付加語が同じで、対象語の標準語のアクセント型が異なるという語群を対象に、それぞれ生成されたアクセント型を比較し、有意な違いがないということを示す。この結果から、その付加語に先行している環境では、生成されるアクセント型は対象語(例では「出す」と「踏

む」) の標準語でのアクセント型とは無関係に決められるということが分かる。なお、生成されるアクセント型への付加語の影響についての分析は第6章にゆずり、ここで示すのは、付加語を一種類に統一した場合には、対象語のアクセント型による影響がないということだけである。

ここに至るまでには分析上、負の影響に見える傾向が、さらに精査した結果、アクセント型からの負の影響ではなく、付加語の影響によるものであることが見いだされたという経緯があった。したがって、ここでは、まず一見負の影響に見える傾向を示し、それが付加語の影響であることを示す。

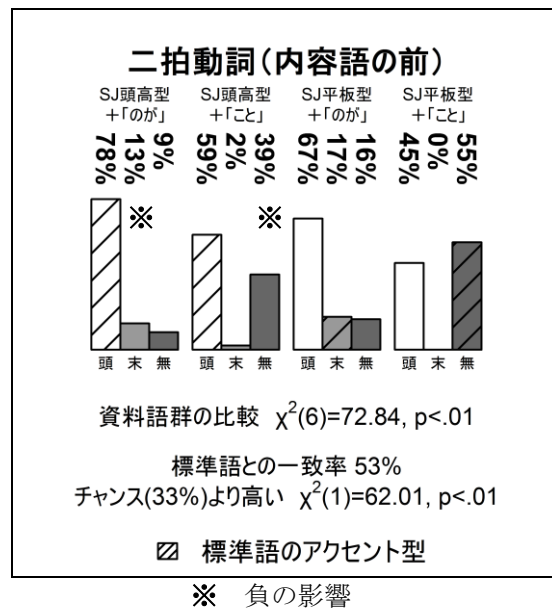


図 5-18 経験の多い学習者群による内容語の前の二拍動詞

図 5-18 は経験の多い学習者群による内容語の前の二拍動詞の結果である。四つの語群それぞれについて生成されたアクセント型を示している。図にはカイ二乗検定の結果をこれまで通り二つ示しているが、標準語におけるアクセント型が異なるそれぞれの語群の間には有意な差があり、標準語との一致率はチャンスレベルより有意に高いことが

分かる。本来、これらの結果からは、標準語から正の影響が現れている証拠であると解釈するところである。ただし、以下に示すように、この種の資料語のタイプでは、標準語のアクセント型の影響の他、付加語の影響も多く関わっている。

分析上、負の影響に見える結果は、図 5-18 に「※」で記したアクセント型である。それぞれの語群について生成されたアクセント型を比較したカイ二乗検定で、標準語と一致しないアクセント型であるにもかかわらず、残差が 1 を超えた部分がある。一つ目は、「のが好きだ」に先行する標準語でのアクセント型が頭高型である資料語における語末アクセントである。二つ目は、「ことができる」に先行する標準語でのアクセント型が頭高型の資料語における無核である。

これらの結果から、「のが好きだ」に先行する資料語では語末アクセントの割合が比較的高く、「ことができる」に先行する資料語では無核の割合が比較的高くなるという可能性がうかがえる。図 5-19 はその傾向を示すために、図 5-18 の結果を付加する内容語別に並べ替えたものである。

図 5-19 の左側に示している独立性の検定の一つ目の結果から、「のが好きだ」に先行する資料語では、標準語におけるアクセント型が異なる二つの語群の間には、有意な差がないことが分かる。この結果が意味することは、標準語のアクセント型が「出すのが好きだ」のように語頭アクセントか、あるいは「踏むのが好きだ」のように語末アクセントかに関係なく、生成されるアクセント型が決まるということの意味する。一方「ことができる」に先行する資料語では、生成されたアクセント型と標準語でのアクセント型の間、有意な関係がある。ここでは標準語からの正の影響が現れていることが分かる。

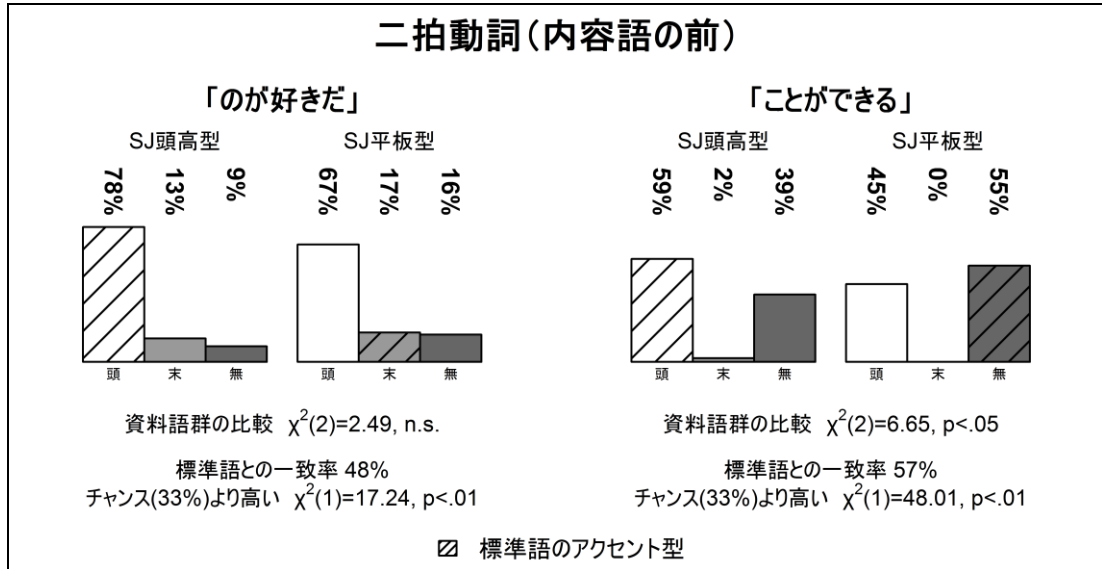


図 5-19 内容語の前の二拍動詞における付加語別の傾向

次ページの図 5-20 は、生成されるアクセント型は標準語でのアクセント型とは無関係に決められる三つの資料語のタイプを付加語別に示している。それぞれの付加語について、標準語のアクセント型の異なる語群についてそれぞれ生成されるアクセント型を比較している独立性の検定では、いずれも有意な差がなく、生成されるアクセント型は対象語のアクセント型とは無関係に決められていることが分かる。

なお、以上の例では「ことができる」、「ほど」に先行する資料語では無核の割合が比較的高く、「ので」、「のが好きだ」の前では、語末アクセントが比較的高くなっている傾向がうかがえるが、これについては第 6 章で分析することとする。本章で指摘すべきことは、付加語を一種類に統一した場合には、標準語の影響が現れないということである。

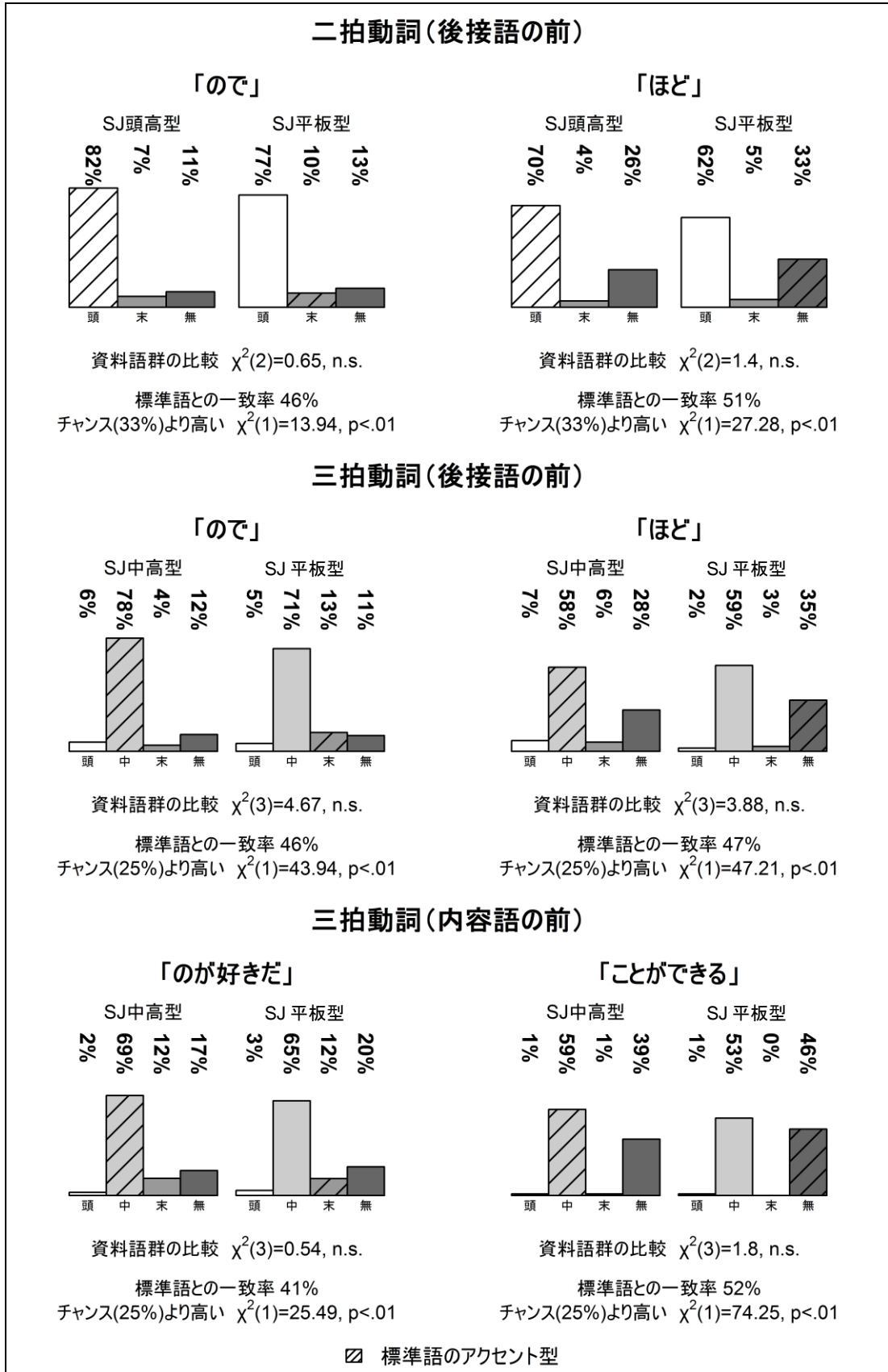


図 5-20 動詞における付加語別の傾向

5-5-4 考察

以上の結果から、全体的な傾向として標準語からの影響は低く、また認められるのは正の影響のみで、負の影響が一定の傾向として現れている証拠はないと考えられる。

以上述べたように Nagano-Madsen (2000) によると、英語と同じストレス言語であるスウェーデン語を母語とする日本語学習者には、アクセント核の位置を一拍遅く知覚する傾向があることが指摘されている。このように知覚する場合、生成では、標準語のアクセント型が語頭アクセントの語は他の語より語中アクセントで、標準語のアクセント型が語中アクセントの語は他の語より語末アクセントで生成される可能性が考えられる。つまり、生成には標準語からの負の影響が現れる可能性がある。

以上では、経験の少ない学習者群には、標準語からの負の影響が二箇所現れているということを示した。内容語の前の三拍単純名詞では、標準語の尾高型の語は、標準語の中高型の語および平板型の語に比べ、語頭アクセントが多少多くなっており、後接語の前の三拍動詞では、標準語の中高型+「ので」の語は、標準語の他の語に比べ、語頭アクセントが多少多くなっている。前者から語末アクセントが、後者から語中アクセントが、語頭アクセントに知覚された可能性は考えられる。しかしながら、強い傾向ではなく、事例数も少ないことから、明確な傾向ではないと思われる。経験の多い学習者群に関しては、一見負の影響とも見られる傾向が観察されたが、実はそうではなく付加語の影響によるものであることを示した。したがって、英語話者には、日本語のアクセント核の位置をスウェーデン語話者のように一拍遅く知覚する傾向はない、もしくは少なくとも生成には実現されないと考えられる。

5-6 結果のまとめ

以上では、標準語の影響を示さない資料語のタイプ、示す資料語のタイプの両方があることを指摘したが、この結果から、標準語の語アクセントがどのように習得されるかについては何が分かるのだろうか。本節では、資料語のタイプ別、アクセント型別に、何が習得され、何が習得されないのかを検討する。その結果、資料語のタイプに関しては、他の発話環境より単独のほうが習得されにくく、さらに三拍語より二拍語の方が習得されにくい傾向がうかがえ、またアクセント型に関しては、語頭アクセントと語中アクセントが比較的習得されやすい傾向がうかがえる。しかしながら、すでに示したように比較的習得されやすい資料語のタイプやアクセント型でも標準語との一致率は高くない。以下では、比較的習得されやすい発話環境、拍数、アクセント型と、習得されにくいものとの比べても、大きな違いはないということを示す。

5-6-1 資料語のタイプ別

本章では、各資料語のタイプが生成されるアクセント型に標準語の影響が現れているかどうかを判断するために、標準語におけるアクセント型の異なる複数の語群に対してそれぞれ付与されたアクセント型を、カイ二乗検定で比較するという方法を用いた。その結果有意な差が認められなかった場合、アクセント付与は標準語のアクセント型とは無関係に行われると判断し、一方、有意な差が認められた場合、生成されるアクセント型は標準語でのアクセント型には影響されると判断した。本節では標準語の影響を示す資料語のタイプ、示さない資料語のタイプをそれぞれ表にまとめ、どのような資料語のタイプが標準語の影響を示しやすい、あるいは、示しにくいのかを検討する。その結果、

単独の発話環境や、三拍語より二拍語の方が、習得されにくい傾向が示唆されるが、それほど明確な傾向ではないことを示す。

次ページの表 5-6 は、これまで報告した結果のまとめとして、標準語の影響を示す資料語のタイプ、示さない資料語のタイプをそれぞれ表したものである。二つの学習者群で共通した結果を示したものは上部に提示し、異なるものは経験量別に下部に提示している。なお、経験の多い学習者群に関してのみ、動詞に後続する付加語を一種類に統一すると標準語の影響がないものがあることを 5-5-3 節で示したが、それらの資料語のタイプに関しては、標準語の影響を示さない方に分類してある。

経験の少ない学習者群と多い学習者に共通の結果から、以下の弱い傾向がうかがえる。標準語の影響を示す資料語のタイプは、後接語の前、内容語の前の資料語のタイプである。例外は、単独の三拍単純名詞のみである。逆に、後接語の前、内容語の前の環境であるにもかかわらず有意でない資料語のタイプは、二拍単純名詞、二拍転成名詞である。つまり、三拍に比べ二拍は標準語の影響を示しにくく、後接語の前、内容語の前に比べ、単独の発話は標準語の影響を示しにくいという傾向が示唆される。

ただし、経験の少ない学習者群と多い学習者でそれぞれ傾向が異なる資料語のタイプでは、三拍語でも標準語の影響を示さない例、後接語の前や内容語の前でも標準語の影響を示さない例がどの学習者群にもあるので、以上のような傾向があるとしても、強い傾向ではないと考えられる。

表 5-6 資料語のタイプによる傾向の違い

標準語の影響を示す	標準語の影響を示さない
経験の少ない学習者群・経験の多い学習者群の両方	
二拍単純名詞（内容語の前） 二拍動詞（内容語の前） 三拍単純名詞（単独） 三拍単純名詞（後接語の前） 三拍単純名詞（内容語の前） 三拍転成名詞（内容語の前）	二拍単純名詞（単独） 二拍単純名詞（後接語の前） 二拍転成名詞（単独）※ 二拍転成名詞（後接語の前） 二拍動詞（単独） 三拍転成名詞（単独）※ 三拍動詞（単独）
経験の少ない学習者群のみ	
二拍転成名詞（内容語の前） 二拍動詞（後接語の前） 三拍動詞（後接語の前） 三拍動詞（内容語の前）	三拍転成名詞（後接語の前）
経験の多い学習者群のみ	
三拍転成名詞（後接語の前）	二拍転成名詞（内容語の前） 二拍動詞（後接語の前）※※ 三拍動詞（後接語の前）※※ 三拍動詞（内容語の前）※※

※ 標準語でもアクセント型が対立しない

※※ ただし付加語による違いはある

なお、ここで資料語の選定について再度述べる点がある。資料語は学習者にとってなるべく馴染みのある語であるように選定しているが、第4章で述べたように、三拍の単純名詞、二拍と三拍の転成名詞のうちの複数の語、および動詞に付加させる後接語の「ほど」に関しては、特に経験の少ない学習者群にとっては馴染みが低い恐れがある。しかしながら、5-2-4 節では、経験の少ない学習者群と経験の多い学習者による標準語との一致率には差がなかったことを示している。さらに、本節では、標準語との一致率が全体として低く、一致率が比較的高い資料語のタイプと比較的低い資料語のタイプの間には大きな違いが観察されなかったことを報告している。したがって、資料語のタイプの間にあると予測される馴染み度の差異に関しては、結果に大きな影響を及ぼしている可能性はないと思われる。

5-6-2 アクセント型別

本章の分析を通し、アクセント型別に異なる傾向が観察された。5-2-3 節では、標準語との一致率は語頭と語中アクセントで相対的に高く、語末アクセントでは最も低く、無核ではその中間であるという傾向を報告した。5-4 節では、正の影響を示す資料語のタイプのうち、無核以外のアクセント型には標準語の影響が現れ、無核には現れない資料語のタイプがいくつかあった。5-5-2 節では、語中アクセント（中高型+「ほど」）に標準語の影響が現れていない例が一つ観察されたが、無核とは対照的に一例のみであった。これらの結果の背景には、語アクセントの習得のしやすさがアクセント型によって異なるという傾向があるのだろうか。本節では、生成されやすさはアクセント型によっては異なるが、習得されやすさにはそれほど大きな差がないということを論じる。

表 5-7 は経験の少ない学習者群、経験の多い学習者群のそれぞれについて、各アクセント型の一致率、過剰使用率を示したものである。一致率と過剰使用率の定義はこれまで通りで、一致率とは、標準語のアクセント型が x（語頭、語中、語末、無核のいずれか）である資料語のうち、標準語通り x で生成される資料語の割合である。一方、過剰使用率とは、標準語のアクセント型が x でない資料語のうち、x で生成される資料語の割合であると定義している⁵³。

表 5-7 アクセント型による傾向の違い

	経験の少ない学習者群		経験の多い学習者群	
	一致率	過剰使用率	一致率	過剰使用率
語頭	61%	41%	68%	48%
語中	61%	44%	60%	40%
語末	19%	7%	16%	5%
無核	40%	22%	39%	20%

一致率：標準語のアクセント型が x である資料語のうち、x で生成される資料語の割合

過剰使用率：標準語のアクセント型が x でない資料語のうち、x で生成される資料語の割合

表 5-7 の結果から、以下の二点に分かる。第一には、一致率が比較的高い語頭と語中アクセントは、過剰使用率も高くなっているということである。語アクセントを習得す

⁵³ 各アクセント型の過剰使用率の計算は、x というアクセント型を標準語に持つ資料語のタイプに対してのみ行う。

るということを、どの語がどのアクセント型を取るかを習得することであると考えると、語頭および語中アクセントは習得されやすいのではなく、ただ生成されやすくなっているにすぎないという傾向がこの結果からうかがえる。アクセント型の間には、生成されやすさの違いはあるが、どの語がどのアクセント型であるかを習得することは、どのアクセント型でも難しいと思われる。

表 5-7 の結果から分かる二点目としては、経験の多い学習者群に見られる語頭アクセントの比較的高い一致率は、経験の少ない学習者群に比べ、どの語が語頭アクセントであるかをより習得しているのではなく、標準語のアクセント型を問わず語頭アクセントを使用しやすいという傾向を反映しているということである。これは、経験の多い学習者群には、語頭アクセントの過剰使用率もいくぶん高くなっていることから分かる。各学習者群が生成するアクセント型に影響する要因については、第 6 章でより深く分析する。

5-7 本章についての考察

本章では、学習者によって生成されるアクセント型が標準語のアクセント型と一致したという報告が先行研究においてなされている場合、それが中間言語の規則を適用した結果としての偶然の一致なのか、あるいは標準語でのその語のアクセント型からの直接的な影響によるものなのかは明らかでないという指摘を出発点とし、標準語の影響が英語話者の生成にどの程度、どのように、現れているのかを調べた。本節では、分析結果に基づき、ある語がどのアクセント型で生成されるのかは、日本語の経験量を問わず、その語が標準語に持つアクセント型には、それほど影響されないということを論じ、語

ごとの習得—すなわち語ごとにアクセント型を音韻表象にエンコードすること—は不可能ではないが、困難である可能性があることを結論として述べる。

標準語との一致率はアクセント型および資料語のタイプによって異なるが、一致率が比較的高い発話環境、拍数、アクセント型と、比較的低いものとの比較しても、標準語の影響が現れる程度には大きな違いは観察されなかった。語の種類（拍数、品詞）およびその語が置かれた環境によっては、生成されるアクセント型は、標準語のアクセント型とは無関係、もしくはほぼ無関係に決められるものがあることが分かった。その資料語のタイプに関しては、標準語と一致した場合でも、標準語のアクセント型からの直接的な影響で一致したのではなく、偶然一致したことになる。一方、標準語の影響が現れている資料語のタイプも観察された。しかしながら、標準語の影響が観察された場合でも、一致率は低く、各アクセント型の過剰使用もあることから、標準語の影響は強いものではないといえる。英語話者には、日本語の語アクセントを語ごとに習得することは困難であることとなる。

語ごとの習得が困難であるという結果は、Wayland et al. (2006) が報告している英語を学ぶ第二言語学習者とは対照的である。Wayland et al. (2006) は語ごとの習得に頼る傾向があると述べている。本調査の参加者の生成では、標準語との一致率は低かった。資料語は学習者にとってなるべく馴染みのある語であるように選定してあるが、全体の一致率は二つの学習者群に共通して 43%と、Wayland et al. (2006) で報告されている正解率を顕著に下回っている。

しかしながら、語レベルプロソディの語ごとの習得が第二言語学習者に困難であると報告しているのは本研究が初めてではない。Dupoux et al. (1997、2001、2008) はフラ

ンス語母語話者について、語ストレスを音韻表象にエンコードすることが困難であると述べている。

本章の結果の説明として、アクセント型は語ごとに習得されにくいと論じてきたが、他の可能性が考えられる。語アクセントは語ごとに音韻表象にエンコードされるが、生成の段階では、音韻表象の通りに実現されないという可能性が残される。その可能性がなぜ排除できるかという説明は、個人の傾向の分析結果を報告する第7章の結果を考慮し、本論文の考察に述べる。

第6章

規則によるアクセント付与

6-1 はじめに

英語話者⁵⁴が生成する日本語では、アクセント付与は中間言語の規則に従って行われるという可能性がある。第3章で紹介した研究では、生成されるアクセント型に影響する要因として、音節構造と拍数（堀口、1973；久野、1998；Shport、2008；戸田、1999）、品詞（Taylor、2012）、発話環境（磯村、1996；Taylor、2012；土岐、1980；山田、1994a、b）が挙げられている。しかしながら、具体的にどのような中間言語の規則があり、アクセント付与はどの程度規則に従って行われるかは明らかでない。

本章では、経験量の異なる二つの学習者群を対象に、生成されるアクセント型はどの程度、どのように、拍数、品詞、発話環境に従って行われるかを検討し、さらに動詞に

⁵⁴ 本章でまた、英語を母語とする日本語学習者の略として「英語話者」を用いる。

については、生成されるアクセント型への付加語の影響も検定する⁵⁵。分析の結果、少なくとも本研究の対象である軽音節のみで構成される語については、生成されるアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測ができるほどの絶対的な中間言語規則はないことを示し、アクセント付与は複数の要因の競合によって決まるという可能性について論じる。

この主張は、英語母語話者および英語を学ぶ第二言語学習者のストレス生成についての以下の記述に基づく。英語では、名詞は第一音節に、長母音がある場合はその音節にストレスが置かれる傾向がある。英語話者による無意味語の生成において、これらの要因から予測されるストレスパターンが矛盾する場合には、第一音節にストレスが置かれるか、長母音のある音節に置かれるかは、場合によって異なる (Guion et al., 2003)。このことが意味することは、英語のストレスパターンは品詞や音節構造から予測されるのではなく、複数の要因の競合によって決まるということである。これは英語母語話者に限らず、英語を学ぶ第二言語学習者にも見られる傾向である (Guion et al., 2004 ; Guion, 2005 ; Wayland et al., 2006)。

本章では以下の二点を示す。第一に、生成されるアクセント型は、語の拍数と品詞、語が置かれた発話環境によって異なり、さらに動詞の場合には付加語によっても異なる

⁵⁵ 付加語に関しては、本来分析対象ではなかったが、生成されるアクセント型に影響を及ぼしていることが第5章の分析で示唆されたため、分析に加えることとした。

ということである。この結果から、アクセント付与はある程度中間言語の規則に従って行われることが分かる。第二に示す点は、各学習者群では、拍数、品詞、発話環境がすべて統一された資料語でも、様々なアクセント型が生成され、特定のアクセント型で生成される強い傾向はないということである。この結果が意味することは、英語話者には、生成されるアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測ができるほどの絶対的な中間言語規則がないということである。本章の考察の節では、この二点に基づき、英語話者では、生成されるアクセント型は複数の要因が競合した結果、決まるという点について論じる。

本章では、経験量の異なる二つの学習者群はいずれも、生成されるアクセント型に主に以下の傾向があることを示す。この傾向は、アクセント付与がある程度中間言語の規則に従って行われているために生じていると思われる。

- (1) 全体的には語末から二拍目にアクセント核を置く傾向がある
- (2) 三拍語では、語頭アクセントの割合は動詞、転成名詞、単純名詞の順に高くなる
- (3) 「雨」のような単独の語に比べ、「雨だ」のように後接語の付いた語は、無核で生成されにくく、三拍語では語中アクセントの傾向が強くなる
- (4) 動詞の場合、「ほど」に先行する動詞は「ので」に先行する動詞より、無核の割合が比較的高く、「ことができる」に先行する動詞は「のが好きだ」に先行する動詞より、無核の割合が比較的高く語末アクセントの割合が比較的低い

これらの傾向のうち、品詞に関する（２）と付加語に関する（４）については、標準語にも類似の傾向がある。本章ではこの結果に基づき、標準語にあるパターンの影響で、中間言語の規則が形成されることを主張する。第二言語学習者が目標言語にあるパターンを習得することができるということは、新しい発見ではない。例えば、英語には二音節名詞は第一音節に、二音節動詞は第二音節にストレスが置かれやすいというパターンがあるが、第３章でも見たように、英語を学ぶ第二言語学習者はこのパターンを習得できるということが知られている（Arciuli & Cupples、2003、2004；Davis & Kelly、1997；Guion et al.、2004；Guion、2005；Wayland et al.、2006）。一方、以上の傾向のうち、語末から二拍目にアクセント核を置くという（１）の傾向および発話環境の影響に関する（３）の傾向については、母語の影響の可能性について考察する。

本章では、以下の順に分析結果を報告していく。（a）拍数の影響として語末から二拍目にアクセント核が置かれる傾向、（b）拍数、品詞、発話環境がすべて統一してある資料語でも、特定のアクセント型で生成される強い傾向はないという結果、（c）品詞と付加語の影響として標準語にあるパターンが習得されている結果、（d）発話環境によるアクセント型のバリエーションである。

本章の分析対象となるデータ数は第５章と同様の 12802 語である。これは全調査語数のうちの 96% であるが、分析に使用できなかった語は、第５章で記述したように、読み上げのミスや判定の不一致などがあるものである。本章の分析項目によっては、分析対象データ全体ではなく、その一部を扱うことがあるが、その際には、データ数を限定する理由および用いるデータ数を述べる。

6-2 語末から二拍目にアクセント核を置く傾向

本節では、経験の少ない学習者群、経験の多い学習者群はいずれも、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向があるということを示す。

第3章で指摘したように、堀口（1973）と土岐（1980）では、英語話者は語末から二拍目にアクセント核を置く傾向があると述べられている。しかしながら、この傾向を裏付けるための分析はなされていない。データ分析をしている研究としては戸田（1999）と久野（1998）があるが、戸田（1999）は研究対象として外来語を扱っているため、語末から二拍目の過剰使用が他の語種にも見られるかは明確でない。久野（1998）によると、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向のある学習者もいるが、無核を多用する学習者や語末から三拍目にアクセント核を置きやすい学習者もいることを示している。

久野（1998）と同じように本研究でも、生成されるアクセント型には顕著な個人差がある。個人の傾向については第7章で詳しく記述するが、本節では、語末から二拍目にアクセント核が置かれた資料語の割合は、学習者によって7%～76%と大きく異なることを示す。以下では、個人差が多くあることを踏まえたうえで、二つの学習者群のそれぞれについて、資料語の半分近くが語末から二拍目にアクセント核が置かれて生成されていることを報告する。

表6-1は経験の少ない学習者群について、二拍と三拍の資料語がそれぞれ生成されたアクセント型の割合を示したものである。前節で述べたように、分析対象となるのは全

調査数のうちの 96%であるが、ここでは二拍語と三拍語のそれぞれについて、分析対象となるデータ数を 100%として、各アクセント型の割合を計算している。

表 6-1 経験の少ない学習者群によるアクセント付与の全体の傾向

	語頭	語中	語末	無核
二拍語	62% ⁵⁶		10% ※	28%
三拍語	16%	48%	5% ※※	31%

※ 語末アクセントが可能な語では、15%⁵⁷

※※ 語末アクセントが可能な語では、7%

表 6-1 から、最も多く生成されているアクセント型は、二拍語では語頭アクセント、三拍語では語中アクセントであることから、語末から二拍目にアクセント核が置かれる傾向があることが分かる。二拍語では、語頭アクセントは、二番目に多く生成されているアクセント型である無核に比べ、有意に多く生成されている ($\chi^2(1)=473.67, p<.01$)。三拍語では、語中アクセントは二番目に多く生成されている無核に比べ、有意に多く生成されている ($\chi^2(1)=142.63, p<.01$)。二拍語と三拍語を合わせたすべての資料語では、全体の 54%は語末から二拍目にアクセント核が置かれていることになる。

⁵⁶ 表では結果を整数に四捨五入している。以下同様。

⁵⁷ 資料語のうち語末アクセントが現れうる発話環境のもの（後接語の前、内容語の前）の語数に対して実際に語末アクセントで発話されたものの割合である。以下同様。この解釈については本文に述べる。

表 6-2 は経験の多い学習者群の生成について、二拍語と三拍語がそれぞれ生成されたアクセント型の割合を示したものである。表 6-2 から、経験の多い学習者群は経験の少ない学習者群と同様に、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向があることが分かる。二拍語では語頭アクセントが最も多く生成されており、二番目に多く生成されているアクセント型である無核に比べ、有意に多い ($\chi^2(1)=395.21, p<.01$)。三拍語では、語中アクセントが最も多く生成され、二番目に多く生成されている無核に比べ、有意に多い ($\chi^2(1)=105.55, p<.01$)。二拍語と三拍語を合わせたすべての資料語では、全体の 56% は語末から二拍目にアクセント核が置かれていることになる。

表 6-2 経験の多い学習者群によるアクセント付与の全体の傾向

	語頭	語中	語末	無核
二拍語	66%		8% ※	26%
三拍語	20%	46%	5% ※※	29%

※ 語末アクセントが可能な語では、11%

※※ 語末アクセントが可能な語では、7%

二つの学習者群では、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向は強い傾向ではない。上述したように、経験の少ない学習者群は全体の資料語の 54%、経験の多い学習者群は全体の資料語の 56%が語末から二拍目にアクセント核を置くアクセント型で生成されているが、この結果から、半分弱の資料語がそうでないアクセント型で生成されていることになる。

二つの学習者群が生成する各アクセント型の割合はほぼ同様である。表 6-1 と表 6-2 に示している各アクセント型の割合では、学習者群の間の差は、統計的に有意であっても 4%以下と小さい。具体的には以下の通りである。語頭アクセントでは、二拍語と三

拍語ではそれぞれ経験の多い学習者群が4ポイント高くなっており、いずれも有意な差である（二拍語では $\chi^2(1)=10.75, p<.01$ ；三拍語では $\chi^2(1)=21.86, p<.01$ ）。三拍語における語中アクセントでは、経験の少ない学習者群は1ポイント⁵⁸高くなっているが、有意な差ではない（ $\chi^2(1)=1.34, ns$ ）。語末アクセントでは、二拍語では経験の少ない学習者群が2ポイント高くなっており有意な差であるが（ $\chi^2(1)=10.01, p<.01$ ）、三拍語では同程度である（ $\chi^2(1)=0.4, ns$ ）。最後に無核では、二拍語では経験の少ない学習者群は2ポイント高くなっているが、有意な差ではない（ $\chi^2(1)=2.08, ns$ ）。三拍語では経験の少ない学習者群は3ポイント高くなっており有意な差である（ $\chi^2(1)=5.02, p<.05$ ）。ただし、各個人が生成するアクセント型の割合は第7章に報告するように大きな個人差を示している。

なお、表6-1にある経験の少ない学習者群の結果、表6-2にある経験の多い学習者群の結果は共通して、四つのアクセント型うち、語末アクセントの割合が最も低くなっている。ここでは、この原因が、語末アクセントが生成されない単独の語も資料語に含まれていることだけによるものではないということを記述しておく。参考までに、資料語のうち語末アクセントが現れうる発話環境（後接語の前、内容語の前）の語数に対して、

⁵⁸ 表6-1の48%と表6-2の46%の差が1ポイントであるとしているのは、誤りではなく、数字を四捨五入して表示しているものの、差の計算には元のデータを用いていることに原因がある。以下同様。

実際に語末アクセントで発話された割合を計算し、表 6-1 と表 6-2 のそれぞれの下に示しているが、低い割合には変わりがないことが分かる。

本節では、二つの学習者群が互いに類似し、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向があることを示した。この結果についての考察は本章の考察の節にゆずり、以下では、生成されるアクセント型はどの程度どのように資料語のタイプによって異なるかを検討していく。

6-3 アクセント付与における予測性の程度

本節では、生成される語の音節構造と拍数、語の品詞、語が置かれた発話環境がすべて統一された資料語でも、英語話者である調査参加者は複数のアクセント型で生成し、特定のアクセント型で生成する強い傾向を示さないということを述べる。この結果は、アクセント付与が中間言語の規則に従って行われる可能性を否定するものではないと思われるが、中間言語規則は、どのような語がどのアクセント型で生成されるかがこれらの要因から予測できるほどの絶対的なものではないことを意味すると考えられる。

本章のはじめに述べたように、英語話者が生成するアクセント型は音節構造、品詞、発話環境の諸要因に影響されるという可能性が先行研究からうかがえる（堀口、1973；磯村、1996；久野、1998；Shport、2008；戸田、1999；Taylor、2008、2012；土岐、1980；山田、1994a、b）。しかしながら、これらの研究では、アクセント付与がどの程度中間言語の規則に従って行われるかについては議論されていない。一方英語のストレス習得研究では、第二言語学習者が生成するストレスパターンは音節構造や品詞に基づく規則

に従って決定されると論じているものも (Pater, 1997 ; Archibald, 1992, 1993) 、生成されるストレスパターンは複数の要因の競合によって決まると論じているもの (Guion et al., 2004 ; Guion, 2005 ; Wayland et al., 2006) もある。本節では、後者の方が英語話者のアクセント生成に当てはまるのではないかという点について論じる。

英語話者が生成するアクセント型は、音節構造、拍数、品詞、発話環境の諸要因に基づく中間言語の規則に従って決まると仮定し、さらに他に影響する要因がないと仮定した場合には、これらの要因をすべて統一したときには、どの語も同じアクセント型で生成されることが予測される。本節では、生成されるアクセント型に影響すると言われている要因である音節構造、拍数、品詞、発話環境をすべて統一しても、複数のアクセント型が生成されることを示す。なお、音節構造については、軽音節のみで構成される語に限定している⁵⁹。

⁵⁹ ただし、本論文の序論でも述べたように、語頭子音の有無は資料語による。語頭子音の有無は、標準語のアクセント付与規則にも、英語のストレス付与規則にも、影響しないと言われている。

図 6-1 と図 6-2 は経験の少ない学習者群、経験の多い学習者群のそれぞれについて、各資料語のタイプが生成されたアクセント型を示しているものである⁶⁰、⁶¹。調査資料語については第 4 章で詳しく述べているが、拍数については二拍と三拍の二種類、品詞については名詞、動詞、転成名詞の三種類、発話環境については単独、後接語の前、内容語の前の三種類を対象とし、各資料語のタイプはこれらの要因が統一されている。

図 6-1 と図 6-2 から、生成されるアクセント型は資料語のタイプによって異なることが分かる。具体的にどのように異なるかは、次節以降の分析対象とする。本節において重要なのは、各資料語のタイプで、複数のアクセント型が生成されている点である。

⁶⁰ 図 6-1 と図 6-2 に示している結果は、第 5 章を通して示した結果をまとめたものである。本章は第 5 章と同じデータを対象とするが、異なる観点から分析する。

⁶¹ 図では結果を整数に四捨五入している。

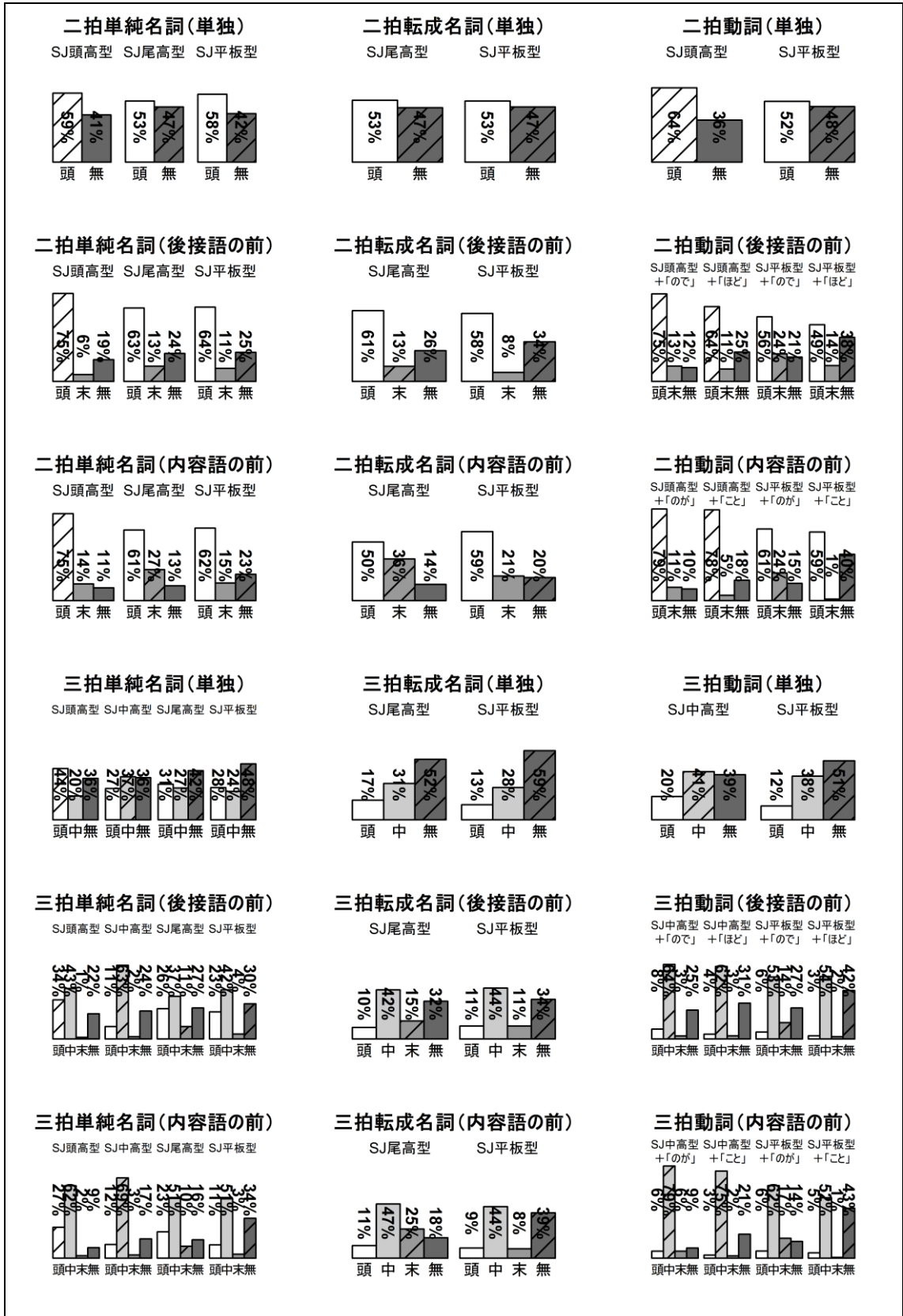


図 6-1 経験の少ない学習者群が生成したアクセント型

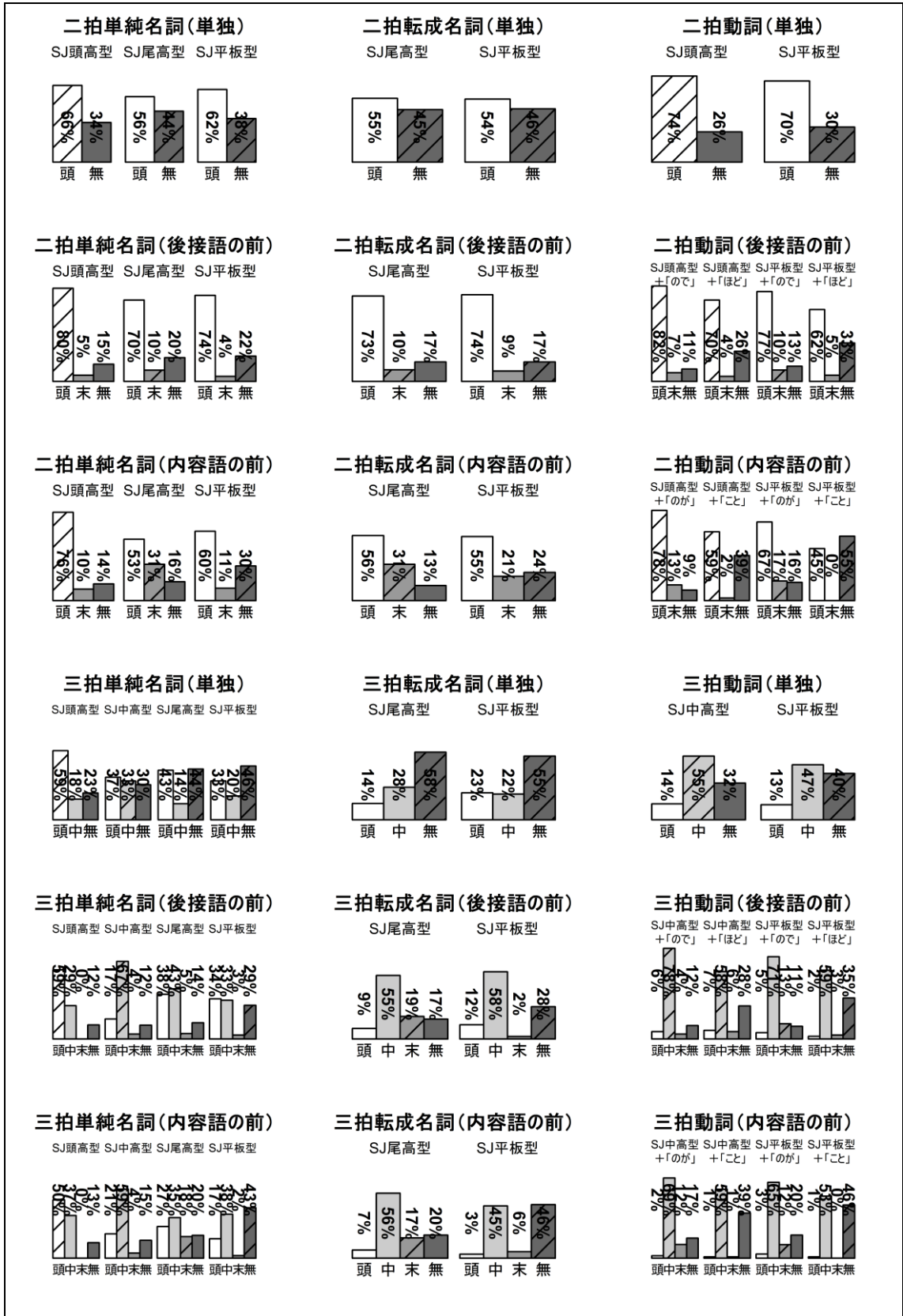


図 6-2 経験の多い学習者群が生成したアクセント型

表 6-3 資料語のタイプ別に最も多く生成されたアクセント型

資料語のタイプ	最も多く生成されたアクセント型	
	経験の少ない学習者群	経験の多い学習者群
二拍単純名詞（単独）	語頭(57%)	語頭(62%)
二拍単純名詞（後接語の前）	語頭(67%)	語頭(75%)
二拍単純名詞（内容語の前）	語頭(66%)	語頭(63%)
二拍転成名詞（単独）	語頭(53%)=無核(47%)	語頭(54%)=無核(46%)
二拍転成名詞（後接語の前）	語頭(60%)	語頭(74%)
二拍転成名詞（内容語の前）	語頭(55%)	語頭(55%)
二拍動詞（単独）	語頭(58%)	語頭(72%)
二拍動詞（後接語の前）	語頭(61%)	語頭(73%)
二拍動詞（内容語の前）	語頭(69%)	語頭(62%)
三拍単純名詞（単独）	無核(41%)	語頭(43%)=無核(36%)
三拍単純名詞（後接語の前）	語中(46%)	語中(43%)=語頭(37%)
三拍単純名詞（内容語の前）	語中(58%)	語中(42%)
三拍転成名詞（単独）	無核(56%)	無核(56%)
三拍転成名詞（後接語の前）	語中(43%)=無核(33%)	語中(56%)
三拍転成名詞（内容語の前）	語中(45%)	語中(50%)
三拍動詞（単独）	無核(45%)=語中(39%)	語中(51%)
三拍動詞（後接語の前）	語中(58%)	語中(66%)
三拍動詞（内容語の前）	語中(67%)	語中(62%)

「=」：一番目と二番目に多いアクセント型の間には有意差がないもの

下線：語末から二拍目のアクセント核以外のアクセント型

図 6-1、図 6-2 の結果を各資料語のタイプそれぞれについて、最も多く生成されたアクセント型の割合として表 6-3 に示す。表 6-3 から、最も多く生成されているアクセント型でも、経験の少ない学習者群では資料語のタイプによって 41%～69%、経験の多い学習者群では 42%～75% で生成されていることが分かる。この結果について、各資料語のタイプがある特定のアクセント型で生成される強い傾向はないと解釈する。なお、表 6-3 では、最も多く生成されたアクセント型と二番目に多いアクセント型の間に有意な差がない場合は、その両方を示している。

一つの資料語のタイプに統一しても、様々なアクセント型が生成され、ある特定のアクセント型で生成される強い傾向がないという結果の背景には、音節構造、拍数、品詞、発話環境以外に、生成されるアクセント型に影響する要因が他にもあるという可能性を示していると思われる。本章の 6-4-3 節に示すように、動詞に関しては、当初分析対象としていなかった付加語の影響もあることが分かっている。その他にも、語頭子音の有無、子音の有声性、母音の開口度など、他に影響する可能性のある要因も挙げられる。しかしながら、本節の分析結果から、次のことがいえると思われる。英語話者が生成するアクセント型は、少なくとも軽音節のみで構成された語については、拍数、品詞、発話環境に基づいた、単純かつ絶対的な中間言語規則に従って決められることはないということである。

図 6-1 と図 6-2 の結果について、生成されるアクセント型は資料語のタイプによって異なることをすでに指摘している。これは表 6-3 から確認できる。ほとんどの資料語のタイプでは、最も多く生成されているアクセント型は語末から二拍目にアクセント核が置かれたものであるが、そうでない資料語のタイプもある。表 6-3 では、これらのアクセント型には下線を引いている。この特徴は三拍語に集中しているが、無核が最も多

く生成されている資料語のタイプや、経験の多い学習者群にのみ、語頭アクセントが他のアクセント型と同程度に多い資料語のタイプもある。さらに、最も多く生成されているアクセント型が語末から二拍目のアクセント核でも、その割合は資料語のタイプによって異なる。

これらの違いが意味することは、生成されるアクセント型は品詞、拍数、発話環境によって影響されるということであると思われる。これ以降では、これらの要因の影響、さらに動詞の場合には付加語の影響も検討していく。

6-4 統計的なパターンの習得

6-4-1 はじめに

本節では、生成されるアクセント型は、品詞と付加語によって異なるということを示し、標準語にも類似しているパターンがあることを示す。この結果に基づき、標準語にあるパターンはある程度習得され、その影響で品詞と付加語に基づいた中間言語規則が形成されたのではないかという点について論じる。

第3章でも述べたように、目標言語にあるパターンが第二言語学習者によって習得できることが知られている。二音節名詞は第一音節に、二音節動詞は第二音節にストレスが置かれやすいという英語のパターンについての知識は第二言語学習者に習得され（Davis & Kelly、1997；Arciuli & Cupples、2003、2004）、無意味語のストレス付与にはその傾向が現れる（Guion et al.、2004；Guion、2005；Wayland et al.、2006）。本研

究では有意味語を対象としているが、英語話者の生成では、標準語にあるパターンの影響が生成されるアクセント型に現れていると考えられる。

6-4-2 品詞の影響

本節では、生成されるアクセント型は語の品詞に影響されることを示す。具体的には、三拍語では語頭アクセントの割合は動詞、転成名詞、単純名詞の順に高くなっていき、転成名詞は他の品詞より、語末アクセント型が比較的現れやすいという傾向がうかがえる。これらの傾向については、以下に示すように、標準語にも類似したパターンが存在する。この結果に基づき、標準語にあるパターンの影響により、中間言語の規則が形成されている可能性について論じる。

本節に報告する傾向のうち、三拍語における語頭アクセントの現れ方に関する傾向については、類似の傾向が Taylor (2012)⁶²により調査されている英語話者の生成にも報告されている。Taylor (2012) では、対象としている資料語数も人数も限られているため、英語話者の傾向としては確定的ではなかったが、本節では、本調査の対象者の生成にも、類似している傾向があることを示す。

⁶² Taylor (2012) は Taylor (2008) のデータに基づき分析している。

第3章で述べたように、Taylor (2012) では品詞に関する傾向をもう一点報告している。具体的には、名詞は動詞に比べ無核で生成されやすいという傾向であるが、本研究では、この傾向は観察されなかった。

本節で報告する分析は、調査資料語全体ではなく、標準語のアクセント型が無核である資料語のみを対象として行う。その理由は以下の通りである。分析の目的は、語の品詞に基づく中間言語規則の有無を検討することである。しかしながら、標準語のアクセント型が、例えば語頭アクセントの単純名詞と無核の動詞のように、異なる語について異なるアクセント型で生成されることが観察されても、品詞が異なることに原因があるのか、標準語のアクセント型が異なるために生じたのかは分からない。したがって本節では、標準語における異なるアクセント型からの直接的な影響を避けるために、標準語のアクセント型が無核である語のみに限定することとする。なお、標準語のアクセント型が無核である資料語のみに限定することで避けたいのは、標準語における異なるアクセント型からの直接的な影響のみで、標準語の影響をまったく無視するわけではない。むしろ、分析対象である単純名詞、転成名詞と動詞に見られる傾向の違いから、標準語にあるパターンがある程度習得されていると主張したい。

用いるアクセント型を無核にするもう一つの理由は、6-3節の図 6-1 と図 6-2 から確認できるように、対象としているどの資料語のタイプにも、無核の資料語があるためである。無核にすることで、各資料語のタイプから、12語の資料語が対象となる。なお、単独の発話環境では、尾高型でも無核で生成されるが、数を統一するために、平板型の語のみを対象とする。

すべての資料語のタイプの比較が可能であるのは標準語のアクセント型が無核の資料語みであるが、無核の資料語だけを対象としても、結果の妥当性に影響があるとは思えない。なぜなら、ここで調べようとしていることは、各品詞がどのように生成されるかではなく、品詞間にある傾向の違いだからである。さらに、生成されるアクセント型は、標準語のアクセント型にはそれほど影響されないことが第5章で明らかになっているので、他のアクセント型の資料語にも無核とは類似の傾向が予測される。本節では、6-3節の図6-1と図6-2に示しているすべての資料語のタイプの結果も参考にし、他のアクセント型の資料語にも無核の資料語と類似の傾向が現れていることを示す。

表6-4と表6-5は経験の少ない学習者群と経験の多い学習者群のそれぞれについて、単純名詞、転成名詞、動詞が生成されたアクセント型を、カイ二乗分布による独立性の検定を用い比較しているものである。検定の結果は表に示しているが、各学習者群の各

拍数では、有意となっている。この結果が意味することは、生成されるアクセント型は品詞によって異なるということである⁶³。

表 6-4 と表 6-5 について、どの項目が有意差に最も大きく貢献しているかを調べるために残差分析を行う。残差が大きいほどその貢献が大きいことが分かる。本節では残差が 2 以上の項目について有意差に大きく貢献していると判断し⁶⁴、表ではこれらの項目に「*」を付ける。

⁶³ 単純名詞、転成名詞、動詞という三つの語群を比較しているが、各語群には、単独、後接語の前、内容語の前という三つの発話環境の語が含まれている。しかしながら、観察されている有意差の原因は、分析対象の品詞ではなく、発話環境にあるという恐れはないと思われる。なぜなら、各品詞では、それぞれの発話環境の語がほぼ均等となっているためである。具体的には、各学習者群の各拍数の各品詞の資料語では、それぞれの発話環境が占める割合は低くて 32.1%、高くて 34.7% である。三分の一から若干ずれているのは、6-1 節に述べたように、分析対象の語の数は、読み上げのミスなどにより、全体の録音資料のうちの 96% であることに原因があるが、三分の一からのずれが小さいため、結果には影響を与えないと思われる。

⁶⁴ 残差は標準分布（平均 0；標準偏差は 1）に従うので、残差が 2（より正確には 1.96）の場合には 0.05 の p 値にあたる。

規則によるアクセント付与

表 6-4 品詞によるアクセント付与の傾向
—経験の少ない学習者群—

語頭	語中	語末	無核
----	----	----	----

二拍語 : n=1353, $\chi^2(4)=19.19, p<.01$

単純名詞	61%		9%	30%
転成名詞	57%		9%	34%
動詞	53%		*5%	*42%

三拍語 : n=1346, $\chi^2(6)=69.1, p<.01$

単純名詞	*21%	39%	2%	38%
転成名詞	11%	38%	*6%	44%
動詞	*6%	48%	*1%	45%

表 6-5 品詞によるアクセント付与の傾向
—経験の多い学習者群—

語頭	語中	語末	無核
----	----	----	----

二拍語 : n=843, $\chi^2(4)=23.22, p<.01$

単純名詞	65%		5%	30%
転成名詞	61%		*10%	29%
動詞	59%		*2%	39%

三拍語 : n=820, $\chi^2(6)=65.69, p<.01$

単純名詞	*28%	*30%	2%	40%
転成名詞	13%	41%	3%	43%
動詞	*5%	53%	1%	40%

残差分析の結果から以下のことが分かる。まず、表 6-4 に示している経験の少ない学習者群については、二拍語では、動詞は単純名詞と転成名詞に比べ、語末アクセントの割合が低く、無核の割合が高くなっている。三拍語では、語頭アクセントの割合は単純名詞では高く、動詞では低く、転成名詞では中間であり、語末アクセントの割合は転成名詞では高く、動詞では低く、単純名詞では中間である。次に、表 6-5 に示している経験の多い学習者群については、二拍語では、語末アクセントの割合は転成名詞では高く、動詞では低く、単純名詞ではその中間である。三拍語では、語頭アクセントの割合は経験の少ない学習者群と同じで、単純名詞では高く、動詞では低く、転成名詞ではその中間であり、語中アクセントの割合は単純名詞が転成名詞と動詞に比べ低くなっている。

以上述べた表 6-4 と表 6-5 の結果から、二つの学習者群は共通して、三拍語における語頭アクセントの割合は、動詞、転成名詞、単純名詞の順に高くなっていく傾向があることが分かる。この結果は、Taylor (2012) で報告した傾向とはほぼ同様である。Taylor (2012) では、三拍の動詞および動詞からの転成名詞に比べ、単純名詞は、語頭にアクセント核が置かれやすいという傾向を報告している。本研究の結果は、動詞における語頭アクセントの割合が転成名詞よりさらに低くなっている点では Taylor (2012) とは異なるが、単純名詞が品詞の中で最も語頭にアクセント核が置かれやすい品詞であるという点では同様である。

三拍の単純名詞が他の品詞より語頭にアクセント核が置かれやすいという傾向は、標準語にもあるパターンである。第 2 章で述べたように、標準語の三拍語では、動詞および転成名詞には語頭アクセントは例外的にしか現れないが、単純名詞はどの拍でもアクセント核を持ちうる。表 6-4 と表 6-5 に示している資料語は、標準語のアクセント型がすべて無核のものであるため、この傾向は標準語における異なるアクセント型からの直

接的な影響によるものではない。標準語にあるパターンの影響で中間言語の規則が形成され、その規則の影響が生成に現れたと考えられる。

表 6-4 と表 6-5 の資料語は標準語のアクセント型が無核である資料語のみであるが、三拍の単純名詞に語頭アクセントが比較的置かれやすいのは、無核の語に限られた傾向ではない。6-3 節の図 6-1 と図 6-2 から、いずれの学習者群も、標準語の他のアクセント型の資料語にも、同じ傾向が現れていることが確認できる。ただし、この場合には、標準語における異なるアクセント型からの直接的な影響も関わっているため、中間言語の規則の影響だけではない。

以上の三拍語に関する傾向の他、表 6-4 と表 6-5 の結果から、転成名詞は語末にアクセント核が比較的置かれやすいという傾向もうかがえる。転成名詞は標準語では原則として語末アクセントか無核かのいずれかであるため、これも標準語にあるパターンを反映している可能性があるが、経験の少ない学習者群では三拍語のみ、経験の多い学習者群では二拍語のみに現れている。

Taylor (2012) では、名詞は無核に、動詞は有核に生成されるという傾向があったが、本研究ではこの傾向は観察されなかった。むしろ、二拍語では動詞は名詞より無核で生成されやすいという逆の傾向が観察された。有意差があったのは経験の少ない学習者群のみであるが、経験の多い学習者群にも、同様の傾向がうかがえた。

以上の分析から、次の三つの結果が得られた。(1) 三拍語では語頭アクセントの割合が動詞、転成名詞、単純名詞の順に高くなっていくこと、(2) 転成名詞では、単純名詞と動詞より、語末アクセント型が比較的置かれやすい傾向がうかがえたこと、(3)

二拍語では、動詞は名詞より無核で生成されやすいことである。しかしながら、これらのうち（２）、（３）は安定した傾向ではなかった。最も安定した傾向である（１）の三拍語における語頭アクセントの現れ方に関しては、標準語にも類似の傾向が存在する。このことから、標準語にあるパターンの影響により、中間言語の規則が形成されているのではないかと考えられる。

6-4-3 付加語の影響

本節では、動詞を対象にした分析の結果として、生成されるアクセント型は付加語によって異なるということを示す。具体的には、傾向の現れ方は二つの学習者群で多少異なるが、全体的には、「ほど」に先行する動詞は「ので」に先行する動詞より無核で生成されやすく、「ことができる」に先行する動詞は「のが好きだ」に先行する動詞より無核の割合が高く、語末アクセントの割合が低い傾向がある。これらの傾向については、以下に示すように、標準語にも類似したパターンが存在する。この結果に基づき、標準語にあるパターンの影響で、中間言語の規則が形成されているのではないかと考えられる。

本調査では、動詞に付加させる語として、後接語の前では、「ので」と「ほど」の二種類、内容語の前では「のが好きだ」と「ことができる」の二種類を用いている。動詞に付加させる語をこれらの発話環境でそれぞれ二種類用いているのは、第４章で述べたように、標準語に存在する全種類のアクセント型が資料語にあるようにしたためである。しかしながら、第５章の分析ですでに示唆されているように、付加語によって生成されるアクセント型が異なる傾向がある。本節では、生成されるアクセント型は、付加語によって具体的にどのように異なるかを検討する。

本節の分析は、調査資料語全体ではなく、標準語のアクセント型が語末から二拍目にアクセント核のある資料語のみを対象として行う。標準語のアクセント型を一つに限定する理由は、6-4-2 節にある品詞の分析と同じように、標準語における異なるアクセント型からの直接的な影響を避けるためである。語末から二拍目を選ぶのは、「ので」、「ほど」、「のが好きだ」、「ことができる」に先行するすべての動詞に、語末から二拍目にアクセント核が置かれるものが資料語にあるためである。

表 6-6 は、後接語の前の動詞について、「ので」と「ほど」の後接語によって生成されたアクセント型を、カイ二乗分布による独立性の検定を用い比較しているものである。表 6-6 に示している独立性の検定の結果から、経験の少ない学習者群による二拍語、ならびに、経験の多い学習者群による二拍語と三拍語では、付加語による有意な差があり、生成されるアクセント型は付加語によって異なるということが分かる。一方、経験の少ない学習者群による三拍語では有意差がなく、生成されるアクセント型は付加語によって影響されないことが分かる。

付加語によって生成されるアクセント型が有意に異なるという結果が見られた場合、残差分析を行い、どの項目がその違いに最も大きく貢献しているかを調べる。表 6-6 の結果には、残差が 2 以上の項目がないため、残差が 1.5 以上の項目が有意差に最も大きく貢献していると判断する。表ではこれらの項目に「*」を付ける。

表 6-6 付加語によるアクセント付与の傾向
—後接語の前の場合—

語頭	語中	語末	無核
----	----	----	----

経験の少ない学習者群

二拍語 : n=304、 $\chi^2(2)=9.1, p<.05$

「ので」	75%		13%	*12%
「ほど」	64%		11%	*25%

三拍語 : n=299、 $\chi^2(3)=3.27, ns$

「ので」	8%	64%	3%	25%
「ほど」	4%	62%	3%	31%

経験の多い学習者群

二拍語 : n=187、 $\chi^2(2)=7.59, p<.05$

「ので」	82%		7%	*11%
「ほど」	70%		4%	*26%

三拍語 : n=190、 $\chi^2(3)=10.01, p<.05$

「ので」	6%	78%	4%	*12%
「ほど」	7%	58%	6%	*28%

残差分析の結果から、以下のことが分かる。経験の少ない学習者群による二拍語では、無核の割合が「ほど」のほうが「ので」より高くなっている。経験の多い学習者群では、二拍語と三拍語はいずれも、「ほど」は「ので」より無核の割合が高くなっている。これらの資料語はすべて標準語では語末から二拍目にアクセント核があるものであるが、調査参加者の生成では、「ほど」に先行する動詞は「ので」に先行する動詞に比べ、無核で生成されやすい傾向があることになる。

標準語にも、この傾向と類似しているパターンが存在する。第2章と第4章で見たように、標準語では「ほど」の前の動詞は語末から二拍目にアクセント核を持つか無核のいずれか、「ので」の前の動詞は語末から二拍目にアクセント核を持つか語末アクセントのいずれかのアクセント型が原則である。調査参加者の生成では、「ほど」と「ので」の間で語末アクセントの割合には差がなかったが、「ほど」に先行する動詞が「ので」に先行する動詞より無核で生成されやすい結果は、標準語にあるパターンと同じである。

表6-7は、内容語の前の動詞について、「のが好きだ」と「ことができる」の付加語によって生成されたアクセント型を、カイ二乗分布による独立性の検定を用い比較しているものである。表6-7に示している独立性の検定の結果から、学習者群、拍数を問わず、付加語による有意な差があり、生成されるアクセント型は付加語によって異なるということが分かる。

付加語によって生成されるアクセント型が有意に異なる結果が見られた場合、残差分析を行い、どの項目がその違いに最も大きく貢献しているかを調べる。ここでも残差が2以上の項目がないため、残差が1.5以上の項目が有意差に最も大きく貢献していると判断する。表ではこれらの項目に「*」を付ける。

表 6-7 付加語によるアクセント付与の傾向
—内容語の前の場合—

語頭	語中	語末	無核
----	----	----	----

経験の少ない学習者群

二拍語：n=295、 $\chi^2(2)=7.44, p<.05$

「のが好きだ」	79%		*11%	10%
「ことができる」	78%		5%	18%

三拍語：n=300、 $\chi^2(3)=12.38, p<.01$

「のが好きだ」	6%	79%	6%	*9%
「ことができる」	3%	75%	2%	*21%

経験の多い学習者群

二拍語：n=182、 $\chi^2(2)=26.47, p<.01$

「のが好きだ」	78%		*13%	*9%
「ことができる」	59%		*2%	*39%

三拍語：n=186、 $\chi^2(3)=17.04, p<.01$

「のが好きだ」	2%	69%	*12%	*17%
「ことができる」	1%	59%	*1%	*39%

残差分析の結果から分かるのは以下のことである。まず、表 6-7 の下部にある経験の多い学習者群の結果であるが、二拍語と三拍語はいずれも、語末アクセントの割合は「のが好きだ」で比較的高く、無核の割合は「ことができる」で比較的高くなっている。表 6-7 の上部にある経験の少ない学習者群は類似の傾向を示しているが、その現れ方は拍数によって異なる。二拍語では、語末アクセントの割合は「のが好きだ」のほうが「ことができる」より高くなっている。三拍語では、無核の割合は「ことができる」が「のが好きだ」より高くなっている。しかたがって、経験の少ない学習者群の傾向は、経験の多い学習者群ほどはっきりしたものではない。しかしながら全体の傾向としては、「ことができる」は「のが好きだ」より無核の割合が高く、語末アクセントの割合が低くなっている。これらの資料語はすべて標準語では語末から二拍目にアクセント核があるものであるが、調査参加者の生成では、生成されるアクセント型はこのように付加語によって異なっている。

標準語にも、この傾向とは類似のパターンが存在する。第2章と第4章で見たように、標準語では「ことができる」の前の動詞は語末から二拍目にアクセント核を持つか無核のいずれかで、「のが好きだ」の前の動詞は語末から二拍目にアクセント核を持つか語末アクセントのいずれかのアクセント型が原則である。調査参加者の生成に見られた傾向は、標準語にあるパターンを反映している。

以上、後接語の前の動詞のうち、「ほど」に先行するものは「ので」に先行するものに比べ無核で生成されやすく、内容語の前の動詞のうち、「ことができる」に先行するものは「のが好きだ」に先行するものより、無核で生成されやすく語末アクセントで生成されにくい傾向があるということを示した。これらの傾向は標準語にも類似のパター

ンが存在する。この結果から、標準語にあるパターンの影響で、中間言語の規則が形成されていると考えられる。

6-4-4 まとめ

本節では、生成されるアクセント型は、品詞と付加語に基づく標準語のパターンを反映していることを示した。この結果から、標準語にあるパターンがある程度習得され、その影響で品詞と付加語に基づいた中間言語規則が形成されていると考えられる。

6-5 発話環境によるバリエーション

6-5-1 はじめに

第3章で述べたように、一つの発話環境に置かれていれば、どの語も同じピッチパターンで生成されることが、韓国語母語話者（宇都木、2004）、英語を含む様々な母語話者（磯村、1996）にあると先行研究で報告されている。対象者に英語話者が含まれる磯村（1996）では、「です」の前では有核、疑問環境では無核の傾向があると示されている。この場合、ピッチ付与は語レベルではなく、句レベルで行われていることになる。

本調査では、第4章に詳しく述べているように、「雨」のような単独の資料語、「雨だ」のように後接語の付いた場合の資料語、「雨が降る」のように後接語と内容語の付いた場合の資料語を対象としている。本節では、同じ資料語が同じ学習者によってこれらの三つの発話環境において生成されたアクセント型を分析する。その結果、生成され

るアクセント型は発話環境によって異なりやすい傾向があるということを示す。具体的には、資料語の約三分の二が、三つの発話環境では、アクセント型を少なくとも一度は変えている。第2章で述べたように、標準語では語のアクセント型は発話環境を問わず原則として維持される傾向があるが、本節で示すように、英語話者では、生成されるアクセント型は不安定である。

しかしながら、アクセント型の不安定性の背景には、発話環境に基づく句レベルの強い中間言語規則があるわけではないと考えられる。本節では、生成されるアクセント型は発話環境によってある程度影響されるということを示すが、特定の発話環境であれば特定のアクセント型で生成されるという強い傾向ではない。以下では、発話環境の影響、アクセント型の不安定性という順に結果を報告していく。

6-5-2 発話環境の影響

本節では、生成されるアクセント型は発話環境によって影響されるということを示す。この結果に基づき、発話環境に基づいた中間言語規則があることを指摘する。ただし、これらの傾向は、学習者群と拍数によって多少異なり、統計的には有意であるものの、強い傾向ではない。

第3章で述べているように、英語話者による日本語のアクセント生成を扱っている先行研究では、生成されるアクセント型は発話環境に左右されやすいことが指摘されている（土岐、1980 など）。しかしながら、疑問環境では無核の傾向があることを示している磯村（1996）以外には、どのような発話環境であれば、どのアクセント型が生成されやすいかを調査している研究は管見の限りないようである。

Taylor (2012)⁶⁵および山田 (1994a, b) は、発話環境の影響を調査することを主な目的とはしていないが、発話環境と関係のある結果を報告している。本節の結果は、これらの先行研究の結果とは、以下のように関係している。

まず、Taylor (2012) は、第3章で詳しく述べたように、単独の語と、後接語の付いた語とでは、アクセント型が異なる傾向があることを指摘している。しかしながら、対象としている語は標準語でもアクセント型が変化する語末アクセントの語であるため、この傾向が語末アクセントの誤った実現であるのか、付加語の影響によるものなのかは明らかになっていない。本節では、標準語ではアクセント型の変化がない無核の語でも、学習者の生成では、後接語の有無によって生成されるアクセント型が異なる傾向があるということを示す。

次に、山田 (1994a, b) では、語（もしくは文節）が連続するとき、その一つ目が無核で生成されやすいという傾向が示唆されている。連続している語（もしくは文節）の一つ目が無核になるピッチパターンについて、山田 (1999, p.60) は複合名詞や、無核語と有核語が連なったアクセント句（例えば「甘い料理」など）の標準語のパターンからの過剰般化によるのではないかと述べている。しかしながら、山田 (1994a, b) で報告されているデータでは、他の発話環境に比べ、その発話環境が英語話者の生成にお

⁶⁵ Taylor (2012) は Taylor (2008) のデータに基づき分析している。

いて特に無核で生成されやすいかどうかは明確ではない。本節では、英語話者にはこのような傾向がない、もしくはあるとしても一定した傾向ではないということを示す。

本節の分析方法は以下の通りである。「雨」のような単独の語、「雨だ」のように後接語の付いた語、「雨が降る」のように後接語と二つ目の内容語の付いた語がそれぞれ生成されるアクセント型を比較し、発話環境の影響を検討する。標準語のアクセント型からの直接的な影響による傾向の違いを避けるために、標準語のアクセント型が無核である語のみを対象に分析する。比較に用いるのは、カイ二乗分布を使った独立性の検定である。発話環境によって生成されるアクセント型が有意に異なる結果が見られた場合、残差分析を行い、どの項目が有意差に最も大きく貢献しているかを調べる。残差が2以上の項目については、有意差に大きく貢献していると判断する。

表 6-8 と表 6-9 は経験の少ない学習者群と経験の多い学習者群のそれぞれについて、単独、後接語の前、内容語の前の三つの発話環境に置かれた資料語がそれぞれ生成されたアクセント型を、カイ二乗分布による独立性の検定を用い比較しているものである⁶⁶。検定の結果、表 6-8 と表 6-9 に示す通り各学習者群の各拍数で有意となっている。この

⁶⁶ 表 6-8 と表 6-9 では、語末アクセントの割合は単独では0となっているが、これは、後接語がない場合には語末アクセントは標準語のアクセント型としては存在しないためである。

結果が意味することは、生成されるアクセント型は発話環境によって異なるということである⁶⁷。

⁶⁷ 単独、後接語の前、内容語の前という三つの語群を比較しているが、各語群には、単純名詞、転成名詞、動詞という三つの品詞の語が含まれている。しかしながら、観察されている有意差の原因は、分析対象である発話環境ではなく、品詞にあるという可能性はないと思われる。なぜなら、各発話環境では、それぞれの品詞の語はほぼ均等となっているためである。具体的には、各学習者群の各拍数の各発話環境の資料語では、それぞれの品詞が占める割合は低くて 32.4%、高くて 34.3%である。

規則によるアクセント付与

表 6-8 発話環境によるアクセント付与の傾向
—経験の少ない学習者群—

語頭	語中	語末	無核
----	----	----	----

二拍語 : n=1353, $\chi^2(4)=78.85, p<.01$

単独	54%		*0%	*46%
後接語の前	57%		*11%	32%
内容語の前	60%		*12%	*27%

三拍語 : n=1346, $\chi^2(6)=81.88, p<.01$

単独	*17%	*30%	*0%	*53%
後接語の前	12%	47%	*6%	*35%
内容語の前	*8%	*49%	4%	39%

表 6-9 発話環境によるアクセント付与の傾向
—経験の多い学習者群—

語頭	語中	語末	無核
----	----	----	----

二拍語 : n=843, $\chi^2(4)=44.92, p<.01$

単独	62%		*0%	38%
後接語の前	70%		6%	*24%
内容語の前	53%		*10%	37%

三拍語 : n=820, $\chi^2(6)=56.41, p<.01$

単独	*23%	*30%	*0%	47%
後接語の前	16%	*50%	3%	*31%
内容語の前	*7%	45%	3%	45%

以下では、表 6-8 と表 6-9 の残差分析から分かることを、単独と後接語の前の比較、単独と内容語の前の比較、後接語と内容語の前の比較を通し順に述べていく。

まず、表 6-8 と表 6-9 の残差分析の結果を元に、単独と後接語の前のそれぞれの発話環境で生成されたアクセント型を比較する。二つの学習者群は共通した傾向を示している。二拍語では、後接語の前は単独に比べ無核の割合が低く、語末アクセントが現れている。本節の対象語は標準語のアクセント型が無核のものであるが、無核の割合が低くなり語末アクセントが現れるのは、標準語における語末アクセントの語と同様の傾向である。三拍語では、後接語の前は単独に比べ無核の割合が低くなり語末アクセントが現れるだけでなく、語頭アクセントの割合が低く、語中アクセントの割合が高くなっている。つまり三拍語は、後接語の付加によって語中アクセントの傾向が強くなる。

生成されるアクセント型が単独と後接語の前とで異なるという傾向は Taylor (2012) でも報告されている。しかしながら、Taylor (2012) が対象としている資料語は標準語のアクセント型が語末アクセントであったため、傾向の違いが語末アクセントの誤った実現であるのか、付加語の影響によるものなのかは明らかではなかった。本研究の結果から、標準語のアクセント型が無核の語でも、単独と後接語の前とでは生成されるアクセント型の傾向が異なることが明らかになった。

しかしながら、その詳細は Taylor (2012) とは異なる。Taylor (2012) は、二拍語では語頭アクセントの割合が後接語の付加によって高くなる傾向を報告している。一方、本研究では、三拍語は後接語の付加によって語中アクセントの割合が高くなっている。語末から二拍目のアクセント核で生成される傾向が後接語の付加によって強くなると

いう点では、類似している傾向ではあるが、その現れ方は調査によって異なっているため、英語話者の傾向として一定した傾向であるとはいえない。

次に、表 6-8 と表 6-9 の残差分析の結果を元に、単独と内容語の前のそれぞれの環境で生成されたアクセント型を比較する。二つの学習者群は異なる傾向を示している。経験の少ない学習者群の場合、上述した単独と後接語の前の比較と同様に、内容語の前の二拍語は単独の語に比べ無核の割合が低くなる。三拍語では、語頭アクセントの割合は低くなり無核と語中アクセントの割合は高くなる。一方経験の多い学習者群では、単独と内容語の前とでは無核における差がなく、二拍語では語末アクセントのみが現れる。三拍語では、無核の割合に差がない点は経験の少ない学習者群とは異なるが、語頭アクセントの割合が低く、語中アクセントの割合が高くなる点では、経験の少ない学習者群と同様の傾向を示している。このように傾向が拍数と学習者群によって異なり、一定した傾向にはなっていないといえる。

山田 (1994a, b) では、語（もしくは文節）が連続するとき、その一つ目が無核で生成されやすい可能性が示唆されているが、本節の結果から、単独の語と内容語の前の語を比較したところ、内容語の前で無核の割合が高くなる傾向はないことが分かった。経験の多い学習者群では単独と内容語の前で同程度、経験の少ない学習者群ではむしろ単独のほうが高くなっている結果が見られた。

しかしながら、後接語の前と内容語の前を比較すると、経験の少ない学習者群による二拍語を除いては、内容語の前は無核の割合が高くなる傾向がある。したがって、山田 (1994a, b) からうかがえる傾向について、例えば「雨だ」が「雨が降る」になることで、無核の割合が高くなる場合もあると思われる。

以上では、生成されるアクセント型は、発話環境によって異なるということを示した。最も安定した傾向としては、「雨」のような単独の語に比べ、「雨だ」のように後接語に付いた語は、比較的無核で生成されにくく、三拍語では語中アクセントで比較的生成されやすい傾向である。しかしながら Taylor (2012) で報告されている傾向とは詳細が異なる。その他には、統計的に有意である傾向は見られたが、学習者群と拍数で傾向が異なり、一定したものではなかった。これらの結果から、発話環境に基づいた中間言語の規則があるのではないかと考えられるが、その影響が弱いためか、具体的にどのような規則かについては、明らかにできなかった。

6-5-3 アクセント型の不安定性

本節では、資料語のタイプの間での比較から、各資料語に焦点を移し、生成されるアクセント型は発話環境によって異なりやすいということを示す。具体的には、単独、後接語の前、内容語の前という三つの発話環境では、約三分の二の資料語のアクセント型が少なくとも一度は変わっている。これは二つの学習者群で共通している傾向である。

表 6-10 は各学習者群について、三つの発話環境で生成されたアクセント型の組み合わせと、各アクセント型の組み合わせで生成された資料語の割合を示したものである⁶⁸。

表 6-10 では、生成されたアクセント型の組み合わせを、アクセント型が「安定している」と「安定していない」ものに分類している。三つの発話環境で同じアクセント型で生成された語については、「安定している」と分類している。一方、三つの発話環境のうちの一つでも異なるアクセント型で生成されていれば「安定していない」と分類している。例えば単独では語頭アクセント、後接語の前では無核、内容語の前では語中アクセントになる、あるいは、語頭アクセントに戻るというようなアクセント型の組み合わせである。ただし、標準語では、語末アクセントは単独では実現されないため、単独では無核、後接語、および内容語の前は語末アクセントというアクセント型の組み合わせに関しては、「安定している」と見なしている。なお、安定しているかしていないかという分類は、標準語のアクセント型と一致しているかしていないかとは、関係なく行っている。

⁶⁸ 表 6-10 では、理論上可能なすべてのアクセント型の組み合わせを示しているが、一度も生成されなかった場合には 0 を付けている。

表 6-10 生成されたアクセント型の組み合わせ

安定している語

アクセント型	生成された割合
語頭→語頭→語頭 ⁱ	<u>17.9%</u> / <u>22.6%</u> ^{ii,iii}
語中→語中→語中	<u>9.5%</u> / <u>7.6%</u>
無核→語末→語末	0.7% / 1.2%
無核→無核→無核	<u>10.5%</u> / <u>8%</u>
合計	38.6% / 39.4%

安定していない語 (続き)

アクセント型	生成された割合
語中→語中→語頭	0.5% / 0.3%
語中→語中→語末	1.1% / 0.5%
語中→語中→無核	1.7% / 3%
語中→語末→語頭	0.0% / 0.0%
語中→語末→語中	1.0% / 0.2%
語中→語末→語末	0.4% / 0.2%
語中→語末→無核	0.2% / 0.5%
語中→無核→語頭	0.0% / 1.0%
語中→無核→語中	1.0% / 0.2%
語中→無核→語末	0.0% / 0.0%
語中→無核→無核	0.5% / 0.9%
無核→語頭→語頭	<u>7.2%</u> / <u>5.8%</u>
無核→語頭→語中	0.7% / 0.6%
無核→語頭→語末	1.5% / 1.6%
無核→語頭→無核	1.8% / 1.9%
無核→語中→語頭	0.3% / 0.7%
無核→語中→語中	<u>5.1%</u> / <u>5.5%</u>
無核→語中→語末	0.3% / 0.3%
無核→語中→無核	1.7% / 3.2%
無核→語末→語頭	0.8% / 0.8%
無核→語末→語中	0.5% / 0.5%
無核→語末→無核	0.6% / 1.2%
無核→無核→語頭	<u>5.3%</u> / <u>2.2%</u>
無核→無核→語中	4.8% / 2.8%
無核→無核→語末	2.2% / 2.2%
合計	61.5% / 60.5%

安定していない語

アクセント型	生成された割合
語頭→語頭→語中	1.9% / 1.6%
語頭→語頭→語末	3.5% / 3.5%
語頭→語頭→無核	2.3% / 6.6%
語頭→語中→語頭	1.0% / 0.9%
語頭→語中→語中	3.4% / 3.1%
語頭→語中→語末	0.2% / 0.2%
語頭→語中→無核	0.7% / 1.2%
語頭→語末→語頭	1.5% / 0.6%
語頭→語末→語中	0.2% / 0.2%
語頭→語末→語末	1.6% / 0.1%
語頭→語末→無核	0.8% / 0.5%
語頭→無核→語頭	1.9% / 1.6%
語頭→無核→語中	0.7% / 0.5%
語頭→無核→語末	0.2% / 0.4%
語頭→無核→無核	1.6% / 1.9%
語中→語頭→語頭	0.3% / 0.7%
語中→語頭→語中	0.4% / 0.6%
語中→語頭→語末	0.0% / 0.0%
語中→語頭→無核	0.1% / 0.2%

i 単独→後接語の前→内容語の前

ii 経験の少ない学習者群 / 経験の多い学習者群

iii 下線は割合が5%を超えているアクセント型

表 6-10 から、アクセント型が安定していない資料語は、各学習者群では全体の約 60% と多くなっていることが分かる。経験の少ない学習者群では 61.5%、経験の多い学習者群では 60.5% となっているが、二つの学習者群の間で、安定していない語の割合は同程度である ($\chi^2(1)=0.24, ns$)。この結果から、二つの学習者群は共通して、約三分の二の資料語のアクセント型を三つの発話環境で少なくとも一度は変えており、生成されるアクセント型は発話環境によって異なりやすいということが分かる。

表 6-10 では、生成された割合が 5% 以上のアクセント型の組み合わせには、下線を引いている。水準を 5% に決めているのは恣意的であるが、その程度に設定することにより、比較的多く生成されているアクセント型が見やすくなる。

安定しているアクセント型については、生成されている割合が 5% 以上の組み合わせは、二つの学習者群に共通で、語頭アクセント、語中アクセント、無核の三つであることが表 6-10 から分かる。一方で安定した語末アクセントは約 1% と低くなっている。語末アクセントが生成されにくいことはすでに 6-2 節で指摘したが、ここでは同じ結果が別の形で確認できる。

一方、安定していないアクセント型については、異なるアクセント型の組み合わせが数多く生成されており、特定のアクセント型の組み合わせで生成される強い傾向はない。経験の少ない学習者群では、「無核→語頭→語頭」、「無核→語中→語中」、「無核→無核→語頭」の三つの組み合わせが 5% 以上、経験の多い学習者群は、そのうちの二つの「無核→語頭→語頭」、「無核→語中→語中」が 5% 以上となっているが、生成されている割合は 5.1%～7.2% といずれの学習者群でも高くはない。上記以外の安定していないアクセント型の組み合わせはすべて割合が 5% 以下になっている。

以上の結果をまとめると、アクセント型が安定していない資料語では、ある特定のアクセント型の組み合わせで生成される強い傾向はないが、二つの学習者群ともアクセント型が安定していない資料語は全体の約60%を占め、多くなっていることが分かった。

6-5-4 まとめ

以上では、各資料語が生成されるアクセント型は発話環境ごとにより変りやすいということを示した。約三分の二の資料語のアクセント型が、三つの発話環境で少なくとも一度は変わっている。しかしながら、この不安定性の背景には、発話環境に基づく強い中間言語の規則があるわけではない。生成されるアクセント型はある程度発話環境によって異なることが明らかになったが、学習者群と拍数で傾向が異なり、一定した傾向は少なかった。次節では、アクセント型の不安定性は、生成されるアクセント型は絶対的な規則ではなく、複数の要因が競合し決まるという説と関係していることを論じる。

6-6 本章についての考察

本節では、本章の結果に基づき、生成されるアクセント型は複数の要因の競合によって決まることを述べる。本章では生成されるアクセント型は拍数、品詞、発話環境、さらに動詞の場合には付加語によって異なる結果が見られた。しかしながら、特定の資料語のタイプであれば、特定のアクセント型で生成されるという強い傾向はなかった。これらの結果から、拍数、品詞、発話環境、付加語といった諸因に基づく中間言語の規則が存在すると考えられるが、その働きは絶対的なものではなく、要因が競合し、生成されるアクセント型が決まるのではないかと思われる。

その結果、同じ条件—つまり同じ拍数、品詞、発話環境—でも、複数のアクセント型の生成が現れる。この結果から、同じ語でも、ときによってはあるアクセント型、ときによっては異なるアクセント型で生成されることが予測される。本調査では、同じ語を同じ発話環境で同じ話者に複数回生成させていないので、この予測は確認できない。しかしながら、発話環境による強い傾向の違いがないにもかかわらず、三つの発話環境とも同じアクセント型で生成された資料語が少数であったことが、生成されるアクセント型は複数の要因の競合によるという説と一致すると思われる。

本章の結果で示唆される中間言語の規則の内容は以下の通りである。拍数に関しては、語末から二拍目にアクセント核が置かれる傾向が全体的にある。三拍語では、語頭アクセントの割合は品詞によって異なる。動詞の場合、語末アクセントと無核の割合は付加語によって異なる。さらに、発話環境により、無核の割合や、三拍語における語アクセントの割合が異なる。

その中で、品詞と付加語に基づくものに関しては、標準語にあるパターンの影響で中間言語の規則が形成されていると思われるものが見られた。対象言語にある語レベルのプロソディのパターンが第二言語学習者に習得されるということは、英語のストレス習得の分野では言われているが、本章の結果から、日本語の語アクセントについても、同様の現象が起こることが示唆された。

以上の中間言語の規則で、英語からの転移で生じたものはあるだろうか。発話環境の影響には、母語にある規則からの転移の可能性が考えられる。しかしながら、一定した傾向は観察されなかったため、その詳細および原因は本研究の結果からは明らかでない。一方拍数に関しては、第3章で述べたように堀口（1973）、土岐（1980）は、語末から

二拍目にアクセント核を置くのは英語のストレス付与規則の転移で生じるとしている。しかしながら、すでに指摘しているように、これは Hayes (1982) で紹介されている英語のストレス付与規則とは一致しないようである。本論文の考察では、これについてより深く検討し、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向は、英語のストレス付与規則からの転移であるとは簡単には片付けることができないということを指摘する。

本章までの分析では、二つの学習者群を対象としてきた。しかしながら、すでに指摘したように、生成されるアクセント型には、大きな個人差がある。次章では、各個人の傾向を分析する。

第7章

各個人の傾向⁶⁹

7-1 はじめに

本論文ではここまで、生成されたアクセント型の傾向を、標準語の影響、規則によるアクセント付与という二つの観点から分析してきたが、対象となったのは日本語の経験量の異なる二つの学習者群である。本章では、それぞれの学習者群全体ではなく、各学習者の傾向を分析対象とする。具体的には、21名の調査参加者について、生成されたアクセント型の割合、標準語の影響、規則によるアクセント付与の可能性という三つの観点から、生成されたアクセント型の特徴を検討する。

本章では分析の結果として、以下の二点を示す。第一には、標準語との一致率はどの学習者も低いということである。第二に示すのは、生成されやすい・されにくいアクセント型や、資料語のタイプと生成されるアクセント型との関係は、個人によって大きく

⁶⁹ 本章に述べる結果の一部は、Taylor (2011a) に報告している。

異なるということである。これらの結果に基づき、標準語のアクセント型を語ごとに習得すること—すなわち音韻表象にエンコードすること—はどの学習者にも困難である可能性、さらに、各学習者はそれぞれ独特のアクセント型の体系を作り出していることについて論じる。

第6章では、二つの学習者群は共通して、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向があることを示した。本章では、学習者の約半分には語末から二拍目にアクセント核を置く傾向があるが、語末から二拍目にアクセント核が置かれた資料語の割合は学習者によって大きく異なり、無核で生成する傾向のある学習者、優先的なアクセント型がなく、もしくは、拍数によって異なるという学習者もいるということを報告する。

第3章で述べたように、久野（1998）によると、英語話者⁷⁰では、生成頻度の高いアクセント型は個人によって異なることが述べられている。本章の結果は、生成されやすい・されにくいアクセント型が個人によって大きく異なるという点では、久野（1998）を追認する結果となっている。

本研究の新しい知見としては、英語話者には、個人個人で独特の語アクセントの体系があるという点にある。生成されるアクセント型がどのような要因にどのように影響されるかに個人差がある可能性は、第3章に紹介した先行研究からもうかがえた。人数は

⁷⁰ 本章でまた、英語を母語とする日本語学習者の略として「英語話者」を用いる。

少なく、対象者は英語話者ではないが、助川（1999）ではポルトガル語を母語とする日本語学習者のアクセント生成における品詞の影響には個人差があること、アンドレエフ（2002）ではブルガリア語を母語とする日本語学習者における音節構造の影響が対象者によって異なっていることが述べられている。Nguyen & Macken（2008）でも英語話者によるトーン生成に影響を及ぼす要因には個人差があると述べられている。本研究では、英語話者について、（1）生成されやすい・されにくいアクセント型、（2）生成されるアクセント型が拍数、品詞、発話環境、付加語といった諸要因から受ける影響、（3）標準語と一致しやすい資料語のタイプやアクセント型という三点はすべて個人によって異なるということを報告する。

第5章では、二つの学習者群に共通した傾向として、生成されるアクセント型は標準語との一致率は低く、標準語のアクセント型にはそれほど影響されないという結果を明らかにした。本章では、標準語との一致率はどの学習者も50%程度かそれ以下と低く、一致率には個人による差が少ないということを示す。標準語のアクセント型を音韻表象にエンコードすることの困難さは、どの学習者にも共通している傾向である可能性が示唆される。

本章の主な目的は、各個人が生成するアクセント型の傾向はどのように異なるかを調べることであるが、別の目的がもう一つある。本研究では、学習者が習得しているのは標準語であるという前提で研究を進めているが、調査参加者のうちの二名はアクセント型の体系が標準語と大きく異なる地域に滞在した経験がある。MF_KWは鹿児島に、MF_PHは熊本に滞在している。本章では、その二名の傾向が、標準語との一致率について、他の学習者とは異ならず、平均的かそれ以上であるということ報告する。

7-2 個人の分析の一例：学習者 LF_AG（図 7-1）の傾向について

本節では、分析の一例として、一名の学習者の結果を述べ、分析方法を説明する。

図 7-1 は本節で取り上げる学習者である LF_AG が生成したアクセント型を、18 の資料語のタイプ別に、示したものである。

図 7-1 では、各資料語のタイプについて、標準語のアクセント型別に複数の語群に分け、生成されたアクセント型を示している。例えば、左上にある単独の二拍単純名詞では、標準語のアクセント型が頭高型の語群、尾高型の語群、平板型の語群という三つの語群の結果を提示している。各語群には、12 語の資料語がある⁷¹。図に示している数字は、各アクセント型で生成された語の数である。標準語のアクセント型には斜線を引いている。

以下では、図 7-1 にある学習者 LF_AG の結果について、生成されたアクセント型の割合、標準語の影響、生成されたアクセント型の体系性という三つの分析項目に沿って生成されたアクセント型の特徴を分析していく。

⁷¹ ただし録音のミスなどによって 12 語未満の場合もある。

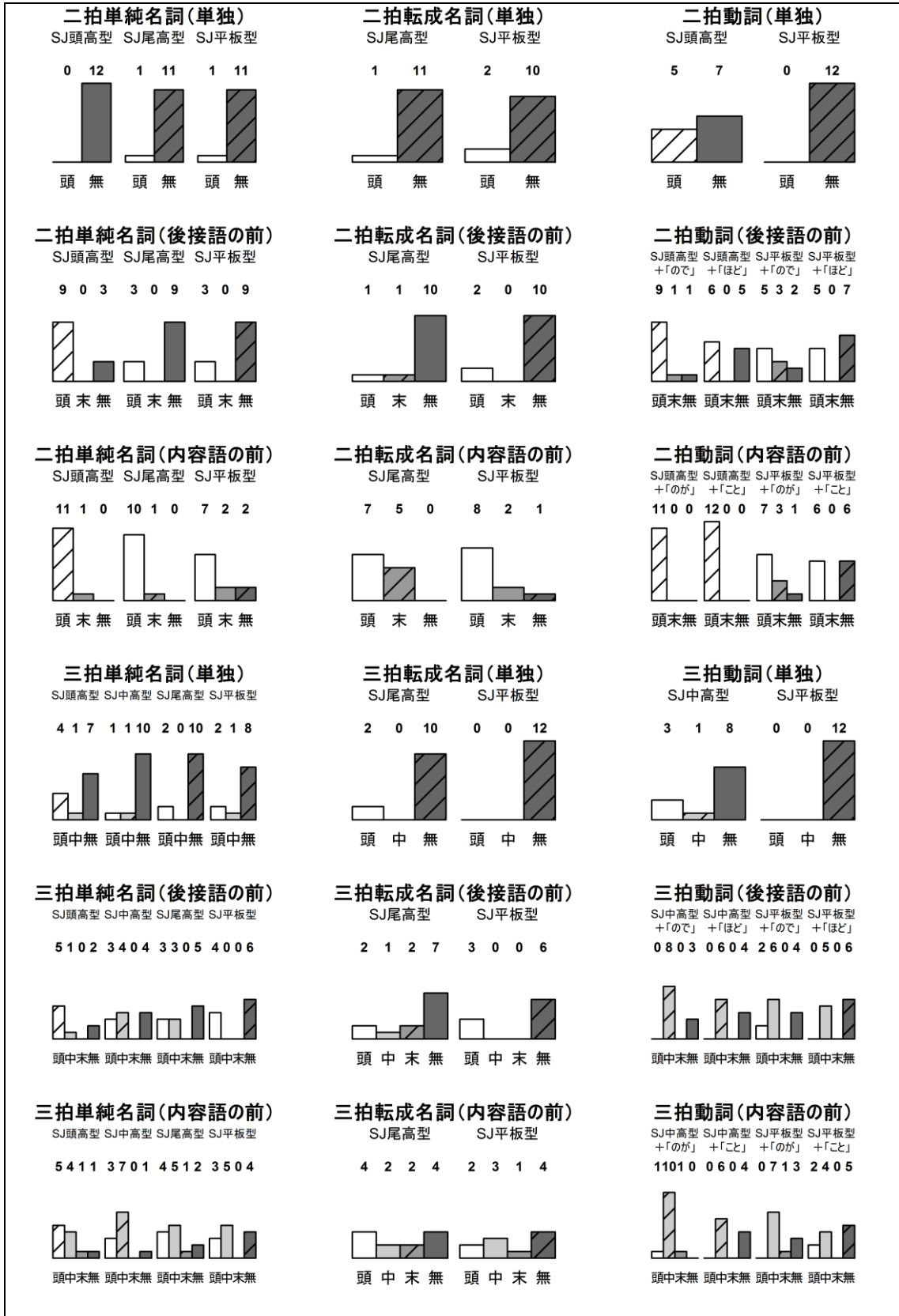


図 7-1 学習者 LF_AG が生成したアクセント型

7-2-1 生成されたアクセント型の割合

本節では、図 7-1 に示している LF_AG の結果について、最も多く生成されているアクセント型および生成されにくいアクセント型を報告する。生成されにくいアクセント型とは、全体の 10%以下であると定義する。さらに、第 6 章では、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向が二つの学習者群に見られたので、語末から二拍目にアクセント核が置かれる語が全体に占める割合についても報告する。

結果は次の通りである。二拍語では最も多く生成されているのは無核（48%）であるが、二番目に多い語頭アクセント（45%）とは 5%水準では有意な差がない（ $\chi^2(1)=0.24, ns$ ）。三拍語では、無核が最も多く生成されている（49%）。語末アクセントが生成されにくく、二拍語では資料語の 7%、三拍語では資料語の 3%が語末アクセントで生成されている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 37%である。

7-2-2 標準語の影響

本節では、図 7-1 に示している LF_AG の生成結果を対象に、標準語の影響に関して、以下の三点を検討する。第一には、標準語との一致率が高い「アクセント型の対立」を示す資料語のタイプを報告する。ここでの「アクセント型の対立」の意味については以下に述べる。第二には、その他に、標準語からの正、あるいは、負の影響を比較的示しやすい資料語のタイプを報告する。第三には、資料語全体における標準語との一致率を述べる。以下では、これら三点の分析内容について詳細を述べるとともに、結果を報告していく。

第一に報告する「アクセント型の対立」の意味を説明するために、図7-1に示しているLF_AGの生成のうち、(1)標準語との一致率が高いが、アクセント型の対立がなく、偶然一致していると思われる資料語のタイプの例、(2)標準語との一致率が高いアクセント型の対立を示す資料語のタイプの例をそれぞれ一つずつ取り出し説明していく。

図7-2は前者の例である。標準語のアクセント型には斜線を引いているが、尾高型と平板型は標準語と高い一致率を示している。しかしながら、これは全体的に無核で生成される傾向に原因があるため、偶然一致していると考えられる。

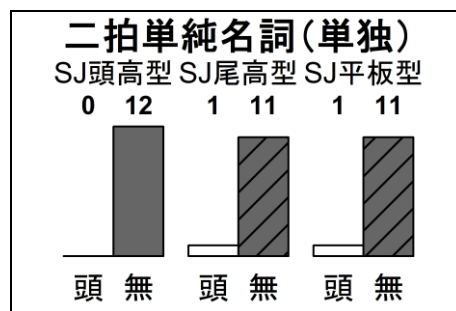


図7-2 偶然の一致の例①

図7-3は後者の例である。頭高型でも平板型でも、標準語と一致率が高い。二つの異なるアクセント型であるため、偶然一致したのではなく、標準語の影響を受けて、一致している可能性が高いと思われる。標準語との一致率が高い「アクセント型の対立」とは、このように、標準語との高い割合での一致が複数のアクセント型で見られる現象を指す。

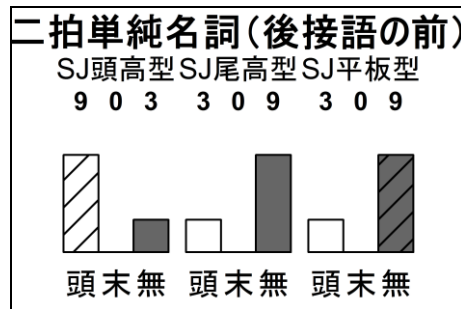


図 7-3 一致率が高いアクセント型の対立の一例

本章では、一つの資料語のタイプで、二つ以上のアクセント型において 8 語以上が標準語と一致した場合、一致率の高いアクセント型の対立があるとみなすこととする⁷²。上述の例の図 7-3 では、頭高型と平板型でそれぞれ 9 語が一致しているため、標準語との一致率が高いアクセント型の対立であると判断する。図 7-1 から、LF_AG は上述の例以外には、標準語との一致率が高いアクセント型の対立を持っていないということが分かる。

第二に報告するのは、図 7-1 に示している LF_AG の生成結果の中で、標準語の影響を示す他の資料語のタイプである。まずは、正の影響である。分析方法を説明するために、ここで再度、図 7-1 の一部を別の図として取り出し、図 7-4 と図 7-5 として示す。

⁷² この基準を 12 語中 8 語に設定した理由は以下の通りである。より高い場合、一致率の高いアクセント型の対立を持っている学習者の数がほとんどなくなる。一方でより低い場合、偶然一致した可能性が高くなり、さらに、事例の数が多くなり学習者間の比較が困難となるためである。

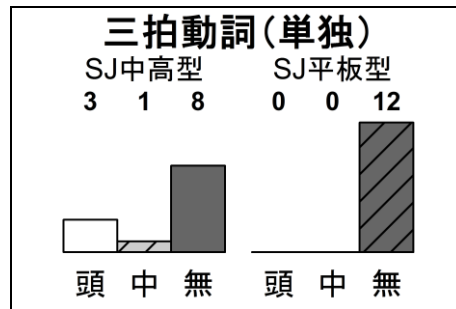


図 7-4 標準語の正の影響を示す資料語のタイプの一例

図 7-4 に示すのは、単独の三拍動詞の結果である。ここでは、標準語と高い一致率を示しているアクセント型の対立はないが、標準語からの直接的な影響は示唆されている。具体的には、標準語のアクセント型が平板型である語群は、標準語のアクセント型が中高型である語群より、無核で生成されやすくなっている点である。この資料語のタイプでは、無核のアクセント型には、標準語の正の影響が現れている可能性が高いと思われる。

一方で図 7-5 では、標準語のアクセント型が異なる語群でも、生成されるアクセント型はほぼ同様である⁷³。この場合、生成されるアクセント型は標準語のアクセント型とは無関係に決まっており、標準語の影響はないと思われる。

⁷³ 図 7-2 に示している資料語のタイプも標準語の影響がない例の一つである。

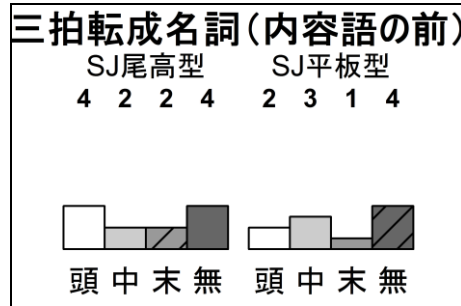


図 7-5 偶然の一致の例②

次は負の影響であるが、LF_AG の生成には負の影響を示す資料語のタイプがないので、分析の例として、ここでは LF_JW の生成にある例を報告する。図 7-6 は LF_JW による後接語の前の三拍転成名詞の結果である。ここでは、標準語のアクセント型が尾高型である語群では語頭アクセントで生成されている語の数が比較的多くなっており、標準語のアクセント型が平板型である語群では語中アクセントで生成されている語の数が比較的多くなっている。標準語のアクセント型が異なる語群がお互い異なるアクセント型で生成されている点では、標準語の影響が現れている可能性が考えられるが、正の影響ではなく、負の影響であることとなる。

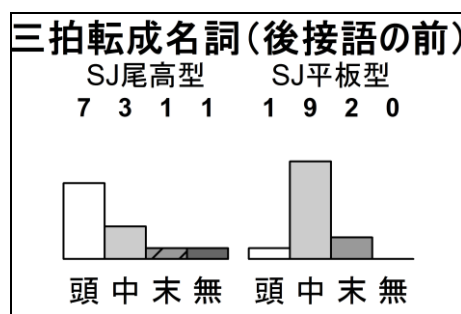


図 7-6 標準語の負の影響を示す資料語のタイプの一例 (LF_JW)

以上のように本章では、標準語の正の影響、あるいは負の影響が現れているかどうかを判断するために、標準語のアクセント型が異なるそれぞれの語群の間で、生成される

アクセント型の傾向に違いがあるかどうかを検討する。4語以上の差がある場合、標準語の影響が現れているとみなすこととする⁷⁴。これまで見た例では、標準語の影響が現れていると判断したものとして、図 7-4 と図 7-6 がある。標準語の正の影響が現れていると思われる図 7-4 では、無核で生成された語の数は、標準語のアクセント型が平板型である語群では 12 語、標準語のアクセント型が中高型である語群では 8 語である。つまり、標準語のアクセント型が異なる語群の間には 4 語の差がある。標準語の負の影響が現れていると思われる図 7-6 では、語頭アクセントと語中アクセントのそれぞれについて、標準語のアクセント型が異なる語群の間に、6 語の差がある。一方標準語の影響がないと判断した例として、図 7-5 がある。ここでは、標準語のアクセント型が異なる語群で生成されるアクセント型の数に違いがあっても、1~2 語程度である。

図 7-1 から、LF_AG に関しては、動詞は単純名詞と転成名詞より標準語の影響を示しやすく、二拍動詞と内容語の前の三拍動詞のそれぞれにおける無核の数、単独と内容語の前の二拍動詞における語頭アクセントの数、「のが好きだ」の前の三拍動詞における語中アクセントの数はそれぞれ、標準語の正の影響を示していることが分かる。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は 52% である。

⁷⁴ この基準を 4 語に設定した理由は以下の通りである。より高い場合、事例の数が少なく、学習者間の比較が困難となる。一方でより低い場合、事例の数が多くなり学習者間の違いが見出せにくくなり、さらに、偶然一致した可能性が高くなるという理由もある。

7-2-3 生成されたアクセント型の体系性

本節では、図 7-1 に示している LF_AG の結果について、生成されたアクセント型と、資料語のタイプの間関係には、どのような体系性があるかを検討する。この目的は、アクセント付与はどの程度どのような中間言語の規則に従って行われているかを探ることである。

図 7-1 から、LF_AG には以下の特徴があることが分かる。第一に、どの品詞でも単独では、無核で生成される傾向がある。第二に、転成名詞は後接語の前でも、無核の傾向がある。第三に、内容語の前の二拍語では語頭アクセントで生成される傾向がある。その他の資料語のタイプでは、語頭アクセント、語中アクセント、無核はいずれもある程度生成されており、特定のアクセント型で生成される傾向はない。

生成されたアクセント型と、資料語のタイプの間、このような体系性があることから、アクセント付与はある程度中間言語の規則に従って行われることが示唆される。この可能性については、考察で詳述する。

7-3 分析項目のまとめ

次節では、上述の LF_AG と同様の分析を、残りの 20 の調査参加者について行っていく。ここでは、分析項目をまとめる。

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているアクセント型はどれか。一番目に多いアクセント型と二番目に多いアクセント型の間有意な差がない場合、二番目に多いアクセント型はどれか⁷⁵。一方で、生成されにくいアクセント型はあるか⁷⁶。語末から二拍目にアクセント核が置かれる語が全体に占めるの割合はどの程度か。

2) 標準語の影響

一つの資料語のタイプで、標準語との一致率が高いアクセント型の対立はあるか⁷⁷。さらに、どの資料語のタイプの、どのアクセント型が、標準語の正の影響あるいは負の影響を受けやすいか⁷⁸、⁷⁹、⁸⁰。標準語との一致率は何パーセントであるか。

⁷⁵ 有意水準は5%とする。

⁷⁶ すべての学習者に同じ基準を用いるため、「生成されにくい」というのを、生成される割合が10%以下のアクセント型であると定義する。

⁷⁷ すべての学習者に同じ基準を用いるために、標準語との一致率が「高い」アクセント型の対立について、各アクセント型で12語中8語以上が標準語と一致していると定義する。

⁷⁸ すべての学習者に同じ基準を用いるために、標準語の正の影響あるいは負の影響を「受けやすい」アクセント型というのは、標準語の他のアクセント型の語群とは、4語以上の差があると定義する。

3) アクセント型の体系性

生成されたアクセント型と、資料語のタイプの間には、どのような体系性があるか。

7-4 結果

本節では、残りの 20 名の調査参加者が生成したアクセント型を個々に示す。生成されたアクセント型は図で示し、前節に述べた三つの分析項目に沿ってその傾向について述べる。

⁷⁹ 動詞に関しては、標準語との一致が高いアクセント型の対立がある場合および、標準語の特定のアクセント型の語群が他の語群と異なるアクセント型の傾向を示す場合では、動詞に付加している語によってアクセント付与が規則的に異なるという場合がある。これに関しては、標準語の影響ではなく、アクセント型の体系性の例として扱う。

⁸⁰ 標準語との一致が高いアクセント型の対立がある場合および、標準語の特定のアクセント型の語群が他の語群と異なるアクセント型の傾向を示す場合では、標準語の影響であるとは、保証できない。偶然そのようになってしまった可能性もある。しかしながら、考察に述べるように、全体の傾向として、負の影響が少なく、正の影響が多い結果から、偶然ではなく、標準語の影響を受けている可能性が高いのではないかと思われる。

7-4-1 学習者 LF_EP (図 7-7) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

二拍語では、最も多く生成されているのは語頭アクセント (46%) であるが、二番目に多い語末アクセント (41%) とは有意な差がない ($\chi^2(1)=1.13, ns$)。三拍語では、語中アクセントが最も多く生成されている (68%)。生成されにくいアクセント型に関しては、10%以下で生成されているアクセント型は二拍語にはないが、三拍語では、語頭アクセント (5%) と無核 (7%) となっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 58% である。

2) 標準語の影響

語末アクセントと他のアクセント型の対立が標準語と高い割合で一致している資料語のタイプは二つある。後接語の前の二拍単純名詞では語末と語頭アクセントの対立が、内容語の前の三拍動詞では語末アクセントと無核の対立が標準語と高い割合で一致している。さらに、(a) 後接語の前の二拍動詞、(b) 単独の三拍単純名詞における語頭アクセント、(c) 単独と後接語の前の三拍単純名詞における語中アクセント、(d) 後接語の前の三拍転成名詞と動詞における語末アクセント、(e) 内容語の前の二拍動詞における無核のそれぞれの数には、標準語の正の影響が現れている。内容語の前の三拍転成名詞では、語末アクセントには標準語の正の影響が見られるが、標準語のアクセント型が無核の語群には、語中アクセントの数が多くなっているという標準語の負の影響もある。標準語との一致率は 44% である。

各個人の傾向

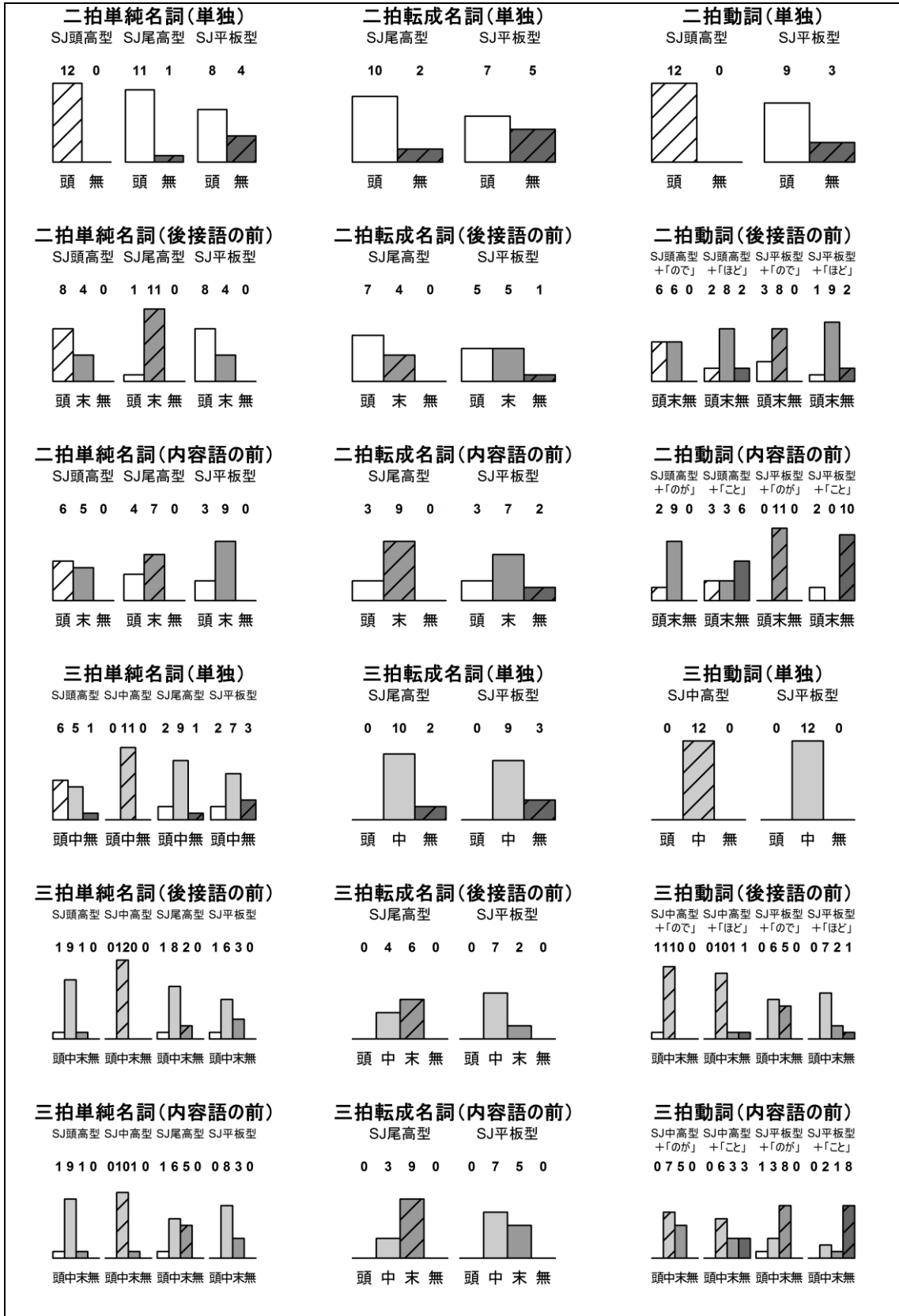


図 7-7 学習者 LF_EP が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

単独の二拍語は語頭アクセントで生成される傾向がある。後接語の前の二拍語は、語頭アクセントと語末アクセントのいずれかで生成されている。内容語の前の二拍動詞では、「のが好きだ」に先行する動詞は語末アクセントで、「ことができる」に先行する動詞は無核で生成される傾向がある。三拍語は語中アクセントで生成される傾向があるが、これは単独の動詞に特に強く見られる。三拍の転成名詞は、語中・語末アクセントで生成される傾向がある。

7-4-2 学習者 LF_GC (図 7-8) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (83%)、三拍語では語中アクセント (69%) である。生成されにくいのは語末アクセントで、二拍語では資料語の 5%、三拍語では 2% である。三拍語では、無核 (2%) も生成されにくい。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 76% である。

各個人の傾向

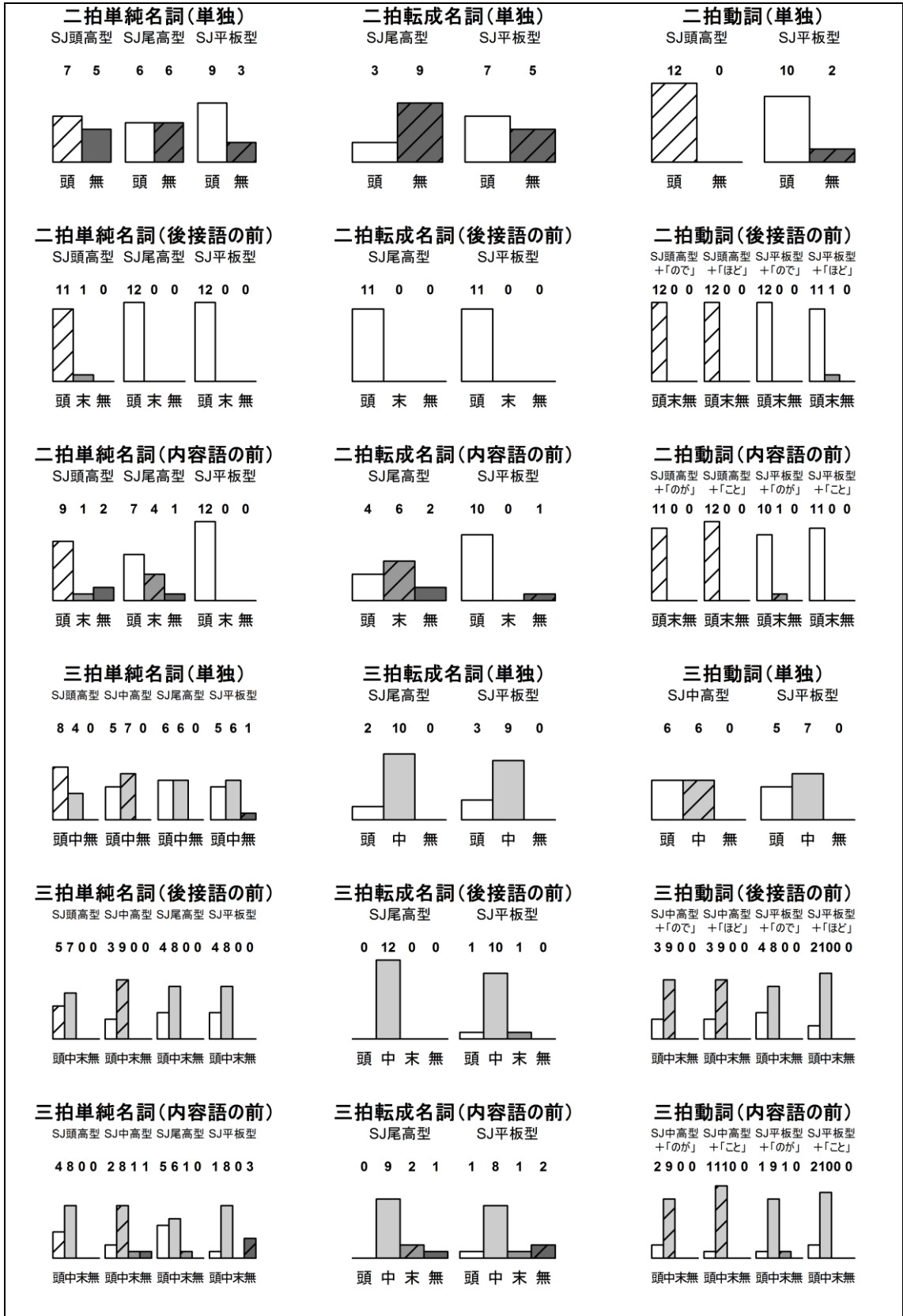


図 7-8 学習者 LF_GC が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

標準語と高い割合で一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。内容語の前の二拍転成名詞では、語末アクセントの数に標準語の正の影響が見られる。同じ資料語のタイプでは、標準語のアクセント型が平板型である資料語は、無核ではなく語頭アクセントの数が多くなっているという標準語の負の影響も現れている。このように、標準語では平板型である語が語頭アクセントで生成されることが他のアクセント型の語より多いという負の影響は、その他にも、内容語の前の二拍単純名詞、単独の二拍転成名詞⁸¹にも見られる。標準語との一致率は35%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

全体的には、語末から二拍目にアクセント核が置かれる傾向がある。二拍語では語頭アクセントで生成される傾向があるが、単独の二拍単純名詞と転成名詞は、語頭アクセントか無核かのいずれかで生成されている。三拍語は語中アクセントで生成される傾向が強いが、単独の単純名詞と動詞では、語頭アクセントも現れている。

⁸¹ 単独の二拍転成名詞に関しては、標準語のアクセント型が尾高型である語群には無核の数が、標準語のアクセント型が平板型である語群には語頭アクセントの数が比較的多くなっているが、標準語では単独の尾高型語と平板型語はいずれも無核で生成されるため、この傾向を標準語の影響と解釈するべきかは明らかでない。

7-4-3 学習者 LF_JW (図 7-9) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

二拍語は語頭アクセントで生成される傾向が強く、93%の資料語が語頭アクセントで生成されている。三拍語では、最も多く生成されているのは語中アクセント(49%)であるが、二番目に多い語頭アクセント(45%)とは有意な差がない($\chi^2(1)=0.71, ns$)。全体的に、語末アクセントと無核は生成されにくい。二拍語では語末アクセントは6%、無核は1%しか生成されていない。三拍語でも語末アクセントと無核はそれぞれ3%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の70%である。

2) 標準語の影響

後接語の前の三拍単純名詞では、語頭アクセントと語中アクセントの対立は標準語と高い割合で一致している。その他に標準語の正の影響を示している資料語のタイプはないが、後接語の前の三拍転成名詞では、標準語のアクセント型が尾高型である語群には語頭アクセントで生成されている資料語が比較的多く、標準語のアクセント型が平板型である語群には語中アクセントで生成されている資料語が比較的多いというように標準語からの負の影響が現れている。その他の負の影響に関しては、後接語の前の三拍動詞では、「ほど」に先行する平板型動詞の語群は他のアクセント型の語群と比較して語中アクセントで生成されることが多いという傾向もある。標準語との一致率は32%である。

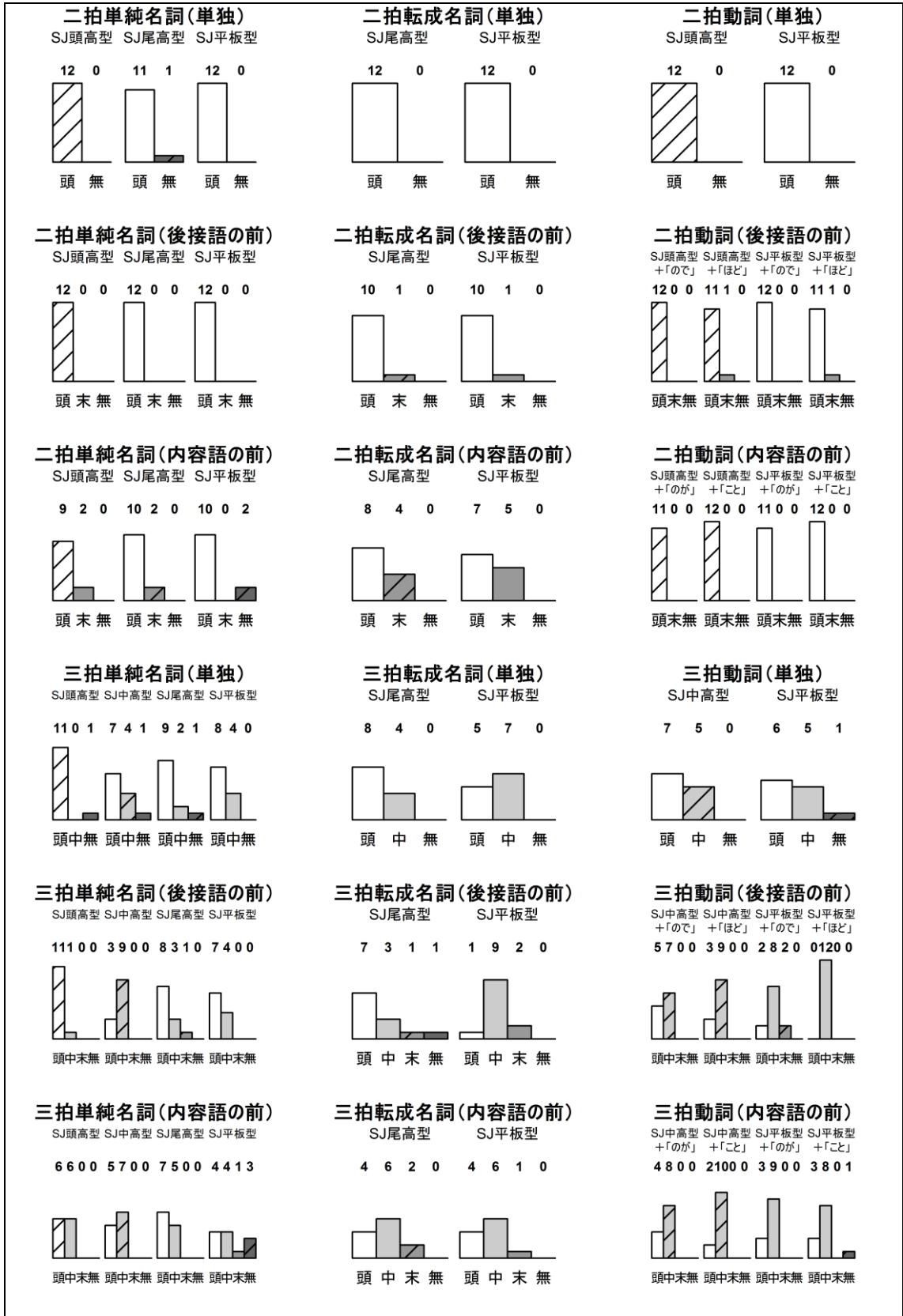


図 7-9 学習者 LF_JW が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

二拍語は語頭アクセントで生成される傾向がある。内容語の前の二拍単純名詞と転成名詞では、語末アクセントもある程度生成されている。三拍語では、語頭アクセントと語中アクセントの両方が生成されているが、単独および後接語の前の単純名詞には語頭アクセントで生成される傾向が、後接語の前および内容語の前の動詞は語中アクセントで生成される傾向が強くなっている。

7-4-4 学習者 LF_LC (図 7-10) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

二拍語では、最も多く生成されているのは無核 (52%) であるが、二番目に多い語頭アクセント (42%) とは有意な差がない ($\chi^2(1)=2.97, ns$)。三拍語では、無核が最も多く生成されている (62%)。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の 6%、三拍語では 2%にとどまっている。三拍語では、語頭アクセント (2%) も生成されにくい。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 36%である。

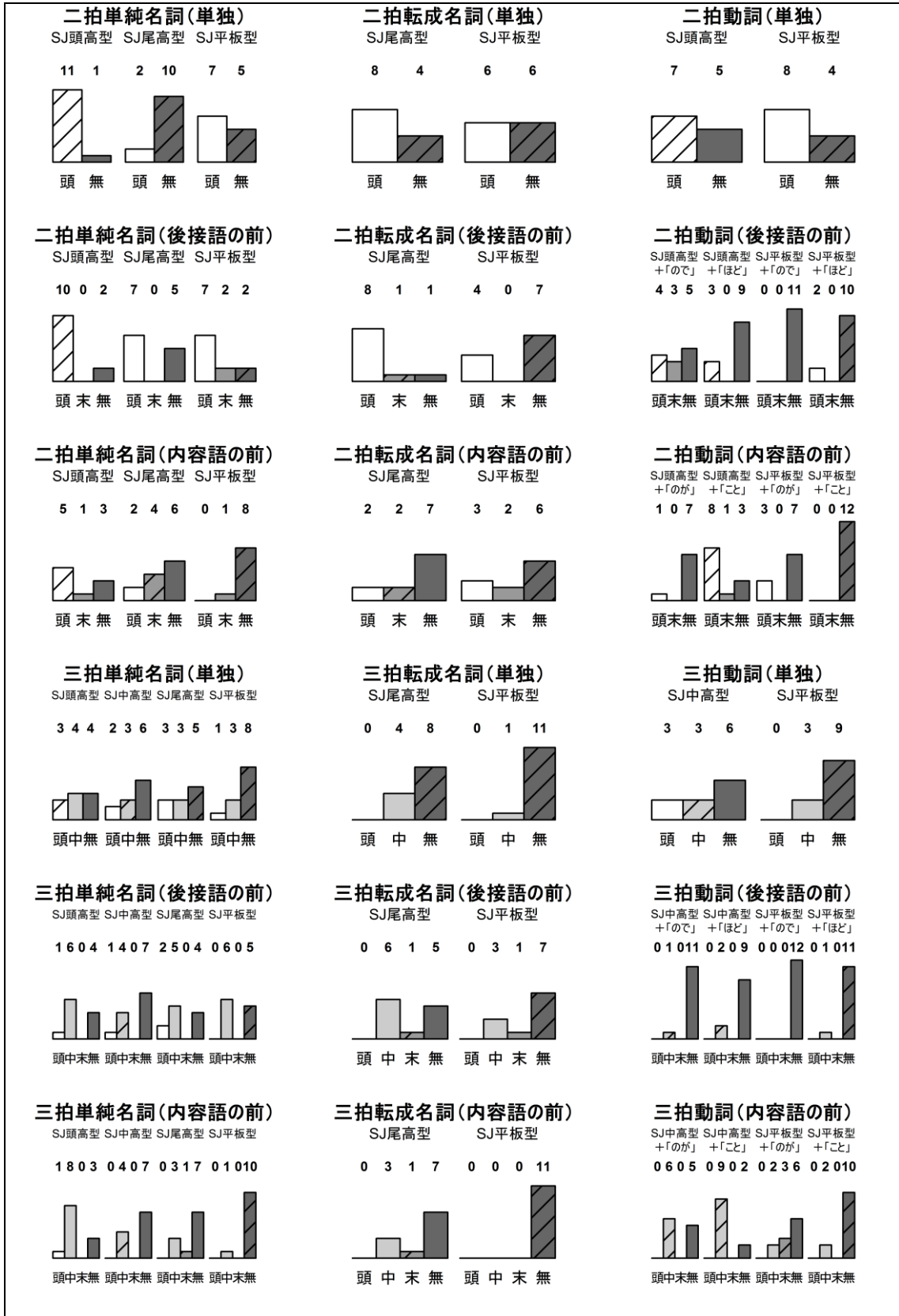


図 7-10 学習者 LF_LC が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

無核と他のアクセント型の対立が標準語と高い割合で一致している資料語のタイプは三つある。単独の二拍単純名詞、内容語の前の二拍動詞のそれぞれにおける無核と語頭アクセントの対立、内容語の前の三拍動詞における無核と語中アクセントの対立である。さらに、内容語の前の二拍単純名詞における語頭アクセントの数、内容語の前の三拍転成名詞における無核の数には、標準語の正の影響が現れている。後接語の前の二拍転成名詞、内容語の前の三拍単純名詞にはそれぞれ無核の数に標準語の正の影響が現れている。しかしながら一方で、前者では、標準語のアクセント型が語末アクセントの語群が語頭アクセントで生成されることが多く、後者では、標準語のアクセント型が語頭アクセントの語群が語中アクセントで生成されることが多いという標準語の負の影響も現れている。標準語との一致率は45%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

全体的には、語末から二拍目にアクセント核が置かれるか、無核で生成されるという傾向がある。二拍語は語頭アクセントか無核で生成されている。三拍語は語中アクセントか無核で生成されているが、後接語の前の三拍動詞では、無核の傾向が強い。

7-4-5 学習者 LF_LD (図 7-11) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

二拍語は語頭アクセントで生成される傾向が強く、95%の資料語が語頭アクセントで生成されている。三拍語では、最も多く生成されているのは語中アクセントである(52%)。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の2%、三拍語では5%にとどまっている。二拍語では、無核(2%)も生成されにくい。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の72%である。

2) 標準語の影響

標準語と高い割合で一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。後接語の前、内容語の前の三拍単純名詞では、標準語のアクセント型が語中アクセントの語群は、他の語群に比べ語中アクセントで生成された数が多いというように、標準語の正の影響が現れている。標準語から負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は39%である。

各個人の傾向

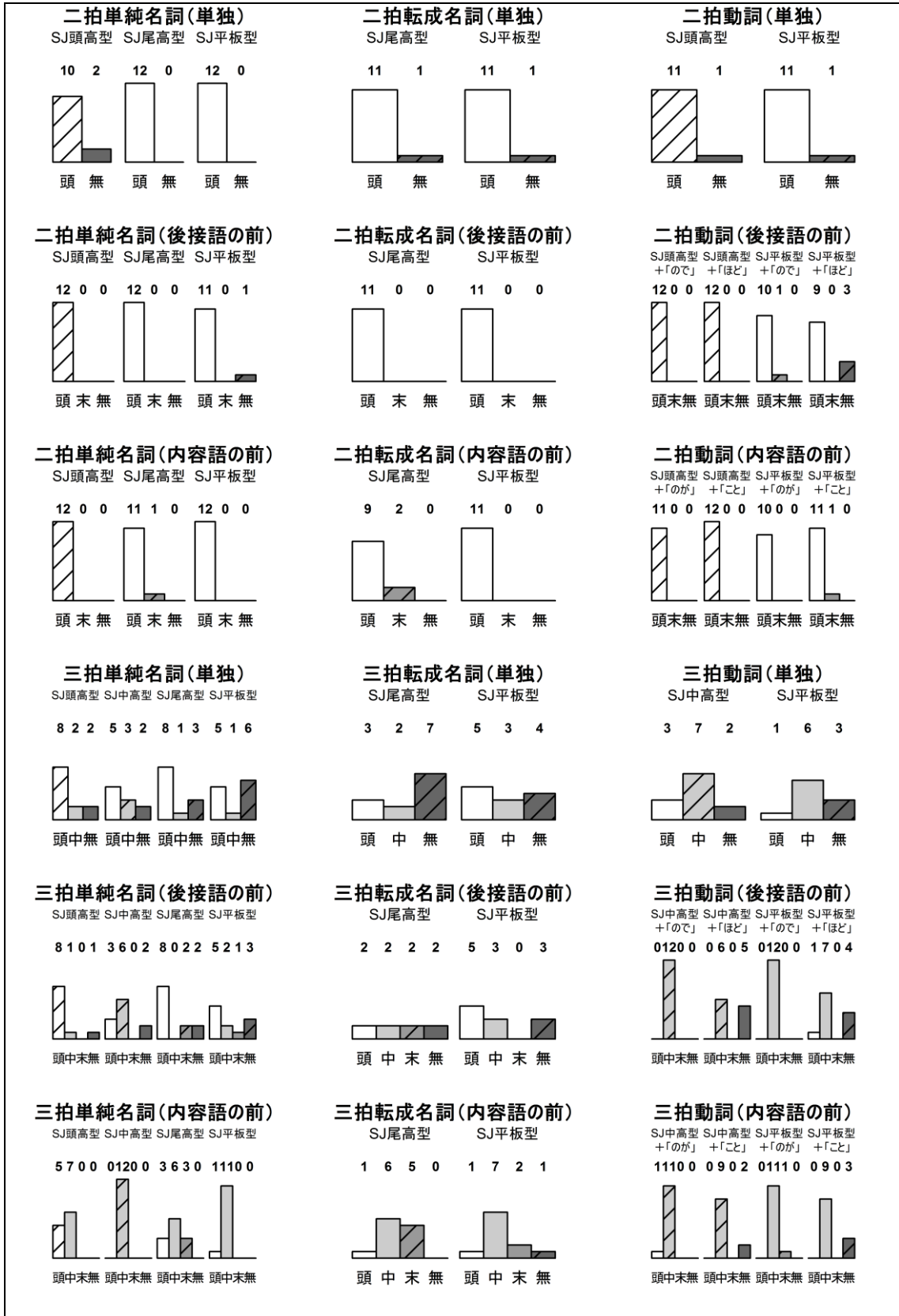


図 7-11 学習者 LF_LD が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

二拍語は語頭アクセントで生成される傾向が強い。一方三拍語はより複雑な傾向を示している。後接語の前の三拍動詞では、「ので」、「のが好きだ」の前で語中アクセントで生成される傾向が、「ほど」、「ことができる」の前で語中アクセントか無核で生成される傾向がある。内容語の前の転成名詞では、語中アクセントか無核で生成される傾向がある。内容語の前の単純名詞と転成名詞では、語中アクセントになる傾向があるが、語頭アクセントと語末アクセントも現れている。残りの資料語のタイプは、語頭アクセント、語中アクセント、無核のいずれかのアクセント型で生成されている。その中で、単純名詞では語頭アクセントが、動詞では語中アクセントが、単独の転成名詞では無核が比較的多くなっている。

7-4-6 学習者 LF_MB (図 7-12) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (73%)、三拍語では語中アクセント (42%) である。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の 6%、三拍語では 5%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 57%である。

各個人の傾向

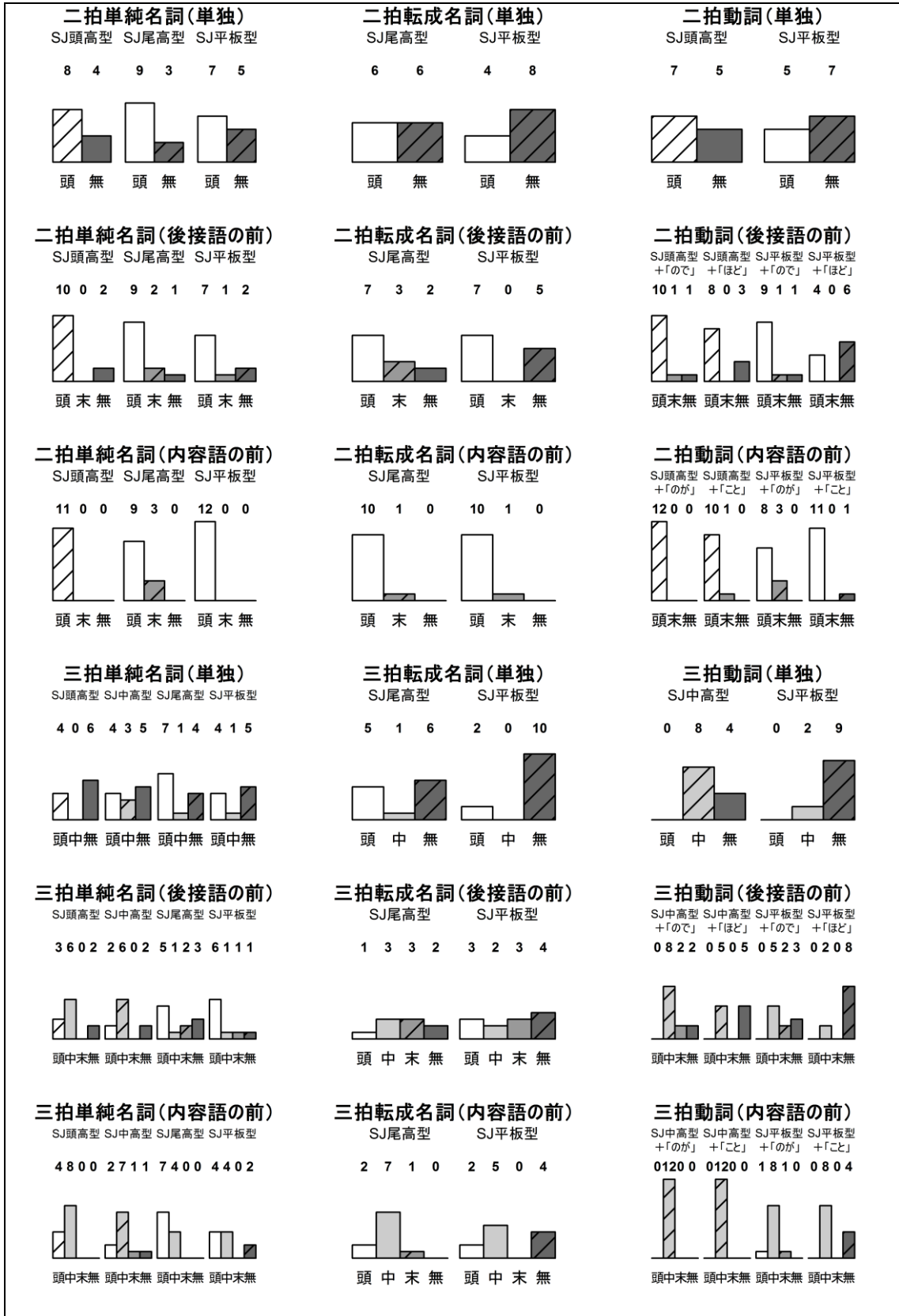


図 7-12 学習者 LF_MB が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

標準語と高く一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプは二つある。単独の三拍動詞、後接語の前の三拍動詞のそれぞれにおける語中アクセントと無核の対立である。さらに、後接語の前の二拍動詞、単独の三拍転成名詞⁸²、内容語の前の三拍転成名詞と動詞では、標準語のアクセント型が無核の語群は無核で生成されることが多いという標準語の正の影響が現れている。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は45%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

単独では、二拍語、三拍語の単純と転成名詞は、語頭アクセントか無核かのいずれかで生成される傾向がある。後接語の前、内容語の前の二拍語は語頭アクセントで生成される傾向が強くなる。三拍動詞は語中アクセントか無核で生成される傾向がある。後接語の前、内容語の前の単純名詞、転成名詞では、語頭、語中、語末アクセント、無核がすべて生成されており、特定のアクセント型で生成される傾向はない。

⁸² ただし単独の転成名詞に関しては、標準語では尾高型語も平板型語も無核で生成されるため、平板型の語群のみが無核で生成されやすい傾向を標準語の正の影響として解釈すべきかは明らかでない。

7-4-7 学習者 LM_JE (図 7-13) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (72%)、三拍語では語中アクセント (51%) である。生成されにくいアクセント型に関しては、10%以下で生成されているアクセント型は二拍語にはないが、三拍語では語末アクセント (5%) となっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 61% である。

2) 標準語の影響

標準語と高い割合で一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。三拍単純名詞では、単独では語頭と語中アクセント、内容語の前では語中アクセントと無核が標準語の正の影響を示している。さらに、後接語の前の二拍動詞では語頭アクセント、内容語の前の三拍転成名詞では無核が標準語の正の影響を示している。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は 45% である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

単独の二拍語、後接語の前の二拍単純名詞と転成名詞は、語頭アクセントで生成される傾向がある。後接語の前の二拍動詞、内容語の前の二拍語は、語頭アクセント、語末アクセント、無核のいずれかで生成されている。三拍語では、単独の単純名詞は語頭アクセント、語中アクセント、無核のいずれか、その他の資料語は、語中アクセントと無核のいずれかで生成される傾向がある。その中で、単独の転成名詞には無核が多く、後接語の前の転成名詞では語中アクセントが多くなっている。内容語の前の三拍動詞では、「ことができる」に先行する語群には語中アクセントと無核の両方が現れているが、「のが好きだ」の前では語中アクセントで生成される傾向が強くなる。

各個人の傾向

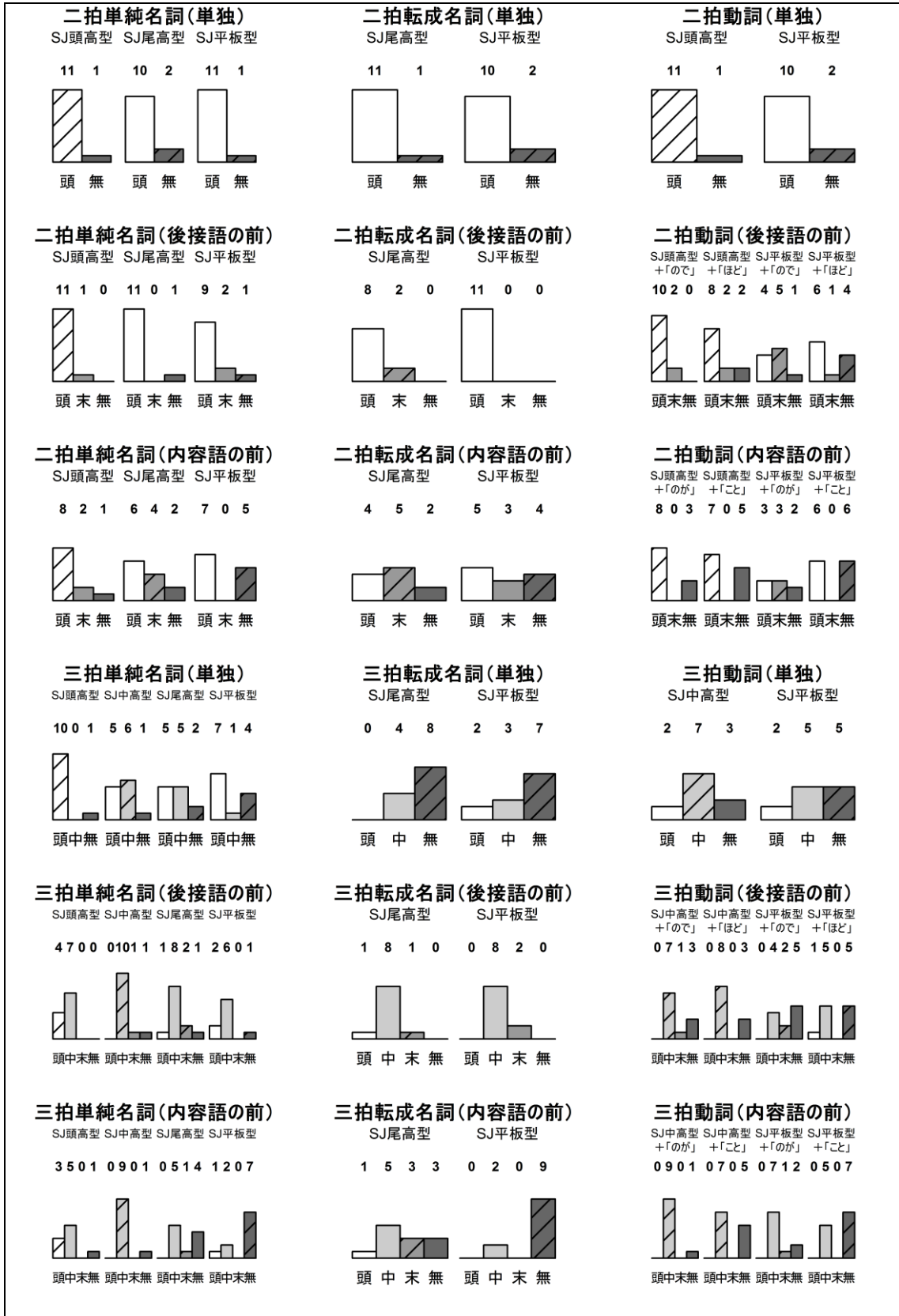


図 7-13 学習者 LM_JE が生成したアクセント型

7-4-8 学習者 LM_JO (図 7-14) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (62%)、三拍語では無核 (49%) である。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の 5%、三拍語では資料語の 9%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 45%である。

2) 標準語の影響

標準語と高い割合で一致するアクセント型の対立として、内容語の前の三拍動詞における語中アクセントと無核の対立がある。さらに、内容語の前の二拍と三拍転成名詞、後接語の前の三拍動詞では、無核と語末アクセントの数に標準語の正の影響が現れている。三拍語ではその他にも、単独と内容語の前の単純名詞では無核の数に、内容語の前の三拍動詞では語末アクセントの数に標準語の正の影響が現れている。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は 50%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

単独の二拍語では語頭アクセントと無核、その他の二拍語では、標準語の影響が現れている内容語の前の転成名詞を除いては語頭アクセントで生成される傾向がある。三拍語では、単独の転成名詞と動詞、後接語の前の転成名詞は無核で生成される傾向が、後接語の前と内容語の前の動詞は語中アクセントと無核で生成される傾向があるが、単純名詞では語頭アクセント、語中アクセントと無核がすべて現れている。

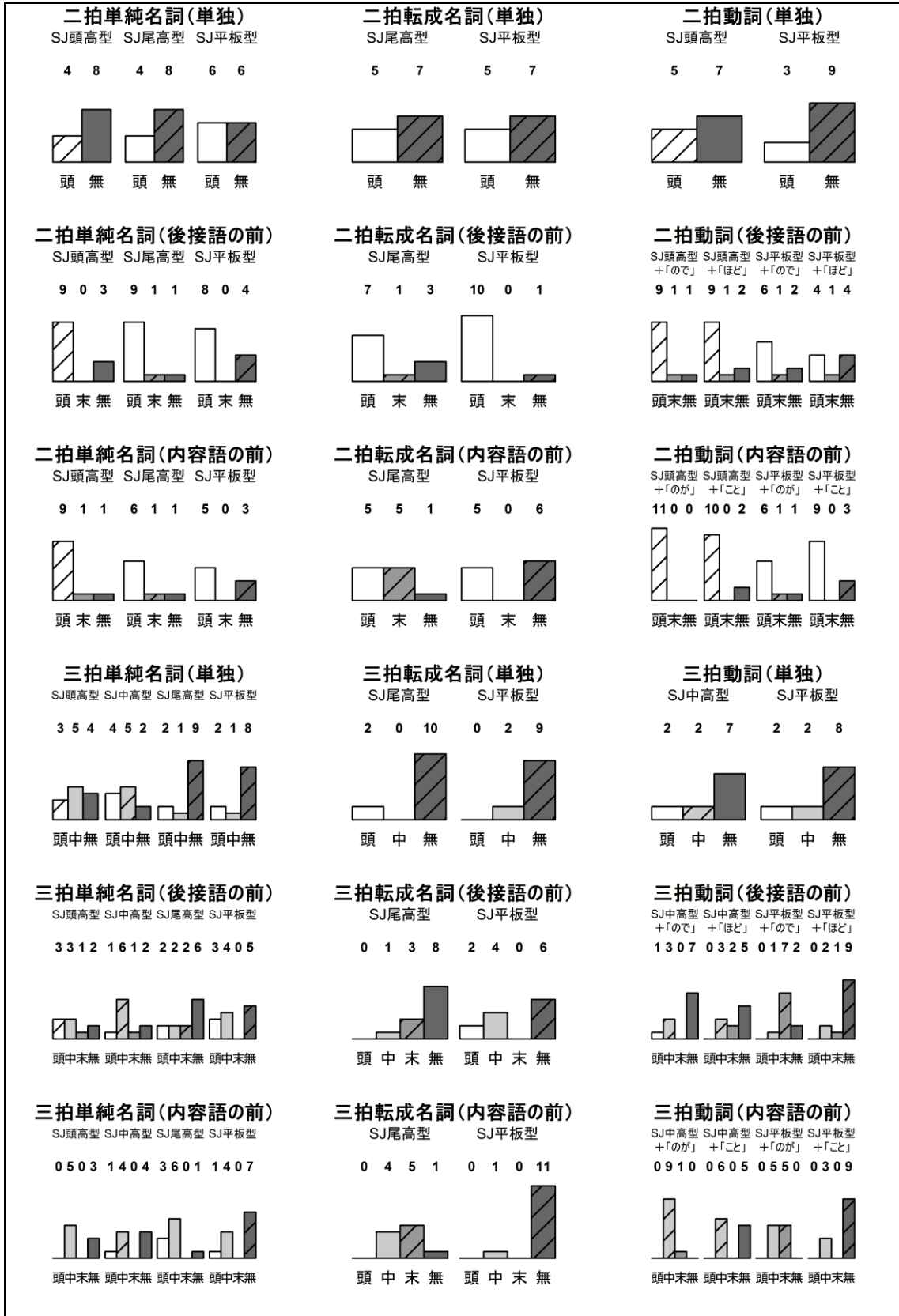


図 7-14 学習者 LM_JO が生成したアクセント型

7-4-9 学習者 LM_JR (図 7-15) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

二拍語では、最も多く生成されているのは無核 (45%) であるが、二番目に多い語頭アクセント (43%) とは有意な差がない ($\chi^2(1)=0.07, ns$)。三拍語では、語中アクセントが最も多く生成されている (55%)。生成されにくいアクセント型に関しては、10%以下で生成されているアクセント型は二拍語にはないが、三拍語では、語頭アクセントと語末アクセントが生成されにくく、それぞれ資料語の 1%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 50%である。

2) 標準語の影響

標準語と高い割合で一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。後接語の前の二拍動詞のうち、「ほど」に先行する標準語で無核の語群においては、他の語群と比較して語頭アクセントで生成されることが少ないという点で、正の影響が現れている。標準語から負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は 48%である。

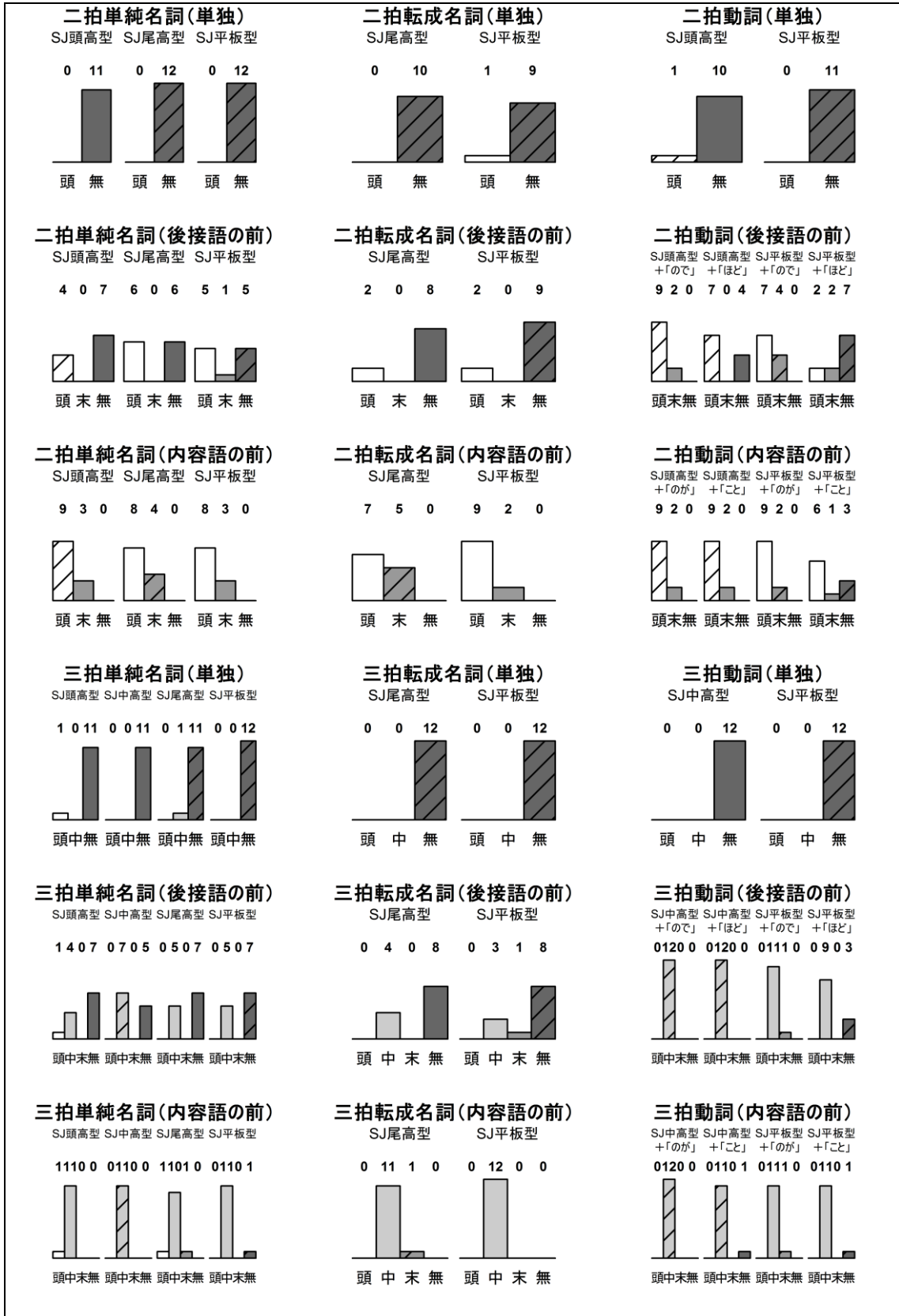


図 7-15 学習者 LM_JR が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

この学習者の場合、アクセント型の生成は高い体系性を示している。単独では、拍数を問わず無核の傾向がある。二拍語では、後接語の前の単純名詞と転成名詞、および「ほど」に先行する動詞は、語頭アクセントか無核かのいずれかで生成されている。一方「の」に先行する動詞、内容語の前の二拍語は、語頭アクセントか語末アクセントのいずれかで生成されている。三拍語では、単純名詞と転成名詞は後接語の前では語中アクセントか無核のいずれか、内容語の前では語中アクセントで生成されているが、動詞は後接語、内容語のいずれの前においても語中アクセントになる傾向がある。

7-4-10 学習者 LM_MD (図 7-16) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (67%)、三拍語では語中アクセント (83%) である。一方、無核は生成されにくく、二拍語では資料語の 7%、三拍語では 2%にとどまっている。三拍語では、語頭アクセント (8%) と語末アクセント (7%) も生成されにくい。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 76% である。

各個人の傾向

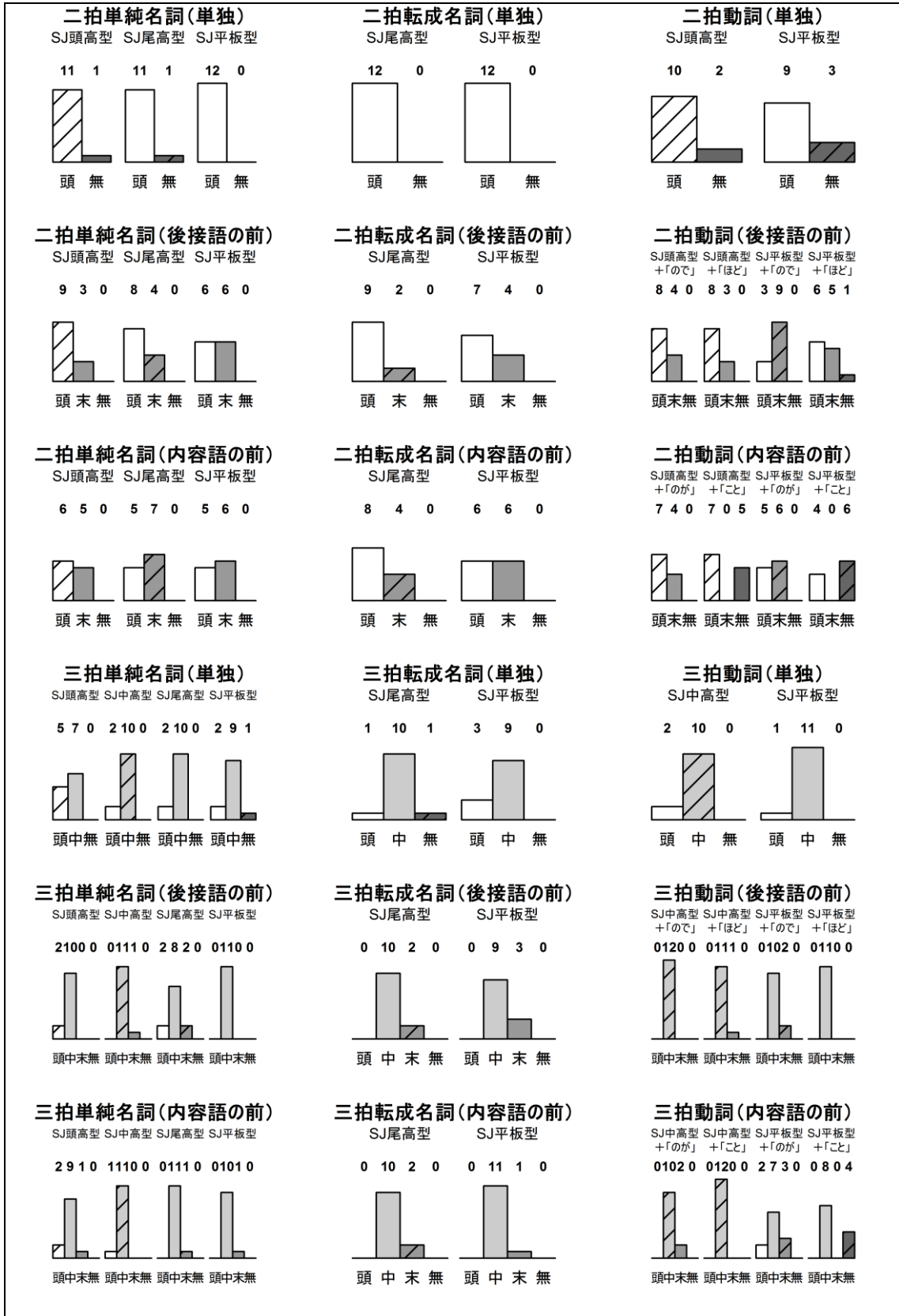


図 7-16 学習者 LM_MD が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

後接語の前の二拍動詞のうち、「ので」に先行する標準語で語末アクセントの語群においては、語頭アクセントで生成されやすい他の語群と比較して語末アクセントで生成されることが多い。その結果、語末アクセントと語頭アクセントの対立は、標準語と高い割合で一致していることとなる。さらに、内容語の前の三拍動詞では、無核の数に標準語の正の影響が現れている。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は36%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

単独の二拍語では語頭アクセントで生成される傾向が強い。後接語の前、内容語の前の二拍語では、語頭アクセントか語末アクセントのいずれかで生成される傾向が全体的にあり、「のが好きだ」に先行する動詞はこれにあてはまるが、「ことができる」に先行する動詞では、語末アクセントが現れず、語頭アクセントか無核のいずれかになる傾向がある。三拍語では、語中アクセントで生成される傾向が強い。

7-4-11 学習者 LM_MT (図 7-17) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

全体的に無核で生成される傾向が強く、二拍語では資料語の88%が、三拍語では94%が無核で生成されている。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の2%、三拍語では1%にとどまっている。三拍語では、語頭アクセント(0%)と語中アクセント(5%)も生成されにくい。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の7%である。

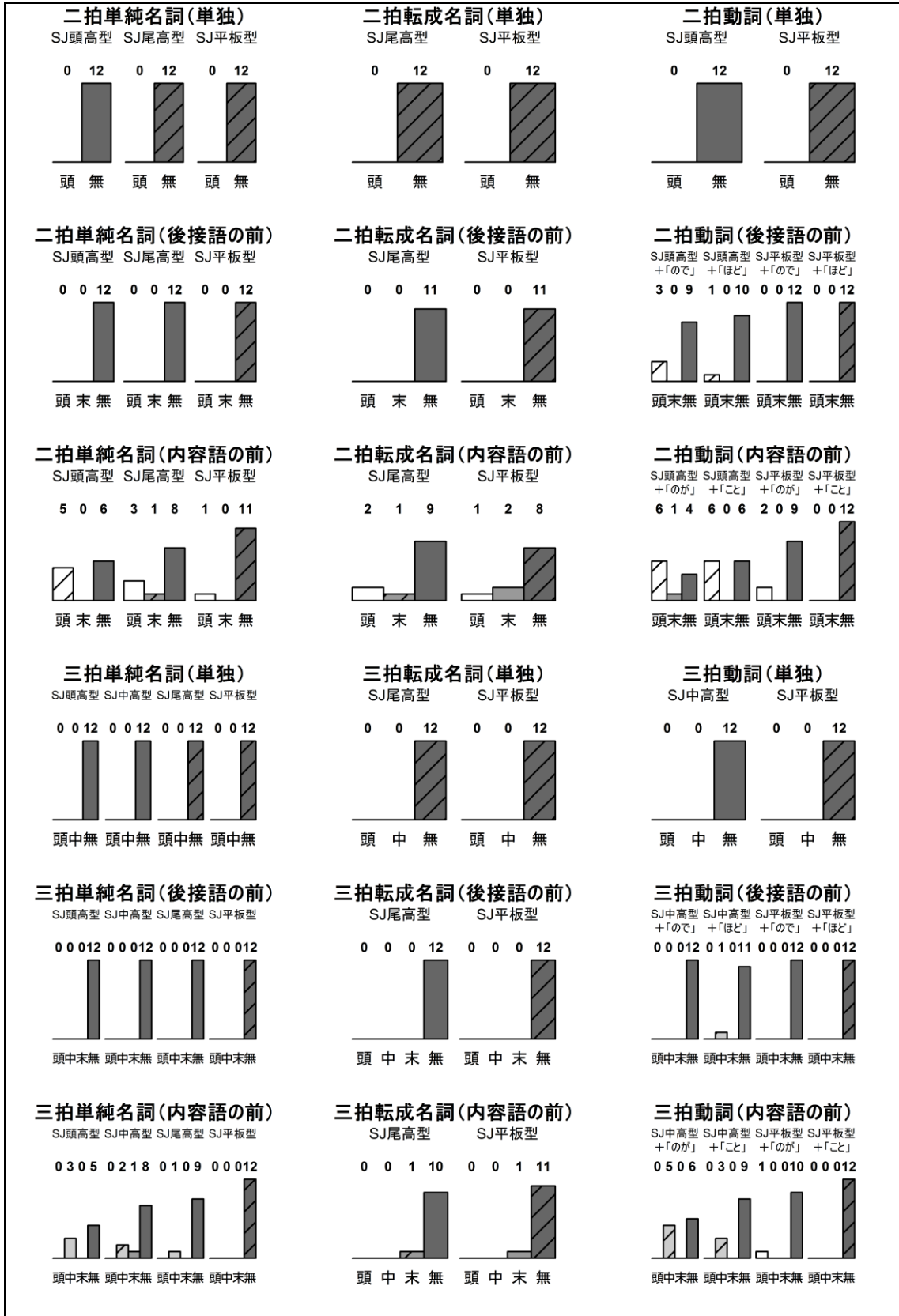


図 7-17 学習者 LM_MT が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

標準語と高い割合で一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。全体的には無核の傾向があるが、内容語の前の単純名詞と動詞では、標準語のアクセント型が無核でない場合には無核で生成されることがより少なく、二拍語では語頭アクセント、三拍語では語中アクセントで生成されている資料語もある。その結果、無核の数には標準語の正の影響が現れていることとなり、内容語の前の三拍動詞では語中アクセントの数にも標準語の正の影響が現れていることとなる。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は47%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

どの資料語のタイプでも、無核で生成される傾向がある。

7-4-12 学習者 LM_NB (図 7-18) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント(68%)、三拍語では語中アクセント(55%)である。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の7%、三拍語では3%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の61%である。

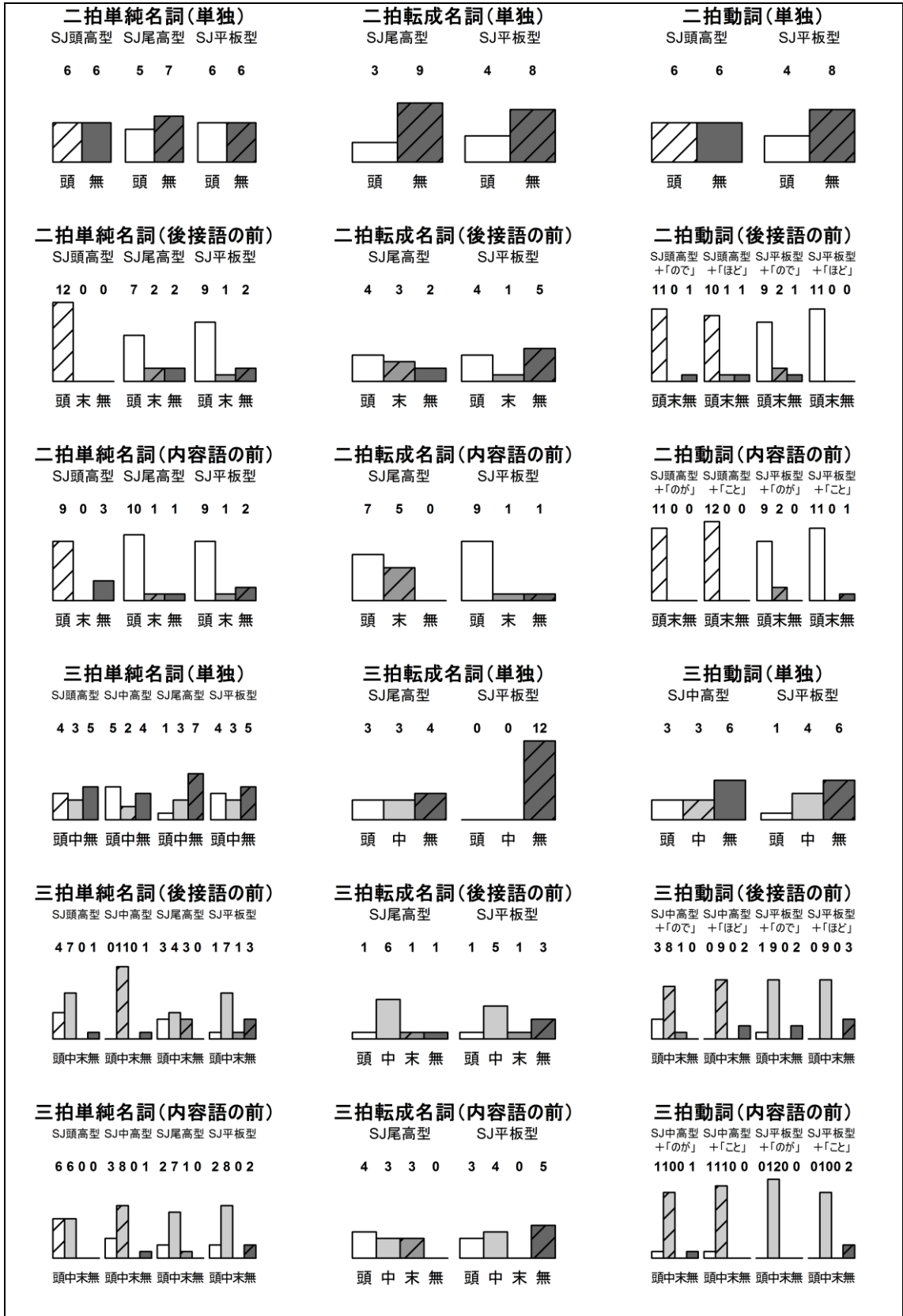


図 7-18 学習者 LM_NB が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

標準語と高く一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。後接語の前の二拍単純名詞のうち、標準語のアクセント型が語頭アクセントではない語群では、語頭アクセントの数が比較的少なくなっており、標準語の正の影響が現れている。後接語の前の三拍単純名詞においても、標準語のアクセント型が語中アクセントではない語群では、語中アクセントの数が比較的少なくなっているというように、標準語の正の影響が現れている。さらに、内容語の前の二拍転成名詞における語末アクセント、単独⁸³と内容語の前の三拍転成名詞における無核の数においても、標準語の正の影響が見られる。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は45%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

単独の二拍語は、語頭アクセントと無核のいずれかで生成されている。後接語の前の二拍転成名詞では、語頭アクセント、語末アクセント、無核がすべて現れており、はっきりとした傾向はない。しかしながら、後接語の前、内容語の前の単純名詞と動詞は、語頭アクセントで生成される傾向がある。三拍語では、後接語の前、内容語の前の単純名詞と動詞、後接語の前の転成名詞には語中アクセントの傾向がある。その他の資料語で

⁸³ ただし単独の転成名詞に関しては、標準語では尾高型語も平板型語も無核で生成されるため、平板型の語群のみが無核で生成されやすい傾向を標準語の正の影響として解釈すべきかは明らかでない。

は、語頭、語中、語末アクセント、無核が生成されており、はっきりした傾向はうかがえない。

7-4-13 学習者 MF_KW (図 7-19) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

二拍語では、語頭アクセントで生成される傾向が強く、資料語の 91%が語頭アクセントで生成されている。三拍語では、最も多く生成されているのは語中アクセントである (54%)。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の 1%、三拍語では 2%にとどまっている。二拍語では、無核 (8%) も生成されにくい。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 72%である。

2) 標準語の影響

標準語の正の影響は三拍語に比較的現れやすく、後接語の前と内容語の前では、語頭アクセントと語中アクセントの対立は標準語と高い割合で一致している。三拍語ではその他にも、単独の単純名詞における語頭アクセントの数、後接語の前の単純名詞における無核の数、後接語の前の転成名詞における語末アクセントの数においても標準語の正の影響が見られる。内容語の前の三拍転成名詞では、無核には標準語の正の影響が見られるが、標準語のアクセント型が語末アクセントの語群には、語中アクセントの数が多くなっているという標準語の負の影響も現れている。標準語との一致率は 43%である。

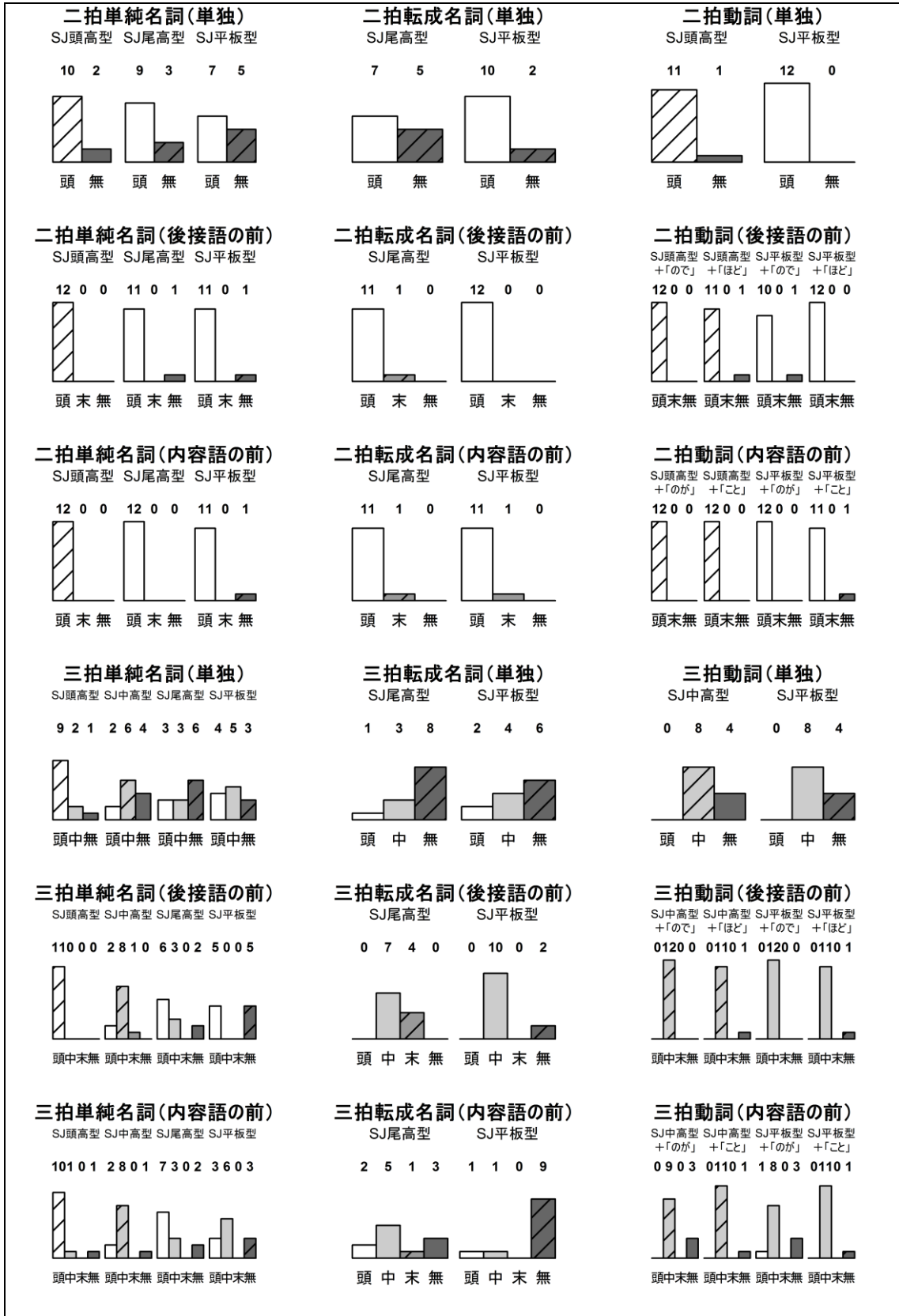


図 7-19 学習者 MF_KW が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

単独の二拍単純名詞と転成名詞は、語頭アクセントと無核のいずれかで生成されている。その他の二拍語では、語頭アクセントで生成される傾向が強い。三拍動詞では、後接語の前および「ことができる」の前では、語中アクセントになる傾向が強く、単独の場合、および「のが好きだ」の前では語中アクセントか無核で生成される傾向がある。転成名詞では、単独では無核、後接語の前では語中アクセントで生成される傾向がある。内容語の前の転成名詞、単独、後接語の前、内容語の前の単純名詞では、語頭アクセント、語中アクセント、無核がすべて現れている。

7-4-14 学習者 MF_NT (図 7-20) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (82%)、三拍語では語中アクセント (54%) である。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の 8%、三拍語では 3%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 67%である。

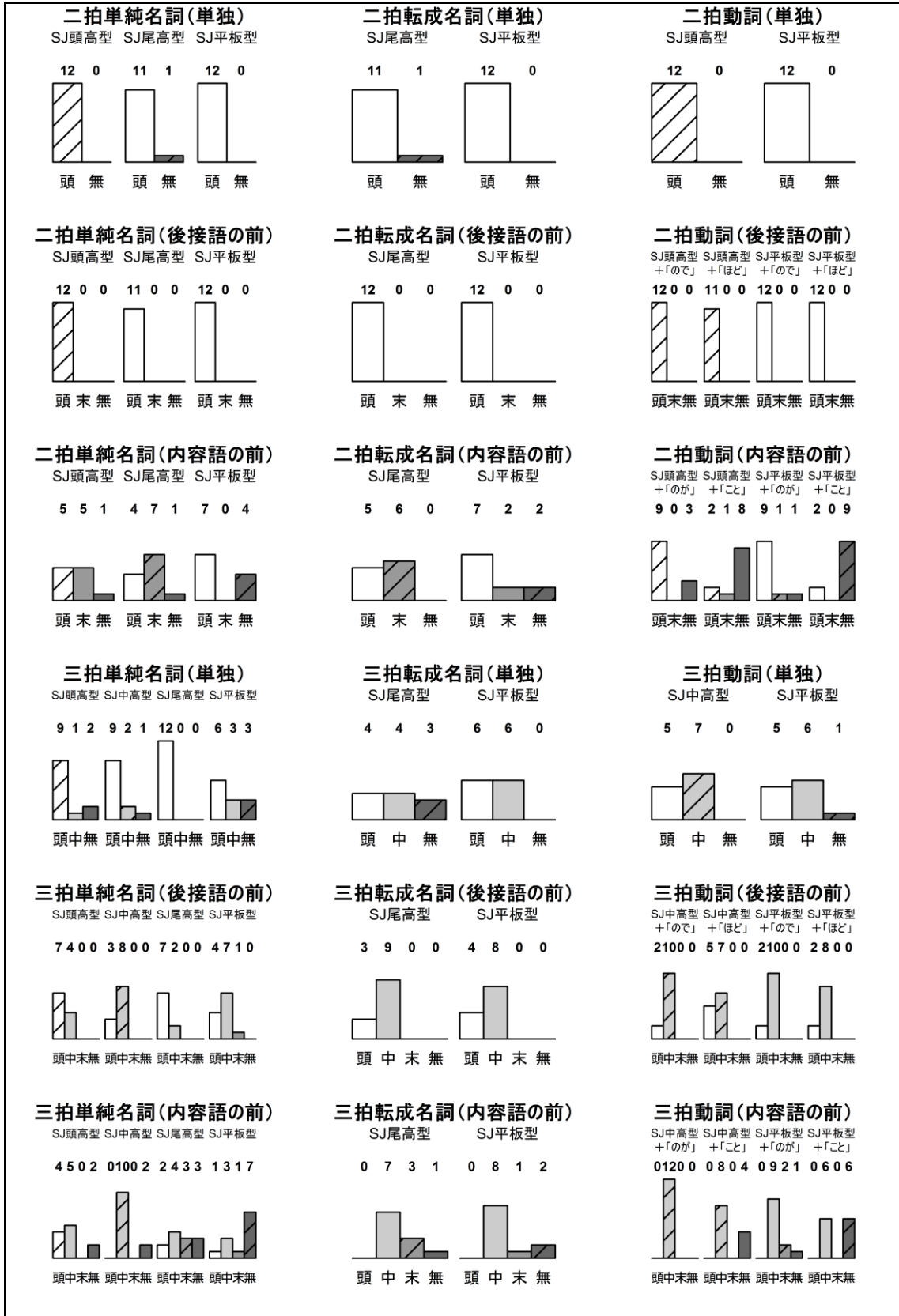


図 7-20 学習者 MF_NT が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

標準語と高い割合で一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない⁸⁴。標準語の正の影響は内容語の前の資料語に現れやすく、二拍の単純名詞と転成名詞では語末アクセントの数に、三拍単純名詞では語中アクセントと無核の数に正の影響が現れている。一方で単独の三拍単純名詞では、標準語のアクセント型が尾高型の資料語は、語中アクセントで生成されることが比較的多いという標準語の負の影響が現れている。標準語との一致率は36%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

二拍語では、単独と後接語の前では語頭アクセントで生成される傾向が強い。「のが好きだ」の前でも、語頭アクセントになる傾向があるが、「ことができる」の前では、無核の傾向がある。内容語の前の単純名詞と転成名詞では、語頭アクセントか語末アクセントで生成される傾向があるが、標準語のアクセント型が無核である語では無核も生成されている。三拍語では、内容語の前の動詞のうち、「のが好きだ」の前では語中アクセント、「ことができる」の前では語中アクセントと無核で生成される傾向がある。単独の単純名詞では語頭アクセントの傾向がある。内容語の前では、語中アクセントが生成されている。その他の三拍語では、語頭と語中アクセントが多くなっている。

⁸⁴ 内容語の前の二拍動詞では、語頭アクセントと無核が高く一致している語群があるが、「のが」の前では語頭アクセント、「こと」の前では無核という規則によってアクセント付与が行われた結果、偶然一致したと思われる。

7-4-15 学習者 MF_PH (図 7-21) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では無核（43%）、三拍語では語中アクセント（48%）である。生成されにくいアクセント型に関しては、10%以下で生成されているアクセント型は二拍語にはないが、三拍語では、語頭アクセント（7%）と語末アクセント（9%）は生成されにくい傾向がある。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の40%である。

2) 標準語の影響

標準語と高く一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。内容語の前の二拍単純名詞のうち、標準語が頭高型の語群では、語末アクセントの数が少なく、語頭アクセントの数が多くなっているというように、標準語の正の影響が現れている。さらに、後接語の前の三拍単純名詞における無核と語中アクセントの数、内容語の前の三拍単純名詞と転成名詞のそれぞれにおける無核の数、後接語の前の三拍転成名詞における語末アクセントの数においても、標準語の正の影響が見られる。一方で、後接語の前の二拍転成名詞のうち、標準語が語末アクセントの語群では無核の数が、標準語のアクセント型が無核の語群では語末アクセントの数が多くなっているというように、標準語の負の影響が現れている。標準語との一致率は48%である。

各個人の傾向

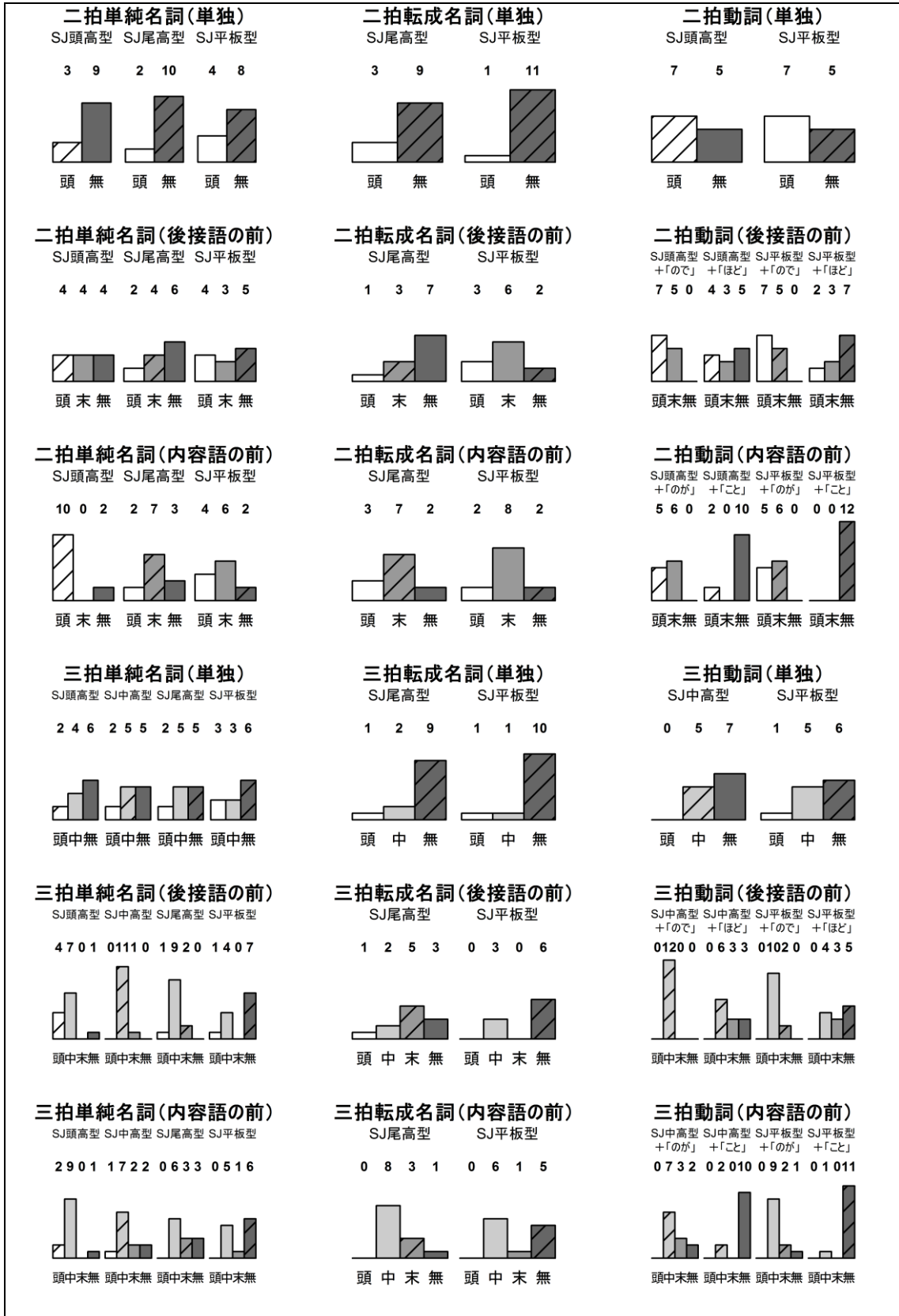


図 7-21 学習者 MF_PH が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

二拍語では、語頭アクセント、語末アクセント、無核のいずれも生成されている。その中で、単独の単純名詞と転成名詞、ならびに「ほど」と「ことができる」の前では、無核が比較的多く、「ので」と「のが好きだ」の前では語頭アクセントか無核かのいずれかで生成される傾向がある。三拍語では、全体的には語中アクセントと無核で生成される傾向があるが、「ので」と「のが好きだ」の前の動詞、後接語および内容語の前の単純名詞では語中アクセントが比較的多く、「ことができる」の前の動詞、単独の転成名詞では、無核が比較的多くなっている。

7-4-16 学習者 MM_DM (図 7-22) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (86%)、三拍語では語中アクセント (54%) である。語末アクセントと無核は生成されにくい傾向がある。語末アクセントは二拍語では資料語の 4%、三拍語では 2%にとどまっている。また、無核は二拍語では 10%、三拍語では 8%しか生成されていない。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 69%である。

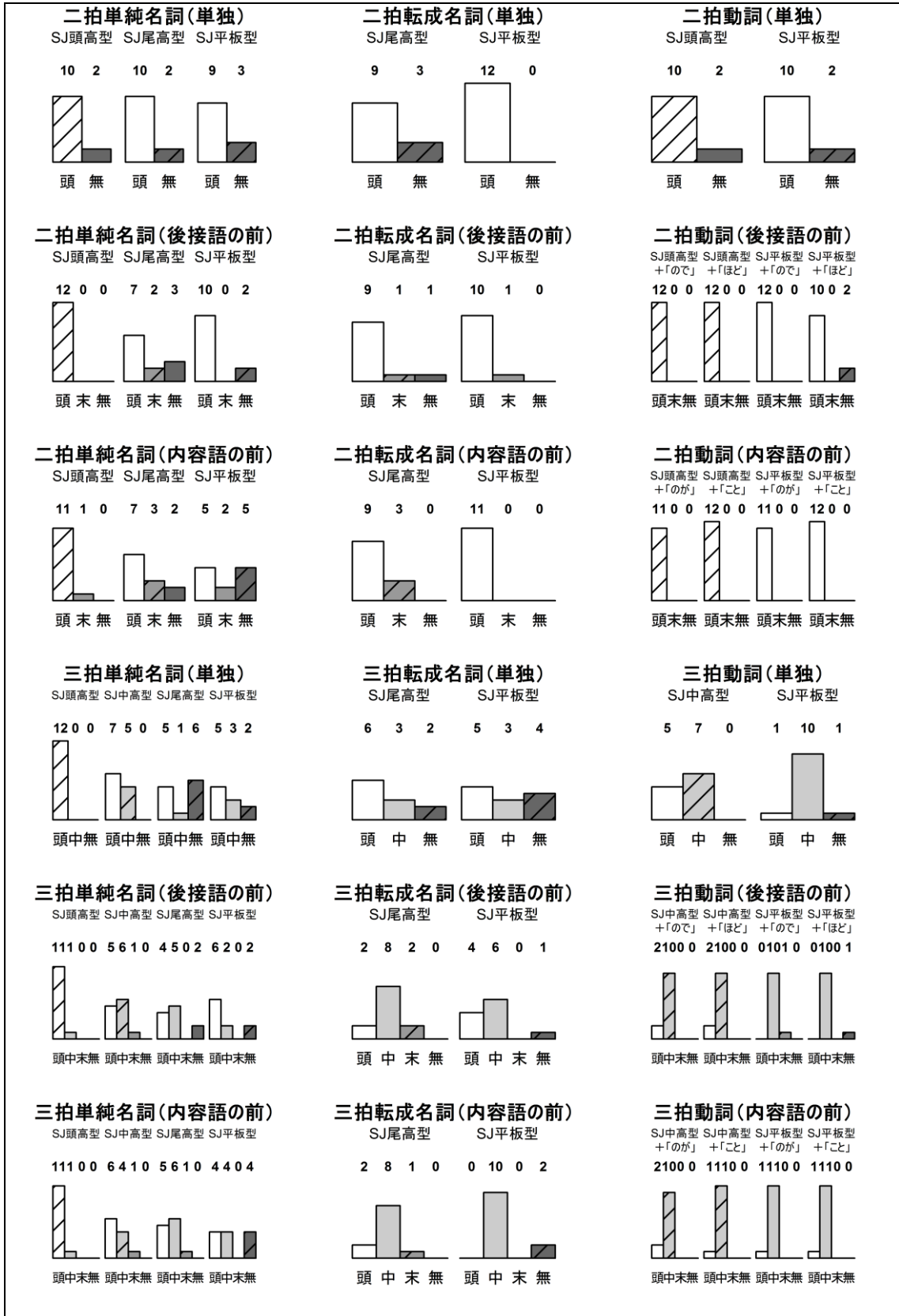


図 7-22 学習者 MM_DM が生成したアクセント型

2) 標準語との一致率

標準語と高く一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。標準語の正の影響は単純名詞に比較的現れやすい。内容語の前の二拍単純名詞、およびいずれの発話環境の三拍単純名詞では、標準語が語頭アクセントの資料語が語頭アクセントで生成されることが比較的多い。後接語の前の三拍単純名詞を除いては、上述の資料語のタイプには無核の数にも標準語の正の影響が現れている。一方で、単独の三拍動詞のうち、標準語のアクセント型が中高型の語群では語頭アクセントで生成された資料語の数が多く、平板型の語群では語中アクセントで生成された資料語の数が多くなっているというように、標準語の負の影響が現れている。標準語との一致率は40%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

二拍語は語頭アクセントで生成される傾向がある。標準語の影響が現れている内容語の前の二拍単純名詞以外はその傾向が強い。三拍動詞では、標準語では語中アクセントである語において語頭アクセントになる傾向が見られるのを除き、語中アクセントで生成される傾向がある。単純名詞には語頭、語中アクセントの両方が現れている。転成名詞は単独では語頭アクセント、語中アクセント、無核であるが、後接語の前、内容語の前の順に語中アクセントで生成される傾向が強くなる。

7-4-17 学習者 MM_DT (図 7-23) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているアクセント型は、二拍語では語頭アクセント(65%)、三拍語では語中アクセント(50%)である。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語

では資料語の 4%、三拍語では 2%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 57%である。

2) 標準語の影響

後接語の前の三拍単純名詞では、語頭アクセントと語中アクセントの対立は標準語と高く一致している。さらに、(a) 内容語の前の二拍転成名詞における語末アクセントと無核の数、(b) 内容語の前の二拍動詞、ならびに、後接語の前の三拍動詞のそれぞれにおける無核の数、(c) 単独の三拍単純名詞における語頭と語中アクセントの数、(d) 内容語の前の三拍動詞における語中アクセントの数はすべて標準語の正の影響を示している。単独の二拍転成名詞では、標準語のアクセント型が平板型である語群では無核で生成される資料語の数が比較的多いという標準語の正の影響も現れているが、標準語のアクセント型が尾高型である語群では語頭アクセントで生成されている資料語の数が比較的多いという標準語の負の影響も見られる⁸⁵。標準語との一致率は 41%である。

⁸⁵ ただし単独の転成名詞は標準語では尾高型語も平板型語も無核で生成されるため、標準語の影響と解釈すべきかは明らかでない。

各個人の傾向

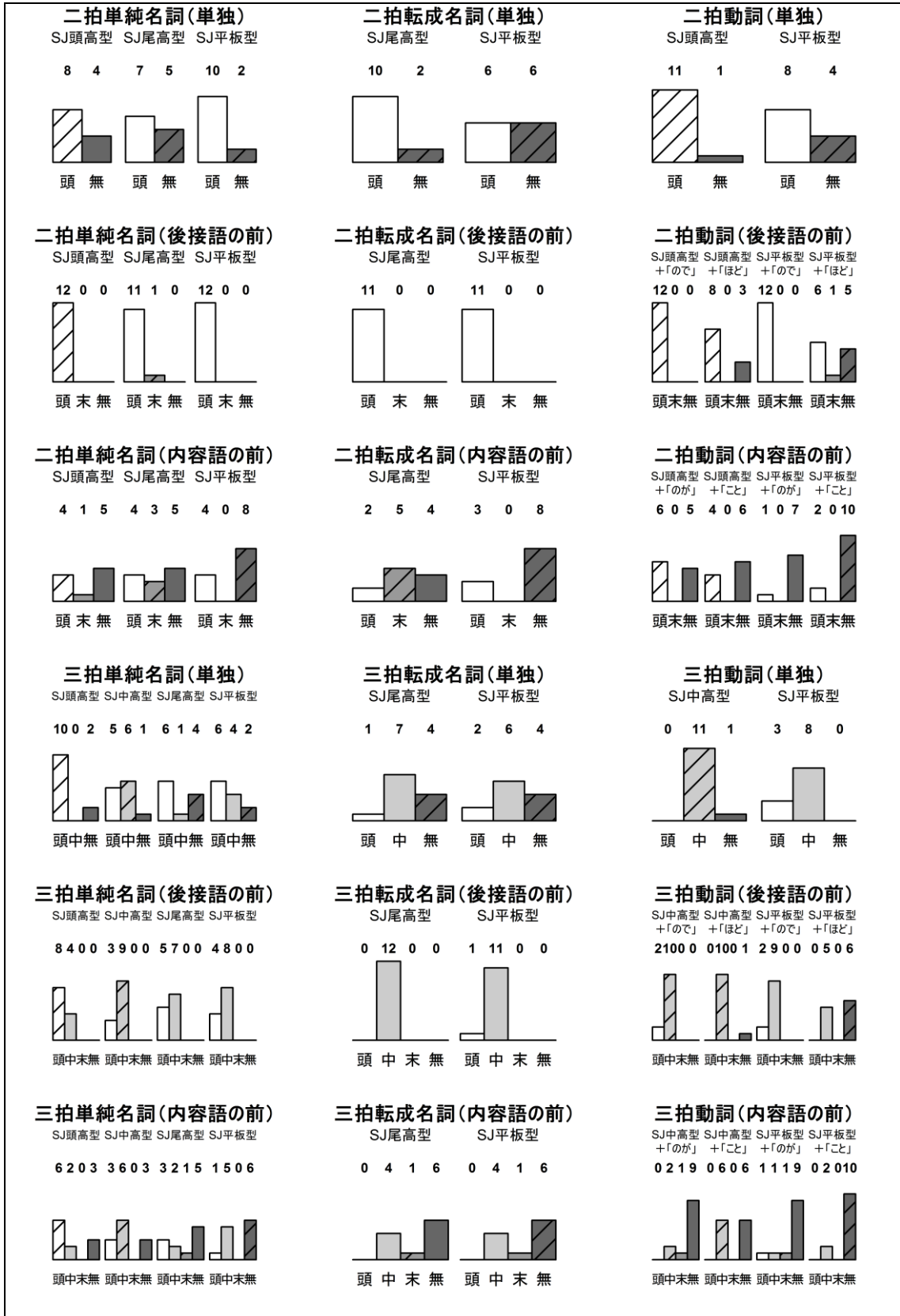


図 7-23 学習者 MM_DT が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

全体的には、単独、および内容語の前の資料語では、生成されている複数のアクセント型の一つとして無核が現れているが、後接語の前では無核が現れにくい傾向がある。後接語の前でも無核で生成されているのは、「ほど」の前の動詞のみである。二拍語では、単独と内容語の前では語頭と無核のいずれかで生成される傾向があるが、無核の傾向はどちらかといえば内容語の前で強くなっている。三拍語にも、内容語の前では無核が比較的多くなっているが、品詞による違いもある。語頭アクセントは単純名詞に現れやすく、転成名詞、動詞には現れにくくなっている。

7-4-18 学習者 MM_JB (図 7-24) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (82%)、三拍語では語中アクセント (56%) である。一方、語末アクセントは生成されにくく、二拍語では資料語の 3%、三拍語では資料語の 5%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 68% である。

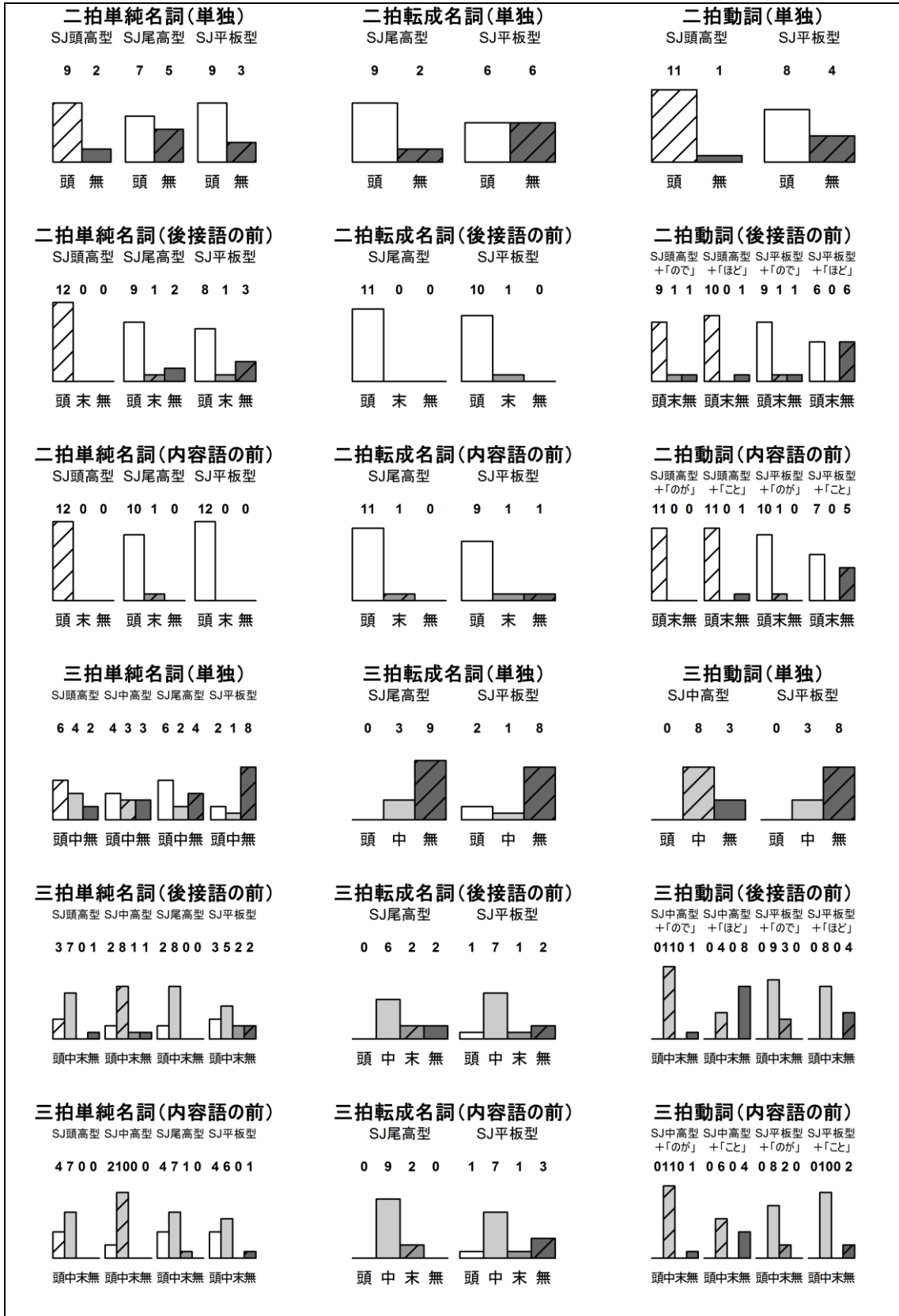


図 7-24 学習者 MM_JB が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

単独の三拍動詞では、語中アクセントと無核の対立は標準語と高く一致している。無核の数は標準語の正の影響を示していることが比較的多く、単独の二拍転成名詞⁸⁶、後接語、および内容語の前の二拍動詞、単独の三拍動詞では、無核で生成される資料語の数は標準語が無核である語群に比較的多くなっている。標準語からの負の影響を示す資料語のタイプはない。標準語との一致率は43%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

後接語、および内容語の前の二拍語では、語頭アクセントの傾向が強く、標準語からの正の影響として見られる無核の動詞を除き、ほとんど語頭アクセントで生成されている。単独では、語頭アクセントの他、無核も生成されている。後接語の前の三拍動詞では、「ので」の前では語中アクセント、「ほど」の前では語中アクセントか無核かのいずれかで生成されている。内容語の前では語中アクセントで生成される傾向がある。転成名詞は単独では無核、その他の発話環境では語中アクセントになる傾向がある。単純名詞も、後接語の前、内容語の前では語中アクセントになる傾向があるが、語頭アクセントもある程度生成されており、単独では語頭アクセント、語中アクセント、無核がすべて生成されている。

⁸⁶ ただし単独の転成名詞に関しては、標準語では尾高型語も平板型語も無核で生成されるため、標準語の正の影響と解釈すべきかは明らかでない。

7-4-19 学習者 MM_LH (図 7-25) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

最も多く生成されているのは、二拍語では語頭アクセント (72%) である。三拍語では、最も多く生成されているのは語中アクセント (35%) であるが、二番目に多い無核 (32%) とは有意な差がない ($\chi^2(1)=0.51, ns$)。語末アクセントは生成されにくく、二拍語でも三拍語でも資料語の 7%にとどまっている。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 53%である。

2) 標準語の影響

単独の三拍単純名詞では、語頭アクセントと無核の対立は標準語と高く一致している。さらに、(a) 内容語の前の二拍動詞における語頭アクセントの数、(b) 後接語の前の三拍単純名詞における語中アクセントの数、(c) 内容語の前の二拍単純名詞における語末アクセントの数、(d) 内容語の前の三拍転成名詞における無核の数はすべて標準語の正の影響を示している。一方、単独の転成名詞では、標準語のアクセント型が平板型である語群にのみ、語頭アクセントが現れているという標準語の負の影響がある⁸⁷。標準語との一致率は 48%である。

⁸⁷ ただし単独の転成名詞に関しては、標準語では尾高型語も平板型語も無核で生成されるため、標準語の影響と解釈すべきかは明らかでない。

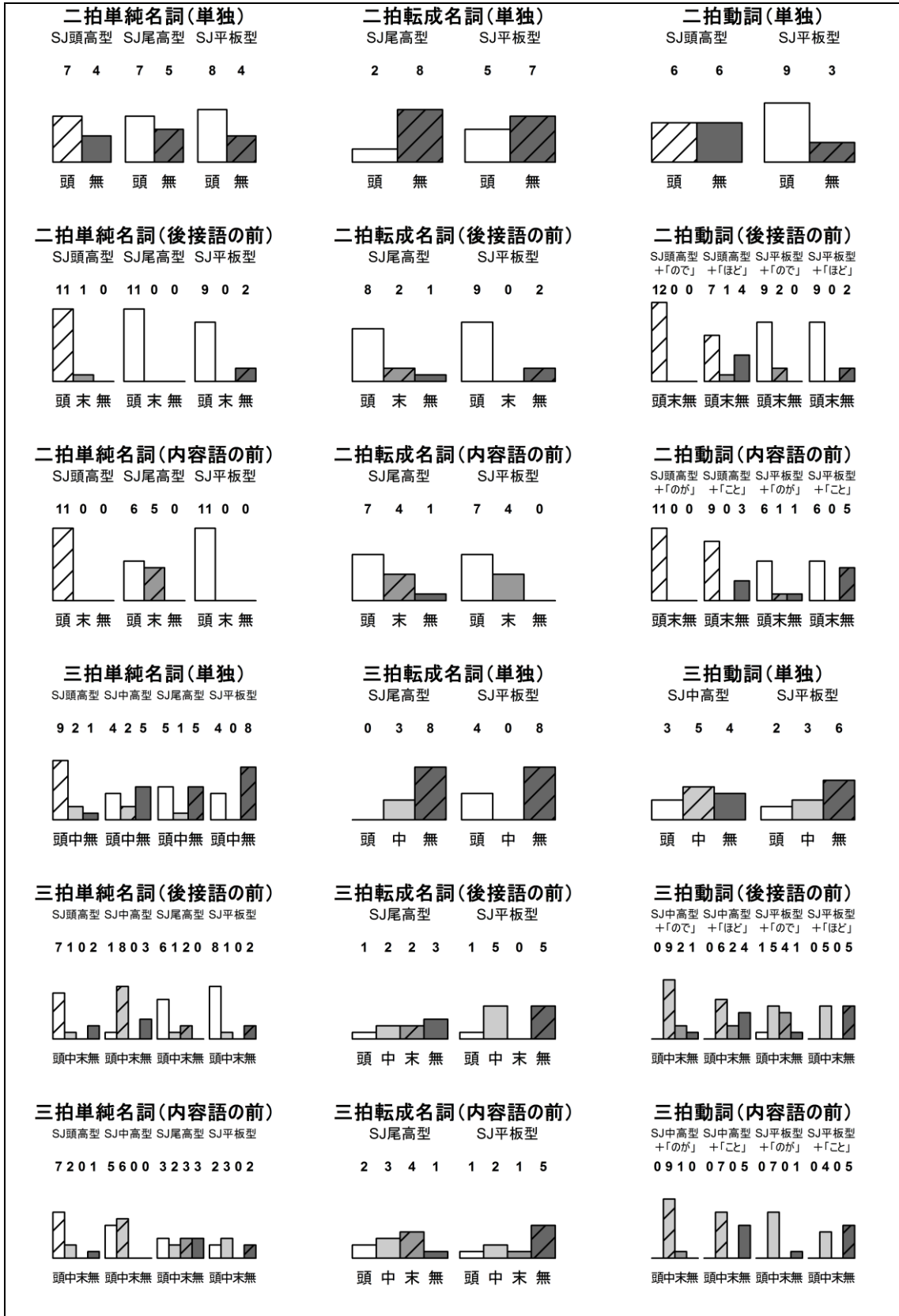


図 7-25 学習者 MM_LH が生成したアクセント型

3) 生成されたアクセント型の体系性

二拍語では、語頭アクセント、語末アクセント、無核がすべて生成されているが、無核は単独に集中しており、語末アクセントは内容語の前の単純名詞と転成名詞に集中している。三拍語では、「ことができる」の前の動詞では語中アクセントと無核で生成される傾向が、「のが好きだ」の前では語中アクセントになる傾向がある。他の三拍語では、語頭アクセント、語中アクセント、語末アクセント、無核がすべて生成されているが、語頭アクセントは単純名詞に集中しており、単独の転成名詞では無核の数が多くなっていく。

7-4-20 学習者 MM_TG (図 7-26) の傾向について

1) 生成されたアクセント型の割合

無核の傾向があり、二拍語では資料語の 73%が、三拍語では資料語の 70%が無核で生成されている。一方、10%以下で生成されているアクセント型は二拍語にはないが、三拍語では、語頭アクセント (4%) と語末アクセント (8%) が生成されにくい。語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合は全体の 18%である。

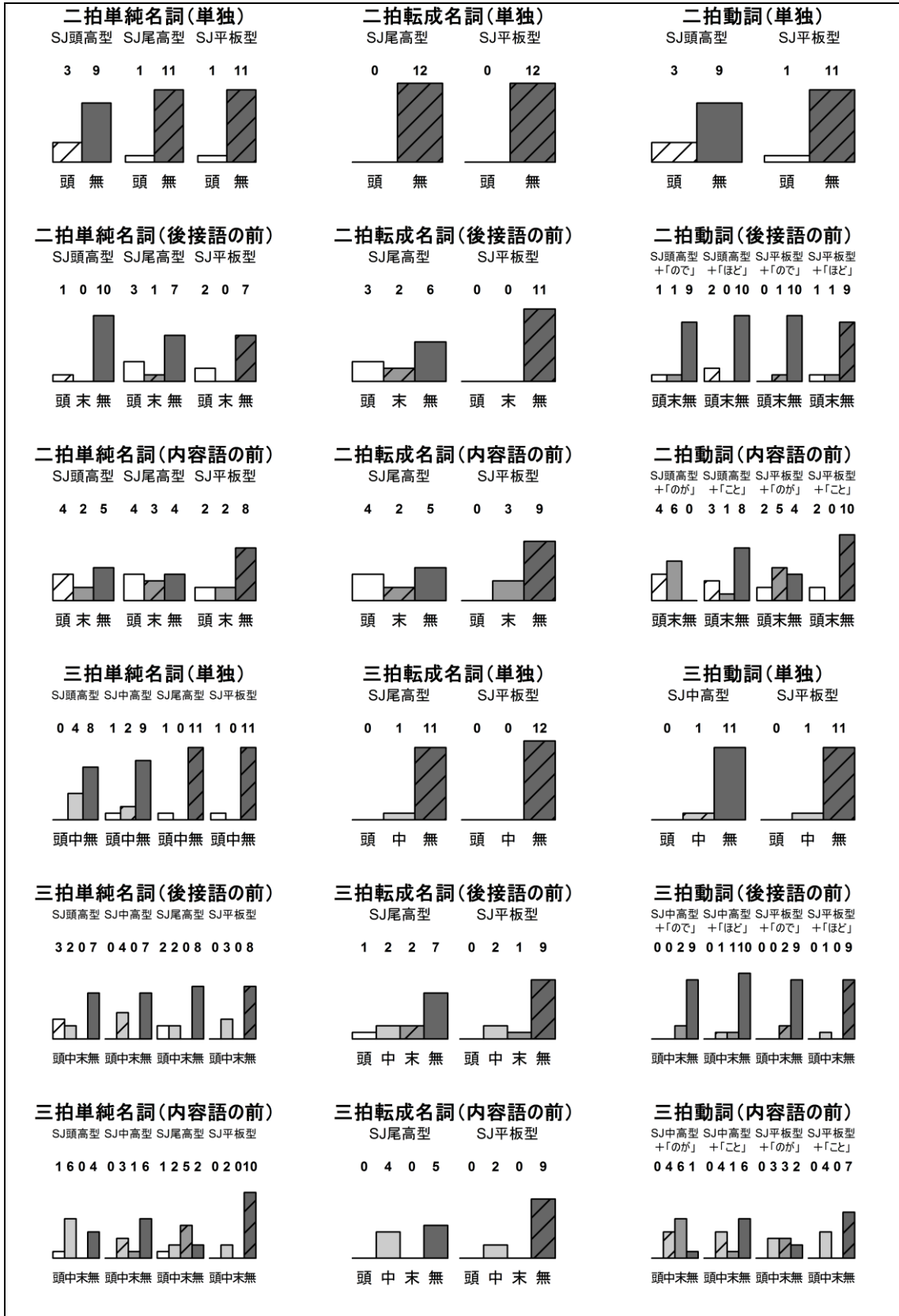


図 7-26 学習者 MM_TG が生成したアクセント型

2) 標準語の影響

標準語と高く一致しているアクセント型の対立を持っている資料語のタイプはない。全体的には無核で生成される傾向があるが、資料語のタイプによっては、標準語のアクセント型が無核である資料語と比較すると、標準語のアクセント型が有核である資料語は、無核で生成されにくいというように標準語の正の影響が現れている場合がある。後接語の前の二拍転成名詞、内容語の前の三拍転成名詞がその例である。内容語の前の三拍単純名詞では、無核だけでなく、語末アクセントの数にも標準語の正の影響が現れている。一方で、内容語の前の二拍転成名詞では、無核の数には標準語の正の影響が現れているが、標準語のアクセント型が尾高型である語群のみが語頭アクセントで生成されているという負の影響も現れている。標準語との一致率は48%である。

3) 生成されたアクセント型の体系性

全体的には無核の傾向がある。「のが好きだ」の前の動詞では、標準語のアクセント型が語末アクセントでなくても語末アクセントで生成される傾向がある。内容語の前の三拍転成名詞では語中アクセントか無核のいずれかで生成される傾向がある。

7-5 結果のまとめ

7-5-1 生成されたアクセント型の割合

各アクセント型がどの程度生成されたかは個人によって大きく異なる。21名のうち、11名(LF_GC、LF_LD、LF_MB、LM_JE、LM_MD、LM_NB、MF_KW、MF_NT、MM_DM、MM_DT、MM_JB)は語末から二拍目にアクセント核を置く傾向を示し、2名(LM_MT、

MM_TG)は無核で生成する傾向を示している。残りの学習者(LF_AG、LF_EP、LF_JW、LF_LC、LM_JO、LM_JR、MF_PH、MM_LH)は、最も多く生成されるアクセント型が拍数によって異なるか、もしくは、二番目に多いアクセント型と有意な差がなく、優先的なアクセント型がないという結果を示している。

第6章では、二つの学習者群には語末から二拍目にアクセント核を置く傾向があることを示したが、本章の結果から、語末から二拍目にアクセント核を置く割合は学習者によって大きく異なり(7%~76%;平均55%、標準偏差19)、最も多く生成するアクセント型が二拍語でも三拍語でも語末から二拍目のアクセント核である学習者は、約半分程度であるということが分かった。

語末から二拍目にアクセント核が置かれる割合だけではなく、どのアクセント型についても、生成される割合には大きな個人差がある。無核に関してはその差は顕著である(2%~91%;平均29%、標準偏差23)。語末アクセントは全体の傾向として生成されにくい、生成される割合には個人差があり(1%~30%;平均7%、標準偏差7)、LF_EPのように多用する傾向のある学習者もいる。三拍語では、全体の傾向として語頭にはアクセント核が比較的置かれにくい、このアクセント型に関しても、生成される割合には個人差があり(0%~45%;平均17%、標準偏差12)、LF_JWのように多用する学習者もいる。

7-5-2 標準語の影響

標準語との一致率は、経験の少ない学習者では32%~52%(平均43%、標準偏差6%)、経験の多い学習者群では36%~48%(平均42%、標準偏差5%)である。学習者による

差はそれほどなく、全体的に低い傾向となった。なお、アクセント体系が標準語と大きく異なる鹿児島での滞在経験を持つ MF_KW、および熊本での滞在経験を持つ MF_PH でも、他の学習者に比べ標準語との一致率が低いということはなく、MF_KW の場合は 43% と平均的であり、MF_PH の場合は平均以上となっている。

標準語と一致しやすい資料語のタイプとアクセント型は個人によって異なる結果となった。標準語と高く一致するアクセント型の対立を持っている学習者は次の通りである。語頭アクセントと語中アクセントの対立三名 (LF_JW、MF_KW、MM_JB)、語頭アクセントと無核の対立四名 (LF_AG、LF_LC、MM_LH)、語頭アクセントと語末アクセントの対立二名 (LF_EP、LM_MD)、語中アクセントと無核の対立 3 名 (LF_LC、LF_MB、LM_JO、MM_JB)、語末アクセントと無核の対立一名 (LF_EP) である。どの資料語のタイプのどのアクセント型が標準語から正の影響を示すかについても個人差がある。

標準語の影響は正の影響の他、負の影響として現れる場合もある。現れ方は学習者によって異なるが、最も多いパターンとしては、標準語のアクセント型が平板型である資料語が他の資料語より語頭アクセントで生成されやすい傾向 (LF_GC、MF_NT、MM_LH の三名)、標準語のアクセント型が語末アクセントである資料語が他の資料語より語頭アクセントで生成されやすい傾向 (LF_JW、LF_LC、MM_TG) がある。どの学習者も示している正の影響とは違い、負の影響に関しては学習者の約半分しか持っておらず、現れている資料語のタイプとアクセント型の数も少ない。

7-5-3 生成されたアクセント型の体系性

LM_MTはどの資料語のタイプでも、無核で生成する傾向がある。この一名を除いては、どの学習者でも、生成されるアクセント型と資料語のタイプの関係は、ある程度体系性を持っている。LM_JRにはその体系性が特に顕著であるが、他の学習者でも、その傾向を持っている。

生成されるアクセント型が具体的にどのように資料語のタイプによって異なるかは、個人差がある。学習者により、品詞、発話環境、付加語のそれぞれの影響が異なる。以下では、順に、その例を紹介していく。

発話環境の影響としては、以下の傾向が見られた。LF_AGは単独では無核、後接語の前、内容語の前では有核の傾向がある。LM_JRは単独では無核、後接語の前では無核と有核の両方、内容語の前では有核で生成される傾向がある。MM_DTは単独と内容語の前では無核と有核の両方が生成されるが、後接語の前では有核の傾向がある。

品詞に関しては以下の傾向が見られた。LF_GCとLF_LDはいずれも単独の三拍語において、品詞による傾向の違いを示している。LF_GCは単純名詞と動詞を語頭と語中アクセントで、転成名詞を語中アクセントで生成している。一方でLF_LDは語頭、語中アクセントと無核のすべてを生成しているが、単純名詞では語頭アクセントが、転成名詞では無核が、動詞では語中アクセントが多くなっている。LF_LCは後接語の前の二拍語において、単純名詞と転成名詞では主に語中アクセントと無核を使っているが、動詞の場合には無核で生成する傾向が強い。MM_DMは、内容語の前の三拍語のうち、動

詞と転成名詞には語中アクセントで生成する傾向が強く見られるが、単純名詞では語頭アクセントと語中アクセントの両方が現れている。

動詞の場合、生成されるアクセント型を、付加語によって変えるという学習者が 21 名のうち 8 名観察されたが、具体的な傾向は学習者によって異なる結果となった。その具体例としては、例えば次のものがある。LM_MD は「のが好きだ」の前では語頭アクセントと語末アクセント、「ことができる」の前では、語頭アクセントと無核になる傾向がある。MF_NT は「のが好きだ」の前では語頭アクセント、「ことができる」の前では無核になる傾向、MF_PH は「のが好きだ」の前では語頭か語末にアクセント核を置くが、「ことができる」の前では無核になる傾向がある。

各学習者の生成には、特に体系的である資料語のタイプ、標準語の影響が出やすい資料語のタイプがあるが、どの資料語のタイプがどのような特徴を見せるかも個人差がある。例えば、LF_AG は動詞全般に標準語の影響を示しているが、LM_JO が二拍語のうち標準語の影響を示しているのは内容語の前の転成名詞のみである。MF_KW が標準語の影響を示しやすいのは三拍の単純名詞であるが、MF_NT は品詞や拍数にかかわらず内容語の前で標準語の影響を示しやすい傾向を持っている。MM_DM は単純名詞の中の語頭アクセントが特に標準語の影響を受けやすくなっている。

どのような語がどのようなアクセント型で生成されるかは、各学習者が持つ体系によって異なることを述べてきたが、個々の学習者の体系では、語の種類と発話環境を統一しても、どの語も同じアクセント型で生成されるのではなく、複数のアクセント型が生成されている場合が多い。例えば、LF_MB、LM_JO、LM_NB、MF_KW、MM_PH、MM_LH は標準語のアクセント型を問わず、単独の二拍語を語頭アクセントか無核かの

いずれかで生成しており、LF_EP、LF_JW、LM_JR、LM_MD は後接語の前の二拍単純名詞と転成名詞を語頭か語末かのいずれかで生成している。

7-6 本章についての考察

本節では、本章の結果に基づき、標準語のアクセント型を語ごとに習得すること—すなわち音韻表象にエンコードすること—はどの学習者にも困難である可能性、さらに、各学習者は個人で独特のアクセント型の体系を作り出していることについて論じる。

本章の主な結果として次の二点がある。第一に、標準語との一致率はどの学習者も50%程度かそれ以下と低く、一致率は学習者間において差が小さいということである。第5章では、日本語の経験量の異なる二つの学習者群が生成したアクセント型ははいずれも標準語との一致率が低く、標準語のアクセント型にはそれほど影響されないということを示したが、本章では、この傾向はどの学習者にも共通しているということが分かった。この結果から、標準語のアクセント型を音韻表象にエンコードすることの困難さは、どの学習者にも共通した傾向である可能性が考えられる。

第二に示したのは、(1) 生成されやすい・されにくいアクセント型、(2) 生成されるアクセント型が拍数、品詞、発話環境、付加語といった諸要因から受ける影響、(3) 標準語と一致しやすい資料語のタイプやアクセント型という三つの項目はすべて個人によって異なるということである。久野(1998)では、多く用いられるアクセント型は個人によるということが報告されているので、本章の結果はそのことを追認する結果となっている。要因の影響が個人によって異なる点は、他の言語を対象としている先行研

究の結果から予測されていたが、本研究では、英語話者が生成する語アクセントには、それぞれ独特の体系があるという点が新しい知見となっている。

英語話者によって生成されるアクセント型の傾向が拍数、品詞、発話環境、付加語といった要因に影響を受けているという結果から、アクセント付与はある程度中間言語の規則に従って行われているという可能性が示唆される。しかしながら、各個人の体系では、語の種類と発話環境を統一しても、どの語も同じアクセント型で生成されるのではなく、複数のアクセント型が生成されている場合が多い。これらの結果の意味については、二つの学習者群を対象とした第6章の結果と照らし合わせ、次章で述べる。

さらに本章の結果として、標準語の影響は負の影響として現れる場合があるという結果がある。数人の学習者には、平板型もしくは尾高型の語が他の語より語頭アクセントで生成されやすいという傾向が見られた。これについても、次章で考察する。

なお、ここで分析方法について再度述べるが、本章では、資料語のタイプが同じで、標準語のアクセント型の異なる語群の間で、生成されるアクセント型の数に差がある場合、「標準語の影響」として記述した。これについては、標準語の影響ではなく、偶然生じた可能性もあると考えられる。現れた影響はほとんど正の影響であり、負の影響が少ない点から、偶然ではない影響が高いと思われるが、偶然に生じた場合もある可能性は排除できないと思われる。

第 8 章

全体のまとめと考察

本論文では、日本語の語アクセントの第二言語習得に焦点を当て、英語話者が日本語の語アクセントをどのように習得するかを調査するために音読調査を行い、生成されるアクセント型の傾向を分析したところ、語がどのアクセント型で生成されるかは標準語におけるアクセント型にはそれほど影響されず、第一言語が英語で共通していても、第二言語の日本語では、語アクセントの特徴は様々であるという結果が得られた。本章では、第 5 章～第 7 章で報告したこのような分析結果に基づき、英語話者はどのように日本語の語アクセントを習得するかについて考察する。

本研究の目的は、英語話者が生成する語アクセントについて、次の三点を明らかにすることであった。(1) 標準語のアクセント型はどのように、またどの程度語ごとに習得されるか、(2) アクセント付与はどのように、またどの程度規則に従って行われるのか、(3) アクセント生成は日本語の経験量および個人差によってどのような影響があるか、という三点である。本章の流れとしては、(1) の語ごとの習得、(2) の規則によるアクセント付与について順に考察していき、(3) の経験量および個人差については(1) と(2) の項目ごとに述べていく。

具体的には以下のことを述べる。まず(1) について、ピッチを語の特徴として解釈するのが困難であるためか、英語話者にはアクセント型を音韻表象にエンコードすることが困難であることを論じる。次に(2) については、アクセント付与は複数の要因の競合により行われ、その詳細は各学習者独特のアクセント体系に従うということを論じ

る。また、この二点に基づき、本研究の結論として、各学習者はアクセント型の音韻表象を持たないことにより、主に非予測的であるアクセント体系を持つ標準語から規則性を探ろうとし、学習者独特のアクセント体系を形成するということを主張する。本章の最後に、本研究の結果が日本語教育にどのように応用できるかについて言及し、今後の課題を述べる。

8-1 語ごとの習得

本論文の第5章では、語がどのアクセント型で生成されるかは、標準語におけるアクセント型にはそれほど影響されないという結果から、語ごとの習得—すなわち標準語のアクセント型を語ごとに音韻表象にエンコードすること—は英語話者には困難であるということを論じた。さらに第7章では、標準語との一致率が低いという結果はどの学習者にも観察されたことから、標準語のアクセント型を音韻表象にエンコードすることの困難さは学習者に共通の傾向であることを論じた。これを踏まえて本節では、標準語のアクセント型を音韻表象にエンコードする際の困難さについて、ピッチを語の特徴として解釈することが英語話者にとって困難であることが原因として考えられるということ論じる。次に、語アクセントの生成結果の説明として考えられる他の可能性を挙げ、それらがなぜ排除できると考えるかについて述べる。最後に、各個人が持つ音韻表象とは具体的にどのようなものかを明らかにすることが課題として残されていることを述べる。

英語話者にとって日本語の語アクセントを音韻表象にエンコードすることが困難であるとすれば、フランス語話者とは類似の現象であることになる。第3章で述べたよう

に、フランス語の母語話者、ならびにフランス語を母語とするスペイン語学習者は語ストレスを音韻表象にエンコードすることに困難を示すと言われている (Dupoux et al., 1997, 2001, 2008)。語ストレスを音韻表象にエンコードできない理由として、Dupoux et al. (2008, p.701) はフランス語には対立的な語レベルのプロソディがないことに原因があると述べている。しかしながら、フランス語とは違い、英語には語ストレスという対立的な語レベルのプロソディがある。したがって少なくとも英語話者が日本語を習得する場合には、第一言語に語ストレスがあることは、第二言語での語アクセントが習得できる十分条件とはならないということが示唆される。

英語に語ストレスがあっても、日本語の語アクセントを音韻表象にエンコードすることが困難である原因は、ピッチを語の特徴として解釈することが困難であることにある可能性が考えられる。このように考えるのは次の理由による。数多くの研究から、英語母語話者は語ストレスを語認識に用いることが明らかになっている (Cutler et al., 1997, pp.148-155 のレビューを参照)。しかしながら、ストレスパターンの語認識に最も大きく影響するのは、ピッチ、長さ、大きさのような韻律的要素ではなく、完全母音と弱化母音の音質の違いという分節的要素である可能性が示唆されている (Cooper et al., 2002, p.223)。英語では、ストレスパターンが異なる語ペアでは、ストレスの位置に伴って母音の音質の違いもある語が多いが、"insight"と"incite"のように、ストレスパターンが異なり、完全母音が二つあるため分節音の違いがない語ペアもいくつかある。Cutler (1986) は、プライミングタスクを行った結果、このような語ペアは英語母語話者にとっては同音意義語の働きを示している。

日本語の語アクセントは、ピッチのみで実現され、音質の違いがないため、英語話者にも、語レベルの対立があることに気付くのが困難である可能性が考えられる。その結

果、日本語学習者の音韻表象では、「雨」と「飴」のように、分節音が同じで、アクセント型が異なる語は、英語話者にとっては同音意義語になってしまうと推測できる。しかしながら、英語話者には、ピッチの上がり下がりが知覚できないと論じようとしている訳ではない。第2章で述べたように、英語ではピッチがイントネーションに重要な役割を果たす。ここで主張していることは、ピッチを語の特徴として解釈することが困難である可能性があるということである。

以上では、日本語の語アクセントを音韻表象にエンコードすることが英語話者にとって困難である原因について論じてきたが、本研究において報告した語アクセントの生成結果の説明としては、本論文で論じた以外の可能性を考えることもできる。第一に、学習者が習得しているのは標準語ではなく、日本語の他の方言である可能性がある。第二に、語アクセントは語ごとに音韻表象にエンコードされるが、生成の段階では、音韻表象の通りに実現されないという可能性がある。以下では、これらの可能性が本論における説明から排除される理由を述べる。

本研究では、標準語との一致率が低い点、標準語の影響が生成に現れにくい点から、音韻表象へのアクセント型のエンコードは困難であると結論づけている。この結論の背景には、序論でも述べたように、調査参加者が習得しているのは日本語の方言のうち、標準語であるという前提があり、他の方言を習得している可能性が排除されるのは、次の理由による。調査参加者は教材やメディア放送などを通して標準語と確実に接していると予想される。留学経験を有する経験の多い学習者群—特にアクセント体系が標準語と異なる地域に滞在した経験のある二名—については、他の方言にも接している可能性は高いと思われる一方で、経験の少ない学習者群に関しては、日本の滞在経験があっても旅行程度であるため、標準語以外に他の方言と接している可能性は比較的低いと思わ

れる。しかしながら、第5章と第6章で見たように、二つの学習者群は非常に似通った傾向を示している。さらに、アクセント体系が標準語と異なる地域に滞在した経験のある二名については、第7章で見たように、標準語との一致率は平均的か、もしくは平均以上であった。これらの点から、学習者群全体について、習得しているのは主に標準語であるという前提は妥当であると考えられる。したがって、標準語の影響が生成に現れにくいのは、他の方言が習得されているためではなく、言語的な困難さに原因があると考えた方が妥当であると思われる。

語アクセントの生成結果に対する別の説明として、音韻表象にエンコードされたアクセント型が、生成の段階で、音韻表象の通りに実現されないという可能性が挙げられるが、これも、第7章の分析結果に基づく次の理由により排除される。第一に、どの学習者も、複数のアクセント型を生成しているという結果がある。つまり、標準語との一致が低いのは、複数のアクセント型が生成できないためではない。第二に、各学習者のアクセント生成には、ある程度の体系性が観察されている。これは、アクセント付与に必要なピッチのコントロールは不可能ではないということの意味する。第三に、拍数、品詞、発話環境を統一した語群の場合でも、どの学習者にも複数のアクセント型が見られる。このことから、中間言語のアクセント付与規則が強すぎるために、同じ条件（拍数、品詞、発話環境）の語には、複数のアクセント型を付与することができないという可能性は排除できると思われる。以上の三点から、標準語の影響が現れにくいという結果は、生成のみに原因があるのではなく、音韻表象に原因があると考えられる。つまり、学習者は複数のアクセント型を生成でき、アクセント付与もコントロールできるが、どの語にどのアクセント型を付与すればいいかが分からないということになる。

本研究の結果から、標準語のアクセント型の影響が生成に現れにくいのは、日本語の経験量が長くなっても、残る傾向である。本研究で対象とした二つの学習者群では、経験量の差異に関わらず標準語との一致率は同程度であった。この背景には二通りの説明が考えられる。一つ目は、標準語から習得できることは習い始めてすぐ習得し、それ以上上達しないという可能性である。その場合、日本語を一年程度学習者している経験の少ない学習者群でも、英語話者に可能な習得はすでにしているため、経験のより多い学習者群とは差異がないこととなる。二つ目の可能性は、語アクセントの習得には十年や二十年など、より長い学習年数を必要とする可能性が挙げられる。この二つを検討するのは今度の課題となるが、日本語を約四年間学習者している経験の多い学習者群でも、標準語との一致率が低いという結果は、日本語の語アクセントがどれだけ習得されにくいかを意味すると思われる。

本節では、アクセント型を音韻表象にエンコードすることが困難であるということを論じたが、不可能ではないことも明確となった。語の種類と発話環境によっては、標準語との一致率が低いものの、標準語の影響を示しているものもあった。さらに二つの学習者群では、語頭アクセント、語中アクセント、語末アクセント、無核のそれぞれのアクセント型には、日本語の影響がある程度見られ、難しいと言われている無核と語末アクセントでも、習得の証拠が観察された。

標準語から何が習得され、何が習得されないかは学習者による結果となった。各個人の分析の結果、標準語の影響を示しやすいアクセント型および、示しやすい種類の語と発話環境には、個人差があることが明らかになった。Nagano-Madsen (2000) では、英語と同じストレス言語であるスウェーデン語を母語とする日本語学習者には、アクセント核の位置を一拍遅く知覚する傾向があるとされている。本研究では、二つの学習者群

全体には、このような傾向は一定したものとしては現れなかったが、数人の学習者には、平板型もしくは尾高型の語が他の語より語頭アクセントで生成されやすいという傾向が見られた。

各個人が持つ音韻表象は具体的にどのようなものかについては疑問が多く残されている。標準語のアクセント型から見られた弱い影響は、数少ない語のアクセント型が習得されているためだろうか。それとも、全ての語について、音韻表象には、アクセント型が弱くエンコードされているのだろうか。「雨」と「飴」のように、分節音が同じで、アクセント型が異なる語は、同音意義語としてエンコードされるだろうか。平板型と尾高型の語を頭高型として知覚しそのようにエンコードする学習者はいるだろうか。英語話者が持つ音韻表象がどのようなものであるかについては、今後の課題として残されている。

8-2 規則によるアクセント付与

第6章では、経験の異なる二つの学習者群を対象とした分析の結果、生成されるアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測ができるほどの絶対的な中間言語規則はなく、アクセント付与は複数の要因の競合によって決まるということを論じた。第7章では、各学習者の傾向に焦点を当て、生成されやすい・されにくいアクセント型および、生成されるアクセント型と拍数、品詞、発話環境との関係には、大きな個人差があることを示し、各学習者はそれぞれ独特のアクセント型の体系を作り出していることを示した。では、どのような語が、どのようなときに、どのアクセント型で生成されるかを定めるのは何か。

本節では、これらの結果に基づき、生成されるアクセント型は様々な要因の競合により決まるが、その詳細については各学習者独特のアクセント体系に従うということを論じる。アクセント体系がどのように形成されるかについては、各学習者は、日本語の語アクセントを音韻表象にエンコードすることが困難であるために、標準語から規則性を探ろうとする結果、当該のアクセント体系が形成されるという可能性について論じる。最後に、今後の課題として、母語の影響が残されていることを指摘する。

第6章において、生成されるアクセント型は複数の要因の競合によって決まると結論したのは、経験の異なる二つの学習者群に見られた以下の二つの結果に基づく。第一には、生成されるアクセント型は語の拍数と品詞、語が置かれた発話環境によって異なり、さらに動詞の場合には付加語によっても異なるという結果である。第二には、各学習者群では、拍数、品詞、発話環境がすべて統一してある資料語でも、様々なアクセント型が生成され、特定のアクセント型で生成される強い傾向はないという結果である。これらの結果に基づき、少なくとも本研究の対象である軽音節のみで構成された語については、生成されるアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測ができるほどの絶対的な中間言語規則はなく、アクセント付与は複数の要因の競合によって決まるのではないかと考えられる。

第7章で観察された顕著な個人差は上述の結論を否定するものではないと思われる。各学習者において、生成されるアクセント型と、語の品詞、拍数、発話環境との間の関係に、ある程度の体系性が見られた。この結果が意味することは、アクセント付与はある程度中間言語の規則に従って行われているということであると思われる。ただし、生成されるアクセント型が具体的にどのように拍数、品詞、発話環境に影響されるかについては、個人差が見られた。つまり、中間言語規則の内容は個人独特のものであること

となる。各学習者の生成では、語の種類と発話環境を統一しても、どの語も同じアクセント型で生成されず、複数のアクセント型が見られる場合が多く見られた。つまり、各個人の生成には、生成されるアクセント型を語の拍数、品詞、発話環境から予測ができるほどの絶対的な中間言語規則はなく、アクセント付与が複数の要因の競合によって決まるといふ結論は各学習者の生成にも当てはまると考えられる。

Guion et al. (2003) では、英語母語話者が英語の無意味語を生成する場合、生成されるストレスパターンに揺れが生じると報告されている。本研究の結果についても、各個人がどの語をどのアクセント型で生成するかには、拍数、品詞、発話環境という複数の要因が影響している。Guion et al. (2003) で挙げられている英語母語話者の無意味語のストレス付与と同じように、同じ拍数、品詞、発話環境、標準語のアクセント型でも、複数のアクセント型が生成されているのは、複数の要因が競合している結果生じる現象であると考えられる。

第6章でも述べたように、同じ語でも、ときによってはあるアクセント型、ときによっては異なるアクセント型で生成されることがこの説から予測される。本調査では、同じ語を同じ発話環境で同じ話者に複数回生成させていないので、この予測は確認できない。しかしながら、発話環境による強い傾向の違いがないにもかかわらず、三つの発話環境とも同じアクセント型で生成された資料語が少数であったことが、この説と一致すると思われる。

生成されるアクセント型は複数の要因が競合し決まると論じたが、各学習者のアクセント体系はどのように形成されるだろうか。これについては、日本語の語アクセントを

音韻表象にエンコードすることが困難であるために、各学習者は標準語から規則性を探ろうとする結果、形成されるのではないかと考えられる。以下がその説明である。

第3章で述べたように、第二言語学習者には、第二言語の統計的なパターンが習得できていることが知られている (Arciuli & Cupples, 2003, 2004; Davis & Kelly, 1997; Guion, 2005; Guion et al., 2004; Wayland et al., 2006)。本研究では、標準語にある統計的なパターンが習得されていると思われる結果が二つある。

一つ目は、傾向の現れ方は二つの学習者群で多少異なるが、全体的には、「ほど」に先行する動詞は「ので」に先行する動詞より、無核で生成されやすく、「ことができる」に先行する動詞は「のが好きだ」に先行する動詞より、無核の割合が高く、語末アクセントの割合が低い傾向がある。個人の傾向を第7章で分析したところ、八名にはこれと類似する傾向があることが分かった。この傾向については、標準語にも類似のパターンが存在する。このことに基づき、標準語にあるパターンの影響で、中間言語の規則が形成されているのではないかと考えられる。

標準語にある統計的なパターンが習得されていると思われる二つ目の結果は、第6章で観察した以下の傾向である。二つの学習者群では、三拍語における語頭アクセントの割合は品詞により、単純名詞で最も高く、動詞では最も低く、転成名詞ではその中間である結果が見られた。標準語では、三拍語での語頭アクセントは単純名詞にはあるが、動詞と転成名詞には例外でしか現れないため、少なくとも単純名詞に比較的現れやすい点は、学習者の生成と標準語とで一致しているといえる。第6章で述べたように、英語からの転移の可能性が低く、統計的なパターンを習得している結果によると考えられる。

以上のように、学習者が標準語にある規則性のある程度習得している可能性が示唆されている。しかしながら、標準語のアクセント型は語ごとに決まっており、各品詞の各発話環境では複数のアクセント型が可能である。標準語における規則性を探ろうとしても、各語のアクセントを決める規則を見つけることには成功できない。個人によるアクセント体系の違いは、規則性がそれほどない標準語の語アクセントから規則性を探ろうとした結果、生じたのではないかと考えられる。

その結果、個人独特の体系が形成されると考えられる。二つの学習者群は共通して、最も多く生成されるアクセント型は語末から二拍目のアクセント核、最も生成されにくいアクセント型は語末アクセントであるが、学習者によっては、無核を多用し、語末から二拍目にアクセント核を置きにくい学習者も、語末アクセントを多用する学習者もいる。さらに、生成されるアクセント型がどのように拍数、品詞、発話環境に影響されるかにも個人差がある。母語が同じ英語でも、第二言語の日本語では、語アクセントの特徴は同じようにならないということになる。

以上の中間言語規則の他、母語の影響も現れている可能性が考えられる。例えば、学習者の約半分には、語末から二拍目のアクセント核を多用する結果となったが、第3章で述べたように、堀口（1973）、土岐（1980）は、語末から二拍目にアクセント核を置くのは英語のストレス付与規則の転移で生じるとしている。ただし、以下に述べるように、この傾向については、英語からの転移と解釈すべきかどうかは不明であると思われる。

この一つ目の理由は、語末から二拍目にアクセント核を置く傾向は、英語のストレス付与規則により説明できるかどうかは明らかでないということである。英語のストレス

付与規則では、名詞に関しては、語末から二音節目が重音節の場合はその音節に、軽音節の場合一音節前の語末から三音節目にストレスが置かれるのが一般的な傾向であると言われている (Hayes, 1982, p.239)。本研究で扱っている語は、軽音節のみで構成されるものである。したがって、語末から二拍目のアクセント核（もしくはストレス）が英語のストレス付与規則で生じるのだとすると、語末から二拍目が本来の軽音節ではなく、重音節の働きをしていることになる。これ以上の検討は本研究の範囲外であるが、語末から二拍目にアクセント核を置くのは、英語のストレス付与規則からの転移であるとは簡単には片付けることができないということをここで述べておく。

二つ目の理由は、語末から二拍目のアクセント核を多用する傾向は英語話者に限ることではないということである。第3章で述べたように英語以外の様々な言語を母語とする日本語学習者に語末から二拍目のアクセント核を過剰使用する傾向が報告されている。したがって、母語からの影響かについては、明らかでないと思われる。標準語自体にも、動詞や形容詞には語末から二拍目にアクセント核が置かれやすい傾向があることなどを考慮すると、なおさらいえることであると思われる。今後の課題として、母語にある語レベルのプロソディが語アクセントの生成にどのように影響するかを調べる必要性が残されている。

これまで、個人による傾向の違いは、アクセント型を音韻表象にエンコードできないために、標準語から規則性を探ろうとした結果生じたものであると論じてきたが、他の可能性として、学習者の母方言にある小さな違いの影響で、日本語の語アクセントにおける顕著な個人差が生じた可能性も考えられる。しかしながら、この可能性は以下の理由で排除されると考えられる。

本研究では、調査参加者の母方言を **SSBE** に限定している。出身地は基本的には、イングランドの南部に限定したが、この条件を満たす学習者の数が少なかったため、出身地がイングランドの他の地域である学習者も三名含めた。この三名については母方言が **SSBE** であると本人が自称している。学習者間に見られた個人差が、学習者の母方言の違いによって生じると考えないのは、以上の三名だけでなく、各学習者の生成には個人独特の傾向が多かったためである。さらに、英語では異なる方言でも、語ストレスが異なる語の数は非常に少ない。データが報告されているのは管見の限りイギリス英語とアメリカ英語のみであるが、ストレスの位置が異なる語は 1~2%程度にすぎない (Berg, 1999, p.126)。したがって、調査参加者の母方言が完全な **SSBE** ではなく、多少の地域性が入っていても、語ストレスの影響はないと思われる。

イントネーションの影響に関しては多少排除しにくいだが、以下のように解釈する。従来のイントネーション研究では、イントネーションの記述は各言語または各方言に合った方法で行われてきているため、言語間・方言間での比較は難しく、最近まで体系的な分析に基づいた比較は行われていないが (Grabe et al., 1998, p.1259; Ladd, 2008, ch.1)、ストレスのある音節に現れやすいピッチの形状は、イギリス英語の方言によることが明らかにされている (Grabe, 2004)。一方、Cruttenden (1997, p.136) によると、アメリカ英語におけるバリエーションは少なく、アメリカ英語と **SSBE** の差は、イギリス英語における方言差ほど大きくない。オーストラリア英語についても、アメリカ英語と同様、バリエーションが少なく、また **SSBE** との差も少ないとしている。英語話者による日本語の語アクセントの特徴を調査している研究で、顕著な個人差を報告しているのは、本研究だけでなく、アメリカ英語話者を対象にしている久野 (1998) およびオーストラリア英語を対象としている吉光 (1981) がある。したがって、語アクセントの特徴が大きく異なるのは、母方言の違いで生じるのではないと考えられる。

むしろ、母語が英語でも、第二言語の日本語では、語アクセントの生成に顕著な個人差が現れやすい点が、英語話者の特徴であると考えられる。これまで論じてきたように、各学習者が独特のアクセント体系を形成するという結果は、日本語の語アクセントが音韻表象にエンコードされにくいという結果と関係していると思われる。すなわち、アクセント型の音韻表象を持たないことにより、学習者は主に非予測的であるアクセント体系を持つ標準語から規則性を探ろうとし、その結果、独特のアクセント体系が形成されると考えられる。今後は、他の言語を母語とする日本語学習者にも視野を広げ、以上で指摘した母語にある語レベルのプロソディの影響の他、アクセント型の語ごとの習得の可能性、さらに、個人差の現れ方についての検討が課題となる。

8-3 結論

本研究では、英語を母語とする日本語学習者がどのように日本語の語アクセントを習得するかを調べるための調査を行った。分析の結果、標準語との一致率は低く、どのアクセント型で生成されるかには標準語のアクセント型はそれほど影響しないということが分かった。さらに、第一言語が同じ英語であっても、第二言語の日本語においては、アクセント型の特徴が類似するとは限らないことが明らかになった。どのアクセント型で生成されるかには、拍数、品詞、発話環境が影響することが分かったが、個人差が大きく、生成されやすい・されにくいアクセント型にも、その要因の影響も個人によって異なることが分かった。このような結果の説明として、英語話者には、ピッチを語の特徴として解釈することが困難であるためか、日本語の語アクセントを音韻表象にエンコードすることが困難であり、各個人が持つアクセント体系は、主に非予測的であるア

セント体系を持つ標準語から、規則性を探ろうとしたために生じたのではないかと論じてきた。

本研究で明らかになったことはどのように応用できるだろうか。音声教育の面では、生成されたアクセント型が標準語と一致しても、偶然一致した可能性が高いという結果が重要であると思われる。さらに、各個人は無意識のうちに、語のアクセント型を決定する規則を探ろうとしている可能性があるため、指導では、ある発話環境では複数のピッチパターンがあり、どれを取るかは語のアクセント型で決まるということを意識させることで、規則を探ろうとする無駄な労力を省くことができる可能性が考えられる。

本研究の結果から、今後の研究が取るべき方向として、以下の課題が示唆される。第一に、各個人が持つ音韻表象は具体的にどのようなものか、第二に、母語の影響はどのように現れるか、第三に、経験量の影響がなぜ現れなかったか、という三点である。これらの三点については、今後の課題としたい。

参考文献

- アンドレエフ・アントン (2002) 「ブルガリア人学習者の日本語アクセント—ケーススタディー—」 『言語科学論集』 東北大学文学部日本語学科紀要 6号、1-12.
- Archibald, J. (1992). Transfer of L1 parameter settings: some empirical evidence from Polish metrics. *Canadian Journal of Linguistics*, 37(3), 301-339.
- Archibald, J. (1993). The learnability of English metrical parameters by adult Spanish speakers. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 31(2), 129-142.
- Archibald, J. (1997). The acquisition of English stress by speakers of nonaccentual languages: lexical storage versus computation of stress. *Linguistics*, 35, 167-181.
- Arciuli, J. & Cupples, L. (2003). Effects of stress typicality during speeded grammatical classification. *Language and Speech*, 46(4), 353-374.
- Arciuli, J. & Cupples, L. (2004). Effects of stress typicality during spoken word recognition by native and nonnative speakers of English: Evidence from onset gating. *Memory and Cognition*, 32(1), 21-30.
- Beckman, M. E. (1986). *Stress and non-stress accent*. Dordrecht: Foris.
- Beckman, M. E. & Pierrehumbert, J. B. (1986). Intonational structure in Japanese and English. *Phonology Yearbook*, 3, 255-309.
- Berg, T. (1999). Stress variation in British and American English. *World Englishes*, 18(2), 123-143.
- Boersma, P. & Weenink, D. (2009). *Praat: doing phonetics by computer* [Computer programme]. Version 5.1.17, retrieved 22 September 2009 from <http://www.praat.org/>.
- Chomsky, N. & Halle, M. (1968/1991). *The sound pattern of English*. Cambridge: The MIT Press.
- Cooper, N., Cutler, A. & Wales, R. (2002). Constraints of lexical stress on lexical access in English: Evidence from native and non-native listeners. *Language and Speech*, 45, 207-228.
- Cruttenden, A. (1997). *Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cutler, A. (1986). Forbear is a homophone: lexical prosody does not constrain lexical access. *Language and Speech*, 29(3), 201-220.
- Cutler, A., Dahan, D. and van Donselaar, W. (1997). Prosody in the comprehension of spoken language: a literature review. *Language and Speech*, 40(2), 141-201.
- Cutler, A. and Otake, T. (1999). Pitch accent in spoken-word recognition in Japanese. *Journal of the Acoustic Society of America*, 105, 1877-1888.

- Davis, S. M. & Kelly, M. H. (1997). Knowledge of the English noun-verb stress difference by native and non-native speakers. *Journal of Memory and Language*, 36, 445-460.
- Dupoux, E., Pallier, C., Sebastian, N. & Mehler, J. (1997). A destressing "deafness" in French? *Journal of Memory and Language*, 36, 406-421.
- Dupoux, E., Peperkamp, S. & Sebastian-Galles, N. (2001). A robust method to study stress "deafness". *Journal of the Acoustical Society of America*, 110(3), 1606-1608.
- Dupoux, E., Sebastian-Galles, N., Navarrete, E. & Peperkamp, S. (2008). Persistent stress 'deafness': The case of French learners of Spanish. *Cognition*, 106, 682-706.
- Flege, J. E. (1995). Second-language speech learning: theory, findings, and problems. In W. Strange (Ed.), *Speech perception and linguistic experience: Theoretical and methodological issues* (pp. 229-273). Timonium, MD: York Press.
- 福岡昌子 (2008) 「韓国人日本語学習者のアクセント習得における母語干渉—語頭破裂音を含む語のアクセント—」 『三重大学国際交流センター紀要』 3号、45-59.
- Grabe, E. (2004). Intonational variation in urban dialects of English spoken in the British Isles. In P. Gilles & J. Peters (Eds.), *Regional Variation in Intonation, Linguistische Arbeiten* (pp. 9-31). Tübingen: Niemeyer.
- Grabe, E., Nolan, F. & Farrar, K. (1998). IViE - a comparative transcription system for intonational variation in English. *Proceedings of the 5th International Conference on Spoken Language Processing*, 1259-1262.
- Guion, S. G. (2005). Knowledge of English word stress patterns in early and late Korean-English bilinguals. *Studies in Second Language Acquisition*, 27, 503-533.
- Guion, S. G., Clark, J. J., Harada, T. & Wayland, R. P. (2003). Factors affecting stress placement for English non-words include syllabic structure, lexical class, and stress patterns of phonologically similar words. *Language and Speech*, 46(4), 403-426.
- Guion, S. G., Harada, T. & Clark, J. J. (2004). Early and late Spanish-English bilinguals' acquisition of English word stress patterns. *Bilingualism: Language and Cognition*, 7, 207-226.
- Hayes, B. (1982). Extrametricality and English stress. *Linguistic Inquiry*, 13(2), 227-267.
- 堀口純子 (1973) 「英語国民による日本語の四音節名詞のアクセントの予測とその実際」 『日本語教育』 19号、97-112.
- Igarashi, Y. (2007). Typology of Prosodic Phrasing in Japanese dialects. *Proceedings of the Satellite Workshop on Intonational Phonology: Understudied or Fieldwork Languages, the 16th International Congress of Phonetic Sciences*, 1-44.
- 磯村一弘 (1996) 「アクセント型の意識化が外国人日本語学習者の韻律に与える影響」 『日本語国際センター紀要』 6号、1-18.
- 角道正佳 (1990) 「第30回外国人による日本語弁論大会予選通過者の日本語の東京アクセントからの逸脱度」 『音声言語』 IV、137-154.

- Kawagoe, I. (2003). Acquisition of English word stress by Japanese learners. In J. M. Liceras, H. Zobl & H. Goodluck (Eds.), *Proceedings of the 6th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference* (pp. 161-167). Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Kelly, M. H. & Bock, J. K. (1988). Stress in time. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 14(3), 389-403.
- 北原真冬 (2006) 「アクセント対立の分布について」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 5 (pp. 147-158) 東京: くろしお出版.
- Kim, M.-R. & Duanmu, S. (2004). "Tense" and "lax" stops in Korean. *Journal of East Asian Linguistics*, 13, 59-104.
- 金田一春彦 (監修) 秋永一枝 (編) (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』 東京: 三省堂.
- Kondo, M. (2007). Acoustic realization of lexical accent and its effects on phrase intonation in English speaker's Japanese. *Proceedings of the 16th International Conference on Phonetic Sciences*, 1649-1652.
- Kubozono, H. (2006). Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua*, 116, 1140-1170.
- 久野志保 (1998) 「米英語話者における日本語アクセントの生成」 『音韻研究』 1号、83-90.
- Ladd, D. R. (2008). *Intonational phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lee, W. H., Murashima, K. & Shirai, Y. (2006). Prosodic development in the acquisition of Japanese: a longitudinal study of three native speakers of Cantonese. *Japan Journal*, 10, 38-51.
- Minematsu, N., & Hirose, K. (1995). Role of prosodic features in the human process of perceiving spoken words and sentences in Japanese. *Journal of the Acoustic Society of Japan*, 16, 311-320.
- Nagano-Madsen, Y. (2000). Perception of Japanese accent by Swedish learners. *Proceedings of Fonetik 2000*, 97-100.
- 中東靖恵 (2001) 「単語読み上げにおける韓国人日本語学習者のピッチ実現」 『日本語教育』 109号、80-89.
- 西沼行博 (1997) 「アメリカ人・フランス人日本語学習者のアクセント聞き取り—母語干渉による知覚のゆがみ—」 『21世紀の日本語音声教育に向けて』 文部省科学研究費『新プロ日本語』 平成8年度研究報告書、5-12.
- Nishinuma, Y., Arai, M. & Ayusawa, T. (1996). Perception of tonal accent by Americans learning Japanese. *Proceedings of the Fourth International Conference on Spoken Language Processing*, 646-649.
- Nguyen, H. T. & Macken M. A. (2008). Factors affecting the production of Vietnamese tones: a study of American learners. *Studies in Second Language Acquisition*, 30, 49-77.

- Otake, T. & Cutler, A. (1999). Perception of suprasegmental structure in a non-native dialect. *Journal of Phonetics*, 27, 229-253.
- Pater, J. V. (1997). Metrical parameter missetting in second language acquisition. In S. J. Hannahs & M. Young-Scholten (Eds.), *Focus on phonological acquisition* (pp. 235-261). Amsterdam: Benjamins.
- Pierrehumbert, J. (1980). *The Phonology and Phonetics of English Intonation* (Unpublished doctoral dissertation). MIT.
- Pierrehumbert, J. B. & Beckman, M. E. (1988). *Japanese tone structure*. Cambridge: The MIT Press.
- Pierrehumbert, J. & Hirschberg, J. (1990). The meaning of intonational contours in the interpretation of discourse. In P. R. Cohen, J. Morgan & M. E. Pollack (Eds.), *Intentions in Communication* (pp. 271-311). Cambridge: MIT Press.
- R Development Core Team (2009). R: A language and environment for statistical computing. *R Foundation for Statistical Computing*, Vienna, Austria. ISBN 3-900051-07-0, URL <http://www.R-project.org>.
- 坂本恵美 (2008) 「英語母語話者による第二言語としての日本語ピッチアクセントの習得：知覚実験的研究」 『Sophia Linguistica』 56、139-150.
- Sekiguchi, T. & Nakajima, Y. (1999). The use of lexical prosody for lexical access of the Japanese language. *Journal of Psycholinguistic Research*, 28(4), 439-454.
- 柴田武、柴田里程 (1990) 「アクセントは同音語をどの程度弁別しうるか—日本語・英語・中国語の場合」 『計量国語学』 17 (7) 、1-11.
- Shport, I. A. (2008). Acquisition of Japanese pitch accent by American learners. In P. Heinrich and Y. Sugita (Eds.), *Japanese as foreign language in the age of globalization* (pp. 165-187). München: Iudicium Verlag.
- 杉藤美代子 (1982) 「東京アクセントにおける『花』と『鼻』の生成と知覚」 『日本語アクセントの研究』 (pp. 183-201) 東京：三省堂.
- 杉藤美代子、田原広史 (1989) 「統計的観点から見た大阪アクセント—東京との比較を中心に—」 『音声言語』 3、143-165.
- Sugiyama, Y. (2006). Japanese pitch accent: examination of final-accented and unaccented minimal pairs. *Toronto Working Papers in Linguistics*, 26, 73-88.
- 助川泰彦 (1999) 「ブラジル人日本語学習者の2モーラと3モーラ語のピッチ実現」 『音声研究』 3 (3) 、13-25.
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語—初級Ⅰ本冊—』 東京.
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語—初級Ⅱ本冊—』 東京.
- Taylor, B. (2011a). Variability and systematicity in individual learners' Japanese lexical accent. *Poznan Studies in Contemporary Linguistics*, 47(1), 146-158.

- Taylor, B. (2011b). Do English learners of Japanese produce isolated nouns with Standard Japanese lexical accent? *Second Language*, 10, 15-31.
- Taylor, B. (2012) 「英語を母語とする日本語学習者による語末アクセントの生成」『言葉と文化』13号、77-94.
- Taylor, R. L. (2008) 「尾高型タイプのアクセント・パターン『名詞+「だ」』、『動詞+「から・ので」』の生成—イギリス英語を母語とする日本語学習者を対象として—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科 修士学位論文
- 戸田貴子 (1999) 「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察—英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて—」『文藝言語研究 言語篇』36号、89-111.
- 土岐哲 (1980) 「英語を母語とする学習者におけるアクセントの傾向」『アメリカ、カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』3号、78-96.
- 宇都木昭 (2004) 「韓国人日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的音韻的特徴」『音声研究』8 (1)、96-108.
- 上野善道 (2003) 「アクセントの体系と仕組み」上野善道編『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』(pp. 61-84) 朝倉書店.
- Vance, T. J. (1995). Final accent vs. no accent: utterance-final neutralization in Tokyo Japanese. *Journal of Phonetics*, 23, 487-499.
- Venditti, J. J. (2005). The J_TOBI model of Japanese intonation. In S.-A. Jun (Ed.), *Prosodic typology and transcription: A unified approach* (pp. 172-200). Oxford: Oxford University Press.
- Wayland, R., Guion, S. G., Landfair, D. & Li, B. (2006). Native Thai speakers' acquisition of English word stress patterns. *Journal of Psycholinguistic Research*, 35, 285-304.
- 山田伸子 (1994a) 「日本語アクセント習得の一段階—外国人学習者の場合—」『日本語教育』83号、108-120.
- 山田伸子 (1994b) 「日本語アクセントのストラテジーと中間言語の形成—外国人学習者の場合—」『音声学会会報』207号、17-24.
- 山田伸子 (1999) 「中間言語の生成過程解明に向けて：日本語アクセント習得の場合」『コミュニケーション学科論集』茨城大学人文学部紀要6号、51-66.
- 山田 (2007) 「日本語学習者および茨城方言話者による東京方言アクセントの習得：その類似点と相違点について」『音声研究』11 (3)、23-37.
- 吉光邦子 (1981) 「外国人学習者のアクセント」『日本語教育』45号、63-75.